曲者時代

柴田錬三郎

曲者時代

柴田錬三郎

曲者時代

柴田錬三郎

集英社

集英社 ¥980 0093−772122−3041

曲者時代

柴田錬三郎

集英社

曲者時代

柴田錬三郎

目次

京洛暮色	七
煩悩菩薩	二七
山師夢想境	三九
天下攪乱(こうらん)策	五六
中仙道異変	六九
田沼意次	八九
江戸の反逆者	一一四
花の長崎	一二九
抜荷船	一四八
海底秘宝	一六五
江戸城異変	一八七
亡霊	一九九
東の海、南の海	二一〇
御座船江戸丸	二二六
怪物	二三八
末次金	二四九
賄賂	二六四
江戸に降る金	二七七
暗闘	二九四
天下の野人	三一四
権勢	三三〇
不吉の影	三五〇
かくれ島	三六六
老中御用部屋	三八三
往く人、来る人	三九八
安永九年正月	四一三
附記	四二一

曲者時代

京洛暮色

一

東海道五十三次は、起点のお江戸日本橋と終点の三条大橋を除いて、かぞえる。

起点のお江戸日本橋は、徳川家康が天下を取ってから三年後——一六〇三年（慶長八年）春に、架けられた。

終点の三条大橋は、それより十三年前——一五九〇年（天正十八年）正月、豊臣秀吉が架けている。

三条大橋は、長さ約一〇一米、幅七米、橋脚の石柱六十三本、水底地下五尋（約九米）に突き込まれている。

ねぎ坊主型の擬宝珠のひとつに、日本で最初の石柱を用いた得意を、施工にあたった増田長盛が、おのが名を明記して、誇らしげに、刻んでいる。

いつの頃から、次のようなならわしとなったか、作者も知らぬ。

お江戸日本橋を、七つ（午前四時）に出発した旅人は、五十三次を膝栗毛で道中し、京の都に入ると、かならず、まっすぐに、三条大橋に至り、これを渡ってから、諸方へ散るならわしとなった。

「これが、三条大橋か」

途方もない大声を、橋袂であげた者がいた。

この年、秋は雨の日ばかりで駆け足に去り、東山各峰のくれないの彩りの底で、冷気は、肌を刺していた。

浪人ていの、その大声にふさわしい二米に近い巨漢の、旅塵によごれた着物は、まだ単衣であった。袴は、いたるところ、つぎあてがしてあった。

そのうすぎたない風体よりも、かれが、背中に下げている筍笠が奇異であった。

それには、円型に、かなり整然と、東海道五十三次の宿名が、記されてあったが、朱、黒、青、黄……まちまちであり、好奇心につられた通行人が二三人、そっと近寄ってみると、

大磯——鮟鱇汁、うまし（これは朱色）

沼津——千本松原、勝景というほどの眺めならず（これは黄色）

鞠子——とろろ汁、名物とは笑止（これは黒色）

岡崎——女郎ども悪たれ也（これは黒色）

土山——鈴鹿の坂の途中にて、雲助三人を、ぶちのめ

す（これも黒色）
つまり、五十三次の道中日誌を、筍笠に記しているのであった。
無精髭だらけの馬面だが、まだ二十歳前であることは目もと口もとに、稚さをとどめているので明らかであった。
若者は、のそのそと、大橋の中ほどまで渡ると、そこに正座して、皇居の方へ視線を据えた。
「つつしみて、一天万乗の大君に奏上し奉る。上州新田郡細谷村名主のせがれ高山彦九郎正之、年少よりの念願――皇居をふしおがみつつ、弁当をつかわせて、頂き奉る。このにぎり飯こそは、今秋、上州一揆勢が、江戸市中へ乱入し、蔵前の札差を襲って掠奪したる白米に御座候」

二

その若者の、傍若無人の振舞いが、お江戸日本橋であったならば、たちまち、八丁堀の町方定廻りが、十手をつかんで、馳せ寄って来て、ひと騒動起ったに相違ない。
尤も三条大橋の通行人は、それぞれ雅びを知っていて、野次馬性が薄かった、という次第ではない。
自分とかかわりのないことは、よほど好奇心をそそられない限り、京洛の住民は、見て見ぬふりをする。
人垣をつくるまでもなかった。うすよごれた旅の若者が、橋上に正座して、こんがり焼いた大きなにぎり飯をくらっているだけの光景だったのである。
高山彦九郎が、どうやら、前夜泊った旅籠でにぎらせたらしい小児の頭ほどあるそれを、平げて、指についた飯粒をていねいになめているところへ、ようやく、面詰者が、近づいていた。
肩をいからせた町奉行所の役人ではなく、一瞥して公家ざむらいと判る、腰の大小が重そうな中老の男であった。
「お主、名でも売る存念で、左様な振舞いをいたして居るのであれば、この洛中では、逆に、物笑いの種をまくだけの結果に相成るぞ」
一応、おだやかに、忠告した。
高山彦九郎は、公家ざむらいを見上げ、返辞をする代りに、彼方の『御所』を、黙って指さした。
「内裏が、如何いたした！」
「如何いたしただと！　お主、それでも、公家ざむらいか！」

高山彦九郎は、噛みつくように呶鳴った。
「お主の申したいことは、あの紫宸殿まる見えの内裏の荒れたさまが、すなわちご皇室の衰微を示している、と申したいのであろう。判って居る」
「判って居りながら、摂家一列は、公儀に対して、一言も、古制にもとづく再建をたのめぬのか！　おれは、ちゃんと調べて居るんだぞ。あれは、まことの御所ではない。南北朝時代の大納言藤原邦綱の邸宅だ。天下の政事をなす大極殿は、安元三年（一一七七年）に、それから天子の起居あそばされる内裏は、安貞元年（一二二七年）に、焼けてしもうて、ついに再建されて居らん。大まちがいだ！……いまこそ、大内裏は、再建されなければならん！」
「わしのような六位の蔵人に向って、わめきたてても、いたしかたあるまい。……ともあれ、お主、ここを立ち退いてくれまいか」
「おれはまだ、二日分のにぎり飯を所持している。動かん！」
「お主が、そうやって、いつまで坐り込んでいても、べつに、同志が集って来るわけではあるまい」
「猛虎が、嵎を負うて、うそぶけば、千里の四方にひびくぞ！」
若者は、云いはなった。
次の瞬間、「腰抜けめ！」と一喝しざま、身がまえてもいない相手へ、猿臂をのばすや、その片足くびをつかんで、はねあげた。
欄干の上をもんどりうたされた六位の蔵人のからだは、高い水音を立てた。

三

おだやかに忠告しただけの公家ざむらいを、いきなり鴨川の流れへ投げ込んだ高山彦九郎の狼藉が、京都町奉行所へ、目撃者によって、急報されないはずはなかった。
彦九郎自身は、まるで、与力・同心が駆けつけて来るのを、待っているように、昂然と、橋上に正座をつづけていた。
捕方がそこへ至る前に、西の高瀬川に架けられた三条小橋を渡って、一人の人物が、近づいて来た。
彦九郎より二つ三つ年長であろう。むさくるしい上洛浪人と対蹠的に、白羽二重の小袖を着流し、小脇差一本だけを佩びて、頭髪を結ばずに肩に散らした姿は、いかにも、この京洛にふさわしい風雅さで、面貌にも、さわ

やかな品位があった。
「お主――」
　かたわらに立って、見上げる彦九郎と眸子を合せると、
「この京のしきたりを知って居らぬ様子だな」
「しきたりとは？」
「浪人風情が、公家に乱暴を働くと――たとい、相手が最下位の六位の蔵人であっても――扇子腹をさせられる」
　扇子腹とは、小刀で切腹するのではなく、紙に包んだ扇子を取って、腹にあてるのを合図に、介錯人がその首を斬ることをいう。
「この高山彦九郎正之、扇子腹ごとき腰抜け作法など、まっぴらご免を、こうむる。この三条大橋にて、立腹を切り、はらわたをつかみ出して、天子にささげたてまつる！」
「それをやってのけるために、お主は、上洛して来たのか！」
　白衣の青年の顔には、微笑があった。
「いや、曲った政道のために天下万民が苦しむ有様を、見とどけつつ、足の向くまま、関東より道中して参っただけの身でござる」
「短気が生来のものであっても、いささか乱暴がすぎたな」
「それがしは、あのような腰抜けの公家ざむらいに、したり面で、忠告などされると、むかっとなり申すのだ」
「むかっとなっただけで、扇子腹をさせられる」
「お主、何者だっ？」
　彦九郎が、険しい形相になって、突っ立ちあがって、相手を睨みつけた――その時。
　町奉行所の与力一人、同心三人の姿が、橋だもとに現れた。
　白衣の青年は、瞬間、目にもとまらぬ素早さで、大刀の柄へかけた彦九郎の右手をおさえると、
「蛸薬師通堀川――空也堂の裏手に、長生庵という茶道家がある。そこで、逢おう」
　口早やにささやくや、次のせつな、その巨軀を、宙に空転させた。
　彦九郎に、抵抗するいとまも隙も与えず、その膂力を逆に利用した素手の迅業であった。
　彦九郎は、六位の蔵人のあとを追って、鴨川の流れに、高い飛沫をあげた。

四

　その日――。
　京都所司代、阿部豊後守正允は、町奉行所に来ていた。
　所司代の方から、町奉行所にやって来た例は、かつてないことだった。
　京都所司代は、現代でいえば東大を出て、さしずめ大蔵官僚となり、局長に昇って、代議士に転じ、やがて大臣になる出世街道を歩むエスタブリッシュメント（上級階級層）の中枢にいる、えらばれたるエリートであった。
　大坂城代、若年寄、奏者番衆を経て、京都所司代となる。老中に次ぐ要職であり、やがて、老中に就くことが約束されている。
　げんに、前々代の所司代であった松平右京大夫輝高（上野高崎・八万二千石）は、老中であり、前代の阿部伊予守正右（備後福山・十万石）も、老中の座につらなるために、昨年夏、阿部豊後守正允と交替したのであった。
　豊後守正允は、武蔵忍・十二万四千石の三河譜代の大名であったが、型破りな行動で知られている、融通に富んだ気象の持主であった。
　時世は、徳川家の幕政百五十余年を経て、ようやく、大地の底が鳴動するように、うす気味わるい不吉な予感を、上下すべての人々に与えていた。
　独裁者・八代将軍吉宗の享保改革を経て、そのあとを継いだ九代家重の暗愚が、すべての面で祟り、今日（明和二年・一七六五年）に至っていた。
　九代家重は、若年にして放蕩にあけくれたむくいで、梅毒に罹り、晩年は、舌がもつれて、ろくに言語が発音できなくなるとともに、大小便たれ流しのぶざまな廃人になりはて、四年前に他界していた。
　この『小便公方』に対して、七歳にして天皇となった桃園帝は、稀にみる天資英邁な主上であった。
　桃園帝は、九代家重が、将軍職を家治にゆずって一年後に五十一歳で薨ずるのを看てから、崩御されたが、まだ二十二歳の若さであった。
　在位十五年だが、七歳から二十二歳までであるから、実際に、おのが意見を主張することができたのは、せいぜい数年間にすぎなかった。
　しかも、その数年間に、帝は、徳川家康が制定した禁中・公家諸法度に反抗し、腐敗しきった堂上公卿たちと必死にたたかって、秀れた頭脳を有った生命を縮められ

たのであった。
帝の御世に、竹内式部事件が起ったのが、そのことを明白に証拠だてている。
そして、いま——。
帝位には、智子内親王が践祚されていた。すなわち、力のない女帝であった。
天皇親政を、じかに、桃園帝に説き、江戸幕府をおそれる堂上公卿の卑劣な策謀によって、重追放処分にされた竹内式部の門下生は、なお、多く、京洛に、身をひそめて、機会をうかがっている。
当然、幕府としては、型破りな行動派の阿部正允のような人物を、所司代にせざるを得なかった。しかし、幕閣の要人たちのうちで、その阿部正允が、ただの出世主義者ではないことに気づいている者はいなかった。

五

京都所司代といっても、それまでの所司代は、一年の大半は江戸にいて、上は皇室守護から下は幕府直轄地の百姓一揆にいたるまでの万端を治めるのは、町奉行の手にゆだねていた。
しかし、阿部正允は、就任するや、ただちに上洛して来て、すでに一年余になるが、一度も、江戸城へ帰ってはいなかった。
正允は、自分の代理として、町奉行の方を、出府させて、重要事項を、閣老に報告させていた。
この日も、町奉行小林伊予守は、江戸へおもむいて、留守であった。
所司代・阿部正允は、一人の「山師」浪人を引見していた。
平賀源内、という讃岐国生れの、異能の所有者であった。
源内は、顔半面、髭だらけで、筒袖にたっつけをはき、馬革製の帯を締め、十指の爪を朱色に染めていた。
正允と源内のあいだには、大火鉢が据えてあり、炎々と焔が燃えあがっていた。
燃えているのは、源内が、筑後のどこからか採掘して来た黒石（石炭）であった。
「では、見せてもらおうか」
正允がうながすと、源内は、黙って、筒袖を、双肌ぬぎになった。
石綿布でつくった下着をつけていた。
『日本は申すに及ばず、唐土・天竺・紅毛にても開闢以来出来申さざる、火浣布なる、絶対に火に焼け

ざる布を発明つかまつり候えば、一度、御高覧下されたく——』
先月はじめ、所司代の許に、そんな手紙がとどけられていたのである。
正允と源内は、今日が初対面であった。しかし、平賀源内という、金鉱さがしの名人がいることは、正允の耳にとどいていた。
非公式の引見なので、阿部正允は、町奉行役所をえらんだのであった。
「どうぞ——」
源内にうながされて、正允は、長火箸で、燃える黒石をつまみあげた。
源内が、火鉢わきへ、膝行した。
火力激しい黒石は、源内の胸へ、押しつけられた。
「……?!」
石綿布の下着は、焦げもしなければ、源内は平然として眉毛一本動かさぬ。所司代は、内心、うなった。
その時、木戸口から、与力一人、同心三人が、一人の男を、とりかこむようにして、平庭へ入って来た。
男は、三条大橋から、高山彦九郎を鴨川へ投げ込んだ白衣の青年であった。
べつに、縄もかけられてはいなかった。
与力と同心は、白州へ跪いたが、捕われ人は、立ったなりであった。
「いかがいたした?」
所司代は、青年のさわやかな品位をたたえた面貌へ、視線をあてながら、問うた。
与力が、こたえた。
「これなる者、六位蔵人に狼藉を働きたる怪しい浪人を、わざと遁した容疑にて召し捕りましたなれど、おのれで、従三位と申し立てますゆえ、ご吟味の儀を願い上げまする」

六

「なるほど、従三位とうそぶいてもおかしくはない顔立ちをいたして居る。わしは、従四位下ゆえ、お主がまこと従三位ならば、下座に就かねばならぬな」
所司代・阿部豊後守正允は、云った。
すると、白衣の青年は、すたすたと、縁側へ歩み寄って来た。
与力と同心が、あわてて、とどめようとしたが、所司代は、
「よい。かまわぬ」

と許した。
　青年は、それが当然のように、上座に就くと、正允に挨拶するよりさきに、平賀源内の石綿布の下着を視て、
「その布は、火に燃えぬのか？」
と、たずねた。
「火浣布と申す」
「かんとは、浣うという意味だが……」
「この布は、墨や油でよごれても、火に投ずれば、汚れが落ち申すゆえ、ま――水の代りに火にて浣う、という意味です」
「お主の発明か？」
「左様――」
「天才を誇っている曲者面だな」
　青年は、寛闊な笑い声をたててから、
「さて、所司代殿に吟味して頂こう」
と、正允へ視線を据えた。
「町奉行所の役人が捕えた者を、上座に据えて、取調べをするとは、前代未聞だな」
　正允は、苦笑した。
「姓名は――？」
「従三位下権中納言――禁門影人」
「ほう?!　禁門影人とは、仮名であることがあきらかゆえ、従三位下権中納言などと、胸を張られても、ちと信用いたしかねるのう」
「当然の疑惑と存ずる」
「では、ものはためしに、ひとつ、町奉行所の揚り屋とは、どんなところか、入ってみられるか、従三位下権中納言殿」
　阿部正允は、微笑しながら、云った。
「先年、竹内式部が入れられたところですな」
「いかにも――。布団ひとつ、ゴザ一枚、米抜きの麦飯に、水のように薄い味噌汁とたくあん一片。まだ二十歳を越えたばかりの若さゆえ、いい経験に相成ろう」
「入れて頂こう。但し――」
　所司代を見まもる青年の双眸が、光った。
「三日以上はご免をこうむりたい」
「かたりでなければ、明日にも出て行くがよろしかろう」
　禁門影人は、一揖して、立ち上ってから、平賀源内に、
「お主とは、知己になりたい。おぼえておいてもらう」
と、云った。
　源内は、うなずいてみせた。

　青年が、与力・同心に連れられて――いや、むしろ、かれらを供にした態度で、立ち去ると、阿部正允は、何気ない口調で、
「お主といい、あの若者といい、当節、一風変った者がつぎつぎと出現いたすのは、吉か凶か――なんの前ぶれであろうかな」
と、云ったことだった。

七

　禁門影人と仮名をつかう青年が、入れられた揚り屋（士分の者を拘禁する牢座敷）には、すでに一人、虜囚がいた。
「これは……?!」
　禁門影人は、一歩入って、あきれ顔になった。
　文字通り足の踏み場もなく、まるめたり、ひき裂いたりした料紙が、十畳いちめんにちらばっていた。
　牢内をそのありさまにした当人は、片隅の几に向って、せっせと筆をはこんで居り、あらたに仲間が加えられても、一瞥も、くれようとしなかった。
　坊主あたまで、平べたい丸顔は、わるくいえば醜悪で、表現をかえれば、狷介峭直の野趣をむき出していた。すくなくとも、文雅の士とは、およそ縁のなさそうな容子風体であった。年歯は、三十二三歳であった。
　禁門影人は、まるめて反故にされた料紙を、一枚、手にして、ひらいてみた。

　津の国の難波につけて憎まるる芦間の蟹の横はしる身は　　無腸

「無腸、か。おのれを、前へ進めぬ男ときめてかかっているとは、よほど、浮世を、白眼で視て居るらしい」
　禁門影人は、云った。
　無腸、とは蟹の意味であり、この一首にも、自嘲がこめられていた。
　無腸と号する男は、耳がないかのごとく、おそろしい早さで、筆を走らせている。
　禁門影人は、反故をはらいのけて、自身の座をつくると、
「そうか。先月、洛中いたるところに、先の帝（桃園天皇）の崩御は、公儀にへつらう公卿どもに弑逆されたと同様である、と嘲罵の落書を、貼ってまわったのは、お主であったのだな」

と、云った。
相手は、返辞もせぬ。
禁門影人は、つづけた。
「落書には、書き手の名など記さぬものだが、お主は、堂々と浪華和訳太郎と署名していた。……知って居る。本名は、上田秋成。お主が著した本も、わたしは、目を通している。たしか、〝諸道聴耳世間猿〟という題名であったな。……それにしても、お主は、大坂の堂嶋の商家の者であるにもかかわらず、この揚り屋に入れてもらい、しかも、好き放題に、なにやら、著述を許されているとは、所司代も、粋なはからいをしてくれたものだな」
「いや、わしは、商人ではない、と云いはって、ここに入ったのだ」
「商人ではない？」
「そうだ。わしは、浪士のせがれだ——ということにしているのだ」
「所司代が、よく、それをみとめたものだ」
「正徳五年十一月に、摂州西成郡浜の崇禅寺馬場にて、弟の仇を討とうとした郡山本多家の若い兄弟を、返り討ちにした生田伝八郎の忘れ形見、と主張したおかげでな」
上田秋成という男は、にやりとしてみせた。

八

生田伝八郎の返討が、有名になったのは、そのことがあってから四十四年後の宝暦八年（一七五八年）三月に、竹田小出雲、竹田滝彦との合作で、『敵討崇禅寺馬場』という狂言を、興行し、大当りをとったおかげであった。
たしかに——。
正徳五年十一月四日の、その敵討は、狂言として大当りをとるに足りるドラマチックな要素を持っていた。
その年の五月十四日、大和郡山・本多信濃守の城下にある藩の剣道場内で、原因が生じた。
ひと稽古を終えた数人の若ざむらいが、古今の兵法者の評価に花を咲かせていたが、話の主導権をにぎっていたのは、遠藤宗左衛門重次であった。
まだ二十歳になったばかりであったが、その矯激の気象は、同輩のみならず、上役にも一目置かせていた。
一座には、二十六歳になるかれの長兄・治左衛門重広も加わっていたが、ほとんど口をきかずに、甲高く早口な弟の声音に、時折り、眉宇をひそめていただけで、たしなめようとはしなかった。たしなめれば、逆にいきりたたせる逆効果を招くことを、長兄は知っていたからである。
「要するに、剣は、覇気だ！　宮本武蔵の五輪之書にもあるではないか。剣道一通りの理を、さだかに見分け、一人の敵に、自由に勝つ時には、世界の人に、皆勝つところなり、と。剣の妙諦は、勝つことにあらず、心を極めることにある、などというのは、禅問答上の遊び言葉だ」
遠藤宗左衛門が、一流兵法者の評価に、とどめを刺すように、そう云った折であった。
「はたして、そうかな」
明るい声が、道場の外から、武者窓を通して、かかった。
皆が、一斉に、視線を向けると、そこに、微笑した生田伝八郎の顔が、のぞいていた。
この道場主・生田惣兵衛（二百石・惣頭役）の聟養子であった。
生れは、播州明石・松平左兵衛督の家中・庄林八左衛門の次男であった。
伝八郎は、いずれは、指南役になるべき身でありながら、あまり道場には現れず、山野をぶらつくのを唯一の趣味にしている、飄々とした青年であった。
遠藤宗左衛門は、かねてから、伝八郎を虫が好かなかった。
「伝八郎殿は、拙者の申し条に、不服か！」
気色ばんだ宗左衛門に、伝八郎は、微笑を消さず、
「人それぞれ、主張することは自由だが、わたしは、宮本武蔵という人物をあまり好きではないのだ」
「理由は？」
「ずるいな、武蔵は——」
伝八郎は、平常あまり、はっきりした兵法論など口にしたことはなかったが、珍しく、ずばりと、断定してみせた。
「宮本武蔵が、ずるいだと?!」
遠藤宗左衛門は、伝八郎を睨みつけた。

九

正徳五年（一七一五年）といえば、ようやく、華美驕奢の元禄時代が過ぎ、五代将軍綱吉から無比の寵愛をこうむった柳沢吉保が、江戸城内から身を退き、前年、五十七歳で逝った——その年であった。
後世、名君と称された徳川吉宗が、政治の主導権をつかんで、抜本塞源の世直しを計画していた。
すべての大名が財政の窮迫の中にあり、その家中は、

それぞれの家風によって、士道の性根をひきしめようとしつつあった。

当然――。

各家には、

――いまこそ、富有な商人どもに、借財ごときで頭を下げ、士道の吟味を失ってはならぬ！

という緊張感が、起っていた。

大和郡山・本多信濃守の城下に於て、にわかに、剣の修業がさかんになったのも、その一例、といえた。

いささかの口論が、果し合いに進展する状況は、一時代前ならば、みられなかったところである。

宮本武蔵の行動はずるい、と云いはなった生田伝八郎に対して、道場の門弟筆頭・遠藤宗左衛門が、こめかみを痙攣させ、かっと睨みつけたのも、二十歳の血気のせい、というだけではなく、城主本多信濃守が、

「前の時代の惰弱を一掃するため、武芸のたしなみを、第一義とすべし」

と、厳しく下命したことによる。

「きこうではないか！　武蔵という古今稀有の兵法者が、ずるい理由を――」

宗左衛門の殺気をこめた視線を、おだやかな表情で受けた生田伝八郎は、こたえた。

「武蔵は、五輪之書に書いている。生涯、諸流の兵法者に行き逢うて、六十余度び勝負するといえども、一度もその利を失わず、と。これほど謙譲を忘れた高言はない。しかも、その六十余度びの勝負のうち、最も強敵を相手としての記録にたしかなのは、佐々木小次郎との試合だけだが、それさえも、だまし討ちに似た作略を弄している。吉岡又七郎直綱との試合は、相打ちにもかかわらず、自分が勝った、と記述している。……武蔵は、ほかには、一度も、高名な剣客とたたかっては居らぬ。武蔵は、江戸へ出ながら、誰人とも試合をしていないのは、なぜか。江戸には、柳生道場は別として、幕屋大休も、紙屋伝心も、その師の小笠原源信斎も、鉄中の錚々が、ずらりといた。にもかかわらず、武蔵は、かれらに、勝負を挑んでは居らぬ」

「それは、機会がなかっただけだ。相手の方が、武蔵の二刀流に用心して、挑戦を拒否したに相違ないのだ。げんに、小笠原源信斎は、武蔵の二刀流をきき、自分も研究しはじめた、と言い伝えられているぞ！」

双方の主張は、しだいに、熱して来た。

宗左衛門は、試合というものは、戦争であり、相手の息の根を止めてこそ勝ちであるゆえ、戦場のかけひき、奇襲は断じて卑怯ではない、と吹鳴った。これに対し

て、伝八郎は、

「剣の道は、殺意を蝉脱した一心の暁りにあるのではなかろうか」

と、反駁した。

十

「桜木を割って見ればなにもなし、花の種には何がなるらん――この宇宙の神秘に近づくのが、わたしには、剣の修業と思える。野獣の兇暴とはちがう」

そう云う伝八郎に対して、宗左衛門は、逆上した。

「伝八郎っ！　貴様、おれの剣技をあざけったな！」

宗左衛門の太刀打ちは、獰猛なけだものじみている、という家中の評判があったのである。

「野獣の兇暴が勝つか、似非禅定門の屁理屈がまさるか――よし！　真剣勝負で来いっ！」

喚きたてた宗左衛門を、兄の治左衛門が、あわてて、たしなめたが、無駄であった。

かっと炒りつける陽光と、七葉樹の高幹から降る蝉しぐれをあびて、道場の裏庭で、二人の若ざむらいは、白刃を、相青眼にとって、向いあった。

ともに、長身の半分に、葉むらの翳を宿して、微動もしなかった。

このわずかの静寂の間に、両者の五体から、おびただしい生命の量が、消耗した。それは、まばたきを忘れた双眼から放射する光によってであった。

一瞬――。

宗左衛門が、切先を、ほんのかすかに、小きざみにうごかしはじめた。それが、見物の者たちには、野獣が跳躍せんとする直前の、凄じく横溢した殺気のほとばしり、と見えた。

うごきにつれて、切先は、じわじわと、上段へ移っていた。

伝八郎の刀身は、依然として、同じ位を保って、微動もしなかった。

「えいっ！」

満身からの猛気を炸裂させるとともに、宗左衛門の五体は、まさしく野獣の襲撃に出た。

見まもる人々の目には、その凄じい気合をあびて、伝八郎の上半身が沈んだ、と映った。

伝八郎が、身を沈めつつ、ひらと薙ぎあげた迅業は、のけぞった宗左衛門ののどから頤へかけての一線から、鮮紅のしぶきが飛んだので、合点された。

刀を鞘に納めた伝八郎は、その兄の治左衛門へ、鄭重に一礼して、

「やむなき仕儀であったとはいえ、弟御の敗北を無念と想われるならば、この場にて、仇敵の名のりをあげられることは、一向にかまい申さぬが……」

と、云った。

治左衛門は、横へかぶりを振った。

伝八郎は、死体へ、しばらく合掌してから、しずかな足どりで、その場を立ち去った。

そして、その夜のうち、伝八郎は、養父惣兵衛の命令で、郡山を立ち退いた。

しかし、治左衛門宛に、これは決して自分の本意ではない、という手紙を、小者にとどけさせておいた。

十一

遠藤宗左衛門には、長兄治左衛門のほかに、武兵衛光乗という二十四歳の次兄があった。

武兵衛は、はじめ喜八郎といったが、母方の祖父の名跡を継いで、安藤を名のり、知行六十石の納戸方をつとめていた。

この二人の兄は、宗左衛門とは腹ちがいであった。宗左衛門は、後妻の子であった。

二人の兄と義母との間には、かなり深い溝があった。

義母は、実子宗左衛門が兇暴なけだものじみた太刀打ちをする激しい気象を、おのが血から与えた女性であった。

治左衛門が、その場に居合せながら、拱手傍観していたことを、義母は、激しく憎み恨んだ。

藩庁の重役が、情況を聴取して、これを正当の試合、と裁いたことが、さらに、義母に、治左衛門に対する憎悪を、内部で燃え狂わせた。

義母の憎悪は、四十九日の法要で爆発した。

施主の治左衛門が、焼香しようとすると、突然、義母が、白木の位牌をとって、胸に抱き締めるや、その場に俯伏して、慟哭した。

その宵、治左衛門と武兵衛の肚はきまり、藩庁へ、敵討願いが出された。

藩庁からの許可は、容易に下りなかった。

いったん、試合上の事と裁いてあったし、伝八郎ならびに養父惣兵衛が人望を集めていたことでもあり、また、弟の敵を討つことは定法になかったからである。

兄弟再度の歎願によって、許可が下りたのは、二月も過ぎてからであった。

藩を退転した生田伝八郎の居所は、判っていた。大坂天神橋北詰で、道場をひらいていたのである。

兄弟は、大坂へ出て、道場の前に立った。

『東軍流指南　生田伝八郎』

それから四日後、船場の旅宿にいる兄弟に、伝八郎の方から、書状がとどいた。

口上

御舎弟の遺恨を晴されるべく、いつ大坂表へ御出向相成るべくや、とかねてよりお待ち申し上げ候ところ、愈々御到着の儀、神妙に存じ上げ候。依って、十二月四日、卯刻、摂州西成郡浜・崇禅寺の松原を場所として、出向かい尋常の勝負を仕り候。弓矢八幡誓約如件。

正徳五年十一月二日

生田伝八郎絶好

遠藤治左衛門殿

安藤武兵衛殿

いささか大袈裟にいえば、日本の敵討史上、空前にして絶後といえる、奇妙にして悲惨な仇討であった。

真剣の試合をして、敗れた弟の相手を、その兄たちが敵として討つのは、前述のごとく、定法はずれであった。そして、その兄は、あきらかに、弟の非をみとめ、生田伝八郎の人柄に敬意を抱いていたのである。

結果は、無慚な返り討ちとなる。

史実なるものが伝えそこねた謎を、虚構のてずまで埋めるのを好む私（筆者）ですら、この仇討を以前、一片の空想を交えずに、短編を書いたことがある。

十二

大田南畝は『葦の若葉』（享和三年の旅日記）の中で、次のように書いている。

……畑の中をゆきて崇禅寺の松原というにいたる。（中略）すべてこのあたりの松は、根入り深からずして、四方へ一丈ばかりずつも根わだかまれる。松根に寄って、腰を摩るといえるは、かかる所なるべしと。小竹筒をとり出して、かたみにくむ。馬場あり。人々、馬乗りさま見ゆ。崇禅寺は、松原の右にあり。竹藪深し。ここに崇禅寺馬場の敵討という事あり。

その日の崇禅寺馬場に於ける仇討の光景は、文字通り阿修羅地獄であった。

生田伝八郎が、ここをえらんだのは、冬の卯刻（午前六時）ならば、馬場で責め馬をしている影はなかったし、町からも遠く、街道とは、松林でさえぎられていたからであった。

夜は、ようやく明けそめたばかりで、松林や竹藪のあたりには、闇がのこっていた。

生田伝八郎が、まっすぐに、疎林を抜け出て、馬場端にある稲荷の社の前に出た時、すでに、むこうの根上りの老松わきに、二つの影があった。

「遠藤氏か――」

「生田殿だな」

互いに、すかし視て、鄭重に、一礼し合った。

挨拶の言葉は、交されなかった。

十歩の距離を置いて、伝八郎は、羽織を脱ぎすてると、波平行安の一刀を、鞘走らせて、青眼にかまえ、治左衛門の二間柄の銀杏穂の素槍と、武兵衛の刃渡り尺二寸円柄の薙刀に、対峙した。

それなり、固着した数秒がつづいた。

治左衛門は、兄として、先に攻撃するのが、作法であったので、ツツツ……と迫るや、総身からの気合を噴かせて、突きかかった。

もとより、そうあることを予測して、治左衛門へ七分の神経を配っていた伝八郎は、左半身にひらいて、穂先をかわした。

穂先を流さずに、はねかえせば、間髪を入れず、武兵衛の薙刀が襲って来ることも、予測のうちにあり、

「やあっ！」

と、満身から発する武兵衛の懸声に応えて、伝八郎は、三米余を跳び退っていた。

尋常のたたかいは、そこまでであった。

突如――。

松林と竹藪の中から、七八人の血気の武士が、躍り出て来た。

伝八郎の門弟たちであった。

「図ったな！　伝八郎！」

武兵衛の総身の血汐が逆流した。

治左衛門も、また、それまで伝八郎の人柄を評価していただけに、

「伝八郎！　これは！」

と、絶叫した。

「ちがう！　そうではない！……お主ら、引け！　引けっ！　引かぬか！　うつけ者ども！」

前夜、伝八郎は、門弟たちを集めて、絶対に自分に助太刀してはならぬ、とかたく申しきかせていたのであった。

十三

生田伝八郎の悲痛な叱咤は、門弟たちの耳には入らなかった。

道場できたえた腕を、真剣で試すのは、生涯のうちで、滅多にあることではなく、かれらは、血に飢えた野獣さながらに、闘志をにえたぎらせていたのである。

――やんぬるかな！

伝八郎は、絶望した。

「卑怯者め！」

兄弟の方もまた、絶望による死にもの狂いの勢いで、伝八郎めがけて、槍をくり出し、薙刀を打ち込んで来た。

伝八郎は、門弟たちの無断の助太刀に、心気を殺がれ、受太刀になり、後退をつづけた。

円陣をつくっていた門弟たちは、この有様に、じっとはしていなかった。

わっと、一斉に抜刀して、兄弟に殺到した。

「お主ら、寄ってはならぬ！　助太刀されては、生田伝八郎の名がすたる！　退けっ！」

はらわたからしぼり出すような伝八郎の制止も肯かず、門弟たちは、兄弟に斬りかかった。

伝八郎が、武兵衛の薙刀の柄を両断した瞬間、その隙をのがさず、門弟の一人が、武兵衛の脇腹を突き刺した。

「武兵衛っ！」

治左衛門は、数人に迫られて、じりじり退っていたが、弟の仆れるのを見て、逆上した。

伝八郎は、奔って、門弟の一人を突きとばし、

「貴様ら、退かぬと、この伝八郎が相手になるぞ！」

と、呶号した。

ようやく、門弟たちが、後退すると、伝八郎は、治左衛門の正面に立ち、

「お許し下され。斯様な仕儀に相成ったのは、それがしの本意ではなかった。おわびつかまつる」

頭をふかく下げてから、

「貴殿は、一騎討ちならば、刀の方が、得手のはず――。お待ち申す」

治左衛門は、しかし、槍をすてようとしたが、双手の指が、柄に貼りつけられたように食いついてしまっていた。

「槍でよい！　来い！」

突き進んで来る治左衛門に対して、伝八郎は、悲痛な面持で、青眼にかまえた。
……勝負は、一瞬にして、決した。

それから、二月後――。
粉雪の舞う正月三日の黄昏どき。生田伝八郎は、郡山城下の町はずれにある常念仏堂（常弥寺）の墓地で、遠藤家代々之墓と刻まれた一基の前に端座すると、見事に、割腹して果てた。
遺体は、翌朝、当寺の小坊主によって発見された。ふところには、次の遺書があった。

書置
御機嫌恐れ奉り今日切腹仕候
正徳六年一月三日
いさぎよく死出の雪見る今宵かな

十四

場面を、現在――明和二年初冬の、京都町奉行所の揚り屋へ、もどさねばならぬ。
禁門影人と仮名をつかう、得体の知れぬ青年は、読本らしいものを書きまくっている上田秋成を、眺めやりながら、
「嘘も方便というが、お主は、よほど、ぬけぬけとした虚言者だな」
と云った。
「ふん――」
秋成は、鼻さきで、受けただけであった。
「正徳五年、と申せば、いまから五十年前になる。ところが、お主は、どう見ても、三十を二つ三つ、過ぎたばかりだ。……どういうのであろうな」
そう云われて、秋成は、はじめて、筆を走らせる手を止めて、禁門影人を、正視した。
「五十年前の崇禅寺馬場の敵討は、ごく限られた人々にしか知られなかったのだが、七年前、大坂の芝居小屋で、竹田小出雲と竹田滝彦が、『敵討崇禅寺馬場』という題で狂言にして、興行し、大当りをとったおかげで、いっぺんに、世間にひろまったのだ。もちろん、この敵討が五十年前の出来事であろうとは、いまの人々が知っては居らぬのさ。せいぜい、十年あまり前のことと、受けとっている」
マスコミなどのなかった時代のことである。その狂言が大当りをとってから、いつとなく、読本書きの上田秋成が、生田伝八郎の忘れ形見、という噂が流れたのである。おそらく、当人が、でたらめを口にしたのが、きっかけであったろう。
「すると、お主は、生田伝八郎とは、全く縁のない者か？」
「いや、忘れ形見以上の因縁がある」
「うかがおうか」
「遠藤治左衛門には、妻はなかったが、ひそかに愛する女が居り、二人のあいだには、稚い娘がいた、と思って頂きたい。治左衛門兄弟が、弟の敵を討つべく、大坂へ出るや、生田伝八郎から先手を打たれて、試合の儀を申し入れられたことは、ご承知と存ずる。その夜、治左衛門は、ひそかに書状をしたためて、もし万一、自分が返り討たれた時は、郡山城下はずれに、ひっそりとくらしている女と子供の面倒の儀を、お願いいたしたい、と生田伝八郎へ、依頼した秘密がござる。……生田伝八郎は、この依頼を承知し、崇禅寺馬場にて、遠藤兄弟を返り討ちにしたのち、ただちに、使いを郡山へ遣して、その母子を引きとり申した。そして、かねて懇意にしていた曾根崎新地の青楼花屋久兵衛に、身柄をあずけ、世話をたのんでおいて、自身は、切腹して相果て申した。……当時、その子は、娘にて、七歳であり――」
「その子が、やがて娘に生長して、どこかの男と交り、お主を生んだ、という次第か。それから、お主は、堂嶋の商人上田なにがしに養子として貰われた。となると、これは、成程、つじつまは合うわけだな」
禁門影人が、微笑しながら、そう云った折であった。
「こちらの揚り屋であります」
与力の一人が、客をみちびいて来た。
客は、その衣服によってかなり地位の高いことが知れる堂上公卿であった。

十五

「これは！」
太格子の内部をのぞき込んだ堂上公卿は、禁門影人をみとめて、目をみはった。
「若宮ともあろう高貴のおかたが、これは、なんという不始末をあそばされましたのか？」
公卿は、七年前、王政復古思想を土台として神代巻を、さきの帝（桃園天皇）に進講した罪によって重追放処分にされた竹内式部の主人・徳大寺前大納言公城であった。
徳大寺公城は、この事件によって、永久蟄居、落飾（頭髪をおろす）の罰を、関白近衛内前から加えられて

いた。
　しかし、いつの間にか、頭髪も公卿髷にもどし、平気で、洛中洛外を、遊吟して歩きまわっていた。
　堂上公卿の中では、抜群の気骨と智能をそなえた人物であった。
「わたしは、べつに不始末などしたおぼえはないが、ここの与力が、何か誤解して、連れて来た。来訪していた所司代の阿部豊後守が、せっかく来たのだから、ものはためしに、町奉行所の揚り屋とは、どんなところか、入ってみるがいい、とすすめてくれたので、入ってみたまでのこと――」
　禁門影人は、そう告げて、明るい笑い声を、たててみせた。
「埒もない。……おん身を、わざとけがすようなお振舞いは、もってのほかでございます」
　徳大寺公城は、太格子そとの廊下へ正座すると、はやく出て来るように、うながした。
「そうさな。べつに、長く逗留していれば、おもしろいことが期待できる場所でも、なさそうだ」
　禁門影人は、いったん立ちあがりかけて、
「そうだ。大納言卿、たのみがある。これに在る上田秋成と申す読本作者も、ついでに、出してくれまいか」
と、たのんだ。
　すると、後方にひかえていた与力が、
「それは、なりませぬ。町奉行の許可を必要といたしますれば――」
　と、拒否した。
「大納言卿。お許は、所司代にたのんで、わたしを、ここから出してくれるのであろう。ならば、ついでに、わたしの友となったこの読本作者も、所司代の権限にて、身柄を自由にしてもらいたいものだ」
　禁門影人が、上田秋成をともなって、町奉行所の正門から、出て行った頃、徳大寺公城は、所司代・阿部正允と、書院で対座していた。
「あの若い書生の正体を、大納言卿は、明かすことはできぬ、と仰せられる？」
「なにとぞ、お忘れ頂きたく存ずる」
「こちらが、忘れることにしても、どうやら、あの青年は、わざと、公儀にとって目ざわりになるような行動をとってみせるのでは、ござるまいか」
　阿部正允は、微笑しながら、云った。
　――この新しい所司代の目は、鋭い。正体までも、およその推測をいたしたようだ。
　徳大寺公城は、内心、微かなおそれをおぼえていた。

煩悩菩薩

一

「は、は、はっくしょいっ！」
　行き交う人々が、思わず、びくっとなるほど、途方もない大きなくしゃみであった。
　総身ずぶ濡れで、まだ袴から、ぼたぼたと、しずくを地面にたらしながら、高山彦九郎は、二米近い巨体を、大股に、都大路をはこんでゆく――。
　筍笠の蔭の顔は、しかし、この京の底冷えの寒風にさらされつつも、ずぶ濡れの肌身がべつだんこたえている表情をみせてはいなかった。
　五体を充分にきたえていたし、十九歳の若い精気が、その五体に満ちていたのである。
　むしろ、その精気をもてあましている彦九郎としては、きびしい寒さの中にずぶ濡れのからだをさらしている方が、壮快でさえあった。
　――この高山彦九郎正之を、まるで、案山子のように、造作もなく、鴨川へ投げ込みやがったあいつめ！
　そういう手練者に出会っただけで、彦九郎は、気分がよかった。
　あの場合、白羽二重を着流した、気品のある面貌を有った青年が、この高山彦九郎を、鴨川へ投げ込んだのは、町奉行所の与力・同心からかばってくれた、鮮やかな、とっさの智謀であった。
　よけいなお節介をしやがった、という気持も、脳裡の片隅になくはなかったが、それよりも、相手の心遣いと迅業に対する敬服が、心の中で、大きな比重を占めていた。
　高山彦九郎は、上州新田郡細谷村という、坂東武者の素朴で豪放な気風を、なおきびしく伝統としている土地で育っていた。そして、その気風にふさわしい直截な性情を、父からうけ継いでいた。
　父の良右衛門正教は、ただの名主ではなく、膂力二十人力と称われ、新田義貞の馬側（後世の寄騎）十六騎党の一人であった高山遠江守重遠を先祖に仰ぐ誇を、事ある毎に、口にしていた。
　彦九郎は、物心ついた頃から、父の供をして、山野の狩猟におけるその勇猛ぶりを見せられていた。
　良右衛門は、猪を獲るのに、弓矢は使わず、かなら

ず、木太刀をふるい、常に一撃で、挌殺した。
これが、わが子に対する教育でもあった。
彦九郎が、父にならって、突進して来る猪に、真正面から立ち向って、これをなぐり殺したのは、十四歳の時であった。
新田郡細谷村は、旗本大御番頭・筒井左膳の領地の内にあった。
高山良右衛門は、名主でありながら、領主筒井左膳に、みじんもへつらわなかった。
彦九郎は、幼少期、いくたびも、領内巡察に来た筒井左膳と父が、呶鳴り合う光景を目撃させられている。
筒井左膳は、時には、激昂して、責め馬用の鞭で、良右衛門を、打ちすえた。良右衛門は、顔面、血だらけになりながらも、断乎として頭を下げようとはしなかった。
その父の態度もまた、彦九郎が性根をつくる上でのつよい影響を及ぼした。

二

「ここか――」
蛸薬師通堀川――空也堂の方角を、通行の人々を呼びとめて、尋ね尋ねて、ようやく、高山彦九郎は、その空也堂の裏手の家の門前に立った。
彦九郎に、茶道のたしなみはなかった。斯道の識者の目には『長生庵』という扁額を、門にかかげたこの家の造りが、千利休の師・武野紹鷗が確立した侘び茶の素朴簡素を、そのまま趣きとしているたたずまい、と映るであろう。
風雅にして厳粛な寄合である書院の茶式を完成したのは、足利義政の同朋・能阿弥である。
この貴族向きの茶道に対して、一般庶民向き侘び茶をはじめたのが、同時代の禅僧の珠光であった。
侘び茶は、珠光の「真」から、孫弟子武野紹鷗の「行」となり、それが、紹鷗の高弟千利休によって「草」となって、草庵の数寄屋、茶庭の露地が完成されている。
まさしく――。
長生庵は、「草」の前の「行」の造りを、そのまま、この時代まで、保ちつづけていた。
もとより、高山彦九郎は、千利休によって大成された茶道が、さらに、その高弟の古田織部の作意によって、新しい時世に即応したものに改められ、小堀遠州・片桐石州にいたって、後世の茶匠の権威の基礎がかためられたものであることなど、知る由もなかった。

したがって、この長生庵の古めかしいたたずまいが、いかに貴重な遺物であるか、観る目を持ってはいなかった。
「おそろしゅう、ぼろぼろになった家だな」
自分を鴨川へ投げ込んだ白衣の青年の、気品のある容姿を、思い出しながら、彦九郎は、およそ不風流な大声をあげて、案内を乞うた。
門から草庵までは、およそ二十歩の距離があった。
古びた草庵から、一人の若い女人が、出て来て、作法正しい一礼をした。
一瞬――。
彦九郎は、茫然とわれを忘れた。
この世ならぬ天女が、いまにも、崩れ落ちそうな草庵から姿を現した衝撃は、彦九郎の心の臓を、一瞬、止めた、といってもあながち誇張ではなかった。
彦九郎は、十九年の生涯で、こんなろうたけた美女に、はじめて、出くわしたのである。
どうやって、その面前に近づいたか――魅せられた者の、宙を踏むような足どりであった。
「そ、それがし……、お招きにより……、参上いたした」
興奮のため、のどがからからにかわいて居り、胸の鼓動の高鳴りを抑えつつ、それだけ告げるのに、彦九郎は、声音がかすれ、悲鳴に近い奇妙な語気になっていた。
おのれのあまりの興奮を、あさましい、と羞恥の意識が生れたのは、草庵内に坐らされ、しばらく一人にすておかれてからであった。

三

高山彦九郎が、坐らされたのは、「行」の四畳半の茶室であった。
茶釜には、湯がわいて、微かな音をひびかせていた。
その茶釜にしても、棚物や風炉や水指や茶碗にしても、すべてが、侘び道具であった。
尤も、彦九郎の目には、壁が、藁をむき出した荒壁であるのをはじめ、すべてが、古ぼけたしろものにしか映っていなかったし、湯音が閑寂味をつたえてくれる、と聴く余裕など、まるっきりなかった。
足音が近づいて来たのを、耳にしただけで、また、この十九歳の野性の若者の胸は、激しく早い鼓動をたてた。
天女と見まがう美しい娘が、風炉わきの亭主の座に就くや、彦九郎は、両手をつかえて、額が畳につくほど平

伏した。
娘は、無言裡に、点前をはじめた。
彦九郎は、自分の膝の前に、朝鮮の熊川の茶碗が置かれて、
「粗茶、召されませ」
と、すすめられるや、
「そ、それがしは、数寄道を、心得申さぬ！」
と、云った。
おのれ自身、はっとなるほどの大声であった。
その大声が、草庵の閑寂を破ったことに、気づいて、彦九郎の巨軀は、縮んだ。
たおやかな娘は、優しい微笑で、彦九郎のぎらぎら光る視線を受けとめ、
「作法など、後世の茶匠たちが勝手に、つくったものゆえ、お気にかけられますな」
と、こたえた。
「はあ?!　……しかし、その、それがしは、全くの無骨者でござれば——」
「茶の湯は、べつに、格式を重んじたり、当節の各流派が守っているような窮屈なものではありませぬ」
「では……、頂戴つかまつる」
彦九郎は、大きな両掌で、茶碗をはさむと、押しいただいてから、ひと息に飲みほした。
茶道の茶とは、こんなにもにがいものだったのか。判ったのは、それだけであった。
しかし、
「いま、一服、召されませ」
と、すすめられると、思わず、打てばひびくように、
「頂戴つかまつる」
と、こたえてしまった。
二服めを喫み終えた時、ようやく、彦九郎は、おちつくまでにはいたらずとも、なんとか自分をとりもどした。
「わたくし、つかさと申します」
「は、はっ！　申しおくれました。それがし、上州新田郡細谷村名主のせがれにて、高山彦九郎正之と申します」
「影人様が、お招きなされたと申されましたな」
「はいっ！　それがしを、鴨川へ投げ込む直前に、ご当家をささやかれました。あの御仁は、どういうおかたでありましょうか？」
「素姓の儀は、わたくしの口から申し上げるわけには参りませぬ」

四

禁門影人と仮名を使う青年が、ものしずかな足どりで、長生庵へやって来たのは、残照が、その足もとから影法師を長くのばして、片側の土塀にまで、匍わせた頃あいであった。
影人は、門へ二十歩あまりの地点で、ふっと足を停めた。
門の萱ぶき屋根に、守宮のように、灰色の忍び装束の者が、ぴたりと吸いついているのを、みとめたのである。
この長生庵の門は、馬に乗ってでもくぐれるほどに、高くつくられていた。
したがって、その屋根に、忍び装束の者が伏せていても、並の者ならば、気づかずに、くぐるところであった。
禁門影人は、尋常の神経の持主ではなかった。
視線をそこへ仰がせずとも、
——いる！
と、神経が意識に伝えた。
待ち伏せられている、ということは、こちらが長生庵へ身をはこんで来るのを、尾行して来て、先まわりしたか、それとも、尾行者が別の人間に急報したか——いずれかであった。
実は、影人は、ここ十数日のあいだ、常に尾行されている気配を、察知していたのである。そして、こちらは、そ知らぬふりをしつづけて来た。
襲撃されるおぼえはあったし、尾けねらっているのが、こちらを憎む者にやとわれた忍びの者であることも、看てとっていた。
往還は、ひっそりとしていて、人影といえば、影人のほかに、むこうから、使い帰りらしい町娘が、うつ向きかげんに近づいて来ているだけであった。
影人は、なに気ない様子で、ふたたび、歩き出した。
門へ七八歩の距離に近づいた時、屋根の上から、殺気が、放たれて来た。
ただの殺気ではなかった。
かなりの武芸者でも、一瞬、総身が、じいんとしびれるほど、凄じかった。
当然——。
その殺気に対して、全神経をひきしめて、備えの構えをとるべきであった。

影人は、それをせず、両手を、袖から抜き出そうともしなかった。
ゆっくりと、さらに二歩、出た。
瞬間——。
敵は、襲って来た。
しかし、襲って来たのは、門の屋根からではなく、むこうから歩いて来た町娘であった。
これは、忍びの者として、巧妙な戦法であった。
影人の全神経を、屋根上へひきつけておいて、思いもかけぬ奇襲をしかける。
町娘の攻撃は、矢が飛ぶに劣らぬ迅さであった。
得物は、鉛玉を先端につけた縄であった。
この鉛玉は、厚い門扉でも、畳でも、やすやすと貫く兇器であった。
それが、影人の顔面めがけて、飛んで来た。

五

町娘に扮した女忍の放って来た手練の縄術に対して、禁門影人には、これに応ずる業があった。
鉛玉が、顔面に飛来するのと、影人の左手が、袖から、さっと抜き出て、眉間にかざされるのが、同時であった。
その左手は、懐石をつかんでいた。
強く高いひびきを、宙にまいて、懐石が、真二つに割れた——その時には、もう影人の五体は、地面すれすれに跳んでいた。
第一撃を仕損じた女忍が、第二撃を放つべく、鉛玉をぶうんと頭上で唸らせて旋回させたのは、もとより、縄術の為すべき当然の継続技であったが、影人の方に、これをさけ、かわすだけでなく、とっさに、その裏をかく迅業の会得があった。
地面すれすれに跳んだ五体の力を、どうやって、四肢に配分したか、次のせつなには、影人の双手は、女忍の両足くびをつかみ、彼女を、空中へ、たかだかとさしあげていた。
影人の首は、女人の裾の中へ、かくれた。
これを視た門の屋根上の仲間が、
「うぬがっ！」
吼号とともに、柄の短い忍び槍をさしのべるや、萱を蹴って翔んだ。
秀れた忍びの者にあるまじき、これは、逆上の飛翔であった。
影人に、この飛翔が予想のうちにあったわけではない。
これは、影人にとって、文字通り、飛んで灯に入る夏の虫であった。
いったん、たかだかと、女忍を空中へさし上げておいて、すっと身を沈めた。
女忍が、頭上で旋回させる鉛玉を、翔け降りて来た仲間に、当らぬように、一瞬裡に、旋回を止めるいとまはなかった。
鉛玉は、頸根を搏ちざま、その部分にふかぶかと埋まった。
……地ひびきたてて倒れた仲間は、すでに、完全に事切れていた。
「ああっ！」
女忍は、はじめて、娘らしい悲鳴をほとばしらせた。
その隙に、影人は、女忍を、投げておいて、すっくと背後に立った。
女忍は、仆れた仲間を、抱きあげた。
「父者！」
ききとれないほどの小さな声音だったが、肺腑をしぼる悲痛なひびきを、見まもる影人の耳に、とどかせた。
——そうか、わが娘だったので、おれの首が裾の中に入ったことに逆上したのだったか。
影人は、残照を受けた初老の死顔を、あわれな父親のものとしてみとめながら、
「娘の手で、一命を断ったのであれば、恨みもならず、悔いもなかろう」
わざと、非情な言葉をかけた。
「斬れ！」
女忍は、その場へ正座すると、言った。
「あいにくだが、わたしのさしている小脇差の中身は、匂い木だ」
「……?!」
女忍は、影人へ、頭をまわした。
「この長生庵の裏に、墓地がある。自身の手で、父親を葬ってやるがいい」

六

禁門影人は、父の遺体を背負った女忍を、うながして、門内に入ると、左方を指さし、
「葬ったならば、南端の茶亭へ、寄るがいい。一服、茶の湯をふるまおう」
と、云った。
まだ二十歳に満たぬくの一は、何事もなかったかのよ

うに、おだやかな態度を示している影人へ、けげんな視線をかえした。

忍びの者として、攻撃に失敗して、一命を落せば、これは、自身の業が未熟であることであり、襲った相手を憎むことはせぬ。

しかし、忍者も人間である。子に親を殺させておいて、わが手をよごさなかった影人に対して、複雑な感情をおぼえるのは、人情であった。

まして、二十歳前の娘としては、名状しがたい心の動揺が起っていた。

こちらへ背を向けると、能楽で修練したと判る足どりで、茶亭の方へ遠ざかる影人を、女忍は、じっと見送った。

――隙がある！

そう看てとった。

わざと見せた隙であったろう。

――父者、許して下され。

女忍は、古びた書院造りの建物のわきを通って、裏庭へ出た。

墓地は、竹藪をへだてて、遠いむかしのものだが、いずれも立派な墓碑を、整然とならべて、ひっそりとしずまっていた。

塔婆は、五輪塔かまたは宝篋印塔で、これは平安末期からの、高い身分の公卿累代のものであった。

あるいは、竹藪のむこうの書院造りの建物のある処には、むかし、寺院が在ったのかも知れない。

――こんな由緒ある墓地に、名もない忍びの者を葬っても、よいものなのか？

父の遺体を、地面によこたえた女忍は、とまどいの独語を、胸の中で、もらした。

幾分かのち、女忍は、北隅にある小屋（幾年か前までは墓守が住んでいた）から、鋤をとって来て、なるべく、塔婆からはなれた地点をえらぶと、

さくっ！

さくっ！

と、掘りはじめていた。

掘りはじめてから、はじめて、女忍の双眸がうるみ、泪が頬をつたい落ちた。

無香――と名づけられたこの十七歳の女忍は、母を知らず、物心ついた時には、父親とともに、伊豆半島の南端にある石廊崎にいた。

「われら親子は、北条乱波の最後の生き残りぞ」

父親の口ぐせは、それであった。

すなわち、豊臣秀吉によって滅亡させられた小田原北条氏の手飼いの伊豆忍者の末裔だったのである。

伊豆忍者は、鎌倉幕府がさかえた頃に、起っている。俗に「捨て草」と称ばれていた。

史上有名な、伊賀者・甲賀者とは、全く、その存在価値を異にしていた。強いて、さがせば、薩摩島津氏がやしなっていた「すてかまり」と、その生態が似ていた。

七

伊豆忍者「捨て草」も、薩摩忍者「すてかまり」も、いうならば、第二次大戦末期、怒濤のごとく殺到して来たアメリカ海軍の空母艦隊めがけて、突入して行った神風特攻隊であった。

一人一人が、期限つきで各武将にやとわれて、さまざまなスパイ役をつとめた伊賀・甲賀の忍者とは、その本質を異にしていた。

「捨て草」も「すてかまり」も、合戦に於て、味方の本隊を救うために、身をすてたのである。

小田原城が陥落し、北条氏が滅びた時、すでに、伊豆忍者「捨て草」の九割が、討死していたのは、当然であった。

その北条乱波最後の生き残りである無念道士が、わが娘無香をつれて、京洛へ上って来たのは、三年前――桃園帝が崩御された宝暦十二年（一七六二年）の春であった。

無香は、父が、誰人にやとわれて、上洛して来たのか、その口からはきかされなかった。

上洛したその年の盛夏。

宵に出て行き、深夜になって、家へ帰って来た父の無念道士は、神棚の注連縄に蠟燭を立てて、その焔で、右手の五指を、一本ずつ焼いた。

無香は、父が、何故に、忍者の大切な得物である手の指を焼くのか、意味がわからなかった。尤も、理由を問うても、父は、こたえてはくれなかったに相違ない。

天皇が、突如として崩御された、と洛中に知れわたったのは、それから二日後であった。

父が右手の五指を焼いたことが、英邁な天子の崩御に、深い関連があることは、無香にも、察知できた。

親子のあいだには、しかし、それについて、いっさい、会話はなかった。

無念道士が、わが娘を使って、一人の人物を襲撃したのは、今日が、はじめてであった。それまでの四年間、無香は、ただの娘として、洛外の小さな家ですごして来ていた。

そして、無念道士は、わが娘の縄術によって、頸根へ鉛玉を打ち込まれて相果てた。

——もし、父者が、右手の指を焼いていなければ……。

墓穴を掘りながら、無香は、かたわらに横たわっているなきがらに、声なく云いかけた。

——決して、この襲撃を仕損じはしなかったのに！

悔いても、もはやかえらぬ現実であった。

やがて——。

小さな土まんじゅうが、そこにつくられた。

無香は、合掌するのをためらった。伊豆忍者〝北条乱波〟に、亡き者を回向するしきたりはなかったのである。

無香は、ただ、ふかぶかと頭を下げた。

泪は、もうかわいていた。

無香はそのまま、そっと、何処へともなく立ち去るつもりであった。

しかし、それは、許されなかった。

八

人の気配に、無香はふりかえった。

竹藪の中から、すっと、姿をあらわしたのは、つかさであった。

この長生庵に、このようにろうたけた美女がいて、禁門影人の来るのを待っていることなど、無香は、父から教えられていなかった。

「影人様が、あちらでお待ちなされています」

つかさは、優しい微笑と声音で、いざなった。

「父とわたしは、あの御仁を暗殺しようとしたのです。それなのに、どうして許して下さるのです！」

無香にとって、どうにも合点しがたい、禁門影人と仮名をつかう青年の態度であった。

「あのおかたは、そういうおひとなのです」

「父が敗れたのは、間一髪の差でした。いえ、父が、わたしを犠牲にする非情を持っていたならば、いま頃は、あの御仁の方が、遺体となって居りましょう」

「でも、父上は敗れて亡きひととなられ、影人様は、生きておいでです」

「わたしは、討とうとした相手から、憐みなど、かけられたくはありません！」

「影人様は、高僧善知識のように、寛容で、慈悲ぶかいおひとではありませぬ。むしろ、冷たい性情をお持ちです。……ただ、水のように、その日その時で、心を、どのようにでも、気分という器で、お変えになります。貴

女に、茶の湯をおふるまいになるのも、べつに意味があるのではなく、ただの気まぐれ、とお受けとりなさい」

つかさが、そう云って、歩き出すと、無香は、なんとなく、そのあとにしたがわなければならないような気持になった。

その茶亭の前に来ると、つかさは、

「茶の湯で、心をしずめられませ」

無香へ、かるくうなずいてみせておいて、立ち去った。

無香には、茶亭に入るのが、ためらわれた。

すると、内から、

「入るがよい」

禁門影人の声が、かかった。

無香は、目に見えぬ糸で、ひっぱられるように、入って行った。

影人は、亭主の座にいた。

先客がいた。ずぶ濡れの若者であった。

「こちらは、上州新田郡の浪士・高山彦九郎氏だ。そなたは……、そうであった、まだ、名を知らぬ」

無香は、視線を膝へ落して、名のった。

そのまま、会話はなく、無香は、影人のたてた茶を、ふるまわれた。

女忍は、数寄道の作法も、父から教えられていた。

茶碗が、手もとにもどってから、影人は、いきなり、

「そなた、まだ、男を知らぬ無垢であろう」

と、云いあてた。

無香は、だまっていた。

「こちらの高山彦九郎氏も、まだ、女の柔肌を知らぬ、という。どうであろう、今宵、ご両人、隣りの草庵で、初夜をすごしては——？」

九

「お手前様は、この高山彦九郎を、木偶としてあやつるために、ここへ呼びつけられたのでござるか！」

憤然たる形相となって、禁門影人を、睨みつけた。

「無垢の男が、無垢の娘とちぎることを、冗談ですすめられるか」

影人は、あくまで、氷のような冷たい眼眸で、彦九郎の狂いかかった凝視を、受けとめた。

「それがしは、生涯、女体に接しない誓いをたてて居り申す」

彦九郎は、吐き出すようにこたえた。

すると、突如として、影人が、別人のごとき鋭い刃物

のような双眸の光を、彦九郎の目へ、射込んだ。
「男子なら、女を抱いてみよ！」
凛乎(りんこ)としたその言辞と態度は、流浪する、猛気だけありあまった関東の旧家のせがれの総身を、電流を通したごとく戦慄させた。
それでも、彦九郎は、必死に、その視線を受けとめると、
「お手前様の素姓をおあかし下されば、場合によっては、蒙(こうむ)ったご恩もござれば、お申しつけに、順い申す」
と、その正体をもとめた。
影人は、しばらく沈黙を置いてから、やおら、口をひらいた。
「お主は、将軍家よりも天子を上にして、うやまうことを、誰人に教えられた？」
「父でござる」
「で――、お主は、その猛気をしずめるために、剣の修業ばかりではなく、夜毎、自瀆(じとく)をやっては居らぬか？」
影人の質問は、たたみかけて、しかも内容が飛躍した。
「やって居り申す」
彦九郎は、ためらわずこたえた。
「ならば、自瀆の代りに、無垢の娘を抱け」
「拙者は、承知つかまつる条件として、お手前様の素姓を――まことの正体を、うかがって居り申す！」
彦九郎は、胸を張ってこたえた。
「わたしは、さきの天子の兄だ」
禁門影人は、ためらわず、こたえた。
「えっ?!」
あの英明をうたわれた桃園天皇の、これが、兄君であろうとは！
事実とすれば……。
禁門影人、などという仮名をつかって、市井ぐらしをしているには、よほど、深い複雑な事情があるに相違なかった。
彦九郎は、畳へ両手をつかえて、平伏した。
影人は、無香へ視線を移し、
「このこと、こばみはすまいな？」
と、問うた。
「……………」
無香は、顔を伏せた。
「そなたは、わたしの俘虜(ふりょ)だ。命令をこばむことはできぬ」
影人は、鈴を鳴らして、つかさを呼び、二人を隣りの草庵(そうあん)へ案内せよ、と命じた。

山師夢想境

一

禁門影人のおかげで、京都町奉行所の揚り屋から解放された、大坂の読本作者・上田秋成は、その若さにふさわしくない猫背(ねこぜ)で、のそのそと、伏見街道を辿(たど)っていた。
藤の森を通り、深草、墨染を過ぎて、伏見の町へ入っていた。
伏見街道は、いたるところ、古蹟だらけであった。この伏見にしても、むかしは、「伏水」といい、平等院を建てた藤原頼通の三男・橘俊綱が山荘をつくって、有名になったところである。
いまは――。
酒屋の倉と二流女郎をかかえた青楼が、ならんでいた。
「おーい、戯作者殿。生田伝八郎の忘れ形見殿――」
青楼のひとつの二階から、秋成に、声がかかった。
そこに、見知らぬ顔があった。
「なんぞ、御用か？」
「お主、懐中を、さぐってみてくれないか？」
「懐中を――？」
秋成は、けげんなままに、ふところへ、手を入れてみた。
一通の封書が、あった。いつの間に、どこで、入れられたのか、全くおぼえがなかった。
表には、
「檄(げき)」
とあり、裏をかえしてみると、「禁門影人」と署名してあった。
「…………？」
秋成は、あきれながら、封を切ってみた。
『ここに同志あり。共に、正々の旗をかかげ、堂々の陣を布きて、日月が地に墜ちざるために、天下をくつがえさん。義に二信なく、信に二命なし。疑わしければ、すなわち、義に従(よ)りて事を断ずべし。その手段は問わず。武を以てするも良し、文を以てするもまた佳なり。
禁門影人』

「その檄文を、身共も、町奉行所で、いつの間にやら、懐中へ、ほうり込まれていたのだ。……身共は、元高松藩蔵番、風来山人・天竺浪人そして大山師の平賀源内という、お主と同じ戯作者だ。……上って来ないか」
　さそわれて、上田秋成は、青楼の赤のれんをくぐった。
　平賀源内は、薄ら笑いながら、
「身共は、所司代に面会を許されて、書院にいた。お主は、揚り屋にいた。……あの奇妙な青年が、われわれを、同文の檄で、ひきあわせてくれたことだ」
と、云った。
　痼症という持病のせいではあるまいが、人と交るのを好まず、本居宣長だろうが、松尾芭蕉だろうが、大家というものをことごとく否定する反骨精神の権化のような上田秋成も、あの禁門影人というふしぎな魅力を有った青年のおもかげは、脳裡になぜとも知れず強烈な印象をのこしていた。
「あんたは、あの禁門影人の正体を看破っているのか？」
　秋成は、問うた。

二

「いや、あの青年の正体は、目下のところ皆目見当がつかぬ」
　平賀源内は、かぶりを振った。
「揚り屋から出してくれた徳大寺公城という堂上が、あの男を、若宮ともあろう高貴のおかた、と呼んだ」
　秋成は、告げた。
「ふむ。それだけきけば、正体をつきとめるのに、さして日数を必要とはいたすまい。その前に、あの青年に目をつけられたお互いの素姓を、明かしておこう」
「………」
「そもそも、この平賀源内と申す男、物心ついた頃より、天性の虚言巧みにして、高松藩家中一統に、〝天狗小僧〟と称わせる英才と錯覚させ、十三歳にして、本草学、儒学を学びしも、まことは、耽読したのは、軍記物『太平記』のたぐいのみ。但し、いささか俳諧の才ありて、十四歳の春、
　　霞にて漉して落すや峯の滝

という発句をものして、うぬぼれたり。もとより詩文を知らず、狂歌、俳諧も、いまだ、一首一句の佳作をものせず」
「お手前のつくった漢詩一首を、うかがいたい」
　秋成は、もとめた。
「うむ……。あれは、宝暦五年――左様、十年前の三十歳の春に、故郷をすてて、江戸へ出るにあたって、友人たちが送別の宴を催してくれた際、一首ものした。
　相逢う湖海、暁風寒し、
　珠浦城頭万里を看る。
　此の日の離筵須く酔を尽すべし。
　孤帆一たび去らば星を聚ること難からん。
　どうだな、これは――」
　秋成は、ちょっと間を置いて、
「凡作だな」
　ずばりと、酷評した。
「その通り、人前に披露できるしろものにあらず。まさに、虚勢をはり、虚飾を示す野心の徒にほかならず。ところが、世間は盲千人、高松の小藩にて、蔵番づとめなどするケチな器量にあらず、と豪語して、大手を振って、江戸へ出、彼方でうそぶき、此方で大風呂敷きをひろげているうちに、平賀源内の名は、四方にひろまった、と思われたし。……但し、睡れぬ枕の上で、あるいは、厠にしゃがんでいる折など、ふっと思いつく異想は、並の虚言者にあらざる神より与えられた利器。神田の寓居に、我を慕っておとずれる若者どもを、あごでつかって、関東の山中をかきわけさせて、採集したのが、芒消（硫酸ナトリウム、漢方では、下剤に使用）、巴戟天（精力増進剤）、鉛石（自然銅）、コールド（緒黄色の顔料）、画焼青（染付けの釉薬に使うゴス）、そして金剛石。これらの採集品を、公儀に献じ、同時に江戸は湯島で、途方もなき大がかりな物産会を催して、さらにその名を高めたり。出品物、かぞえて、実に七百四十八種なりき」
「…………」
「物産会によって、天下にあまねく名を挙げるや、将軍家側衆・田沼主殿頭意次殿がたちまちに、平賀源内を、自邸に召して、金銀銅山の開発を依頼したるぞ、おかしけれ」

三

「わしも、戯作者のお主なら知って居る」
上田秋成は、源内にしゃべらせるだけしゃべらせておいて、ぼそりと、云った。
「おれの談義本を読んでいるのか、お主？」
「うむ。『根南志具佐』も、『風流志道軒伝』も――」
「はばかりなく、批評してもらおうか」
平賀源内は、もとめた。
「うそ八百ぶりが、面白いといえば面白いな」
秋成は、こたえた。
『根南志具佐』という小説は、次のようなストーリイである。
地獄の閻魔大王が、当時、江戸で随一の人気を誇る歌舞伎女形・二世瀬川菊之丞の美貌に惚れ込み、かれをつかまえて地獄へ連れて来るべく、部下の河童に命じて、江戸へおもむかせる。
たまたま、菊之丞、荻野八重桐らが、隅田川の中洲で、蜆取りに興じていた。菊之丞だけは、女形らしく、泥に足を入れるのをきらって、船にのこっていた。そこへ、河童の化けた美男の若ざむらいが現れて、たちまち、二人は恋におちいる。菊之丞を本気で愛した河童は、自分は、地獄の閻魔大王の使いである、と打ち明けてしまう。
これをきいた荻野八重桐が、師匠の菊之丞の身代りとなって、入水する。
このストーリイは、歌舞伎役者の荻野八重桐が、中洲で蜆を取っているうちに、溺れ死んだ、という事件があり、源内は、これをヒントにして、創りあげたフィクションであった。
しかし、荒唐無稽の小説ではあったが、源内は、地獄の描写をするにあたって、当節の世相を、さんざ嘲罵し、思う存分に毒舌をふるっていた。
役人の賄賂取り、僧侶の堕落、藪医者のインチキぶりなど、歯に衣きせぬ痛烈な現実諷刺であった。
天下泰平が、永くつづくと、いつの世でも、そうであるごとく、地獄の沙汰も金次第になる。
宝暦年間（一七五〇年代）も、その風潮をまぬがれなかった。
いわば、現代（一九七〇年代）と、二百余年をへだてながら、人間のやることは、全く同じであった。
巨富の町人どもは、役人に賄賂を送って、江戸の中心地――土一升金一升の土地――を買い占めて、暴利をむ

さぼっていたのである。
「上田殿、文才においては、おれは、お主にはるか遠く及ばぬ。しかし、おれの異想は、かならず、お主がこれから書くものに、役立つと確信する。あの禁門影人という青年が、お主とおれとをこの檄でひきあわせてくれたのも、なにかの因縁と考えようではないか」
「わしは……」
秋成は、ひと呼吸置いてから、こたえた。
「人と交るのは、きらいだ。まして、自分の書くものに、他人の手助けなど、まっぴらご免を蒙りたい」
源内は、しかし、にやりとして、
「そういうところが、おれの気に入る。お主は、平賀源内という男の蔭の援助があってこそ、大成する！」

四

上田秋成が、別れの挨拶もせずに、部屋を出て行くのと入れちがいに、唐紙が開かれて、女郎の代りに、一人の男が、現れた。
どこといって特徴のない、物腰のひくそうな旅商人ていであった。三十前後で、双眼の光だけが鋭かった。
「あの上田秋成という戯作者、さして役に立ちそうもないな」
男は、いささかの侮蔑をふくめて、云った。
「一見、役に立ちそうもない人間が、意外にも、使えるのだ。お主は、公儀庭番として、案外、目がないな」
平賀源内は、うすら笑った。
公儀庭番――すなわち、隠密であった。
その名称の通り、かれらは、江戸城内の吹上御庭の宿直、夜間の内庭の巡察をつとめていた。
この庭番に、目をとめたのが、八代将軍吉宗であった。
庭番は、江戸城内の守備という任務を与えられているだけに、それだけのきびしい武芸の修業をしていた。
吉宗は、この庭番を、諸大名の動静をさぐるスパイにしたてたのであった。将軍家直属の高等スパイであり、吉宗からじかに命令され、働き、その成果をまた直接報告するのであった。
八代将軍吉宗が、他界してから、すでに十四年が過ぎている。いまでは、老中や若年寄など、幕府閣老たちが、自分に直属の庭番をかかえていた。
いま――。
平賀源内の面前に坐ったのは、このたび、将軍家側衆として、大名になった田沼主殿頭意次の命令によって働いている隠密であった。

鬼堂天馬といい、源内が田沼意次に自邸へ召し出された時に、ひきあわされ、
「わしは、これより奔馬と相成る。天馬は前脚をつとめ、源内は後脚をつとめてくれい」
と、命令されたのであった。
田沼意次が、閣老首座に就く野心を起していることは、はっきりと推測がついていたが、いかなる政治を行う計画を胸中に秘めているのか、まだ源内にも、天馬にも判ってはいなかった。
「源内——」
「うむ?」
「田沼殿は、まこと、天下を左右する主権を、手中にするであろうか?」
「おそらく、十中九まで、まちがいあるまい」
「どうして予測できる?」
天馬に、問われて、源内は、しばらく、沈黙を置いてから、
「お主は、占星の術など、学んでは居るまいな」
と、云った。
「占星——星占いか。そのようなものなど……」
「待て! わが日本では、そのむかし——天武帝の頃、占星台が興(おこ)されたと、『日本書紀』にある。天武帝ご自身が、占星の術や、さまざまの占いが得意で、壬申(じんしん)の乱の際には、天文を占って、大いにこれを利用し、成功されて居る。……しかし、この占星の術も、後世、俗信化して、陰陽道となり、おろかな縁起かつぎとなってしまった。占星の術は、迷信ではない。立派な科学なのだ」

五

平賀源内の、隠密・鬼堂天馬に語る言葉には、熱気がこもった。
「おれは、お主も知っての通り、好奇心の権化だ。どんなことにも、目を光らせて、首を突っ込む。したがって、ひとつの学術では、斯道(しどう)に専念する人からみれば、二流だ。いや、三流だろう。医学薬学しかり、歌道俳諧しかり、儒学しかり、漢文しかり、西洋絵画しかり、博物学しかり、陶器づくりしかり、鉱山発掘しかり、オランダ語しかり——。ただ、おれが、真剣になって、識り究(きわ)めようとしているものが、二つある。それは、占星の術と、麻薬だ」
「なぜ、その二つに、真剣になる?」
「おれは、いまからちょうど十四年前——二十七歳の時、はじめて、長崎へ行った。そこで、オランダ船や唐船が

はこんで来たさまざまの品物を、観た。すべてが、おれにとっては、驚異の種であった。それから、オランダ商館や唐人屋敷の異邦人たちに接してみて、脳裡が、惑乱せんばかりだった」
オランダ商館では——。
はじめて、日本へ渡航して来た船長(カピタン)から、西洋占星術をきかされた。
その時、船長は、源内に、生れた月日と時刻と場所をきくと、地図をひろげ、緯度・経度をはかり、ものの一時間も、占星術の書物をひもといていたが、
「君は、先天性の虚言者(うそつき)であるが、同時に、人をおどろかせる途方もない空想力の所有者である。凡夫ではないが、非常に危険な性格と行動力を持っている」
と、ぴたりと当ててみせたのであった。
また——。
唐人屋敷では、源内は、阿片(あへん)をはじめ、各種の麻薬をのまされて、現実とは全く次元の異なる世界へ送り込まれたのであった。
以上の二つは、もはや、日本には、ないものであった。
現在——。
天文学は、幕府の天文台も設けられて居り、専門学者もすくなくはない。しかし、かつて、戦国時代まで、兵法のひとつとして用いられていた占星術は、徳川家の教学にされた儒教によって、抹殺(まっさつ)されてしまっていた。
日本人は、封建制度下の儒教によって、占星術による吉凶占いと、別の次元の世界に送り込んでくれる麻薬を、封じられたのである。
そして——。
暦註や易経によって、民間に、きわめておろかな迷信そのものの運勢判断が、定着してしまっていた。
暦註は、五代将軍綱吉をして、自分が、戌年の生れであるゆえに、人間よりも犬の方を大切にする法令を布かせて、未曾有(みぞう)のばかげた苦しみを、武家にも庶民にも与えた。
易は、本来は、人生ぎりぎりの岐路に立たされた際、はじめて卜筮(ぼくぜい)によって、おのが進むべき道を、鬼神に問うものであり、生涯ただ一度の占いであるが、いつの間にやら、あぶれ浪人や堕落坊主や山伏が、いい加減な卦(け)をたてて、迷信増幅に拍車をかけているのであった。

六

平賀源内の熱弁は、つづく。

「……思うてもみるがいい。やれ仏滅だから婚礼を止めるとか、友引だから葬式を出せぬとか――人間が、迷信にしばられて、ふりまわされて居る。こんなばかげた話があるか」
隠密・鬼堂天馬は、問うた。
「占星の術は、迷信とはちがう、というのか？」
「そうだ。占星の術は、絶対に信じなければならぬたしかな基盤がある。それは、この世界に、何億人いるか知らぬが、同じ条件で生れた者は、一人も居らぬ、ということだ。月日時刻が同じでも、場所がちがう。たとえ、双生児であっても、生れた時間がちがうではないか」
「うむ！」
「よって、その人その人によって、生れた瞬間の天体の状況は、ちがって居る。その人間の生涯の運勢は、その瞬間に決定するのだ。これは、いかなる努力でも、変えようはない。性の善悪とは、関係がない。人間は、定められた運勢にしたがって、生き、死んで行く」
「それで、お主は、田沼殿の運勢を、占星の術で、占った、というわけか」
「そうだ。おれは、主殿頭殿の生年月日と時刻、場所をきき、西洋暦に置きかえて、その占星表をつくってみた」
田沼意次は、享保四年（一七一九年）夏に、江戸赤坂の紀州邸内で生れていた。
源内が、調べたところでは、意次は、獅子宮（現代では、獅子座と呼ばれている）であり、獅子宮の支配星は、太陽であった。
太陽は、権力、活力、創造性を象徴している。
この太陽が支配星である獅子宮は、吉に於ては、威厳のある支配力、指導力、組織力を発揮し、上下から信頼感を抱かれ、性情は寛闊で陽気である。凶に於ては、独裁でなければ承知できず、頑固であり独断であり、豪磊な浪費家であり、きわめて派手好で、奔放である。
「まさに、ぴたりだな！」
鬼堂天馬は、うなった。
「さて、だ」
平賀源内は、いちだんと声音を高いものにした。
「太陽という支配星を持つ獅子宮に生れた田沼意次という人物をして、幕府の主導権をにぎらせ、さらにひとまわり大きな怪物にするには、ただひとつ――麻薬だ」
「…………」
「麻薬こそ、五の力しかない者に、十の力を発揮させる！」
「おい、お主、そうたやすく麻薬が、手に入るのか？」

天馬は、問うた。
「ははは……、麻薬は、人間の手で製るものではない。天地自然の中に生れる。すなわち、わが日本の山野に、ちゃんとあるのだ。知る人ぞ知る」
「お主、その場所を知っているのか」
「これから案内いたそうか」

七

麻薬の中で、最もひろく人に知られているのは、阿片である。
阿片は、芥子の果実によって、つくられる。
日本に阿片がもたらされたのは、明確な記録はないが、室町時代（将軍足利義満）――六百年前であった、と推測される。
足利義満自身、芥子を栽培しているからである。目的が、阿片をつくることであったのは、疑いを入れない。
徳川時代に入ってから、阿片は、『津軽』と称ばれた。
そのむかし、南方の漂流船が、津軽地方（現在の青森県西半部）のどこかの浜辺へ着き、その船の者が、芥子栽培を教え、阿片で地下人たちを酔わせたからである。
しかし、一年の半分を寒気で包まれる津軽地方は、芥子栽培に適していなかった。
阿片づくりは、『津軽』と称ばれながら、しだいに南下して、京洛を中心とするようになったのである。
奥羽、関東、そして近畿へと、年代が下るとともに、芥子栽培地域はひろがったが、これは、日本歴史に記述されない悲惨な裏面の事実を、裏づける証拠となる。
農耕民族にとっての最大の敵は、天災地変であることはいうまでもないが、もうひとつ、人口と米穀の量との比率であった。
当然、老いて働く能力を失った者は、この世から一日も早く、消えなければならなかった。そこで、姥捨て、という残酷な行為が、当然の運命として、老人たちに襲って来、老人たちもまた、拒むことは許されなかった。
山奥へ、せがれに背負われて、すてられる老人たちに、与えられたのは、食物ではなく、阿片であった。
（阿片を吸煙するようになったのは、一六五〇年――日本では、徳川幕府初期・慶安三年――から、中国に於てであった。日本では、どこの地方でも、山奥へすてられた老人たちは、阿片をそのまま喰べたり、浸出液を飲んで、夢遊裡に果てた）
伏見の遊女街をあとにした平賀源内と隠密・鬼堂天馬

は、次の日には、淀川夜船で下って、大坂の八軒屋であがり、尼崎、西宮を通り抜けて、兵庫へ入っていた。兵庫の旅籠で一泊した。

「いったい、どこまで、連れて行くつもりだ？」

「武庫山（現代の六甲山）だ」

源内は、明けそめたばかりの、西宮の甲山から須磨の鉢伏山につらなる山系の主峰を指さした。

「平賀――、お主、まさか、あの山中で、芥子を栽培している、というのではあるまいな？」

「おれは、そんなまねはせぬ。オランダの船長は、麻薬は、野生の草か茸からつくるに限る、と教えてくれた」

「どんな草だ？　なんという茸だ？　それがしも、およそ、北から南まで、山から山へと、登り降りした男ゆえ、だいたいの薬草、毒茸なら知っている」

「おそらく、お主の知識の外にある草と茸だ。……その草の実または茸をくらうと、千丈の断崖も、翼があるがごとく、跳び降りられる心地になる。恐怖心が全く失せるのだ。……万里の波濤を越えて飛ぶ渡り鳥は、それをついばんで、大海原へ落ちるおそれを忘れる」

八

半刻（一時間）あまり、勾配の急な坂をのぼったところに、その場所は在った。

半刻といっても、源内も天馬も、山嶽登攀の足をきたえあげていたので、常人の三倍の早さであり、すでに、兵庫湊は、はるか眼下にひろがり、淡路島が、手にとるほどの近さで、播磨灘と大坂湾を区切っていた。

ちゃんとした道がつけられていたのではなく、たまに猟師でも通るであろうけものみちであった。

源内が、天馬を案内したのは、頂上ではなく、灘五郷の酒造りの宮水を落している布引の滝の下を通り抜けて、いったん樹海の斜面を下り、奇岩の重なり合った山中であった。

どの岩も、さして大きくはないが、賽の河原を連想させる、薄気味わるいひろがりをみせていた。

巨大な絶壁に、よりかかるようにして、岩棚の上に、小さな小屋が建てられていた。

源内は、ひょいひょいと、岩から岩へ跳んで、小屋に近づいた。

ここは、底の浅い池が、無数の奇妙な形の岩を、茸の

群のようにちらばせた眺めであった。樹海を絶壁が切りひらき、そこだけ、清冽な水が、奇岩のあいだを音もなく流れて、別の景色をつくりあげたあんばいであった。

「いるか、爺さん――」

源内は、たてきられた板戸を、たたいて呼んだ。

うめくような、しゃがれ声の返辞があった。

源内は、天馬を振りかえって、

「朝鮮人なのだ。おれが、兵庫宿の本陣井筒屋に居候していたのを、ここへ連れてきた。日本へ渡って来て四十六年にもなるというのに、頑固に、日常の会話の言葉さえ、おぼえようとはせぬ爺さんさ」

と、教えた。

徳川幕府は、始祖家康以来、朝鮮と和親外交をつづけて来ていた。

将軍の代がわりや、特別の慶事の際には、朝鮮の宮廷から、祝賀の使節が、遣されて来ていた。

その使節を乗せた船団は、瀬戸内海を航って、兵庫湊に上陸し、そこから陸路を、江戸へ向うならわしであった。

四十六年前――享保四年（一七一九年）に、新将軍吉宗に、祝賀を申し述べにやって来た朝鮮の正使・副使には、四百七十余人が随行していた。

この使節一行の接待を命じられた尼崎の桜井遠江守家では、四万石の小藩でありながら、一万人を動員し、引船・送迎船四百五十艘、水主三千七百六十二人を用意したため、破産状態になった、という。

源内が、この小屋へ連れて来た老爺は、その享保年度の使節の随行員の一人で、どんな理由があったのか、朝鮮へ還らず、兵庫湊にとどまったのであった。

隠密・鬼堂天馬は、源内が板戸をひきあけるや、内部をのぞき、片隅にうずくまっている朝鮮服をまとい白髪あたまをぼうぼうと乱して、じっと動かぬ影を、すかし視た。

「この爺さんが、麻薬をつくるのか？」

九

「いま、お主に、麻薬というものが、如何に強烈な作用を、魂に及ぼすか、実験させてやる。隠密なら、拒絶はすまいな」

平賀源内は云った。

「もとより、この身は、隠密になった時から、世間の表から消えた」と性根を据えて居る」

「よい覚悟だ」

源内は、朝鮮の老爺に、なにか命じた。
顔も手も皺だらけの老爺は、無表情で、うなずくと、板壁の棚から、三個の革袋をとりおろして、前へならべた。
それから、かたわらの擂鉢をひき寄せた。それは乾燥した黄色の茸が三個、入れてあった。
老爺は、それを擂り子木で、丹念に押しつぶした。それは、見まもる者にとっても、うんざりするほど長い時間が、かかった。
やがて、老爺は、すりつぶした茸へ、第一の袋からは、穀象虫をとり出し、第二の袋からは、純白の柔かな、繊維質の何かの種を、最後の袋からは、これも何かの草の根をとり出して、入れた。
次に、緑色の水を、茶碗に二杯、そそいでから、囲炉裏の、自在からつるされた土鍋に移し、とろ火で、煮はじめた。
沸騰すると、すこしずつ、緑色の水を加えて、ぐつぐつと煮つづけた。
平賀源内と鬼堂天馬は、終始、黙然として、見まもっていた。
土鍋が、自在からおろされたのは、およそ三時間も経った午后の陽ざしが傾いた頃あいであった。
茸と穀象虫と木の種と草根で、煮つめられたしろものは、猪口一杯分ぐらいの量になって、みるみる凝結した。
「天馬、小さじにすくって、なめてみろ」
源内に、うながされて、田沼意次の隠密は、一瞬、ためらった。
「う、うむ！」
「ほんのすこしなめたならば、深呼吸をするのだ」
忍びの術で、身心を修練している鬼堂天馬は、その反応が如何なるものであろうとも、断乎として、理性は失わぬぞ、とおのれに云いきかせて、小さじを把りあげた。
「深呼吸をしたならば、しばらく、無念無心でいることだな。修行僧の結跏趺坐――内満安座の相というところだ」
「判った」
ものの数分が過ぎたろうか。
おそろしい胸部の動悸から、症状は、はじまった。
その息苦しさがおさまった時、天馬の前に、いっぴきの蝮が、するすると迫って来た。
……ふっと。
気づいた時には、蝮は真二つに両断されていた。天馬

の右手には、白刃があったが、自身、どうやって、迅業をつかったか、全くおぼえがなかった。
なんとも名状しがたい凄じい活力が、五体に満ちていた。
と――。
その活力を試すために来たごとく、戸外から、ものしずかだが、冴えた声音が、かかった。
「平賀源内氏、その公儀隠密と、わたしの連れを勝負させてみたい」

十

突如として、小屋の前に出現して、呼びかけて来たその声音は、禁門影人のものに、まぎれもなかった。
平賀源内は、愕然となった。
武庫山中のこの場所は、自分がえらび、この朝鮮の老爺をつれて来て、麻薬製造所にしたのである。老爺を、ここへ連れて来たのは、四年前であったが、金小中というかれは、爾来ただの一度も俗界へは降りていなかった。
絶対に、誰人にも知られていない処を、どうして、あの白面の青年が、さぐりあてて、登って来たのか？
――遠方の花を知る蜜蜂のような、天性の霊感でも、そなえている、というのか？
源内は、内心呟きながら、田沼意次の隠密を視やった。
異常な活力を、五体にたぎらせた天馬は、餓狼のように、原始の野生の鋭い眼光を、宙へ送って、ぴくっぴくっと、こめかみを痙攣させていた。
源内は、立って行き、板戸をひきあけた。
禁門影人は、京都町奉行所で出会ったと同じく、白羽二重の小袖を着流し、小脇差一本だけを、腰に佩びていた。
但し、そのうしろに、一人の若い逞しい巨漢をしたがえていた。
源内は初対面であったが、それは、高山彦九郎であった。
「お手前、どうして、ここをさがしあてられた？」
源内は、問うた。
「わたしは、秀れた女忍を一人、俘虜にした。そのくの一に命じて、お主の行動をさぐらせた。お主が、伏見の遊里で流連していることは、すぐに判明した。あとは、お主が、伏見を出て、この武庫山へ登るのを、尾行させるのは、なんの造作もないことであった。――お主は、

どうやら、将軍家側衆の田沼意次が放っているらしいその隠密と仲間になっているようだが、尾行に気がつかなかったとは、うかつであったな」
「尾けて来たそのくノ一の、忍びの術に、頭を下げ申す」
源内は、わるびれなかった。
源内は、天馬とともに、兵庫で一泊している。そのあいだに、女忍は、京都へ馳せもどって、この禁門影人を、兵庫まで、案内して来たのである。
源内と天馬の会話は、ことごとく、女忍に聴きとられてしまったに相違ない。
左様——。
禁門影人は、高山彦九郎と女忍・無香を、同じ部屋に寝かせたが、彦九郎が異常な忍耐心をもって、その柔肌へ一指もふれないままに、一睡もせずにいると、夜明け前に、不意に、
「無香とやら、起きよ。やってもらいたいことがある」
と、呼び出し、
「平賀源内という曲者が、洛中か洛外にいるはずだ。行方をつきとめて、あとを尾けよ」
と、命じたのであった。
俘虜となった無香は、おどろくべき短時間で、源内が伏見の青楼にいることを、つきとめたのであった。

十一

「平賀源内——」
禁門影人は、ふところ手で、その気品のある相貌に、微笑をうかべつつ、云った。
「わたしが、ともなったのは、上州新田郡細谷村の名主のせがれで、高山彦九郎正之という。見ての通り、この巨体には、二十人力の膂力がありそうだ。……話にきけば、物心ついた頃より、豪毅の気象の父の供をして、山野の狩猟で、剣と度胸をやしなった由。十四歳で、真正面から立ち向って来た猪を、木太刀で、撃ち殺したそうな」
「つまり、申さば、猛獣にひとしいこの野性の若者を使って、正しい剣の修業を積み、且また忍びの術も会得しているそれがしの同輩が、さらに麻薬によって、活力を五倍にも十倍にも身心を満たしているのを、破ってみたい、と申される？」
「そういうことだ」
「さア、それは、どういうものですかな」
源内は、冷やかな笑いをかえした。

「この鬼堂天馬は、この二刻（四時間）あまりは、人間ではござらん。つまり、人間の意識をふりすてた完き悪鬼でござる。……とうてい、そこの若者は、試合をすることなど、不可能と存じます」
これをきいた高山彦九郎が、かっと双眼をひき剝いた。
「拙者は、今日まで、名ある一流の剣客と立ち合って、いまだ一度も敗北を知り申さぬぞ！　猛虎といえども、一太刀で両断してみせ申すぞ！」
「それだけの天才を親から与えられ、いまだ弱冠（二十歳）に満たぬ、春秋に富んだ身を、あたら、ここで犬死させることはあるまい。お主は、この禁門影人などという怪しげな仮名をつかう人物に、巧みにあやつられた人形でしかない」
「黙れっ！」
彦九郎は、満身から、呶号を噴かせた。
「このお方は、恐れ多くも、さきの天子様のおん兄君にあたらせられるのだぞ！」
「なに?!」
源内は、この白面青年が、所司代に向って、従三位権中納言、と告げていたのを思い出した。
従三位というのは、そこいらの大名などがもらえる位ではなかった。
徳川家四天王といえば、井伊・本多・酒井・榊原であり、老中の上の大老になれるのは、まず、この四家の当主に限られていた。ところが、四家筆頭の井伊家当主でさえ、たとえ大老となっても、位は従四位か、ひとつあがって正四位であった。
また、外様の大大名にしても——たとえば、広島の城主浅野安芸守は、四十二万六千石の西国の雄であるが、位は従四位下であった。亡くなってから、ようやく正三位を贈られるのであった。
さらに——。
禁門影人は、権中納言と称したが、徳川幕府では、将軍は別として、ご三家（紀州・尾張・水戸）のうち、紀州家と尾張家が大納言で、水戸家当主は、中納言であった。
禁門影人が、大嘘をついていないとすれば、まさしく、かれは、先帝の実兄であろう。

十二

「わたしが、さきの天子の兄であろうと、なんであろうと、そんなことは、どうでもよい」

禁門影人は、云った。

「わたしは、火に燃えぬ布を発明したお主――平賀源内が、つくった麻薬というものの魔力を、看たいのだ」

「わざわざ、この場所を突きとめて、たずねて参られたからには、ごらんに入れぬわけにはいきますまい」

源内は、あたかも不動尊と化したごとく、宙へ双眼を据えて、微動もせずにいる鬼堂天馬のそばへ寄ると、その肩をたたき、

「おい、あの若者を見ろ」

と、高山彦九郎を、指さした。

「お主は、あれと、立ち合うのだ。容赦無用。斬れ！」

「………」

天馬は、無言で、すっと立った。

その動作だけで、すでに、無気味であった。

高山彦九郎の方は、闘志をむき出して、

「来いっ！」

と、一米に近い大太刀を抜きはなった。

この当時、こんな長剣を差料にしている者は、剣客でもいなかった。

これに向って迫る天馬は、全くの無表情であり、白刃を右手につかんで、だらりと下げていた。すなわち、闘いの構えがなかった。

清冽（せいれつ）な流れの中に、無数の茸（きのこ）のように浮き立った奇岩の中でも、踏みごたえのあるひとつを、彦九郎は、えらんで、大太刀を、大上段にふりかざしていた。

天馬の方は、構えをとらぬ自然の体勢で、二つ、三つ、と岩から岩へ渡って、距離を縮めて来た。

その前進は、どう眺めても、敢えて彦九郎の大太刀のえじきになろうとしているとしか、受けとれなかった。

距離が、彦九郎の大太刀の刃圏内に、いま一歩、と迫った時、天馬は、ぴたりと立ちどまった。

みるみる天馬の顔面から、汗が噴いた。唇のはしから、よだれが流れた。

その全身が、石のように硬直するのが、みとめられた。

筋肉という筋肉が、こわばってしまったようであった。

対峙（たいじ）する彦九郎が、その様子に、眉宇（びう）をひそめて、舌打ちした。

彦九郎の目には、敵が突然、発作を起して、闘う力を失ったように、映ったのである。

事実、天馬は、数秒ののち、硬直が溶けるや、ゆらりと上半身をゆれさせた。

平衡感覚をなくしたか、とみえた。

「くそっ！」

彦九郎が、唸った。

「案山子同然になった奴などと、決闘はできぬ！」

禁門影人は、終始沈黙を守り、眉毛一本うごかさぬ。

平賀源内の方は、やがて、鬼堂天馬が発揮するであろう鬼神のような迅業を、期待している表情であった。

十三

時刻が、移った。

大上段にふりかぶった彦九郎と、だらりと下げた天馬と、両者は、それなり絵に入ったごとく、動かなかった。

ようやく、禁門影人が、源内に問うた。

「どうなる？」

「勝負は、白昼から闇夜へ――ひとつの世界から、もうひとつの世界へ転ずる亀裂（きれつ）の狭間の黄昏（たそがれ）に於て、決すると存ずる」

まさしく――。

源内の予告通りであった。

西の樹海の上にあった残照が、潮のように引いた――瞬間。

鬼堂天馬が、岩を蹴って、五体を宙のものにした。

高山彦九郎の豪剣が、うなりをたてて、振りおろされた。

次のせつな、彦九郎のその白刃は、空中へはねとばされ、彦九郎自身は、流れへ、倒れ、飛沫（ひまつ）をあげた。したたかに、太股（ふともも）を斬られたのである。

と、みるや……。

天馬は、形容の詞もない奇怪な懸声を発して、禁門影人めがけて、襲いかかって来た。

後刻、平賀源内によって説明されたことだが、源内が、声なき声で、天馬に、

「この禁門影人を攻撃しろ！」

と、命じたのであった。

影人は、飛鳥に似た早さで、天馬の魔剣を、文字通り紙一重でかわしつつ、岩から岩へ跳躍した。

天馬の襲撃は、あきらかに、自らの意志で、そうするのではなかった。隠密が、忍びの術を使う場合は、絶対に、意志を明晰（めいせき）な状態に置いているものである。

天馬は、麻薬によって、完全に、何ものかにとり憑かれていた。

瞬時の休止もなしに、襲いかかる凄じさは、たしかに、悪鬼そのものであった。

これに対して、なぜか、禁門影人は、小脇差すら抜こうとせず、跳びかわし、避け躍った。
しだいに、宵闇が、濃くなった。
小屋からもれ出る灯火だけが、明りを増した。
と——。
禁門影人は、その小屋前の明るい地点へ、数米を、一挙に、翔けた。
あっ、という間のことであった。
禁門影人は、平賀源内の利腕をつかみざま、ぱっと、その背中へ、影となって、身をかくしたのであった。
源内は、あっとなり、反射本能で、
「天馬っ！　止めろ！」
と、絶叫した。
一瞬、おくれていたならば、源内は、脳天から真二つに斬り下げられていたに相違ない。
天馬が、その動きを停めた。
源内は、片足を流れへ突っ込み、ばあっ、と天馬めがけて、水をかけた。
その飛沫を顔にあびた天馬は、とたんに、裂けんばかりに、大きく口をひらいた。そして、げえっ、とおびただしく嘔吐した。

天下攪乱策

一

二更——午后十時。
武庫山中の麻薬製造小屋内は、その麻薬の異様な臭気のただよう静けさが、占めていた。
五人の人物が、それぞれの座を占めて、深い沈黙を守っている。
中央の囲炉裏で、燃やされる粗朶火の、ぱちぱちとはじける音だけがあり、樹海の底の寂寞は、寒気のきびしさを加えて、いっそ、妖しいものになっていた。
禁門影人だけが、端然と炉端に正座して、思念をこめた視線を、遠く、宙へ据えていた。
そのむかい側に、平賀源内が、疲労の色を、顔面ににじませて、粗朶火へ目を落していた。
太股に重傷を受けた高山彦九郎は、源内の背後に、仰臥して、時折り、ひくい唸りをもらしていた。

隠密・鬼堂天馬は、麻薬の切れた者の、完全な痴呆のていで、荒壁へぐったりとよりかかっていた。
そして、金小中という朝鮮の老爺は、依然として、同じ片隅に、うずくまっていた。
やがて——。
「どうやら、これで、わたしが求めていた役者が、出そろったようだ」
禁門影人が、冴えた語気で、云った。
「平賀源内。
高山彦九郎。
上田秋成。
公儀庭番・鬼堂天馬。
そして、目下、わたしの俘虜となっている無香と申す娘忍者とこの朝鮮の老人。
この六人の曲者がそろったところで、わたしの企てている、当代の封建の社会の仕組みをひっかきまわす仕事は、どうやら、実行に移せるであろう」
「お手前は、おれたちを、あやつり人形として使うこんたんか？」
「類は友を呼んだことだ。わたしがお主ら一人一人にあらかじめ、目をつけて、同志にさそい入れた次第ではない」
「それは、そうだが……」
「お主は、占星の術を学んだ模様ゆえ、人間というものが、運命の糸であやつられることを、すでに承知であろう。二十年の知り合いでも、ついに、性が合わぬ間柄もいれば、ただ一度の対面で、水魚の交りのできる同士もいる。……曲者は曲者を呼び、そして、ともに同じ目的の道を進む」
「強引な誘惑だな」
源内は、苦笑した。
「伏見の青楼で、お主は、そこの隠密に申していたそうではないか。将軍家側衆となった田沼意次という人物が、いずれ、幕閣で主導の権力をにぎるであろう、と。まさに、わたしの企図を実践するためには、うってつけの人物だな、田沼意次は——」
「お手前のたくらんでいることを、具体的にうかがおう」
源内は、対座しているうちに、この白面の、気品のある青年に、いつの間にか、惹きつけられているのを、はっきりと意識していた。

二

「田沼意次をして、幕府の権勢を手中にせしめたならば、やがて、幾十年かののち、公家ならびに武家の法度を、根底から改革させる時代がおとずれよう」

　禁門影人は、なんのためらいもなく、平賀源内にこたえた。

「たとえば――？」

「鎖国制度を廃して、諸外国と交易させる。諸大名の参覲交替制を、それぞれの自由意志にまかせる。さらに、禁廷に、すくなくとも十万石以上の領土をわかち与えさせる。公儀役人に賄賂して、ふところをこやしている大坂商人どもを、たたきのめす。そして、召し上げた御用金で、百姓を救済させる。……わたしは、倒幕、王政復古などと、敢えて旗じるしはかかげぬ。ただ、このままでは、いささか、神がかりな云いかたをすれば、封建制度に、天災地変の罰が下るであろう、という予感がする」

　毅然たる影人の態度と言辞は、さすがの源内に、かたずをのませた。

「いま、八代将軍吉宗は、中興の英主とうたわれているが、享保の改革ごとき、いささか度胸があれば、その独裁によって、誰人でもやれたことだ。老中どもを威圧し、倹約令を下して物価騰貴を抑制したのはよいが、その結果は、狡猾な大商人どもを大いに肥えさせる結果をまねいた。のみならず、緊縮政策のひとつとして、貨幣の質を落して改鋳したために、逆に、物価を騰貴せしめた。同時に、公儀の得た利益も無に帰した。かさねて云う。中興の英主吉宗は、大坂・京・江戸の問屋どもに金の力を得させたにとどまった。それが証拠に、飢えた百姓たちは、窮鼠、猫を噛んで、一揆を起し、将軍家の膝元である江戸で、幕府はじまって以来、はじめてのうちこわしが起っている。……吉宗ごとき、なにが中興の英主ぞ！」

　舌鋒は、鋭かった。

「では、お手前は、田沼意次という人物ならば、まことの改革ができる、と申されるのか！」

「いや、わたしが、前述した根底からの改革は、田沼個人の力を以てして、とうてい、実現し得る、とは思わぬ。ただ、わたしが、田沼意次という人物を、ひそかに調べたところでは、かれは、いかに金の力を巧みに利用するか、という智能に秀れている。八代吉宗の専制によって、三都の問屋どもを肥えさせた享保改革とは、質の

ちがう政策をとるに相違あるまい。すなわち、商業資本力を増大させるであろうが、それとともに、その資本力を巧みに逆手にとるであろう。すなわち、莫大な運上金を課すに相違ない。さらには、外国との貿易、新田開発をはじめ、殖産興業の政策もとるであろう。……あるいは、その改革もまた、田沼個人の金権を第一とする独裁力が及ばずして、結果は、失敗に終るかも知れぬ。ただ、わたしが、最も期待し重要視するところは、田沼の改革によって、下級武士層、農民たちの間に、意識無意識に、徳川幕府の封建政治というものに対する不信が起ることだ。この不信が、やがて、王政復古という自覚をつちかうであろう。士農工商の差別などが、いかに、愚劣なものであるか――封建社会の危機の激化の中から、目ざめる者が、せめて、千人も生れれば、後世に於ける、根底からの改革に、多大の影響を及ぼすであろう」

三

　田沼主殿頭意次は、この年（明和二年・一七六五年）すでに四十七歳で、ようやく、将軍家側衆となり、遠江相良一万七千石の城主となっていた。

　意次の父は、意行といい、紀州吉宗に仕えていたが、吉宗が八代将軍の座に就いてから、主殿頭に任ぜられ、旗本となり、御小納戸頭になった人物であったが、紀州時代は、木刀しか腰にさせない足軽でしかなかった。

　足軽は、武士に加えられない最下級の身分であった。

　田沼意行は、よほど、才知が長けていたとみえて、吉宗の英断もあって、六百石の武士にまで出世したのであったろう。

　その子意次は、十五歳で、江戸城西丸に小姓として出仕した。

　その出世ぶりは、決して足早やなものではなかった。

　ひとつの理由は、八代吉宗のあとを継いだ九代家重が、若年の放蕩のたたりで、梅毒に冒され、ろくに口もきけなくなったばかりか、大小便たれ流しの晩年を送り、この痴呆状態を、巧みに利用して、家重と老中たちの間に、『御用取次』の小姓、大岡忠光が居すわっていたからであった。

　家重は舌がもつれてしまって居り、老中はじめ、左右の人々はほとんどその言語を解すことが不可能であった。ふしぎに、大岡忠光ただ一人だけが、その意味を理解できた。

　当然、大岡忠光の『御用取次』の座は、重いものとなった。

吉宗が、大御所として、家重の後見をしていたあいだ（七年間）は、大岡忠光も、おとなしく、文字通りの御用の取次だけをしていたが、宝暦元年（一七五一年）六月二十日に、吉宗が逝くや、たちまち、忠光は、大名にとりたてられ、若年寄となり、名実ともに御側御用人となり、その勢力は、ゆるがぬものとなった。

尤も――。

当時は、それぞれ識見をそなえた老中たちが、ずらりといたので、大岡忠光が、かれらを制することはできなかった。

　堀田相模守正亮（下総佐倉・十一万石）
　西尾隠岐守忠尚（遠江横須賀・三万石）
　本多伯耆守正珍（駿河田中・四万石）
　松平右近武元（上野館林・五万四千石）
　酒井左衛門忠寄（出羽鶴岡・十一万五千石）

これら譜代大名が、幕閣に、厳然として、在るかぎり、大岡忠光も、政権を狙う野心はあったとしても、実際行動に出ることは、叶わなかったのである。

田沼意次が、きわめてのろのろと、出世して行ったのは、大岡忠光の下に置かれていたとともに老中たちの粒がそろっていたからである。

意次が、御小姓組番頭となり、二千石の旗本になったのは、三十歳（寛延元年・一七四八年）であった。

吉宗が、他界したのは、意次が三十三歳の時であった。しかしそのおかげで、べつに、意次の面前に、はっきりと出世街道が見通せた次第ではなかった。

三千石を加増されたのは、三十七歳になってからであり、四十歳になって、やっと、一万石の大名に昇ったのであった。

平均年齢の甚だひくい当時にあっては、四十歳は初老であり、隠居するのに間のない年配であった。

四

九代将軍家重が、痴呆状態のまま、五十一歳で、亡くなったのは、自分の代理をつとめてくれていた大岡忠光が、五十二歳で歿した翌年（宝暦十一年・一七六一年）であった。

田沼意次は、もう、四十三歳になっていた。

そして、いま――明和二年。

田沼意次は、ようやく、政治の世界に乗り込んで、その首座を手中にすべく、虎視眈眈としている。

夜が、更けた。丑刻（午前二時）になっていたろう。

「お手前も、この老人のつくった麻薬によって、別の世界を視られては、いかがか？」

平賀源内が、禁門影人に、すすめた。

「お主は、すでに経験ずみか？」

影人は、問いかえした。

「それがしは、好奇心の権化のような男ゆえ、たとい、それが地獄であろうと、そこにあれば、のぞかずには、気がすまぬのです。……この老人がつくった麻薬をのむと、まず、時刻が失せる。朝、目覚めて、昼を迎え、黄昏を境として闇夜に入る――。人間は、生涯、こうして、時間というしろものに刻まれ、左右されつつ、生きて居る。突如として、この時刻の過ぎるのが停止したならば、どのような新しい意識が生れるか、お手前には、想像ができ申そうや？　たとえば、恋におぼれて、その女子を抱いた時、抱いたおのれも、抱かれた女子も、このまま、永遠に時間が停止すればよい、と願い祈るのが、人間の情と申すもの。麻薬は、実際に、現実に、時間をぴたりと停めてくれ申す」

「幻覚か？」

「いや、幻覚ではござらん。意識が明らかな中で、時間が停まり、さらに、それまで、おのれをしばりつけていた全てのものから、解放された世界に入り申す」

「…………」

「人間は、この世に在る限り、四苦（生・老・病・死）と、さらに、加えるに、愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦の四苦を合せた八苦から、のがれるすべのないことは、仏典を読まずとも、文盲の徒も知って居り申す。されば、この四苦八苦から、ただの半刻でも、解放されて、別の次元の世界へ、しかと意識を保ちつつ、入り得たならば、まさしく、生身で極楽浄土のよろこびをあじわうことができる、と申すもの。……こころみて、ごらんなされ」

源内のすすめを、しかし、禁門影人という青年は、微笑しながら、かぶりを振って、拒否した。

「傀儡師が、傀儡になっては、おのが魂を見失うことに相成ろう」

「いや、それは――」

「まず、待て。わたしの意志は、おのれ個人の悦楽や愉快のためには、働かぬ。……神より与えられたいささかの能力を、世直しのために、揮ってみたい。麻薬も、その目的のためならば、敢えて使用するのを辞せぬ。……お主の話をきけば、麻薬は、どうやら、わたしのさめた能力を削りこそすれ、増してはくれそうもない」

五

禁門影人が、ふらりと京都へ帰って来たのは、それから五日後の夕刻であった。

蛸薬師通堀川の『長生庵』には、つかさという、ろうたけた美女が、一人だけ待っていた。

「おもどりなされませ」

作法正しく両手をつかえたつかさは、影人がほんの半刻あまり外出していたのを出迎えるように、無表情であった。

つつましく、しとやかに、孤独に耐えることに馴れて、ひっそりと日々をすごしていると、その性格・育ちかたもあろうが、このように喜怒の情を、全くおもてにあらわさぬ女になるのであろうか。

「無香と申す女忍は、いかがいたした？」

夕餉の箸をとりあげた時、影人は、たずねた。

「亡父の遺髪を、故郷の伊豆へ持ちかえりました。石廊崎の家で、供養をすませたならば、すぐに、こちらへひきかえして参る、と誓って居りましたが……」

「あのくの一、いずれ、わたしに惚れるであろうな」

影人は、なに気ない口調で、云った。

その顔へ、視線をあてたつかさは、しかし、べつに、表情をうごかそうとしなかった。

「もしかすると、わたしは、無香を抱くかも知れぬぞ」

影人は、意地わるく、たたみかけた。

「ご随意になされませ」

「つかさ、そなたが妬心を持たぬとはいわせぬ」

「ご自身の自由を、いささかでも、じゃまされることを、最もおきらいなおひとではありませぬか、貴方様は」

「自由か。……おのれをしばったものから、全て解放される、というのが、自由なのか」

影人は、武庫山中で述べた平賀源内の言葉の一節を、くりかえしてみた。

その平賀源内は、長崎へ行くと告げて、西海道をひろって行った。

高山彦九郎は、朝鮮の老人金小中の小屋で、あと十日は、治療しなければなるまい。

隠密・鬼堂天馬は、江戸へ還って行った。

大坂へひきあげた上田秋成は、いま頃はもの狂おしい勢いで、料紙に筆を走らせているに相違ない。

「つかさ、どうやら、わたしが、江戸へ出る秋が来たようだ」

影人は、告げた。

「…………」

つかさは、宇治茶を口にはこぶ影人を、じっと、見つめたが、何も云わなかった。

影人が、臥床に入った時、乙夜を報らせる寺院の梵鐘が、ひびいて来た。

目蓋をとじた影人は、自分が知己となった曲者たちの風貌を、ひとつびとつ、よみがえらせた。

――占星の術でうらなえば、運命の糸が、かれらを、わたしの許へ、たぐり寄せて来た、ということか。

自身に、そうつぶやいた折、襖をそっと開いて、洗い髪のつかさが入って来た。

白綸子の寝召すがたは、有明の灯の中に、清らかで雅びな美しさを描いた。

六

つかさが、音もなく掛具をあげて、傍へ身をすべり込ませて来た。

影人は、動かなかった。

影人が、手をのばさぬ限り、つかさは、腕の中へ入って来ない女であった。

しかし、今宵は、つかさの方から、恋する男の胸へ、顔を伏せて来た。

「…………」

影人の方に、微かなとまどいが起った。

しばらく、そのままでいてから、影人が動いた。

つかさが、顔をあげた。必死の慕情が、その眸子に、うるんだ妖しい光を宿していた。

影人は、その唇へ口を合せて、片掌を、柔かに盛れた胸へすべらせた。

瞬間――つかさのしなやかな肢体が、狂おしくもだえた。

かつて一度も示したことのない激しい反応であった。

……影人は、青い実が、一瞬裡に熟したのを、感じた。

ふっと、唇から口をはなすと、

「わたしが、出府したならば、生還せぬ、とおそれているのか？」

と、問うた。

「その便りがあったならば、わたくしも、死にまする！」

「…………」

「生きて還る、とお約束なさいませ！ ……いやです！

貴方様がこの世から姿をお消しになるなどと、想像しただけで、わたくしは、気が狂いそうになります！」
　これまで抑えに抑え、押しころしていた感情を、一挙に噴かせて、しがみついて来る肢体を、受けとめつつ、影人の脳裡が、不意に、鋭く冴えた。
「つかさ――」
「はい！」
「わたしよりも、そなたの方が、一足さきに、この世から去ることになるかも知れぬぞ」
「…………」
「覚悟は、できて居るはずだ」
「できて居ります！」
「わたしの生命を狙う敵どもが、庭に来た」
「え?!」
　つかさは、からめた四肢を、かたくこわばらせた。
「別離のはなむけに、そなたが天女の舞いをひとさし舞うてくれるか？」
　それは、受けとりかたによっては、禁門影人という青年の氷のような非情を示す要求であった。
「舞いまする！」
　つかさに、ためらいはなかった。
　影人自身が、得物をつかんで、暗殺者どもと闘おうとせず、つかさをして立ちむかわせるのは、それなりの思慮があってのことであった。
　すなわち。
　明日、江戸へおもむくのは、封建下の日本を攪乱しようとする目的のためであった。
　それだけの大仕事を、やってのけるためには、愛する女をも、敢えて犠牲にして悔いぬ非情を必要としたからであった。

七

　臥床を出たつかさが、まず、為したのは、有明行燈を、縁側へはこぶことであった。
　次に、長押に架けてある薙刀を、手にした。
　禁門影人は、臥床の上に坐っていたが、つかさが、黙礼しておいて、縁側へ出ようとすると、
「待て」
と、呼びとめた。
　ふりかえったつかさへ、ひくく、
「忍び込んで来たのは、並の手練者ではない。かれらの意表を衝かねば、雨戸を開いた瞬間に、討たれるぞ」
と、云った。

　数秒間、つかさは、その場に佇立していた。
　影人が、ひくいが凛と冴えた声音で、命じた。
「羞恥を忘れよ、つかさ！」
「…………」
　つかさは、逡巡をふりはらった。
　左手で、しごきのむすびを解いて、肩から、白綸子の寝召を、すべり落した。つづいて、腰にまとっていた二布も、足もとへすてた。
　豊かに肉の乗った、白磁のようにぬめらかな裸身は、たったいままで、官能の悦びに、燃え、疼き、もだえていたものであった。
　禁門影人は、夜の灯に映えた、名工が精魂をこめた塑像のようなその後姿を、冷やかな眼眸で、見まもった。
　その裸身がたたえた神秘な美しさは、観世音菩薩の化身かと想わせた。
『長生庵』の庭へ、侵入して来た黒影は、三人であった。
　すでに――。
　禁門影人が、この世に在るのを目ざわりとする密議をした宮廷内の一部の公卿たちは、わざわざ、伊豆から呼び寄せた北条乱波生き残りの「捨て草」父娘を、さし向けて、失敗していた。
　二度の失敗は許されなかった。
　失敗すれば、こんどは、禁門影人の方から、逆襲して来るに相違なかった。
　かれらは、禁門影人のおそろしさを、充分に知っていた。
　一部の堂上公卿たちが、何故に影人を暗殺しようとしているのか、読者に、その理由をかくしておく必要はあるまい。
　英明の天子桃園帝を、伊豆忍者「捨て草」の無念道士をやとって、暗殺したのが、かれらであった。
　かれらは、桃園帝が、竹内式部の思想を聴取され、王政復古の肚をきめて、それを実際行動に移されるのを、おそれたのである。
　すなわち。
　江戸幕府に対する卑屈な恐怖心から、ついに、まだ二十二歳の主上を弑逆して、人形のような智子内親王を、帝位に即けたのであった。
　桃園帝に、異母兄がいることは、宮廷内では、公然の秘密であった。
　その異母兄は、有栖川宮家に預けられて、その御殿で十四歳まで育ったが、突然、「神かくし」にあい、十年の後――二十四歳の秋、飄然として、京の都へ、還っ

て来たのであった。
　禁門影人と仮名をつかうその異母兄が、桃園帝を弑逆した公卿がた一人一人宛に、復讐を暗示する無気味な書状を不意に送りつけたのは、今夏であった。

八

——屋内へ突入すべきか？
——庭で、待ちかまえているべきか？
　忍び入って来た三人の刺客は、その時、まだ、いずれをとるべきか、決定しかねていた。
　かれらは、すでに、禁門影人の業前について、充分に調べあげていた。
　刺客たちは、並の手練者ではないだけに、それだけに、影人の業前を高く評価していたのである。
　自分たちの侵入は、気配を消したものであったが、影人ならば、すでに察知した、という判断のもとに、襲撃しなければならなかった。
　とすれば、屋内へ突入するのは、攻撃側としては、不利な条件であった。
　しかし、庭で待ちかまえていれば、影人という青年は、わざと、そ知らぬふりをして、すてておく公算が大であった。
　——やはり、突入すべきであろう。
　刺客たちの無言裡の思議が成り、即時にして、心気が、突入の闘志のためにはりつめた。
　隙間の多い雨戸の、その隙間から不意に、光箭がいくすじも、庭に放たれて来たのは、ちょうど、その時であった。
　有明行燈が、縁側へはこばれたのである。
　これは、突入して来るのを待っているぞ、という意思表示に受けとれた。
　瞬間——建物へ迫ろうとした三人の五体が地上に固着した。
　十ばかりかぞえるほどの、文字通り息づまる秒刻が、流れた。
　すっ、と——。
　雨戸が一枚、繰られた。
　あかい灯かげの中に、浮きあがったのは、若い女性の全裸像であった。
「…………」
　叫びこそあげなかったが、刺客たちは、予感だにしていなかったその出現に、はりつめた心気を搏たれて、棒立った。

　薙刀の石突きで、沓石を突きざま、寝待月のあかるい深夜の宙を、白鳥の翔ぶがごとく、反撃して来るまで、刺客たちは、茫然として動かなかった。
　つかさは、足が地面につくと同時に、薙刀を、はねあげた。
　刃線上に、刺客の一人の、一刀をつかんだ双腕があった。
　その双腕が、両断された時には、もう、薙刀は、つかさの頭上で旋回して、次の敵を、袈裟がけに、斬りおろしていた。
「うぬがっ！」
　仲間二人を、一瞬裡に斬られた残りの刺客が、屈辱を憤怒に転じて、青眼に構えた。
　まともの立合いに於ては、あきらかに、刺客の腕が、まさっていた。
　振りおろし、突き出し、薙ぎはらいつつも、つかさは、次第に、後退を余儀なくされた。
　そして……。
　ついに、雨戸まで追いつめられた。
　屋内は、ひそとしずまりかえって、影人の気配すらもなかった。
　——影人様！　つかさの最期をお見とどけあれ！
　恋する男へ、つかさは、声なく絶叫した。

九

　刺客が、必殺の一撃を、充分の余裕をもって、放とうとした——せつな。
「斬る相手をまちがえて居らぬか、刺客殿」
　背後から、冴えた声が、かけられた。
「おっ！」
　ほんのわずかな狼狽が、刺客の生命取りとなった。
　つかさの薙刀が、したたかに、その胴へ食い込んだ。
　いつの間に、庭へ忍び出たか、禁門影人は、小脇差すら腰に佩びずに、すらりと、寝待月の光の下に、佇立していた。
　つかさは、一時に、気力が失せて、その場へ、くずれるように坐った。
　薙刀の柄をにぎりしめた十指は、それなり、にかわで貼りつけられたように、柄からはずれなかった。
　影人が、その指を、一本一本、柄からはずしてやると、つかさは、意識が遠のいて、ぐったりと、影人の胸によりかかった。
　……ふっ、と。

われにかえった時には、臥床に、横たえられていた。
夜は、明けていた。
あわてて起き上ったつかさは、枕元に、一通の書置が、のこされているのをみとめた。

一樹の蔭に宿りあひ、同じ流れを掬ぶだに、別れは悲しきならひぞかし

平家物語の中の一節が、したためられてあった。
つかさの双眸から、泪があふれた。
これまで、彼女は、影人から、ただの一度も「愛している」という言葉をきかされたことはなかったのである。
つかさは、七年前に重追放処分にされた竹内式部の主人・徳大寺前大納言公城の次女であった。
少女の頃、有栖川宮家で、作法見習いをしている頃、少年の影人と、兄妹のように、数年間をすごしていた。
影人が、十四歳で、有栖川宮家を出奔するや、つかさは、泪が涸れるほど泣きつづけたものであった。
つかさは、影人への慕情を忘れるために、公卿娘にあるまじく、薙刀の修業にうち込み、その業を身につけた。
昨秋、何処からともなく、十年ぶりにふらりと帰って来た影人は、まず、徳大寺家を訪れて、大納言公城に、
「つかさを申し受けたい」
と、申し入れたのであった。
すでに、つかさを住まわせる『長生庵』を、影人は、借りていた。
つかさにとって、影人は、生涯ただ一人の男性であったが、青年となったかれは、何処で、どのようなすごしかたをしたか、心中に黒い幕を張って、誰人にも窺い知らせない、無気味な人物になっていた。
いま、はじめて……。
つかさは、影人から、平家物語の一節に托して、
「そなたを愛している」
と、明かされたのであった。
しかし、その当人は、すでに、江戸へ向って出発していた。

中仙道異変

一

四日後――。
禁門影人の姿は、中仙道の、鳥居峠を越えた奈良井宿に、見出された。
鳥居峠を越えれば、木曾路は終る。影人は、わずか四日間で、木曾路を徒歩で過ぎていた。尋常の健脚ではなかった。
午後の日ざしがありながら、粉雪が花びらのように、宙に舞っていた。
影人は、奈良井宿を通り越した頃から、うしろを道中してくる若い男女同行の旅人に気づいていた。
男も女も、風呂敷で四角な行李を包んで、真田紐で背負い、紺がすりを膝までの短かさに着て、前垂れをかけたいでたちは、越後の毒消し売りにまぎれもなかったが、影人の目には、それが、変装であることをごまかせなかった。
影人が、かれらに尾けられている次第ではなかった。
――男は、生れながらの町人だろうが、女は、遊女あがりであろう。
影人は、そう看てとっていた。
二人の挙動は、あきらかに、世間の目をはばかるものであった。
影人には、こちらには、関係ないことなので、そう看てとっただけで、足をはこんでいた。
しかし、その二人にとって、通行をはばむ贄川の関所が、その行手にあった。
「卒爾ながら……」
男の方が、いそいで、影人に近づいて、呼びかけて来た。
「見も知らぬおさむらい様に、斯様なお願いをして、身も心も縮みまするが、ただの御人ではない、とお見受けして、後生一生のおたのみをつかまつりまする」
たしかに――。
白羽二重を着流し、小脇差一本だけを腰に佩びて、旅の道具など何ひとつ持たずに道中している影人の姿は、異様であった。
世間の目を忍ぶ者としては、只の武士ではない、と看

てとり、思いきって、救いを求めてきたに相違ない。

　街道は、下り坂になっていて、左右は、うっすらと雪化粧した畑がひろがっていた。

　影人は、榎の一里塚のわきにある腰掛茶屋へ、すっと、入った。

　つづいて、入って来た男女は、他に客がなかったので、その場へ、土下座して、平伏した。

「お前は、佐渡の流人であったのか？」

　いきなり、影人は、ずばりと云い当てた。

　はっと顔をあげた男へ、次の言葉が投げられた。

「金山の水替人足にされた者は、一年もつづけると、金属の毒に皮膚が冒され、さらに、その手に独特の節くれができる由」

「仰せの通り、てまえ、佐渡へ流されて、二年余り、水替人足をつとめさせられて居りましてございます」

「眺めたところ、べつに悪党面をしては居らぬが……」

「てまえは、ただの商人でございました。加賀のご城下宮腰町にて、三年前まで、手びろく諸種の事業をいとなんで居った者でございます。銭屋五兵衛と申しまする」

二

「銭屋、か。両替商であることをむき出しにした家号だな」

　影人は、薄ら笑った。

「仰せの通り、三代前までは、両替商をいとなんで居りましたので、世間から、銭屋と呼ばれ、これを屋号としたのでございます。てまえの曾祖父からは、材木、竹のあきないを主といたして居りました」

　銭屋五兵衛と名のる若い町人は、こたえた。（筆者註。巷間、密貿易で、加賀前田家の財政をうるおし、遠く、アメリカまで渡航した銭屋五兵衛は、この若い町人の長男――三世を継いだ人物であった）

「佐渡の流人にされた罪状は？」

「てまえが申すのも、面はゆいことながら、小僧の頃よりいささかの商才があり、六年前の四月十日に、金沢の城下が猛火に包まれ、お城までも、大半が消失いたした際、すばやく奥羽地方から、材木を廻送して、大もうけをいたしました。十七歳の時でございました。……他人の不幸を利用して、莫大な利益をむさぼったむくいを、てまえは、いま、受けて居りまする」

「その金で、何をした？」

「千石船を七艘買い入れて、南部、津軽、松前、函館、江刺などへ航海して、材木と海産物の交易をし、さらに、暴利を手中にいたしたのでございますが……、そのうちの一艘が、大時化に遭うて、陸奥の沖へ流され、安房へ漂着したのが、運の尽きでございました」

「…………」

「船の中に、オロシヤとひそかに交易をした品を積んであったのが、天領お代官の手代の出張によって、露見いたしたのでございます」

「お前は、前田家に、多額の御用金をさし出していたであろうに、藩庁からの救いの手はさしのべられなかったのか？」

「ご公儀の評定所に於て、罪状を問われたてまえを、藩庁が、当家の御用商人ではない、とつよく否定なさるのは、やむを得ぬ仕儀でございました」

「冷たいものだな、大名と申すものは――」

「はい」

「それにしても、佐渡から、よく逃亡に成功したものだ」

「それが……、この女子が、相川の漁師の娘でございまして、筏を組むすべを知っていたのでございます。てまえは、金山の穴底から匍いあがり、この女子は、相川町の女郎屋から抜け出して、その筏で、運を天にまかせた次第でございました」

　五兵衛と女の、流れ着いたのは、越後つついし親不知の断崖下であった。

　商売取引き相手の、気っぷのいい男が、近くの宿場町にいたのが、さいわいして、二人は、毒消し売りに化けることができたのであった。

　越中から飛騨へ、そして、木曾路へ、重畳する山嶽を越えるのに、筆紙につくせぬ苦労をした。

「それで……、わたしの供にでも化けて、贄川の関所を通って、何処へ参ろうというのだ？」

　禁門影人は、島抜けの男女を、じっと視やった。

三

　二代目銭屋五兵衛は、ちょっと、返辞をためらっていたが、

「てまえ、江戸の材木町に、支店を持って居りました。勿論、ご公儀に召し上げられましたが、番頭が気転の利く男で、十五万両ばかり、すばやく、かくしてくれたのでございます」

と、こたえた。
影人は、その巨額のかくし金のことをきかされても、眉宇もうごかさなかった。
「如何でございましょう？　何卒、江戸まで、従者にしたてて、おつれ下さいますまいか。……お願いつかまつります」
「………」
影人は、しばらく、宙へ、冴えた眼眸を据えていたが、
「お前にとって、江戸までの道中は、ずいぶん高い路銀になるかも知れぬ」
「お礼は、おのぞみ通りの額を、さし上げます」
影人は、それにこたえる前に、
「お前は、わたしを何者とも、素姓も判らぬままに、重大な秘密を打ち明けて居る」
「これは、てまえの直感でございます。商人は、商売取引きに、イチかバチかの勝負をいたさなければ、莫大な利益を得ることは叶いませぬ。したがって、おのが直感を大切にいたします」
「わたしが、実は、公儀隠密であったならば、どうする？」
「やむを得ませぬ。佐渡へ送りかえされて、水替人足をつとめまする」
「わたしのきくところでは、元禄九年に、荻原重秀が金山奉行として、一万一千尺の大水道を造ったために、地下の湧水が、十数倍となり、二つや三つの放水口を造ったが、間に合わなかったそうな。その穴に入り、金銀掘りや水替人夫をつとめていると、せいぜい六七年の寿命しか保たぬ由。激しい咳とともに、煤のようなものを吐いて、死神に迎えられるそうな」
「その通りでございます」
「されば……」
影人は、あかるい声音で、云ってのけた。
「江戸までの従者の路銀として、十五万両のうち、その四分を、礼として寄越しても、佐渡へ送りかえされるよりは、安いものではないかな？」
四分といえば、六万両であった。
二代目銭屋五兵衛は、一瞬、息をのんだ。
せいぜい、千両も礼を出す、といえば、快く、従者にしてくれるもの、と踏んでいたのであった。
六万両とは、いかにも、足もとにつけ込んで、ふっかけて来たものである。
「六分四分の分配が不服ならば、お前ら二人、なんとか工夫して、贄川の関所を通ってみせることだな。……

尤も、江戸へたどりつくまでには、いくつ関所があるか、かぞえてみることだ」
その皮肉な言葉に、五兵衛は、唇を、血が出るほど噛んでいたが、
「よろしゅうございます。四分のお礼をさし上げまする」
と、約束した。

四

贄川の関所を通って、尾州領から松本領に入り、木曾義仲が愛馬を大田の清水で洗った故事から、洗馬と称された宿を過ぎると、塩尻峠である。
雪片が舞う塩尻峠の深い山中を、三つの人影がたどって行く。
禁門影人の従者らしく、草履取りに姿を変えた銭屋五兵衛と下女の身装になった相川の女郎と。
贄川の関所を通るにあたっては、いささかの不審も抱かれなかった。
影人が、懐中からとり出してみせたのは、小折紙という品であった。
小折紙というのは、五摂家（近衛・九条・一条・二条・鷹司）で、官位をもらう場合、天子にさし出すもので、さし出しさえすれば、勅問があって、ただちに、
「従三位に叙す。中将故の如し」
という宣下が下るのであった。
すなわち、宮廷内に於て、参議を経ずに、三位の中将、権中納言になれるのであった。
この小折紙は、檀紙を横に二つ折りにして、左端を五分ほどに折り、さらに縦に三つにたたみ、中央に、影人の場合、
『申従三位・権中納言』
と、一条流の書方がしてあり、勿論、天皇御璽と関白の印が捺してあった。
小折紙は、官位の申請書で、堂上公卿も地下官人も、これをさし出さなければ、官位は昇進しない。小折紙をさし出しても、官位には定員があるため、闕のない場合は、幾年でも待たされるし、落第したまま、一生を終る者もすくなくなかった。
小折紙の申請で、文句なしに、ただちに、官位が、与えられるのは、前述の通り、五摂家の子弟のみであった。
関所には、勅使が江戸へ下向する場合にそなえて、小折紙に関する参考書類が置いてあった。

贄川の関所の役人は、影人が示した小折紙を受けとり、備えのその書類とてらしあわせると、あわてて、一同、土下座したことであった。

「尾張家の家臣を、供につけてさしあげまする」

とまで、申し出た。

「江戸を忍び見物いたすのだ。見て見ぬことにしておいてもらおう」

そう云いすてておいて、影人は、島抜けの罪人二人を連れて、悠々と通ったのであった。

……塩尻峠は、まがりくねった山坂をのぼると、不意に、眼下に、ひろびろとした佳景が、出現する。

めぐり十一里余・さしわたし三里余の諏訪湖を、眼下にして、信州の山間にひらけた白一色の平原が、ひろがるのであった。

ふところ手で、その冬景色を眺めやりながら、影人が、ふっと、もらした。

「下の諏訪から、中仙道をえらぶか、甲州街道を往くか——えらびかたをまちがえると、お前らは、江戸へ到着することは叶わぬかも知れぬ」

下の諏訪宿から、その二つの街道がわかれるのであった。

五

禁門影人が、降りて行こうとする下の諏訪には、偶然、影人が将来ふかいかかわりをもつであろう人物が来ていた。

京都所司代・阿部豊後守正允であった。

昨年夏に、京都所司代に就任して以来、阿部正允は、いまだ一度も江戸へ還ってはいなかった。

いま、はじめて、出府しようとしていた。

武蔵忍・十二万四千石の譜代大名でありながら、わずか十数人の供をしたがえて、しかも、東海道を避けて木曾路を越えて来たのである。

理由があった。

少年時代から、同じ学塾でまなんだ親友の幕府大目付・大河内政之進と、この下の諏訪で、落ち合うためであった。

大目付というのは、老中の耳目となって、大名と旗本大身（交替寄合）と高家を監察する重職であったが、天下が泰平であれば、むしろ閑職といえた。（現代でいえば、検事総長というところであろう）

もとより、大目付は、旗本の中から、抜きん出た俊秀

が、えらばれた。

大河内政之進は、城北昌平坂に面した大成殿（孔子像をまつる湯島聖廟）に於ける大名・旗本の子弟の学塾で、開設以来の神童といわれた秀才であった。

二十四歳で、大目付に就任したのが、その証拠であった。

尤も——。

今日までの大河内政之進には、世間に知られるような業績は、ひとつもなかった。

実際には、とりつぶされかかった大名・旗本を巧妙な計略を用いて救ったり、諸国に起った百姓一揆や国外逃散を、隠密裡におさめて、犠牲者を出さぬように処理したり、大坂商人の大名貸しの高利を帳消しにしたりしていたが、それを大目付自身の功名とせず、評定所の記録にのせていなかった。

下の諏訪で、京都所司代と落ち合ったのは、佐渡の鉱山を視察して来た帰途であった。

京都所司代と公儀大目付は、町なかの温泉につかっていた。

もちろん、旅籠の飯盛女が案内する一般庶民の浴屋とは別に設けられた岩風呂であった。

岩風呂は、霜月（十一月）なかばであるが、すでに厚い氷が張りつめた諏訪湖の湖畔にあった。

阿部正允と大河内政之進は、縹渺とひろがった氷上を、さまざまの荷を、牛馬や大八車ではこんでいる人影を、眺めやりながら、なにげないが、きわめて重要な会話を交していた。

「佐渡の金は、もはや、大半掘りつくした、と申しても過言ではない」

大河内政之進は、まず、その事実を、自分の目でたしかめた、と報告していた。

「すると、いずれ、諸外国との交易以外に、金の入手方法はないな」

やがて、老中に進むであろう阿部正允は、江戸城内の金蔵が、ほぼ空になっていることを知っていた。

「そういうことだな。倹約や貨幣改鋳などという姑息な手段では、間に合わぬ！」

政之進は、きりすてるように、断言してみせた。

六

「われらが母国は、たとえれば、半身不随の中風患者というところか」

京都所司代が、云うと、公儀大目付は受けて、
「その半身不随が、杖にすがりつつも、必死に働かねば、くらしてゆけぬところに、悲劇がある」
と、こたえた。
「公儀大目付としてではなく、お主個人としての意見は、どうだ？」
「四海、波静かすぎる封建の泰平が、百五十年つづいて居る。そのあいだに、徐々に体内に生じた病根ゆえ、一朝一夕に、とりのぞくことは、不可能であろう」
大河内政之進は、つづけて、
「安藤昌益という学者が居る。南部あたりの出身で、目下は、久保田（秋田）に住んで居る模様だ。学者としての学識は、二流の下というところであろうが、その思想は、卓越している。つい、去年、安藤昌益が著した『自然真営道』という書を、読んだが、わしは、目が洗われる思いがした」
「ふむ？」
阿部正允は、興味をそそられて、親友を見つめた。
「安藤昌益は、孔子・孟子をまっ向から、たたきつけている。孔子が言う君子、というしろものは、自然に即した直耕直食をきらって、自然を知ろうとせぬ妄言の徒である、ときめつけ、孟子もまた、自分では田畑を耕さずに、孔子を猿まねして、諸国を歴行し、堯舜の仁義道徳をしゃべりたてて、素直に直耕直食している庶民をまどわした道賊だ、とけとばして居る」
「つまり、四民（士・農・工・商）の制度が、儒教によって行われている封建の差別社会を、許せぬ、というわけだな」
「そうだ。安藤昌益は、不敵にも、釈迦にまでも、筆誅を加えている。釈迦が、王位をすてて、出家したまでは、立派だが――」
『再び自然の道を盗み、耕さずして乞食となり、弁舌を巧みにして衆人に尊まれんと欲し、同気の者を誑かして弟子となし、後には、弟子どもに心施（お布施）をむさぼらしめ、おのれはむさぼり歩くことを止めて高座に上り、舌頭を蕩かして、貪食せんことを図る』
こういうたぐいの聖人や仏祖の教えが、日本へもぐり込んで来たために、かえって、国内に争いの絶えぬ状況をつくり、今日までそれがつづいている、というわけである。
「昌益は、仏教の渡来を、武力をもって排除しようとした物部守屋こそ、本邦最大の忠臣、と記して居る」

「太古の直耕直食の民に還れ、という説か。しかし、いまさら、身分も階級もない世にすることは、夢でしかない。どだい、人間は、人格・品位・知能等の差がある。……お主が、その安藤某の説に、目が洗われたのも、一応うなずけぬことはないが……」
阿部正允が、そこまで云った折であった。
突然――。
おもての街道で、激しい叫び声が起り、女の悲鳴がひきつづいた。

七

ひとつの襲撃が、ちょうど、その岩風呂の小屋の前で、行われたのである。
襲われたのは、禁門影人と銭屋五兵衛と佐渡相川の廓の女郎であった。
包囲したのは、一見して海の荒くれ、と判る汐焼けした、逞しい骨格の面々であった。頭数は、十人を越えていた。
その一人が、街道を通り過ぎようとする影人たちの面前へとび出して来て、
「銭屋の旦那！　おめえが、島抜けしたという噂をきいて、きっと、ここを通って、江戸へ出る、とおれたちがつけた見当に狂いはなかったぜ」
と、五兵衛を睨みつけたのであった。
そして、あとの連中が、どっと出現して、包囲したのである。
かれらは、五兵衛がつかっていた抜荷の千石船の船頭たちであった。
影人は、ふところ手のままで、
「お前にしこたま金子をたくわえさせた手合らしいな」
と、五兵衛に云った。
「仰せの通りでございますが……」
五兵衛は、顔面蒼白になりながらも、
「わしを、待ち伏せていて、いったい、どうしろ、というのだ？」
と、睨みかえした。
「しらばくれるねえ！　おれらに、船出のたびに、家族と水盃を交させる生地獄の働きをさせておきやがって、てめえ自身、とっつかまって島送りになったら、知らんふりして、佐渡から抜け出す工夫ばかりしくさったんだ。ちゃんと、わかっているんだぜ。……公儀に全財産を没収された、とみせかけて、その実、途方もねえ大金を、どこかに、かくしておきやがったんだ。……安房で

難破した船が、抜荷の品を積んでいたのが、ばれた時、てめえは、江戸にいたんだ。あわをくらって、加賀へ逃げかえったところを、とっつかまった。つまり、そのあいだに、てめえのために、生地獄の働きをしたおれたちに、こっそり、金を分けることはできたはずだぜ。血も涙もねえてめえの、銭屋という家号通りの守銭奴の冷酷が、許せねえんだ。……さあ、どこへかくしたか、泥をはいてもらおうぜ」

船頭たちは、ひとしく、片手を懐中に入れていた。しのばせた匕首を、つかんでいるのであった。

銭屋五兵衛は、とっさに、この危機を脱するすべを、思いつかず、歯を食いしばったなりでいる。

影人が、ものしずかな声音で、

「ここで、お前たちが、突きかかって来て、騒動になれば、当地の役人が馳せつけて来よう。つまり、あぶはち取らず、という結果になるぞ」

と、云いきかせた。

しかし、逆上している海の荒くれは、常に生命の危険にさらされつつ生き抜いて来た者の短気さで、

「金のかくし場所さえ教えりゃ、てめえがどこへ消え失せようと、おれらの知ったことじゃねえんだ。さあ、たったいま、泥を吐きやがれ！」

と、迫った。

八

「よし、わかった。お前らの申し条、たしかに道理である」

突然、声を高くして、こたえたのは、禁門影人であった。

「なんでえ、おめえさんは？」

「お前らとは、生れと育ちが、いささかちがっているのが、唯一の取得の男さ」

「ご大層にほざきやがる！　うぬが生れ育ちなんぞ、おれらにゃ、なんのかかわりもありゃしねえんだ！」

「それが、どっこい、大いにかかわりがあるのだ」

「なんだと?!」

「わたしの素姓は、公卿くずれ、と思っておいてもらおう。それから、これが、肝心の点だが、この銭屋五兵衛を、佐渡の金山から脱出させたのは、このわたしだ、ということだ」

「なにっ?!」

「時化と凪、海流と暗礁——海の上の運行は、すべて、おのが生死につながっている。そうやって生きのびて来たお前らには、芝居の筋書きは、単純なほど、カンがはたらくであろう。……わたしのつくった筋書きは、大方読めたと思う。わたしにとっては、お前らの出現は、筋書きになかったことだが、こうなっては、やむを得ぬ。銭屋は、たしかに金をかくしている。お前らにも、分配してやらねばなるまい」

「話のわかるおさむれえだぜ。……おい、銭屋の旦那、いくら、かくしているんだ？」

「そ、それは……」

五兵衛は、救いをもとめる視線を、影人へ向けた。

影人は、平然として、

「いくら、かくしてあるか、お前らの目でたしかめるのだな」

と、云った。

「おれらに、江戸までついて来い、というんですかい。冗談じゃねえ。おさむれえの手下が、街道のどこかで、待っているにちげえねえや。うっかり、その網に、ひっかかってたまるけえ」

「海の荒くれらしくもなく、疑い深い者どもだな。その心配はない、と申しても、信じはすまい」

「あたりめえよ！　おれらを裏切りやがった船主の口から、じかに泥を吐かせるんだ。そうでなけりゃ、にえくりかえっている腹の虫がおさまらねえんだ！」

「ははは……」

影人が、明るい笑い声をたてた。

「なにがおかしいんだ、野郎！」

「こちらは、その腹の虫がおさまるようにしてやろう、と申しているのだ。お前らの出現で、やむなく書きなおす筋書き通りに、役をつとめてもらわなければ、小判は木の葉になって、海の彼方へ流れて行くぞ」

「よしっ！　江戸まで、くらいついて行ってやらあ」

「お前らは、なぜ、金のかくし場所は、江戸だ、と勝手にきめている？」

「江戸じゃねえ、というのか？」

「わたしに、ついて来るがよい」

影人は、ふところ手のまま、ゆっくりと歩き出した。

九

——どういうことになるのだろう？

禁門影人のあとに従いながら、銭屋五兵衛は、不安と恐怖で、その後姿を見つめていた。

背後には、懐中の匕首をにぎりしめて、殺意をむき出した船頭十一人が、ついて来ているのであった。

五兵衛には、影人がどういう存念を心中に据えたのか、見当がつかなかった。
影人は、凍てついた街道を、すたすたと痩身をはこんで行く。
下の諏訪には、神社が二つあった。
諏訪秋宮と諏訪春宮と。
祭神は、上の諏訪の神社と同じく、健御名方命であった。
この祭神は、毎年、七月一日に秋宮に遷され、正月一日を迎えて、春宮へ還された。
したがって、霜月（十一月）のいまは、春宮は空社になっていた。
禁門影人のえらんだ場所は、その北の坂の降り口にあたる春宮の境内であった。
鳥居をくぐって、境内の中央に進み入った影人は、やおら、船頭たちに、向きなおると、
「わたしも、金のかくし場所は知らぬ」
と、云った。
「なんだと、野郎っ！」
船頭たちは、血相変えて、一斉に、匕首を抜きはなった。
「わたしは、談合の場所として、お前らをここへともなったのだ」
「なにをほざきやがる！　だまされるけえ！」
「やっちまえ！」
まず、正面と左右から、白刃が、突き込まれて来た。
影人は、双の手刀で、左右の者の匕首を搏ち落し、正面から襲いかかって来た者の股間を蹴あげる迅業を、一動作でやってのけた。
そこいらの破落戸ならば、その迅業に、ひるんだに相違ない。
海の荒くれたちは、敵わぬと知れば怯じて身を引く、という自己擁護の気持を、みじんも持っていなかった。
暴風雨などという自然の猛威に向って、敢然と立ち向うことによって、生きのびる――いわば、原始の人類の攻撃即防禦の本能を受け継いできたえていた。
吼号を噴かせて、一人のこらず、体当りの、文字通り捨身の攻撃を、四方からしかけた。
素手の影人が、ひらめく白刃の中で、蝶のように舞う姿が、かたずをのんで見まもる島抜けの男女二人には、いっそ、美しいものに眺められた。
匕首ことごとくが、宙へはねとび、得物を失いつつも狂ったように、つかみかかった船頭たちが、一人のこらず、地面へ落ちて匐うのに、ものの数分もかからなかった。

一人、立ちのこった影人は、かえって、ひとさし舞いおさめたような、すずやかな面持で、
「勝負あったからには、すっぱりと恨みも怒りもすてるのが、海の荒くれときいているが、どうだ？」
と、見まわした。

十

たしかに――。
敵わぬと知りつつ体当り攻撃した海の荒くれたちは、敗北をみとめるのも、率直であった。
ひとつには搏たれた手くびに痛みと、しびれがのこっているものの、一人も骨折して居らず、また、素手でつかみかかった者は、真額を突かれて、視界が、ぼうっとかすんでいたが、脳中の芯まではもうろうとしていたわけではなかった。
つまり、孤身を舞わせて、十一人を地面に匐わせつつ、一人も手負わせなかったのは、天賦の才を刻苦の修業でみがきあげた神技といえた。
もそもそと立ちあがった船頭たちの目には、ひとしく、畏怖の色があった。
「申しきかせよう。この銭屋五兵衛が、捕縛される前に、かくした金子は、当人の自白を信じるとすれば、十五万両だ。わたしは、五兵衛の願いをきき入れて、江戸へともなうことにしているが、その礼として六万両を要求し、承諾させている。のこり九万両のうち、五兵衛が、お前たちに、いくら分けるか、また、お前らが、どれだけもらえば手が打てるか――それは、双方の談合次第で、わたしの知ったことではない。わたしには、六万両の中から、お前たちに、いくばくかを、配る義理も存念もない」
船頭たちは、顔を見合せた。
ただ江戸まで連れて行ってやる礼金として、六万両も取るとは、欲が深すぎる。
かれらの表情は、ひとしく、その不服を示していた。
しかし、そのことは、自分たちが襲撃する以前にとりきめられた約束であり、いま、完敗させられた上は、文句をいう筋合ではなかった。
「五兵衛、この荒くれ十一人に、いくら分けてやれる？」
影人が、問うた。
「はい。……一人宛、一千両では、と存じますが――」
「さて、どうする、船頭衆？」

影人は、十一人を見まわした。
しばしの重苦しい沈黙ののち、一人が、口をひらいた。
「わしらは、三年のあいだ、北の果ての荒海で、いのちがけの抜荷をやって、銭屋をもうけさせた。おさむれえは、ただ、江戸まで連れて行ってやるだけだ。一千両と六万両とでは、ちっとばかり、差がありすぎますぜ」
「その通り、差がありすぎる。もし、わたしが、私腹をこやすために、受けとるならば、お前たちは、承服できまい。お前たちは、一命を賭けた働きの報酬として、一千両をもらう。わたしは、この六万両を、一文もおのれのふところには入れぬ」
「…………」
「世直しのために、使う。お前たちがのぞむなら、千石船を仕入れて、あずけよう。銭屋に命じられた以上の、危険な抜荷買いをやってもらうことになるが、しかし、そのもうけは、世直しのために使われる」
影人が、そう云った時、二人の武士が、鳥居をくぐって来た。

十一

二人の武士は、京都所司代・阿部豊後守正允と公儀大目付・大河内政之進であった。
護衛の供は、どちらも、一人も従えてはいなかった。
岩風呂につかっていたところへ、大河内政之進の供をして、佐渡まで随行した三人の庭番の一人が、街道上で起った騒動を、急報したのであった。
阿部正允は、海の荒くれにまぎれもないと見受けられる男どもに包囲された浪人の風体をきくと、すぐに、京都の町奉行所で会った従三位下権中納言・禁門影人と仮名をつかった青年を、思いうかべた。
大河内政之進の方は、佐渡の金山奉行から、二代目銭屋五兵衛が、脱走した報告を受けて居り、その脱走の目的はおそらくかくし金にある、と推測していたので、この事態を面白いと思った。
二人が岩風呂をあがって衣服をつけた時、騒動の場は、諏訪春宮へ移動した報告があり、次いで、両者が無言裡に、検分をきめて、肩をならべて、春宮の鳥居の下まで至ると、争闘は瞬時にして決定した旨の報告がなされたのであった。

阿部正允は、大目付随行の隠密から、あらためて、勝者の風貌と態度をきき、
──まちがいない。
と、うなずき、自分の供も大目付の隠密も、遠くへさがっているように命じたのである。
境内に入った京都所司代は、総髪白装の青年を一瞥すると、
「やはり、お手前であったか」
と、微笑した。
視かえした禁門影人は、自身につぶやくように、
「川の急流を渉れば、こんどは、山嶽の嶮難が、行手をはばむ」
と、云った。
京都所司代は、同行した公儀大目付に、この青年は、大納言徳大寺公城から「若宮」と呼ばれた、正体不明の公卿であることを、告げておいて、気軽な口調で、
「お手前が、供にしているその草履取りが、金沢の二代目銭屋五兵衛かな？」
と、指摘した。
「当人が、みとめるなら、わたしの方は、否定はせぬが、……どうだ？」
影人は、五兵衛をかえりみた。
「てまえは、……貴方様の草履取り五兵衛でございます」
五兵衛は、肚をきめて、こたえた。
十一人の船頭は、かたずをのんで、なりゆきを、視まもっている。
「この者、わたしの草履取り、と申す上からは、べつに、京都所司代殿の糺明など受ける必要はあるまい、と存ずる」
「あいにく、となりに立っているのは、公儀大目付にて、大河内政之進という利け者で、佐渡の金山を視察に行き、その帰路にある。公儀大目付ならば、その草履取りが、銭屋五兵衛と同名異人であるとして、看のがすかどうか──如何相成るかな」
阿部正允は、薄ら笑った。

十二

「…………」
禁門影人は、すでに、大河内政之進というこの公儀大目付の器量をはかっていた。
大目付を、ただの閑職としてすごしている人物ではない、と看てとっていたのである。

当然、むこうの出かたによっては、こちらも、覚悟をきめてかからなければならなかった。

「さて——」

大河内政之進は、いかにも、このきびしい寒気が、骨身にこたえる身振りをしてから、

「まず、うかがっておくことにいたそうかな。従三位下権中納言ともあろう高い身分の御仁が、供を一人も連れずに——いや、その草履取りと下婢は、たぶん、木曾路のどこかで、ひろわれた模様ゆえ——何が目的で、出府されるのか？」

と、問うた。

「将軍家側衆の田沼主殿頭意次に会いに参る」

影人の返辞は、明快であった。

「お手前は、すでに、田沼殿と面識がおありですかな？」

「いや、ない」

「どのような談合をなさるおつもりか、うかがっては失礼にあたり申そうか」

「べつに、かくす必要はない。田沼主殿頭意次が、年を経ずして、幕閣内に入り、連署の衆に相成るであろう、と予想したからだ」

「つまり、いずれは、田沼殿が、政権を手中におさめる、と観られた？」

「左様——」

影人は、微笑して、うなずいた。

「どこから、どのようにして、田沼殿の人となり、知能ぶりを、知られたか存ぜぬが、その予測、おそらく的中いたすでござろう」

大河内政之進は、みとめた。

「幕府にも、貴公らのような人物がそろっているならば、こちらの志も実行しやすい、ということだ」

「その志とは？」

「世直しだ」

「世直し？」

「口にすれば、そらぞらしくなるゆえ、そちらで、この胸中を読んでもらいたい。……どうやら、わたしの運勢という舟は、進路をあやまらずに、順風に帆を張っているらしい」

「この五兵衛という男を、ひろったことも、順風と、みなされるか？」

「わたしは、田沼主殿頭に、手ぶらで、会うつもりであった。ところが、この五兵衛が、抜荷の罪を消してもらいたさに、手土産をくれる、と申している」

「いかほどの手土産でござろう？」

「五万両。ほかに、五兵衛は、わたし自身に六万両くれる、と約束している気前よさだ」

「……?!」

さすがの公儀大目付も、いささかあっけにとられて、京都所司代と顔を見合せた。

五万両と六万両——加えて十一万両といえば、幕府の年貢収入の約五分の一にあたる。まさに、大金である。

五兵衛自身、影人が五万両を田沼意次に贈呈する、と自分に断りもなく唐突に云いはなったのをきいて、あっけにとられていた。

阿部豊後守正允は、影人の後方にうずくまっている銭屋五兵衛に、

「銭屋——いや、草履取り五兵衛、その方、佐渡送りの前に、どれほどの巨額の金銀を、隠匿いたしたのだ！」

十三

「しかとかぞえては居りませぬが、約十五万両がほどでございます」

二代目銭屋五兵衛は、京都所司代の尋問に答えた。

「それとは別に、十万両も、かくして居るのではないのか」

京都所司代が、皮肉な言葉をあびせた。

「いいえ、決して、そのようないつわりは、申し上げて居りません」

「どうであろうかな。わしは、京都に所司代として上洛いたしてから、まだ一年余にすぎぬが、それでも、もうすでに、京畿の大商人たちのしたたかな狡智と嘘つきぶりには大いに舌をまいて居る」

「てまえ、神明に誓いまする！」

五兵衛の必死な様子に、かるくうなずいた大河内政之進は、影人へ視線を移して、

「その十五万両の中から、お手前が六万両を取り上げ、田沼殿へは五万両手土産にされるとは、まさしく、順風満帆の航路についた運勢と受けとってよろしかろう」

「貴公が、この男を、わたしの草履取りとして、黙過するならば、という約束の上での話だが……」

「そこにかたまって居る男どもは、どうやら、銭屋が使っていた船頭と思われる。その者どもも、隠匿金銀の分け前を、要求いたしているようだが、もう手を打たれたか？」

「一人あたま千両で、こやつらに納得させ申した」

「すると、総額一万一千両。……草履取りの手許には、二万九千両がのこることに相成ったところへ、われら両

名――京都所司代と公儀大目付が、現れ申した」
「わたしの行手には、海図にもない暗礁がある、と警告されているのか？」
「まず、そんなところですな」
「五兵衛――」
影人は二代目銭屋五兵衛をふりかえって、
「大目付殿は、どうやら、微妙な暗示をかけているようだ。お前は、隠匿場所を白状せぬまま、再逮捕されて、佐渡へ送りかえされたくはあるまい」
「は、はい」
「わたしの方は、六万両の謝礼をまけるつもりはない。田沼意次への五万両の贈呈と、船頭衆への、一千両宛の分配は、妥当なところであろう。すると、お前の手許にのこる二万九千両については、大目付殿は、微妙な暗示をかけて居られる」
「はい！」
影人は、大河内政之進に向って、
「この男を、わたしの草履取りとして、江戸へ行かせてもらえるとして、いくらご所望であろう？」
と問うた。
「いや、一文も所望はいたさぬ」
大河内政之進は、意外にも、きっぱりと否定した。
「と、申されるのは――？」
「この男に、あらためて、千石船を用意させ、そこの船頭どもを使って、抜荷をやってもらいたい――これを条件にいたす」

十四

翌朝――。
禁門影人は、島抜けの罪人二人を供にして、道中を、上の諏訪から左折して、中仙道にとった。
船頭十一人には、十日後、江戸で落ち合う場所を、教えておいて、姿をくらまさせた。
京都所司代・阿部正允と大目付・大河内政之進は、甲州街道をえらんで、一日おくれた。
千曲川をわたって岩村田から軽井沢へ出、碓氷峠を下る中仙道と、釜無川に沿うて降りる甲州街道とでは、寒気のきびしさは、比べもならぬ。
わざと、骨身を疼かせる前者の道中をえらんだのは、あらたな待ち伏せの危険が、後者よりも、比率がひくい、と推測したからであった。
あらたな待ち伏せ、とは、加賀前田家の家中のことを指している。

二代目銭屋五兵衛は、抜荷買いが露見して、江戸から金沢へ逃げもどった際、藩庁へ、救命を乞う上書を、さし出していた。
『もし、てまえを、海へ遁がして下さいますならば、江戸の某処にかくした金銀を、そっくり呈上つかまつります』
前田家の重臣たちが、急遽、鳩首協議の上、その手筈をととのえた時には、五兵衛の身に、公儀隠密の手が、すでにのびていたのであった。
五兵衛が、このたび、島抜けした、という報告を受けた前田家の重臣たちが、腕を拱ねて傍観しているはずがなかった。
五兵衛が江戸へ忍び出るであろうと考えられるすべての道筋へ、前田家家中の手練者が、配備されたであろうことは、火を見るよりあきらかであった。
禁門影人としても、前田家が放って来た手練者たちの襲撃に対しては、船頭連をあしらったようにはいかぬので、充分ほぞをきめてかからなければならなかった。
軽井沢宿の旅籠に一泊することにして、夕飯の膳に就いた折、影人は、
「碓氷峠を、ぶじに降りられるかどうか、それが問題だ」
と、云った。
「てまえも、不吉な予感がいたします」
五兵衛が、こたえた。
「前田家の面々が、目を光らせているとすれば、横川の碓氷関所を通った地点、そのあたりであろうか」
「貴方様のお腕前なら……」
すがりつく五兵衛の視線へ、影人は、冷たい眸子をかえした。
「わたし一人ならば、斬り抜けるのに、さまで苦労はあるまいが、お前たち二人を守るのは、面倒なことだ」
「申しわけございませぬ」
「ははは……、六万両の礼金が、鼻の先にぶらさがっているからには、我欲と道連れの策略をたてて、お前たちに披露せねばなるまい」
おちついた影人の態度が、五兵衛と女を、一時的にはっとさせたものの、不安は、その夜のねむりをさまたげて、まんじりともさせなかった。

十五

禁門影人の予想は、的中していた。
軽井沢から、碓氷峠の視界をふさいだ樹海の中を、く

ねくねと折れ曲った坂道を、およそ三里――十二キロばかり降って、横川の関所に至り、そこを通ると、坂の勾配は、ゆるやかとなって、松井田宿に往き着く。

横川と松井田の、ちょうど中間に、梨子の木という寒村があり、街道に面して、名も知れぬ、古びた無住寺が、山門を傾けて、建ちのこっていた。

加賀前田家から派遣された手練者八人が、その古寺に仮住いして、昼夜、上りの通行人に、目を光らせていたのである。

二人ずつ交替で、山門に立っていた。

「五穀も生えぬこの寒気は、能登の荒海の風に吹かれるより、骨身にこたえるな」

一人の口から、つい、愚痴がもらされた。

「われわれは、籤運がわるかったことだ」

もう八人の組は、甲州街道へ行き、甲府城下で、幕府の甲府勤番支配下に入っていた。勤番支配下には二百人の小普請組がいたので、前田家八人だけが交替で、道中する者たちを見張る必要はなかった。

たしかに、中仙道組が、碓氷峠での手配りを命じられたのは、籤運がわるかった、といえた。

「足ぶみばかりしていてもはじまらぬ。焚火でもするか」

一人が、枯木を取りに境内へ入った――その折。

三度笠をかぶった飛脚が、とっと、と駆け降りて来た。

通しの早飛脚とみえて、光明真言を唱えながら、山門前を駆け抜けて行った。

「おん、あぼきゃあ、べいろしゃなあ、まかもだら、まにはんのま、じんばら、はら、ばりたや、うん……」

早飛脚は、一つ刻――二時間を、約十三キロの速度でとばす。

無心状態でなければ、とうてい遠距離を通しで駆けることができるものではなかった。多くの早飛脚は、おのが宗旨のお経を唱えて走ったのである。

山門にいた前田家の手練者は、うっかり、その早飛脚を行き過ぎさせてしまった。

焚火が、勢いよく燃えはじめた頃、二人の待ち伏せ武士の目をひく旅人が、さしかかって来た。

総髪に、白羽二重を着流し、小脇差一本だけを腰に佩びて、素足をはこんでいた。下女一人を供にしているだけで、得体の知れぬ青年と見受けられたので、山門下の一人が、思わず、

「あいや、そこの御仁――」

と、声をかけた。

「なんぞ御用か？」

「何処から何処へ、参られる？」

「お主ら、もしかすれば、前田家の家中ではないのか。佐渡から島抜けした銭屋五兵衛を、待ち受けていると、みたが、どうであろう」

「お手前！　銭屋の行方をご存じか？」

二人の顔色が一変した。

「お主らには気の毒だが、公儀大目付の大河内政之進殿が、配下の庭番に、五兵衛を捕えさせて、佐渡へ送りかえすのを、この目で見かけた」

田沼意次

一

「金だ。金が要る！」

江戸城から下って来た四十七歳の将軍家側衆は、自分でさっさと裃を取り、袴を脱ぎながら、高い声音で、云った。

「地獄の沙汰も金次第、とはよう申したものだ。銭のない者は、帆のない船と同じだ。……ご金蔵は、もはや、空だ。これでは、いかに上様が英明の主であっても、徳川丸という船は、走らぬ。泰平という凪のただ中に、ただ浮いているばかりだ。そうであろう、意知」

「はい」

父の激しく早い語気の言葉をきいているのは、今年元服したばかりの少年であった。

「申すもはばかることだが、五代様（綱吉）が、犬公方と称されているのに対して、八代様（吉宗）は、米公方

と称されて居る。はたして、八代様は、まことに、米公方であったのか？　米公方であったのであれば、ご金蔵には、千両箱が積みかさねられたはずだ。……左様、八代様は、前代の華美の弊風をあらためられた。自らひきいて倹素を実行され、風紀を刷新なされた。目安箱を設けられた。小石川に養生所をひらかれた。町火消四十七組をととのえられた。洋書閲読の禁を解かれた。天文暦算に意を留められた。洋馬を三十頭も輸入された。しかし、ご金蔵に、千両箱を積み重ねることは、ついに、されなかった」

「…………」

十五歳の息子は、だまって、父親の鋭く刺すような演説の、たった一人の聴き手になっていた。

「八代様は、ただ、倹約によって、台所の窮迫をのがれようとされた。大坂の商人どもが、身を粉にし、額に汗して、働いて金銀をたくわえ、その貯蓄を守るために、質素倹約を家訓にしていることを、ご存じなかったはずはあるまい。質素倹約は、金銀があっての上でのことではないか」

「…………」

「つまり、八代様は、結果として、何もされなかったのと同じだ！」

十代将軍家治の側衆・田沼主殿頭意次は、断定した。

その断定は、たしかに、一理あった。

八代将軍吉宗が、積極的に、財政整理をしようとしたのは、ただひとつ、悪質の貨幣の改鋳を行ったことであった。

その事自身は、立派な行為であった。

しかし、貨幣を良質なものにすれば、流通の高がすくなくなるのは、経済原則である。

流通の高がすくなくなれば、米の値段は下る。

米の値段が下れば、俸禄(ほうろく)を米でもらっている武士が、その被害をまっ向から、こうむる。

吉宗は、やむなく、貨幣の質を悪くして、その数を増したのであった。

貨幣の相場を下げて、米価をひきあげることによって、武士を救った——かのごとくみえた。

結果は、米相場を手中にしている大坂の大商人と、江戸蔵前の札差を、大いに肥えさせただけであった。

二

「意知、よくきいておけ。わしは、かならず、閣老の列に加わる。そして、ご金蔵に、千両箱を、びっしりと積

み重ねてみせる！」

田沼意次は、いちだんと声音を高いものにして、自分の将来を予告してみせた。

「ご金蔵が、なぜ、空になったか。五代様のぜいたく放題のためであっただけではない。公儀が、ただ、年貢米の収入にたよっていただけであるのが、原因なのだ」

徳川幕府の年貢米収入は、百六十数万石であった。それ以上の徴収は、不可能であった。

天災地変が起って減ることはあっても、絶対に増すことはなかった。

一石一両として、百六十数万両。

月割にすれば、十三四万両である。現代の金に換算すれば、一日二億円に満たなかった。これだけの収入で、江戸城の維持、幕府の諸経費、将軍家の公私の生活費、天領統治、旗本八万騎の俸禄などまかなえる道理がなかった。赤字は、月毎に、累積していた。

大奥の女中だけでも、本丸に約二百五十人、西丸にその半数がいたのである。

これを、大商人たちの収入に比べると、さらに、明白な数字となる。

駿河町の三井八郎右衛門は、大店三軒を持って、千余人の手代を使って、一日に二千両のあきないをしていたのである。月高、六万両になった。

しかも——。

江戸城は、月収十三四万両を使いはたして、その数倍の赤字を出し、三井八郎右衛門は、六万両の売上高を上げていたのである。

「わしは、長崎出島のオランダ商館からやって来た船長(カピタン)からきいたが、国をとざして、米だけで、財政をまかなっている国など、日本だけだ、と申していた。清国も、鎖国主義をとっているが、実際には、数万の海賊が、政府に代って、交易をやって居るし、また、『行商(ホンシヨウ)』という広州の商人たちが、世界各国と巨額な取引をやって居るのだ。……わしは、政権をにぎったならば、まず第一に、国をひらいてみせる！　それから、新田を開拓してやる！」

「…………」

意知は、ただ、沈黙をまもっているばかりであった。

平服になった意次は、広縁に出た。

庭さきには、先程から、影のごとく、一人の男がうずくまっていた。

意次が、上方へ放っていた隠密の鬼堂天馬であった。

「いかがであった？」

「はい。平賀源内とともに、ふしぎな経験をいたしまし

た」
「源内という男、ただの山師ではない。わしらの思いも及ばぬことをやってのける奴だ。……上れ。話をきこう」
　座敷に坐った鬼堂天馬は、懐中から、小さな革袋をとり出し、
「源内は武庫山山中にて、朝鮮の老爺を使って、この麻薬をつくって居ります。殿に、一度、おためし頂きたい、と申して、源内からあずかりました」
　と、云った。

三

「この麻薬を服めば、如何相成ると申すのだ?」
　田沼意次は、革袋の口をひらいて、茸と穀象虫と木の種と草根で煮つめられた褐色の粉を、眺めて、鬼堂天馬に、問うた。
「なんとも名状しがたい症状を呈します。このようなしろものを、小さじひとすくいぐらい服して、きたえあげた心気が変るなど、あり得ぬ、とおのれに申しきかせて、嘗みましたが……」
「ふむ……」
「胸部の激しい動悸が起り、それがおさまるや、おのれを失いました」
「喪神いたしたのか?」
「いえ、気絶はいたしはしませなんだが、おのが行動に、意識がともなわず、蝮がいっぴき、匍い寄って来たのを、両断しながら、記憶になく、次いで……」
　禁門影人と名のる素姓不明の、どうやら、高貴の身分らしい青年がともなって来た上州新田郡細谷村の名主のせがれ高山彦九郎という六尺ゆたかの十九歳の若者と、真剣で立ち合った。
「その高山彦九郎と申す者、幼少の頃より、猪狩りにて、白刃を振る修練をいたして居り、いまだ人を斬ったことのないそれがしとは、経験の差だけでも、尋常に立ち合っては、勝てる対手ではありませんでしたが、それがし、麻薬によって、完全に、何ものかにとり憑かれた状態にあり、彦九郎の豪剣を宙にはねとばしたことも、その太股をしたたか斬ったことも、全く覚えて居らず、あまつさえ、禁門影人なる高貴の青年に向って、悪鬼のごとく、躍りかかって居りました」
「…………?!」
　意次は、あらためて、褐色の粉を、見つめたが、その場で、試してみようとはしなかった。

「殿――」
「――む」
「禁門影人なる公卿は、ほどなく出府して、殿に面談の儀を申し入れる旨、言づかりました」
「その素姓に、およその見当はついたか?」
「源内が、高山彦九郎よりききいたところでは、恐れ多くも、さきの主上の異母兄にあたらせられ、目下は、従三位下権中納言の位にある由にございます」
「くわせ者であろう」
「それが……、それがし、念のため、京都にて、さぐりましたところ、大納言徳大寺公城卿が、若宮とお呼びなされて居り、また、そう呼ばれるにふさわしい気品と威厳をそなえ居ります」

四

「よし、わかった。禁門影人なる青年が、出府して参ったならば、会ってくれよう」
　田沼意次は、うなずいてから、下座にひかえている嫡子の意知に、
「忠昌を呼んで参れ」
　と、命じた。
　その呼び出しを待っていたように、入って来たのは、十五歳の意知よりも身丈のひくい、瘦せこけた、面貌も猿に似た、およそ、外観は、これくらい貧相な男は、他にあるまい、と思われる、三十前後の家臣であった。
　赤井忠昌といい、もとは、足軽であった。
　意次は、宝暦八年(一七五八年)九月三日に、ようやく一万石の大名の列に加えられていたが、大名になったのを契機として、家中に対して、思いきった改革を実行していた。
　すなわち。
　家柄とか、格式とか、世襲しきたりの役方・番方の職制とか、禄高とかを、いったん白紙にかえして、家老から足軽までの全員に、きびしい登庸試験を行ったのであった。
　意次に、それが実行できたのも、かれ自身が、六百石の江戸城西丸の小姓から、栄進したからであった。
　家臣のほとんどは、意次が召しかかえた者たちであった。
　試験の結果、意次は、あるいは家老を隠居させ、あるいは百石の知行取りを三十石にひきさげ、徒士から馬廻りにひきあげ、そして、足軽をいきなり勘定頭にとりたてたのである。

その足軽から勘定頭にとりたてられたのが、赤井忠昌であった。

赤井忠昌は、数字に関して、途方もなく、頭脳が秀れていた。五桁の数字を暗算で、足し引き、掛け合せて、ただの一度も狂わなかったのである。

「忠昌、これを見よ」

意次が、ひろげてみせたのは、鬼堂天馬が、三月間にわたって調べあげて、絵図面にした大坂の市街図であった。

それには、大坂に関するすべての事柄が、記入されていた。

たとえば——。

人口は、四十一万九千八百六十余人であるとか、元禄以後の新地開発、新町取立は、元堺町・元京橋町・元相生町（宝永五年）曾根崎新地・三町（宝永五年）西高津新地・九町（延享二年）堂嶋新船町（宝暦三年）難波新地（今年——明和二年）であるとか……。

「拝見つかまつります」

赤井忠昌は、絵図面へ、しばらく、じっと視線を落していたが、

「よく、これまで、丹念に調べたものでござる」

と、云った。

この男は、滅多に、他人の業績をほめたことはなかった。

この男を感服させれば、これは、大手柄というべきであった。

「何をほめて居るのだ？」

意次は、問うた。

「されば……、大坂商人どもの、ここ三年間にわたる毎月の店売上高であります」

図面の下部に、ずらりとならべられた豪商たちが示している莫大な利益の数字を、赤井忠昌は、ほめたのである。

五

「江戸の商人の儲けと、比べて、どうだ？」

意次は、勘定頭・赤井忠昌に、問うた。

「問題になりませぬ。両替屋を比べましても、江戸は、大坂の十分の一にも及びませぬ。大坂の両替屋は、おそるべき利益をあげて居ります」

幕府時代の貨幣は、金・銀・銭・紙幣の四種であった。

当時、金貨は、大判・小判・一分判・朱判の四種があ

り、銀貨は、目方を以て通用した。

金一両は、銀六十匁であった。

そして——。

江戸は、金貨を主とし、大坂は、銀貨を主としていた。

「どうして、江戸と大坂とでは、両替屋の儲けに、大差がつくのだ？」

意次が、問うた。

「大坂商人は、自分の店、家には、現金を置きませぬ。金が入れば、すぐに、両替屋にあずけて、通帳によって出し入れをいたします。さらに、大坂商人は、諸国から金を受けとると、かならず、その金を、両替屋へ持参して、銀を買います。両替屋の金銀売り買いの利は、金一両につき、銀一匁でありますゆえ、これは、大層な利益と申さねばなりませぬ……。江戸の商人は、小判をたくわえても、決して、両替屋へあずけずに、自家の倉に、寝かせておきます。……この絵図面をごらんになれば、すぐお判りになりますが、大坂の豪商どもは、千両箱をたくわえておく金蔵を建てては居りませぬ」

「ふむ！」

「さらに、大坂には、武家屋敷はほとんどありませぬ。大坂城の周囲に、城代・両定番・城附与力・同心、町奉行所・代官所など、それから、天満に、町奉行所附の与力・同心の屋敷があるだけでございます。その代り、市井には、中島はじめ、土佐堀、江戸堀川など、川べりに、大名・旗本の蔵屋敷が、九十六邸あります。この蔵屋敷に常住の武士は、きわめて、すくないものであります。……大坂は、まさに、商人が、金をもうける町であります。市制もおのずから、ちがって居りますれば、消費は極度に、少いと存じます」

「つまり、大坂商人どもの儲けを、黙して、看のがすことは、ない、と申すのだな」

「御意——」

赤井忠昌は、無表情で、こたえた。

田沼意次の肚には、富有の商人から、運上金や冥加金をとりたてる計画があった。

とりたてるには、巧妙な手段を用いなければならなかった。

将軍家側衆としての権力は、日毎に増していた。

老中に、松平右近武元（上野館林・五万四千石）という重い存在が、延享四年（一七四七年）から、もう二十年近くも、どっしりと座を占めていて、意次の動きを睨んでいたが、意次は、すでに、この一両年で、将軍家治の寵を得ていたので、野心実現は、近くにある自信がで

きていた。

六

意次は、夕餉のち、寝所に入った。
そこには、すでに、須絵という妾が、白綸子の寝召すがたになって、待っていた。
須絵は、とりたてて美人というほどではなかったが、男子よりも女子に好意を抱かれる明るい愛嬌を持っていた。
意次は、この須絵を使って、江戸城大奥を懐柔しようとしていた。
権門の座を占めようとすれば、まず大奥の人気を得るのは、寛永年間、三代家光時代からの常識であった。
その最も極端な大奥の女中利用者が、五代綱吉に仕えた柳沢吉保であった。
小身者から、のし上るには、これが捷径である実例を、柳沢吉保は、後世の野心家たちにのこした。
吉保は、綱吉の実母桂昌院に、犬のごとく奉仕し、綱吉の寵妾お伝の方と密通し、自分の妾染子と町子を、自邸に迎えた綱吉に、提供している。
柳沢吉保自身が、大変な漁色家であった。
田沼意次が、吉保の裏工作の成功を、看のがすはずはなかった。
しかし、意次は、十代を継いだ将軍家治が好色の徒ではなかったし、おのれ自身も、女性に関する限り、きびしく自己抑制をしていた。
意次が、やってのけたのは、家治の愛妾である阿保方(津田氏)と縁戚にあたる須絵を、さがし出して、これを妾とし、自由に、大奥へ出入りさせて、上は阿保方から下は侍女・下婢にいたるまで、珍奇で高価な品を贈る手段をとったのである。
意次は、褥に入ったが、すぐに須絵を抱き寄せず、
「本日、大奥へ上って、いちばんよろこばれた品を、あててみせようか」
と、云った。
「あててごらんなされませ」
「鈴木春信の閨房図であろう」
「まあ、よくあたりましたこと。その通りでございます」
この時代、京都を中心として、大雅堂、蕪村、蕭白、応挙ら巨匠が、一挙に、輩出すると同時に、江戸を中心として、鈴木春信、鳥居清長ら浮世絵の名手が、ぞくぞくと登場して来ていたのである。その浮世絵は、やがて、喜多川歌磨らに、受け継がれることになる。

浮世絵で、東錦画の名のもとに、新生をひらいたのが、鈴木春信であった。
かれは、中国の木版刷画を研究し、さらに、中国の風俗画を調べて、これをとり入れて、きわめて清新な、優美な手法で、上下貴賤の女子風俗を描いた。
春信は、八色から十三色まで用い、「ふきぼかし」「から摺」を発明した。
そして――。
いま(今年――明和二年)が、かれの絵には、最も油の乗りきった時で、かれは、両国水茶屋のお仙とお藤を描いて、江戸中の評判をとっていた。
豊麗と柔軟との女性美を描きつくして、夢幻の世界の婦人をつくりあげたのである。
田沼意次は、この鈴木春信を、ひそかに、自邸に呼んで、大金を与えると、その技法を駆使させて、男女交合図を描かせたのであった。

七

男子禁制の女護が島に於て、鈴木春信の描いた艶麗な男女交合秘図が、悦ばれないはずはなかった。
田沼意次は、平賀源内を介在として、長崎のオランダ商船から、ひそかに輸入した、各種さまざまな西洋各国の珍しい品物を、大奥へ、賄賂していた。しかし、それよりも、春信の描いた春画の方が、歓迎されることは、目に見えていた。
意次の計画は、みごとに図にあたったのである。
――大奥数百人の女中どもは、春信を眺めて、ひそかに、臥牀の中で、自慰にふけるであろう。
にやりとした意次は、次の瞬間、
「そうだ!」
と、思わず、高い声を発した。
「何でございましょう?」
須絵が、けげんに、視かえした。
意次は、さっと、褥からすべり出ると、衣裳函にたたまれた着物の中から、一個の革袋をとり出した。
それは、隠密・鬼堂天馬から受けとった、平賀源内が武庫山中で製った麻薬であった。
「殿!」
「須絵、これをひとさじほど、なめてみよ」
須絵は、恐怖の色をうかべて、肩をすくめた。
「なにをおそれる。わしが、そなたを毒殺などいたすか。そなたがいればこそ、わしは、大奥の、阿保方はじ

め、女中たちの人気を得られるのではないか」
「でも、それは……」
「平賀源内が、武庫山中で、朝鮮の老爺につくらせて居る麻薬だ」
「では、それは、津軽（阿片）でございましょう。……中毒になれば、骨と皮に痩せおとろえて、洟水、よだれをたれ流して、全く精気を失ったはてに、死ぬ、ときき及びます。げんに、一時代前に、ひそかに津軽の中毒に罹って、幽霊のごとくになり、吹上御庭の井戸へ身を投じたご中臈がおいでだったとか、きき及んで居ります」
「ところが、この麻薬は、どうやら、阿片ではないらしい。朝鮮独特のふしぎな麻薬らしい」
　阿片は、人間を廃人にするが、平賀源内が製った麻薬は、全く阿片とは異質である、という。
　須絵は、しかし、革袋の口をひらいて、褐色の粉を見ると、息をのんで、手を出そうとしなかった。
　須絵も、知っていた。
　老中松平右近武元という人物が、田沼意次の野心を看破していることを。
　──あるいは、このわたくしが、大奥へ、賄賂の取次ぎ役をしているのを、ご老中は、快しとせず、わがあるじに、女を消すように、と命ぜられたのではあるまいか？
　老中の命令とあれば、将軍家側衆ごとき、絶対服従しなければならなかった。
　老中は、御三家（紀州・尾張・水戸）の当主をも、さきに挨拶させ、前田・島津などの大大名をも、「その方」と呼び、命令する存在だったのである。

八

　意次はせかした。
「早く、この麻薬を、口にいたせ。ほんの少量でよいのだ」
　須絵は、肩をすくめて、
「おそろしゅうございます」
「わしに、くどく云わせるな。どうして、そなたを殺す理由がある！」
「でも……お殿様！」
　須絵は、必死の哀願の視線で、あるじの眼眸を受けとめた。
「よし、それほど、そなたがおそれるならば、わしが、さきに嚥んでくれる」
　枕もとには、寝酒の用意がしてあった。

　意次は、将軍家拝領の朱檜の日光膳から七賢盃（朱塗、七盃組で、それぞれに七賢人の名を書いてある）を、手にした。
「そなたも、把れ」
「は、はい」
　須絵も、かすかにわななく両手で盃のひとつを、持った。
　意次は、無造作に、自分と須絵の二つの盃へ、革袋から、褐色の粉をさらさらとこぼした。
「これをのどに流しこんだならば、深呼吸をいたすのだそうだ」
　意次は、盃の粉を、口に入れると、寒冬の夜気を、思いきり、吸い込みつつ、唾液で、それを溶かして嚥み下した。
　須絵も、意次にならった。
　意次は、すぐに、胃の痙攣をおぼえた。しかし、それは、痛みをともなってはいなかった。
「あ、ああっ！」
　須絵が、嘔吐感におそわれて、口をいっぱいにひらいた。
「吐いてはならぬ！」
　意次は、須絵の肩をつかんで、動かぬようにした。
　胃の痙攣は、嘔吐感とともに、消えた。
　次に、四肢の指さきが、しびれてきた。
「おそろしい！」
　須絵が、つぶやいた。
「わしを信じて、わしの目を見ていよ！」
「は、はい！」
　四十七歳の将軍家側衆とその妾は、互いに、じっと見つめ合っていた。
　すると……。
　にわかに、寝室が、あかるくなった。
　当時の夜は、行燈ひとつのあかるさで、行燈から、二米もはなれれば、親指大の文字でさえ、読み難かった。
　それが──その行燈のあかりが、十倍にも増したように感じられ、意次が、行燈へ顔をまわしてみると、あたかも、宝玉の粒をまくように輝いて、美しい光を放っていた。
　──これは、おそろしい酔いだ！
　意次は、おのれにつぶやいた。しかも、その酔いは、かえって、脳中の知力を、明晰にするようであった。
　この世に、おのれにできぬ不可能なものは、何もない。
　そんな気がしてきた。

視界が、おそろしいばかりに明瞭になり、万華鏡の中にいるような心地になって来た。

九

「お殿様！」

須絵が、宙の一点へ、うっとりと陶酔の眸子を据えて、云った。

「わたくし、鳥になりました」

「…………」

「飛んで……ごらんに入れまする」

実際には、泥酔者のごとく、ふらふらと立ち上ったのだが、当人は、かろやかに、孔雀と化したように、飛翔する気分であった。

意次は、この麻薬の作用が、人それぞれによって、異なるのを思い知らされた。

現代流にいえば、その人その人の性格、体質にしたがって、意識するイメージが、全く別のものとなり、精神は呪術の上に乗って、自由な別世界に入るのであった。

そして――。

共通しているのは、〝時間〟というものが、消えて、完全に、〝空間〟の中で、肉体のない状態に置かれることであった。

いくばくの時刻の経過があったろう。

意次は、褥の上で、須絵を抱いていた。

須絵は、まだ、女体の喜悦を知らぬ二十歳の娘であった。

にもかかわらず……。

意次の体の下で、そのしなやかなからだは、狂おしく、かろやかに、まるでうなぎが水の中を泳ぎまわるように、四肢をくねらせ、腰をよじらせ、背を反らせ、首をうち振っていた。

おそらく、須絵は、肉体の現実感を喪いつつ、鳥になったイメージに酔った幸福感だけに、ひたっているようであった。

意次が、目覚めたのは、いつもならば、すでに朝食を摂り終えた時刻であった。

枕元に、須絵が、ぼんやりと坐っていた。

「どうした、須絵！」

「わかりませぬ」

須絵は、当惑と羞恥をまじえた面持で、かぶりを振った。

「昨夜のことは、記憶にないのか！」

「はい。……気がつきましたところ――」

「どうなって居った？」

「は、はい、あのう……」

「ふむ。全裸になっていたか」

「は、はい」

意次は、起き上ると、須絵に、水を持って来させた。

これほど、水というものがうまいのを、意次は、生れてはじめて、あじわった。

「平賀源内という奴、途方もなく効目のある薬物をつくってくれたぞ。おかげで、わしは、大奥を手中につかむことができる！」

意次は、定刻の午前十時に、登城すると、将軍家治に目通りして、

「上様が、ご不快をお治しする良薬を、手に入れましたゆえ、一度、ご服用のほど、願い上げまする」

と、云った。

家治は、ひどい頭痛持ちだったのである。

「このところ、いささか、風邪ぎみなので、また、苦しむか、と不安をおぼえていたところであった」

なにも知らず、家治は、よろこんだ。

十

禁門影人は、すでに、江戸に在った。

出府して、ただちに、まっすぐに、田沼意次を訪問しなかったのは、二代目銭屋五兵衛と佐渡相川の女郎をともなって、中仙道を下って来て、浦和を過ぎたあたりから、尾行に気づいたからであった。

前田家の家中か、それとも、閣老の放っている公儀隠密か――それは、判らなかった。

影人は、五兵衛に、行先が江戸の浅草馬道であるときくと、

「身をかくすには、ちょうどよい場所だな」

と、笑ったことだった。

影人は、江戸ですごしたことがあるらしく、各町について、精通していた。

もとより、そのまま、三人が、ぶじに、浅草馬道に、足をはこび入れることができた次第ではなかった。

板橋宿に至った時、影人は、突如、乗掛け馬へとび乗り、

「五兵衛、人足へ賃銀をはずんでおけ」

と、云いのこしておいて、風の迅さで、街道を、ひき

かえして行ったのである。

尾行者を、どのようにして片づけたか、ふたたび駆けもどって来るや、

「千住へ抜けて、浅草へ入るぞ」

と、指示した。

五兵衛は、もうその時は、早駕籠を用意していた。それは、どこかの大名の家中で、国許で起った何か重大な出来事を、江戸表へ告げるための乗り打ちと、みせかけた早駕籠であった。

こうして、影人と五兵衛は、馬と早駕籠と、べつべつに、浅草馬道に入ったのであった。

落ち合ったのは、三丁目中横丁の長屋であった。

そこは、別名を源水横丁と称されていた。

浅草寺境内で、居合抜きと独楽まわしの名人芸で、江戸中に知られた松井源水が、代々住んでいたからである。

銭屋五兵衛は、その松井源水を、味方につけていた。

先代松井源水は、八代将軍吉宗の面前で、独楽まわしの曲芸を披露したこともあり、ただの大道芸人ではなかった。

いや、実は、当代の松井源水は、正体をあかせば、浅草一円に横行する巾着切（掏摸）の元締であった。

町奉行所の町方廻りの同心、そして岡っ引たちも、それを知っていて、松井源水にだけは、十手を突きつけることをしなかった。源水を捕縛すれば、百人以上の巾着切に報復されるおそれがあったからである。

銭屋五兵衛が、松井源水に、目をつけたのは、賢明であった。

松井源水は、五兵衛からもらった金子を、同心や岡っ引にばらまき、自分の住む三丁目中横丁には、たとい人殺しの下手人が逃げ込んで来ても、司直の手がのびないようにしたのであった。

抜荷という幕府の禁令を犯している者としては、江戸の中で、最も身の安全なかくれ場所をつくっておかなければならなかったのである。

十一

浅草馬道の横丁長屋には、ありとあらゆる種類の人間が、住んでいた。

江戸で、最も歴史が古かったせいでもあったろう。

馬道という地名は、始祖徳川家康が江戸に入る以前から、ついていた。

浅草寺の僧侶たちが、比叡山延暦寺の悪法師のごとく、そこで、兵馬の稽古をする馬場があったからである。

いま――明和のこの頃は、吉原がよいの遊冶郎たちが、白袴白鞘に、白馬にうちまたがって、往来していた。

一丁目から八丁目までの、長い馬道であった。

その左右の横丁に、びっしりと裏店が建ちならび、まっとうな職人や人足から、地まわり、女衒、夜働きの盗賊までが住みついていたのである。

禁門影人は、松井源水の家で、一夜をすごしてから、

「お前の十五万両は、この馬道のどこかに、かくしてある、というのか？」

と、問うた。

五兵衛はかぶりを振り、

「千両箱が百五十個でございますよ。町なかに、かくせる道理がありませぬ」

「それはそうだな」

「いちばん、安全な場所にあずけて居ります」

「どこだ？」

「上野の寛永寺でございます」

東叡山寛永寺は、日本随一の銀行、といえた。

江戸の大商人たちは金貨を銀貨に替える必要はなかったので、両替商に預けることはしなかったが、土蔵に全部たくわえておけば、盗賊と火事に襲われた場合、元も子もなくなるので、そのうちの幾割かを、上野へはこび、寛永寺に預けていたのである。

無利息ではあったが、安全は保障された。

盗賊も、将軍家菩提寺たる寛永寺に押し入ることはしなかった。たとい、押し入っても、黒門をはじめ、出入口の警戒が厳重なので、運び出せなかったのである。

火事もまた、江戸名物とはいえ、四季いずれの強風も、上野の山まで火の手を送りつけては来なかった。

寛永寺では、この預り金を、台所窮迫した大名衆に、かなりの利子をとって、貸しつけていた。

「なるほど、寛永寺とは、考えたものだ」

寛永寺は、寺社奉行がもとめても、何という町人からいくら預っているとは、決して教えなかった。

寛永寺門跡の輪王寺宮は、日光宮とも称え、他の宮家の寺院門跡とは、おのずから、朝廷・幕府の取扱いがちがって居り、いわば、将軍家と同等の位置にあった。

「お前の名で、寛永寺に預けてあるのか？」

「はい」

「お前自身が行かねば、十五万両を、寛永寺では、返してくれぬのだな？」

「左様でございます」
「よかろう」
影人は、うなずいてから、立ち上り、
「では、わたしの取り分六万両を土産として、田沼意次に会うか」

十二

禁門影人が、尾行されていることに気づいたのは、源水横丁を出て、ものの四半刻（三十分）も、往還をたどらぬうちであった。
田沼意次の屋敷は、神田橋の門内にあった。
浅草からは、いかにいそいでも、半刻以上はかかる。
尾行者は、一人ではなかった。
田沼邸へ、行き着くまでに、その頭数が増えていることは、目に見えていた。
影人は、昌平橋を渡ると、右へ往くべき往還を、わざと左へ——八ツ小路を須田町にとった。
須田町から、まっすぐ、日本橋まで、すべて町家であった。
鍛冶町二丁目にさしかかった時には、尾行者が、五人に増えているのを、かぞえた。
神田橋御門へ行くには、右折して、鎌倉河岸へ出なければならなかった。
影人は、わざと、左へ折れて、紺屋町へ入った。
紺屋町二丁目の四つ辻に面して、かなり立派な稲荷社があった。
——どうやら、稲荷大明神の面前で、決着をつけることになりそうだ。
影人は、ずらりと三米置きにならんだ朱塗りの鳥居をくぐって行った。
すると——。
月明りと無数の仰願寺（小蠟燭）の灯の中で、跣になった女が、なにやら、呪文めいた文句を口走りながら、百以上もある鳥居を、右から左へ、左から右へ、まわっている姿が、目に映った。
影人は、とっさに思いつくと、すたすたと近づいて、
「おい」
と、呼びかけた。
「どこのまやかし巫女の口寄せに、だまされたか知らぬが、そのような百度詣りのまねをしても、とり憑いた狐は、逃げぬぞ」
「なんですって?! よけいなお世話ですよ。うっちゃっといておくんなさい」

仇っぽい着つけは、かたぎではなく、伝法な口調で、きりかえして来た。
「たしかに、よけいなお節介だが、こちらは、とり憑いた狐を追いはらう手段を知っているから、教えてやろうというのだ」
「へえ、お前様がねえ?!」
たしかに、総髪、白装の影人の姿は、ただの素浪人とは見えなかった。
「狐にとり憑かれたのは、お前の身内か?」
「あたしの長唄のお師匠さんですよ。年が明けたら、市村座で、〝鷺娘〟をうたわなくちゃならないんだから、それまで、どうしても、治してあげなくちゃならないんですよ。……ほんとですか、旦那、お狐を落すことがおできになるんですかね?」
「その師匠のところへ、案内してもらおう」
このやりとりは、影人の声が尾行者の耳にとどかぬように、交された。
尾行者たちには、影人が、この女と知りあいで、その師匠の狐落しをしてやるために、ここへやって来たように、受けとれた。
影人という青年は、稀有の手練者でありながら、自身の腕をふるうことは、できるだけ避けることにしていた。

十三

その家は、紺屋町三丁目の新道にあり、小粋な構えの、『長唄お習いどころ』と記した掛提灯をかかげていた。
歌吉と名のる女は、よくみがき込んだ格子戸を開けると、
「お師匠さん!」
と、呼んだ。
返辞は、なかった。
「ばあやまで、おそろしがって、逃げ出しちまってさ、一人ぼっちで、ろくに食事も摂らずに、痩せこけて、まるで生きた幽霊になっちまっているんですよ。この新道は、女郎あがりの囲い者ばかりだから、隣りづきあいをしやがらないんだ」
早口にしゃべりたてて、上って行った歌吉は、唐紙を、開けて、舌打ちした。
「ああまた、そんな恰好をしてさ」
狐憑きの師匠は、夜具をあたまから、ひっかぶって、うずくまっていたのである。

影人は、歌吉が、ひきめくって、かかえ起した四十年配の長唄師匠を、一瞥(いちべつ)しただけで、

——これは、もう治癒はせぬ。

と、さとった。

その双瞳は、完全にうつろであり、唇のはしからよだれをたらしていた。

「旦那、さ——お師匠さんにとりついた狐を落して下さいな」

歌吉は、影人を見上げた。

「男がいたであろう、この女には——?」

「どうしておわかりでござんす?」

「無頼のやからで、この女を、さんざ食いものにしておいて、逃げ出したようだな」

「そうなんですよ。七つも年下の、小博奕打ち(ばくち)で、お師匠さんのかせぎを、ありったけ賭場(とば)で、すっちまやがったんです」

「その挙句、のこしたものがひとつだけある」

「なんです?」

「梅毒(かさ)だ。……お前が、いくら、稲荷大明神にたのんでも、こいつは、狐のように、この女の脳中から、出て行ってはくれぬ」

「あん畜生っ! 角吉め!」

歌吉は、柳眉(りゅうび)をつりあげた。

「自業自得であろう。その角吉という無頼漢に、この女が惚れたのが、因果だな。……男というものを、滅多に信じてはなるまい」

「旦那も、男ですよ」

「そうだ。だから、お前も、わたしを信じないがよい」

「なんですって!」

「わたしも、お前をだました」

「え——?」

「わたしは、刺客と思われる手合に尾行されていた。まだ、おもてにひそんで、待ちかまえて居るやも知れぬ。……かれらに、お前と懇意な仲と思わせて、ここへ来た」

「へえ、そうなんですかい。ばかばかしい!」

「一応、詫びておく」

「あやまられたって、いまさら、よござんす、と胸を叩いて、味方になれるものか」

「袖振り合うも他生の縁ではないか。夜明け前まで、ここにひそませてくれぬか」

「図々しいねえ」

歌吉は、眉宇(びう)をひそめながらも、影人の気品のある男振りに、なんとなく惹(ひ)かれていた。

十四

夜明け前——。

禁門影人は、神田橋御門内にある将軍家御側衆の邸内の庭に、孤影を立たせていた。

まだ、からだには、女の肌のぬくもりがのこっていた。

もののはずみといえば、いえた。

延べられた寝床に、影人が横になると、歌吉が、

「あたしゃ、狐(きつね)落しの願かけで、からだの芯まで凍っちまった。そばに寝ても、よござんすか?」

と、云い、こっちが応諾もせぬうちに、長襦袢姿を、傍へすべり込ませて来たのであった。

「だまされついでに、抱かれるんですよ。でも、あたしが、どんな男にも、こうするとお思いになっちゃ、いやですよ」

影人は、歌吉が激しく身もだえた挙句、ぐっすりと睡ったのを見はからって、音もなく、すっと、抜け出したのであった。

——たかが一万石の小大名だが、公方の側衆ともなると、宏壮な屋敷をもらうものだな。

築山の下に、心字池がひろがり、そのむこうの白砂の平庭は、数百坪もあろう。

影人は、すでに、意次の手飼いの隠密・鬼堂天馬から、夜半、あるじを訪問する方法をきいていた。

「ここか——」

影人は、ゆっくりと建物に近づくと、戸袋の下をさぐった。

そこに、平庭の砂を掃いて、青海波などをつくる箒(ほうき)が、置いてあった。

それを取った影人は、たてきられた雨戸を、さっ、さっ、と十文字に掃いた。

それが、鬼堂天馬の教えてくれた夜半の秘密訪問の合図であった。

すぐに、雨戸が、一枚、開けられた。

「天馬か?」

田沼意次は、夜明け前の闇を、すかし視た。

天馬ならば、意次が姿をみせると、沓石(くついし)前に、膝を折るが、黒影は佇立(ちょりつ)したなりであった。

「ああ、そうか。お手前が、禁門影人と仮称する公卿か」

意次は、すぐにさとった。

影人は、意次が、自身で、手燭を持って、長い廊下を

歩いて、書院へみちびく後姿を、見まもりながら、
――この人物ならば、決断力に富んでいる。
と、自分の推測が的中していたことに、満足した。
火の気のない書院で対座すると、意次は、
「まだ、女中どもが睡って居るゆえ、寒いのを我慢して頂こう。尤も、お手前は、京都育ちゆえ、底冷えの厳冬には馴れて居ろうが……」
と、云った。
「わたしより二倍も年齢が上の貴方の方こそ、この寒気に平気でいられるのは、相当な気力と申すもの」
影人は、微笑した。
「いや、寒いのは苦手だ。ただ、炭火を起すのが面倒なので、我慢いたして居る」

十五

「世直しがいたしたく、出府いたした」
禁門影人は、すぐに、きり出した。
「同感だが、口にするのは易く、行うのは、難しい。……天下を憂う正念を持って口にして居るのか、それとも、個人の野望をとげようとして高言して居るのか――これは、風貌や態度だけで、測ると、まちがえかねぬ。まず、お許のまことの正体を、打ち明けて頂こう」
意次は、影人を正視して、もとめた。
「先の主上――桃園帝の異母兄と、受けとって頂こう。実母が、身分いやしいため、皇子としては認知されず、生誕とともに、閑院家の猶子とされ申した。しかし、どのような事情があったか知らぬが、預けられたのは、有栖川家であり、そこで、十四歳まで、育ち申した。実際の後見役として、世話をしてくれたのは、徳大寺公城であった。……わたしは、十四歳の正月、有栖川邸から出奔するにあたって、本名をすてた。爾来、禁門影人と名のっている」
当時――。
皇族は、四家しかなかった。
伏見、有栖川、桂、閑院であった。
しかし、皇族は、席次が、三公（五摂家――近衛・九条・一条・二条・鷹司）よりも、下であった。
たとえば、朝廷で、法事が行われるような場合、五摂家の面々が、さきに焼香をしてから、四皇族は、そのあとにまわされたものであった。
五摂家は、摂政関白になる資格を与えられていたからである。
皇族は、四家に限られていたので、その宮家を継ぐ親

王以外の宮たちは、すべて寺院の門跡になった。
「閑院宮家のご猶子か」
意次は、つぶやいてから、
「では、お手前は、その素姓がまことならば、われらが上様の御台所の義理の弟にあたらせられる」
と、云った。
十代将軍家治の御台所倫子は、閑院宮家から嫁いで来ていたのである。
倫子は、五十宮といい、宝暦四年（一七五四年）十二月一日に、江戸城西丸に入っていた。
その時、家治は十八歳、倫子は十七歳であった。
ちょうど、十一年前であった。
家治と倫子は、幼馴染であった。大御所となっていた祖父の八代将軍吉宗が、十二歳で生母を喪った家治を、ふびんと思い、はやばやと、その婚約者として、閑院宮直仁親王の娘・五十宮倫子をえらび、寛延元年（一七四八年）に、彼女を、京都から下向させて、江戸の南方御浜御殿に迎え、そこへ、少年家治を、たびたび、遊びに行かせたのであった。
倫子は、きわ立った美貌と聡明さを持った少女であったので、家治は、大層気に入り、むつまじく六年の婚約期間をすごしたのである。
そして、結婚十一年を経たいまも、十代将軍と御台所の仲は、むつまじいものであった。
「わたしは、ただの素浪人禁門影人でしかない」
影人は、こたえてから、
「しかし、なお素姓に疑惑を抱くのであれば、御台所と逢ってもよい」

十六

「お手前は、御台所と、会われたことがおありか？」
意次は、問うた。
「京都に在った幼い頃――左様、五六歳の当時、五十宮とは、雙六あそびや百人一首や花合せなどをした。わたしより、三歳年上の五十宮は、実の姉のように、優しかった。……五十宮が、十一歳で、この江戸へ下向した時の、別離の悲しさは、いまも、この胸の中にある」
影人が、こたえるのにうなずいた意次は、
「その後、お逢いなされたか？」
「京都を出奔した十四歳の年の夏――つまり、五十宮が、将軍世嗣の簾中として、江戸城西丸に入った宝暦四年の六月、わたしは、御浜御殿に、忍び入って、再会いたした。ただ一度だけだが……」

「ならば、今日、顔を合されても、お互いに、すぐ、誰と判る、と申されるのだな？」
　意次は、念を押した。
「逢わせる、というのか？」
「上様は、ご寛大で、御台所に、城の外へ出て、景色や風俗を眺めるように、とすすめられ、御台所には、四季折り折りに、少女の時代をすごされた御浜御殿をはじめ、上野の寛永寺にも、芝の増上寺にも、お出かけなされて居る。お手前を、御台所におひきあわせをいたすのは、造作もないこと」
　将軍家の正妻である御台所は、これまで、大奥から、一歩も、城外へ出ないで、その生涯をすごしていた。
　家治の御台所倫子の外出は、前例のないことであった。
「御台所に、逢っても、いまのわたしにとっては、無駄であろう」
　影人は、冷たく、云いすてた。
「と申すと？」
　意次は、わざと、問いかえした。
「それは、大奥に巧みに取り入って、女中たちの人気を得ている貴方自身が、先刻ご承知であろう。……公方との仲が、いかにこまやかとはいえ、大奥の実力は、御台所にはなく、阿保方という側室とそのつき添いの松島とやら申す老女の手中にある、ときいた」
　五十宮倫子は、御台所となって二年後に、出産していたが、それは女子であり、しかも、その嬰児は次の年には夭折していた。次いで、家治が将軍になってから、また女子を産んでいた。
　爾来、倫子は、懐妊していなかった。
　あまりの難産がたたって、どうやら、倫子は、子を産めぬからだになってしまったのである。
　宝暦元年（一七五一年）から、家治の御側衆となっていた田沼意次は、このことを、おのが立身のために利用すべく、思慮をめぐらした。大奥に隠然たる勢力を持つ老女松島に、大いに賄賂しておいて、
「上様には、是非とも、お世継ぎの若君をおつくりなさらねばなり申さぬ。されば、なにとぞ、ご側室をおさだめなさるよう、おすすめ下され」
　と、たのんだ。
　家治は、祖父吉宗が、正式に側妾をつくらなかったのにならい、また妻の倫子を愛していたので、松島らがいくらすすめても、首をたてに振らずにいたのである。

十七

　江戸城大奥に於て、将軍が、幾人もの側室をたくわえておくのは、常識であった。
　八代吉宗だけが、紀州城主であった時代は、数人の侍妾を持っていたが、将軍職を継いで、江戸城に乗り込むにあたって、彼女たちを、一人も、大奥へ連れて行かなかった。
　そして、吉宗自身、これときめた側室を、置かなかった。
　独裁者吉宗は、五代綱吉が、大奥に於て、数多い側妾たちをもてあました晩年の有様を目撃していたからである。
　十代家治は、この祖父の大奥生活ぶりを、みならったのであった。
　家治自身、病弱・暗愚であった父家重の子とは思われぬ秀れた知力と、将軍職に就くにふさわしい寛闊な気象をそなえていた。
　家治が九歳の正月であった。
　祖父吉宗は、家治を呼んで、
「なんでもよい。年頭にふさわしい文字を、書いてみよ」
　と、紙と筆を与えた。
　家治は、両手に重い大きな筆を取って、（新聞紙二面ぐらいの）紙に、
「大」
　という一文字を書きはじめた。
　しかし、あまりに大きく書きすぎて、おわりのはねが、紙におさまらなくなった。
　見まもる一同は、どうなることか、と不安に思った。
　家治は、なんのためらいもなく、畳へ、さっと、はねて、書きあげてみせた。
「うむ、見事！」
　吉宗は、自ら立って行って、家治のあたまをなでたことだった。
　その吉宗が、大奥生活の方針としたのは、質素倹約と品行方正であった。
　ところが、九代を継いだ家重は、父にそむいて、大奥をして、ふたたび、元禄の五代綱吉時代のように、酒色でみだしたのであった。
　九歳から十五歳までの六年間、家治は、大御所となって西丸御殿にしりぞいた祖父吉宗の下で、将軍家となった場合、いかに身を処すべきか、充分に教え込まれたの

である。

この家治に、側室を持たせることは、容易ではなかった。

正夫人倫子を愛する家治は、一年あまりのあいだは、老女松島が、どんなに歎願しても、頑として、側室をつくることを、承知しなかった。

これを看ていた田沼意次は、不敵にも、御台所倫子を、じかに、説いたのであった。

「お世嗣をおつくりあそばさぬと、必ず、ご城内に、みにくい暗闘が起りまする。なにとぞ、御台様より、上様に、おすすめたまわりますよう、意次、衷心より、願い上げまする」

次女を産んだ際、性部を痛めた倫子は、夫婦の営みに悦びをともなわなくなって居り、良人家治に、申しわけなく思っていたところであった。

これは、家治と倫子とのあいだだけの秘密であった。

倫子は、良人に、お褥辞退を申し出て、侍妾の儀をたのんで、承知させた。

十八

十代将軍家治が、大奥に側室を置いたのは、四年前——宝暦十一年（一七六一年）であった。

えらばれたのは、二人の娘であった。一人は、老女松島が、自分の局部屋で、お次から教育して、中﨟に出世させた知保であった。知保の父は、津田右衛門という三十俵二人扶持の御家人であった。

もう一人は、倫子が閑院宮家から降嫁して来た際に、つきそって来た上﨟・広橋が、えらんだ中﨟・品であった。品の父は、従二位藤井兼矩という公卿であった。

知保と品は、ほとんど同時に、懐妊した。

その結果は——。

二人とも、めでたく男子を産んだ。

まず、知保が、翌年十月二十四日に、〝若君〟を出産した。竹千代と名づけられた。

二十三日おくれて、品の腹から、やはり〝若君〟が、生誕した。貞次郎と命名された。

もし、貞次郎が、生後三ヶ月で、夭折しなければ、生母の氏素姓の差からも、また、御台所倫子附きの老女広橋の実力からいっても、こちらの〝若君〟の方に、世嗣の座が与えられたに相違ない。

竹千代は、すくすくと育ち、貞次郎は、泣き声もたてぬままに、早世した。

そして、いま——。

若君竹千代は、御台所〝おん養い〟となって、西丸御殿に在る。

御台所〝おん養い〟とは、将軍家正夫人が養母となったことを、意味している。

したがって、生母知保は、阿保方という〝お部屋様〟になって居り、大奥の権勢は、松島の手に、移りつつあったのである。

田沼主殿頭意次は、この松島と手をにぎっていた。

そのことを、禁門影人は、知っていた。

「お手前は、上は禁裏、江戸城大奥の内情から、下は市井の裏長屋の実態まで、ことごとくご存じのようだ」

意次は、笑って、云った。

「世直しをするために、それぐらいの知識を、たくわえておかねばなるまい」

「身共が手飼いの鬼堂天馬に、平賀源内が武庫山の山中で、朝鮮の老爺に製らせて居る麻薬を、持ちかえらせたのも、これを、身共が、上様はじめ、大奥の女中たちに、服用させるに相違ない、と予測されたためでござったか？」

「貴方なら、必ずそうするであろう、とわたしは、考えた」

「曲者よのう、先の帝の異母兄という御仁は——」

「ははは……、将軍家側衆の方が、わたしよりも、もっとおそろしい曲者かも知れぬ」

影人は、冷たくさめた双眸を、意次にかえした。

「そのほかに、何か、身共に、できるものがござるのか？」

「ある」

「なんでござろうかな？」

「公儀が、捕えて佐渡へ送った加賀の銭屋五兵衛のかくし金だ。貴方が、江戸城内で、権勢の座に就くための軍資金として、提供いたそう」

江戸の反逆者

一

年が明けて（明和三年・一七六六年）、桜の花見の便りが、府内外にひろまった頃、銭屋五兵衛は、『島抜け』の罪を許されて、故郷の加賀国金沢へ、帰って行った。

禁門影人を介して、田沼意次に、五万両を贈ったおかげであった。

影人は、五兵衛とともに、上野寛永寺におもむくや、五万両を、田沼意次邸へとどけさせるとともに、六万両を、自分の名義に変え、五兵衛のために抜荷の働きをした船頭たちに与える一万一千両をひき出した。

銭屋五兵衛には、二万九千両が残った、という勘定になった。

——五兵衛は、このほかに、すくなくとも十万両以上の金を、寛永寺にあずけているに相違ない。

影人は、そう看てとっていたが、敢えて、当人の口を割らせようとはしなかった。

一日——。

御台所倫子は、江戸城大奥から、城外へ出て、御浜御殿に臨み、ついでに、品川まで、足をのばして、御殿山の八分咲きの桜花を、たのしんだ。

供は、ごく少数に限られていたし、倫子は、質素を旨としている将軍家治の妻らしく、ごく目立たない行装であり、従う女中たちもそれにならっていたので、もし諸道具に葵の紋がついていなければ、二三万石の小大名の夫人としか、人の目に映らなかったであろう。

供がしらは、倫子に付き添って、閑院宮家から来た上臈（じょうろう）・広橋に代って、年寄・松島であった。

将軍世嗣を、中臈お知保に産ませることに成功した松島は、御台所が、城外へ出た時、その若君〝御台所御養い〟の竹千代を、一緒にともなって、供がしらをつとめたのである。

御台所が竹千代の養母となった以上、上臈・広橋は、年寄・松島に、その位置をゆずらざるを得なかった。

この日の花見も、四歳になった竹千代の手をひいた松島は、得意満面の様子であった。

松島は、寛永のむかしの、三代家光を育てた春日局に

なったような気分であったろう。

「ほう！　御台所様じゃ。天女のように美しいのう」

「あれが、公方様のお世嗣か！」

「手をひいているのが、松島という大奥随一の力を持った御年寄であろう」

花見の客たちは、花よりも御台所一行に、目をうばわれた。

警護隊は、各処に配されていたが、倫子の希望で、ものものしく鉄砲や槍などを持って居らず、なるべく物蔭にかくれるように、ひかえていた。

倫子をはじめ、大奥の女中たちは、ゆっくりと、桜花の美しさを、愛でることができた。

また、上下雑多な行楽客は、一人も追いはらわれずに、御台所のろうたけた美貌や、将軍家若君の可愛らしさを、近くから見物することができた。

と——、いきなり、大声がひびいた。

「あいや、将軍家御台所とお見受けいたして、無礼かえりみず、これにある素浪人、いささか、申し上げたき言辞がござる」

二

それは、海原のよく見える東方のいちばん大きな桜樹の根かたに、緋毛氈を敷きのべて、数人の若い書生とともに、酒を酌交（くみかわ）していた人物であった。

年齢は、四十を越えたところであろうが、紫綬でもってもとどりをひきむすんだ総髪の左半分が、まっ白であった。

警衛の隊士が三人ばかり、そこへ奔って、

「御台様に、かるがるしく、口をきいてはならぬ！」

「ははは……、御台所ご自身が、そう仰せならば、沈黙を守り申すが——如何でございましょうや、五十宮様？」

佇立（ちょりつ）して、じかに呼びかける態度は、堂々としていた。面貌（めんぼう）に、風格もあった。

松島が、倫子の意嚮をきいて、

「大事ないゆえ、おききとりあそばします」

と、こたえた。

「かたじけなく存じまする。それがし、八丁堀長沢町に、門戸を張り、儒書・兵書・神道・天文学などを講じている柳荘・山縣大弐（やまがただいに）と申す素浪人でござる」

その名をきくと、倫子はうなずき、松島に、うわさできき及んでいる、とこたえさせた。
山縣大弐は、前将軍家重に仕えた大岡忠光の旧家臣であった。
放蕩のむくいで、梅毒に罹って、晩年、まんぞくな言語が発音できなくなった家重に侍して、しゃべった意味を、たった一人だけ解することができたのが、側用人の大岡忠光であった。
忠光は、家重の近習から、次第に立身出世して、二万三千石の武州岩槻城主となっていた。
側用人として、将軍家の意志をつたえることのできる唯一人であったから、忠光の立場は、幕閣内で、大いに重きを為した。
山縣大弐は、その権勢者に、学者として高く評価された人物であった。
また、事実、山縣大弐ほど、政治、文学、兵法、天文学、歴史、ありとあらゆる方面にわたって、豊富な知識をそなえた学者は、江戸にも京都にも見当らなかった。
大弐は、その学識ぶりを買われて、大岡忠光に召しかかえられたのである。宝暦十年（一七六〇年）に忠光が五十二歳で逝くと、おのれ自身も、主家を去って、市井に、道場をかまえたのであった。
その名が、大奥まできこえていたとしても、ふしぎではないほど、慕うて集る門弟は多かった。
「されば、御台所に、おきかせつかまつる！」
山縣大弐は、いちだんと、声を高いものにした。
生来、声音がよく通り、千人が集れば、その千人全部の耳に、とどかせる大弐であった。
花見の客たちも、にわかに、ひそと息をつめて、大弐の言葉に、きき耳をたてた。
「わが日本の国は、神武帝が、皇基を肇められてより、一千有余年。まさに、天に二つの日のないがごとく、この東方の豊葦原の瑞穂の国に、二王はありませぬ。皇統は、連綿としてつづき、今日もなお、その光は、高くひろく、かがやいて居ります。天下の兵馬の権を手中にした覇者は、保平（保元平治）以来、つぎつぎと交替して居りますが、主上の威光は、いまだ一度も、消えては居りませぬ」

三

たしかに――。
この国の覇者は、興っては滅び、滅んでは興り――藤原氏から平家へ、平家から源氏へ、源氏から北条氏へ、

北条氏から足利氏へ、そして戦国百年を経て、豊臣氏を滅した徳川家が、いま、天下に君臨していた。
しかし、日本の主上は、厳然として、京都に在る。
山縣大弐は、天下人たる将軍家の膝元で、しかも、その正夫人と世嗣の面前で、みじんのおそれ気もなく、勤王思想をうそぶきたてようとしているのであった。
いささか、大袈裟にいえば、江戸はじまって以来の不敵な高言であった。
山縣大弐は、つづけた。
「さりながら、歴史をかえりみれば、わが国は、上古は、士民の別なく、国民皆兵にして、戦さがなければ、家に在って、おのおのの業にしたがい、一朝事が起るや、すべて兵器をひっさげて、軍陣に加わりました。家に在っては親に孝、外に在っては、君に忠を尽したのでござる。応仁の乱、戦国百余年を経るあいだに、忠孝の正念を見失い、竜がおどり、虎がはしり、相奪い、相害し、姦賊は権力の座をねらい、小ずるい大名どもはこれにへつらい、ついに天下は、乱麻と相成った次第にて、これすなわち、皇祖がわが人民の始祖であり、皇室がわれら士庶の宗家であることを、全く忘れた罰と申しても、はばかり申さぬ」
行楽客の中から、大弐の論説を、反駁したり、ひやかしたりする者は、一人も現れなかった。
御台所倫子も、だまって、じっと耳をかたむけている。
「御台所には、かしこくも、帝のご親族にあたられる閑院宮家より降嫁あそばされた五十宮殿下でござれば、江戸と京都と――江戸城と皇居との、あまりのくらしぶりの大差を、能くご存じあるものと存じます。……いかにも、時勢とは、個人の力では如何ともする能わざるものとはいえ、宮廷の現状の衰微のさまは、正視するに堪えず、公卿一統また、天朝の尊さを忘れて、いたずらに内争にあけくれて居り、それが、ために、英邁なる先の帝は、垂加流神道のご研究のご熱心に対して、三公の猛反対に遭われ、前関白近衛内前が主謀者となった摂家の企てるところ、拒否あそばすこと能わず、いまだ二十二歳のお若さで、無念の崩御をあそばされ、主上に進講した竹内式部も追放の罪に問われ申した。これと申すのも、はばかりある儀ながら、敢えて申せば、現状は、京都と江戸に、二主が存在するが遠因でござる。……現今の公儀を眺むれば、君臣に上下の志なく、禄位のみを欲し、名を好み、利をあさり、名利相属せず、正視に堪えませぬ。政道の矛盾は、富を増やす者は貴からず、精神を貴しとする者は富まず。富貴相得ざれば、威権は、おのず

から分裂いたすことは、自明の理でございます。……結論を口上つかまつる。方今の堕落、窮迫を救うには、まず、国計を為す者が、王道の官制を復し、その政治の体制を変革して、礼楽を興し、武を排して、文を第一とすべきであります。天下幾万の憂国の士は、いまや、禁裏の政治を復活することを衷心より希望し、祈願し、これが実現に、粉骨しなければなりますまい」

四

すでに、堂々と王政復古を主張するこの山縣大弐という人物は、公儀の注意人物として、いずれ、その身に捕縛の手がのびることは、識者の看通しているところだった。

つまり、山縣大弐の論法は、きわめて露骨であり、過激であった。

日本中が窮迫した現状を打破するには、幕府の政治を、根本からやりなおすこと――ありていにいえば、幕府を一度ひっくりかえして、王政からやりなおす、という論法であった。

はなやかな花見の宴が、くりひろげられた御殿山で、将軍家御台所倫子と幼い若君竹千代の面前で、ぶちまくってみせたのは、大弐自身、いずれ近いうちに、わが身が重罪に問われるであろうことを予知し覚悟していたからであったろうか？

「おお！　まさに、山縣大弐殿の主張されるところ、まさしく破邪の正剣であるぞ！」

行楽客の中から、四方に鳴りひびく大声をあげて、ぬっと立ちあがった巨漢が、いた。

高山彦九郎であった。

彦九郎の感動ぶりは、異常で、総身がぶるぶるふるえていた。

彦九郎は、夢中で、山縣大弐のそばへ、寄って行こうとした。

とたん――。

「待て、彦九郎――」

その鋭く冴えた音声が、近くの編笠(あみがさ)をかぶった白装姿から、かかった。

振りかえった彦九郎は、

「おっ！　お手前様は！」

目を、ひき剝(む)いた。

しずかに、編笠をとったのは、禁門影人であった。

「彦九郎、階段は、一歩一歩、登らねば、頂上には行き

着けぬ」

「しかし、公儀を全くはばからず、堂々の論陣を張るあの山縣大弐殿ほどの大器は、天下に一人も見当り申さぬ」

「公儀にとって迷惑な危険思想を、衆人の前で高言するのは、あまりに、頭脳が、単純すぎる」

禁門影人は、薄ら笑った。

「第一、宮廷の摂家以下、公卿どもの大半が、性根が、貧しく、腐臭を発している。いま、かりに、将軍が、大政を奉還して、いったい、政事(まつりごと)をやってのけられる公卿が、近衛以下、一人でも居るか」

そう云いすてておいて、禁門影人は、しずかな足どりで、御台所倫子に、歩み寄った。

「ま！」

倫子は、おどろきとよろこびで、思わず、その本名を口走った。

「和仁(かずひと)親王様！」

「いや、わたしは、禁門影人という素浪人です。……目下は、市井無頼の徒です」

「…………」

「ただいまの山縣大弐の過激な演説は、おききにならなかったことにして、どうか、おひきあげ下さい」

そうすすめておいて、影人は、供がしらの松島へ、意味ありげな微笑を示した。

松島は、田沼意次の与えた麻薬によって、意次の完全なあやつり人形になっていた。それを、影人は知っていたのである。

五

「ここが、お手前の仮住居でござるか？」

影人の供をして府内に入った高山彦九郎は、紺屋町三丁目の新道に入って、

『長唄お習いどころ』

と記した掛提灯をかかげた小粋な家の前に立って、眉宇をひそめた。

「情婦(いろ)ができた」

影人は、格子戸を開けた。

「あら、お帰んなさい」

歌吉が、いそいそと出迎えた。

影人が、浅草馬道の源水長屋に逗留(とうりゅう)したのは、銭屋五兵衛が、江戸を立ち去るまでであった。

尤(もっと)も、こっちへ移って来たのは、影人がすすんで居候したのではなく、歌吉が、狂った師匠が亡くなって、自

分が、あとを継いで、一人ぐらしになったから、と迎えに来たからであった。

彦九郎は、影人が情夫然として、長火鉢の前に坐るのを見て、露骨にいまいましい表情になった。

「どうも、拙者は、お手前様が信頼しがたくなり申した。出府なされたのは、幕府の封建制度に、近く天災地変の罰が下る予感がするゆえ、いまのうちに、将軍家側衆の田沼意次をして、幕閣の中心人物に昇らせておいて、開国をさせ、禁廷に十万石以上の領土をわかち与え、公儀役人に賄賂してふところをこやしている大坂商人どもを、たたきのめし、かれらから召し上げた御用金で、貧窮の庶民を救う――その大志を抱いてのことではありませんでしたか。……どうも、このようなくらしぶりを拝見いたすと、そこいらの博徒の用心棒以下の、怠惰者にしか、みえ申さぬ」

「万事、ぬかりなく、手を打ってある、と申しても、信じないか？」

「お手前様は、京都に、つかさ様という聡明な美しいご婦人が、お待ちなされていることを、よもや、お忘れではござるまいな？」

「忘れては居らぬ」

「そのつかさ様が、おいでにもかかわらず、斯様な小唄うたいの女子などと同居されていては、断じて、信頼いたしかね申す！」

二十歳の、直情径行の若者にとって、屋内の目に映るものすべてが、淫靡な臭気をただよわせていた。

「高山彦九郎――」

「なんでござる？」

彦九郎は、肩をいからせた。

「わたしは、打つべき手は打ち、いまは、しずかに待っている。それだけのことだ」

「はたして、左様かどうか、証拠をみせて頂きたい」

「みせる証拠はない」

「では――、これにて、おいとまいたす」

「どこへ行く！」

「御殿山にて、王政復古を、高らかにとなえた山縣大弐殿の門をくぐり申す」

「山縣大弐は、今年うちにも、縄目の恥辱を受けるであろう」

「お手前様の、こんなみだらな家に寄宿いたすより、その道場にて精神を養う方が百倍も増しでござる」

彦九郎は、さっさと出て行った。

「あの若い衆を、すておいて、いいのですか？」

歌吉が、不安な面持で、問うた。

「天命あれば、生き残るであろう」

影人の返辞は、表面上は、冷酷であった。

六

暮六つ――。

紺屋町三丁目の新道から、広い往還の辻に出た時、

――またか！

と、禁門影人は、小さく舌打ちした。

何者かが放って来たに相違ない男が、こちらの動静を、監視しはじめたのに気づいたのは、歌吉の家に移って来てから、三日も経たないうちであった。

家の中にいれば、四六時中、おもてにひそんでいるし、外出すれば、かならず執拗にどこまでも尾行して来た。

もちろん白昼でも、監視者は、尾けて来たが、変装が巧みであり、職人・虚無僧・奉公人・行商人・幇間など、さまざまな人種になってみせた。それが、すくなくとも五人以上であるのを影人はかぞえていた。

京都に在った時も、影人は、尾行され、また、襲撃を受けている。指令者は、明白であった。

関白近衛内前が、前関白一条道香、右大臣九条尚美、内大臣鷹司輔平らと鳩首協議して、この禁門影人を亡き者にしようとしたのである。

すなわち。

先帝――桃園天皇は、関白近衛内前によって、毒殺されたのであった。その真相を知って、異母兄の影人が、突如として、京洛へ還って来た、と関白内前とその仲間の公卿一統は、あわてふためいたのであった。

影人は、かれらに、報復の書状を送りつけはしたが、

――案山子同然の奴らを、斬ってもはじまらぬ。

と、すてておき、降りかかる火の粉だけをはらった。

宮廷に於ける、桃園天皇と関白近衛内前を首魁とする摂家たちの激しい争いは、幕府でさえ、あきれたくらいであった。

争いの挙句、主上に垂加流神道を進講した竹内式部は追放され、式部の主人であった大納言・徳大寺公城と帝に味方した大納言・烏丸光胤、中納言・坊城俊逸、中将・高野隆古、少納言・西洞院時名、少将・中院通維らは、永久蟄居を命じられたのであった。

関白近衛内前は、それだけではあきたらず、あまりに英明であった桃園帝を、ひそかに毒を盛って、弑逆したのである。そして、なにも知らぬ、自主の力のない智子内親王を帝位に即かせて、近衛内前は、摂政になった

のであった。
禁門影人にとっては、関白近衛内前こそ、この世で最も憎むべき敵であった。
影人が、この摂取関白を斬らなかったのは、日本という国を、高く、広く見渡したからであった。
――近衛内前ごとき凡夫を斬っても、なんの利にもならぬ。それよりも、生かしておいて、機会ある毎に、恐怖を与えてくれよう。
影人は、そう考えなおしたのであった。
宮廷内に、血の雨を降らせることなく、影人が、京都をすてて、江戸へ出て来たのは、近衛内前をわざと生かしておいてやったことになる。斬ろうと思えば、斬れたのである。ただ、斬らなかっただけであった。
さて、この江戸で、おのが生命を狙うのは、何者であろうか！

七

禁門影人は、出府してすぐ、田沼意次に会いに行こうとした際、五人の尾行者に食いさがられていた。
その時、たまたま師匠の狐つきを落そうとして稲荷社に詣でている歌吉を、見かけ、彼女を利用して、巧みに遁れたのであった。
――摂政関白となった近衛内前の奴が、幕府の誰か――老中か若年寄に、たのんで、おれを、殺そうとしている！
これは、直感であった。
公儀隠密が刺客になっているとすれば、この身の明日はないもの、と覚悟してかからなければならなかった。
――それとも、おれが、銭屋五兵衛から六万両を取りあげた――そのことをかぎつけた野鼠の群が、山吹色の実をくらいたくて、おれにたかって来ているのか？
いずれにしても、こうも執拗に狙われては、次第に腹が立って来る。
こちらが、脇差だけしか、腰に佩びていないのは、人を斬るのを好まぬ、と意思表示をしていることなのである。
――やむを得ぬ。殺るか！
影人は、自身に、云いきかせた。
ふたたび、横丁に入り、幾曲りかして、土塀の崩れた、夜目にも一瞥して、無住寺と判る荒れ寺の境内を、影人は、修羅場にえらんだ。
新月が、頭上にあり、暮春の宵にしては、珍しく、空気が澄んでいて、境内の荒廃したさまを、あかるく照らしていた。

影人は、山門をくぐって来た尾行者の五つの黒影を、じっとすかし視て、
――やはり、公儀の隠密どもだな。
と、さとった。
その間隔のとりかた、歩行ぶりだけで、尋常一様の手練者ではない、と合点する目を、影人は、そなえていた。
「お主ら、わたしを絶えず、見張り、尾けまわしているのは、この生命を奪え、という下知を受けているのか？　それとも、別の目的があってのことか？」
「殺せ、という命令を受けているのであれば、とっくに、襲って居り申す」
一人がこたえた。
「捕虜にせよ、と命じられているのだな？」
「左様――。ただ、お手前様は、手負わせずに、縛るには、容易ではない御仁でござるゆえ、われら一同、手間どって居り申す」
「まさか、お主らを使っているのは、老中首座に在る松平右近将監武元ではあるまい」
松平武元は、その先々代清武が六代将軍家宣の実弟であり、延享四年（一七四七年）より、老中になり、大御所吉宗の信頼が厚かった謹厚誠実な宿老であった。
尾行者たちの返辞はなかった。
もとより、公儀隠密ともなると、自分たちを使っている閣老の名を明かすはずもなかった。しかし、同じ沈黙でも、影人に、
――松平武元ではなく別の閣老だな。
と、うなずかせた。
「お主たち――、わたしも、見張られ、尾行されるのに、いい加減、うんざりした。ここらあたりで決着をつけようではないか」

八

五人の尾行者は、それまで、影人に対して、横列になっていた。
決着をつける、と影人が宣言したのに応えて、ぱっと散った。
次の瞬間には、影人を中心とした円陣を布いていた。
すなわち、影人は、みじんも隙のない強敵五人に、完全に包囲されてしまったのである。
影人が佇立したなりで、そうされるにまかせたのは、袋の鼠となりながらも、存分に闘う自信があったからだ

ろう。
尤も——。
荒れるにまかせた無住寺の境内は、とっさに、後盾にすべき鐘楼も石燈籠も、なにもなかった。
「足を狙え！」
一人が叫ぶと同時に、五本の白刃が抜きはなたれた。
青眼の構えも、全く同じであった。
こちらを生かして、捕えるには、脚を斬るしかない、とあらかじめ討議がなされていたものであろう。そのために、一人いや二人が三人でも、犠牲になるのを覚悟した攻撃策であった。
影人は、敵がたが、白刃で円を描いても、なおまだ、両手を下げたなり、石像と化したごとく、微動だにしない。
攻撃側にとっては、構えをとらぬ静止相の方が、かえって無気味であった。
実際に、影人がどれほどの使い手であるか、見とどけていたわけではなかった。ただ、見張られ、尾行されながら、それと気づきつつ、今宵まで、平然としていたのは、底知れぬ強さをそなえていることを示している、と受けとれていたのである。
脇差しか、腰に佩びていないことも、どのような強敵に襲われようと、これを排除するだけの自信を持っている証左であった。
——真正面の者が幾分間かの不動の構えから、突如、攻撃に出た。
その攻撃に合せて、左右と背後の者が、さっと動いた。
結果は、攻撃がたの失敗であった。
真正面からの、凄じい迅さの太刀ゆきに対して、影人は、その地点を、跳びも移りもしなかった。ただ、片足を、裾を蹴って、はねあげた——とみえた、次の刹那には、きぇーっ、と薙いで来た白刃を、草履の下に踏みつけていた。
のみならず、背後から、突いて来た白刃の峰を、手刀でひと搏ちにして、敵の双腕をしびれさせ、柄から離れさせていた。
もし、影人が宙に跳躍していたならば、あるいは、隻脚にされる敗北を喫していたかもわからない。
真正面の者は、おのが身をすてててかかったのであり、いわば、影人をして、宙へとびあがらせようとする戦法であった。
左右または背後にいる四人のうちの誰かが、宙にある影人の脚を確実に断つ、はずであった。

影人は、充分の余裕をもって、片足と片手で、二本の刃を、敵の手からはなさせたのであった。

九

禁門影人は、待っている。
公儀隠密五人のうち、二人の敵から、その白刃を奪っておいて、あと三人が、こちらの脚を狙って、斬りかかって来るのを、無言で、待っている。
無手になった二人は、数歩後退していた。
あと三人が、正面と左右にいた。
と——。
その三人が、同時に、行動を起した。
影人のまわりを、同じ構え、同じ歩幅、同じ速度で、右へ右へと、身を移しはじめたのである。
それを待っていたように、ひとつの人影が、山門をくぐって来た。
町娘の身装をしていた。
すすっ、とすべるように近づいて来る姿を、一瞥した影人は、
「無香、この場の立ち合いを、そなたにゆずる」
と、云った。
「はい！」
伊豆忍者「捨て草」の最後の一人として、生きのこった女忍は、返辞もろとも、鉛玉を先端につけた縄を、投げた。
無香に向きなおった者の白刃が、鋭い金属音をひびかせて、鍔もとから、折れた。
公儀隠密たちは、意外な助勢者の出現に、思わず、心気の連繋をみだし、それぞれ、一個人のみの攻撃手段に出た。
「捨て草」の縄術にとって、敵が陣形を崩したのは願ってもない有利な働きぶりを発揮できた。
のこり二本の白刃が、鉛玉をくらって、折れ飛ぶのに、ものの二分とかからなかった。
「お主たちの惨敗だ。あらためて、出なおすがよい」
影人の冷静な声が、あびせられた。
……公儀隠密たちの姿は、境内から、消えた。
影人は、無香に、
「いつから、江戸へ出て来ている？」
と、問うた。
「今年正月より、おそばに居ります」
無香は、こたえた。
「そなたが、影となって、わたしを護衛してくれていた

のには、全く、気づかなかった。不覚――」
そう云って、影人は、ひくく自嘲の笑い声をたてた。
「あの隠密衆は、若年寄・水野壱岐守忠見殿の指令の下に働いて居ります」
「そこまで、調べてくれていたか」
影人は、深くうなずいた。
老中は、松平右近武元のほかには、大した人物はいない、と看てとっていた影人であった。その観察は、正しかった。
若年寄の中に、権勢欲の旺盛な人物がいたのである。

十

同じ宵――。
八丁堀長沢町に在る柳荘道場では、一室を与えられた高山彦九郎が、道場主・山縣大弐の新著『柳子新論』をひもといて、むさぼるように、読んでいた。
『柳子新論』は、古人の作に仮託して、大弐は、おのが名を伏せていた。
わが家が、享保のはじめ、数度の水害をこうむったため、やむなく建物を別の処へ移し、空地を畑にしようとして、掘ったところ、石函が出て来た。函の底に、一冊の古書があって、『柳子新論』と題されてあった。どうやら、織田信長が天下を征覇した時代のものらしい。
わざと、そうとぼけていたが、宝暦年間に、大弐自身が、三年がかりで、著述した評論であった。
高山彦九郎程度の学識では、とうてい、すらすらとは、読みこなせない難解な漢語修辞を縦横に駆使していた。
孫子十三篇から思いついたらしく『柳子新論』は、十三章から成っていた。
正名・得一・人文・大体・文武・天民・編民・勧七・安民・守業・通貨・利害・富強――この十三章の内容は、さきに、京都に於て、追放処分を受けた竹内式部の神道論と、きわめて、論調が似ていた。
すなわち。
竹内式部の神道論も、『柳子新論』も、結論は、天皇親政であった。
「……柳子曰く、政の関東に移るや、鄙人、その威をふるい、陪臣その権を専らにし、爾来五百有余年、人ただ武を尚ぶを知りて、文を尚ぶを知らず――」
彦九郎が、その文武篇を、高く声をはりあげて、読みあげていると、板戸が開かれた。
彦九郎が、顔をあげて、そちらを視ると、禁門影人の

ふところ手姿が、すらりと立っていた。
「忠告、ご無用でござる！」
彦九郎は、先手を打って、叫ぶように云った。
「お主は、この道場から、出て行かねばならぬ」
「おことわりいたす」
「いま、あるじの山縣大弐に、お主を追い出すように、たのんで来た」
「なんという、要らざるお節介を！」
「わたしは、山縣大弐に、今年うちにも、幕吏が、この道場に踏み込んできて、縄をかけるであろうゆえ、二十歳の若者を、まきぞえにしてもらいたくない、と申し入れたのだ」
「ばかなっ！　山縣大弐先生は、さきの将軍家御側用人大岡忠光殿の家臣であり、いまは、江都に千人の門弟を擁して居られる大学者でござるぞ！　いかに、公儀といえども、容易に、縄目の恥辱を与えるとは考えられ申さぬ！」
「甘いな」
影人は、薄ら笑った。
「甘いとはっ?!」
彦九郎は、太い眉をつりあげた。

十一

影人は、立ったまま、彦九郎を見下して、
「お主は、いま、そのような、過激で、むき出しな論文に、しがみつくよりも、『三国志』でも、寝そべって、読んでいた方がよい」
と、云った。
「拙者が、何を読もうと、勝手ではありませんか！」
「いや、世直しをするためには、まず、知らねばならぬのは、忍耐だ」
「忍耐？」
「左様――、山縣大弐のように、あからさまに、公儀を攻撃するのは、早急にすぎる。墓穴を掘っているようなものだ。……天下に革命を起すには、天の時、人の和、地の利が、ぴたりと合ってこそ、成功する。その秋は、まだまだ、先だ。『三国志』の諸葛亮孔明の忍耐強さを、まず、お主は学ぶべきであろうな」
「山縣大弐先生は、王政復古実現の捨て石となる、と明言されました。拙者も、捨て石となり申す！」
「徳川幕府の屋台骨には、かなりひびが入っているが、まだ、その大廈高楼は、傾いて居らぬ。その柱が虫に食

われ、根太がくさり、土台が崩れるには、百年は、かかるであろう」

「お手前様は、百数十年も生きのびるご存念でござるのか？」

「わたしは、わたしのやりかたで、世直しをしてみよう、と考えているだけだ。べつに、幕府を倒し、天皇親政に復そうなどと、企ては居らぬ」

「お手前様を、見そこない申した。大志を、おのが手で、実行し、成就してみせる御仁と、みて居った拙者の目が、まちがって居り申した」

彦九郎は、もう影人を対手にせず、『柳子新論』の朗読をつづけようとした。

「あちらで、道場主が、お主を呼んでいる」

影人が、告げた。

それから、半刻あまりのち――。

高山彦九郎は、禁門影人と肩をならべて、人の行き交いもまばらになった月下の両国橋を、渡っていた。

彦九郎は、この高貴の身分の青年に対して、したたか、腹を立てていた。

山縣大弐の口から、直接、出て行くように、と命じられた彦九郎は、影人のよけいな干渉に対して、はらわたが煮えくりかえった。

しかし、なぜか、影人の魅力の前に、抵抗しがたいものを、おぼえていた。

胸を張って郷関を出て来たこの二十歳の若者は、禁門影人に出会ったために、おのれの卑小さを、意識させられたことである。いままで、知らなかった劣等感を与えられた、といえる。

両国橋を西側に渡ったところで、彦九郎は、その劣等感をはねかえすように、

「ここで、お別れいたす」

と告げた。

影人は、べつに、とどめはしなかった。

「流浪もまた、ひとつの人間づくりの糧となろう」

そういって、影人は、彦九郎に背を向けていた。

花の長崎

一

平賀源内は、長崎にいた。

風来山人・天竺浪人、そして、自ら大山師とうそぶくこの人物は、一日たりとも、無為にすごさない男であった。

昨年暮に、ふらりと現れて、そろそろ、半年が経つが、もう、長崎奉行をはじめとする幕府の諸役人、町年寄、会所役人、通詞などの地役人のあいだに、顔と名を売っていた。

この日も――。

その態度にも、歩行ぶりにも、まるで、日本で唯一の外国交易のこの街を、手中にしたような自信を示して、石畳の坂道を、通って行く。

この坂道は、風頭山の西麓を、南北に山を抱くようにして走っていた。

文字通りの寺町であった。

崇福寺、大光寺、大音寺、皓台寺、長昭寺、延命寺、興福寺、浄安寺、三宝寺、深常寺、禅林寺、光源寺など、いずれも由緒ある寺院が、たちならんでいた。

なかでも――。

赤煉瓦の屋根と朱塗りの壁を、春の陽ざしに映えさせている崇福寺と興福寺は、下筑後町の福済寺とともに、三福寺と称された唐寺であった。

町民たちは、この三寺院を「唐人の赤寺」と呼んでいた。

平賀源内は、石畳の坂道の行きどまりに、俗に竜宮門という楼門をそびえさせている黄檗の崇福寺の朱壁に沿うて、左折した。

石ころだらけの、ほとんど人の通らぬ、勾配の急な山路であった。

源内は、一歩一歩、かぞえるようにして、登って行った。

風頭山の中腹に、源内は、讃岐から呼び寄せた五番屋伊助という陶工に、窯場をつくらせていた。

ただの窯場ではなかった。

隣邦中国の南部地域（広東・福建）で製られた明・清時代の法花系三彩の陶器――壺や皿――を、ひそかに、

五番屋伊助に、焼かせていたのである。

明・清の法花系の、緑を中心として、文様の輪郭をつよい彫線と細い線状の泥土で区切り、紫や黄の色を美しく彩どった艶やかな三彩陶器は、交趾手と呼ばれて、わが国の茶道人のあいだでは、大層高価なものとして、珍重されていた。

そこで、平賀源内は、そのにせものを、つくりあげてくれようと考えたのである。

南蛮品は、すべて、珍重されていた時代であった。

源内は、陶器に目をつけ、天草の土ならば、交趾手そっくりの器がつくれると確信をもったのであった。というのも、そのむかし、豊臣秀吉が、朝鮮へ攻め入り、合戦は秀吉の死によって終ったが、ひきあげにあたって、小西行長と島津義弘はそれぞれ、陶工数十人を捕虜として、連れて来たのであった。その朝鮮の陶工たちが、小西行長の下では、肥後天草の深江村に、島津義弘の下では、薩摩大隅の姶良郡帖佐に、良い土を発見して、みごとな茶器を焼いてみせた。

その故実にならって、源内は、故郷讃岐から、器用な陶工の五番屋伊助を、長崎へ呼び寄せ、風頭山中腹に、窯をひらかせ、天草の土をはこんで来て、三彩陶器を焼かせているのであった。

二

「伊助――」

平賀源内は、窯場に登りついて、大声で呼んだ。

返辞はなかった。

源内は、窯の前へ近づいてみた。

火は消されていた。

「焼きあがっているな」

源内は、満足して微笑した。

あとは、泥を塗りこめた窯口を、突き崩して、陶器をとり出せばよかった。

どんな品が、できているのか？

これは、源内にとっても、大いに興味をそそられるところであった。

源内が、五番屋伊助に手渡した中国陶器は、二十年あまり前に焼かれた乾隆窯であった。

源内が生きているこの時代は、隣りの中国は、清の高宗の乾隆年間であった。

清朝の製陶は、当代にいたって、絶頂に達していた。

古雅淡幽の風趣にこそ乏しいが、その代り、奇巧華麗は、前代にないものであった。各種の釉が新しく発明

されたからである。

これは、かえって、にせものがつくりやすかった。

「おみえでございましたか」

五番屋伊助の声で、源内は、窯の前から立ち上った。

伊助は、源内とは同年配であった。祖父の代からの陶工であった。讃岐人らしい、平べたい、四角な顔をしていた。

「お前の傑作を、早く見せてくれ」

「さて、はや、どんなものが焼けて居ることやら……」

偏窟者らしい口調で、伊助は、かぶりを振ってみせた。

「お前の腕前で、天草の土を焼いたのだ。傑作ができていないはずはない」

五番屋伊助は、すでに、故郷讃岐の志度で、緑を中心とした、赤・黄・紫などの色釉を用いて、透明な釉おもてに、絵文様を描く錦手（上絵付け）と、錦手と染付彩を同時に行った染錦手の法を、修得していた。

「贋ものと、一目で判るようなら、この場で割ってもいい、という条件をつけてもよろしゅうございますな！」

伊助は、ことわった。

「う、うむ」

源内は、承知した。

こういう名人気質だからこそ、源内は、この陶工をえらんだのである。

「それにしても、貴方様は、よくもまあ、いろいろ、さまざまなものに、手を出されるものやなあ。江戸で物産会を催したり、薬草・薬種をさがして奇妙な麻薬をつくったり、金・銀・銅の鉱山を見つけたり、火浣布を発明したり、そうかと思うと、談義本を書いたり……、一人で何役をつとめて居られるのやら――」

「そのうち、仏教に首を突っ込んで、新しい宗派をひらくかも知れぬ」

源内は、笑ってみせた。

「天才とは、お前様のような御仁のことを、指していうのやろうな」

三

ここで――五番屋伊助が、窯口を開いて、贋三彩陶をとり出す前に、長崎という独特の町の生態について、言及しておかなければなるまい。

長崎は、鶴が飛翔するに似た、といわれた地形の、異国情緒ゆたかな湊であった。

野母半島の首部に位置して、湾の奥に、さらに深く、

鑿(のみ)で掘り込まれたように細長い入江を抱くようにしてひらけて居り、彦山、風頭山、金比羅山、稲佐岳、岩屋山などの、あまり高くない山や丘陵にかこまれ、これらの高処から流れ落ちる大浦川、中島川、浦上川などによって、鶴がはばたいたかたちをつくった坂の町であった。

そして――。

鎖国日本が、唯一の外国交易を許している湊であるため、寛永十三年（一六三六年）に、海を埋めたててつくった扇型の出島に、オランダ商館があり、その出島の東を流れる中島川のむこうに、元禄二年（一六八九年）に設けられた唐人屋敷があった。唐人屋敷のある場所を、唐館構内という意味で、館内(かんない)といい、出島とともに、いわば、異邦人として隔離された治外法権地区であった。

オランダ商館にも、唐人屋敷にも、一般庶民は、自由に出入りすることは、禁じられていた。すくなくとも、地役人と遊女のほかは、きびしく、出入制限されていた。（尤(もっと)も、地役人への賄賂(まいない)次第で、いくらでも、オランダ人や清国人に接触するのは可能であったが――）

現代では、徳川時代の長崎といえば、われわれは、すぐに、出島のオランダ商館と、オランダ船がもたらすヨーロッパの文明品を、連想するが、実際には、長崎湊が、海外貿易をやった対手は、主として中国であった。

出島のオランダ商館には、商館長(カピタン)をかしらとして、せいぜい百名そこそこが、厳重な監視下に、虜囚のような生活をしていたにすぎなかった。

それにひきかえて、中国人は、清朝が、遷海令（日本の鎖国令とほぼ似ている）を解いたおかげで、ぞくぞくと、長崎へ、中国官船と民間の額船がやって来て、元禄元年（一六八八年）の記録では、一九四艘をかぞえ、一万余の唐人が、市内にあふれた、という。

当時の長崎の人口は、約六万であったから、市内は、唐人色に塗りつぶされた、といっても、過言ではなかった。

幕府では、あわてて、唐人が市内各処に住むことを禁じて、出島と同様に、唐人のみを収容する総坪数九三七三坪の唐人屋敷を設けたのであった。

しかし――。

幕府の威権が、時代が下るにつれて、しだいに殺がれるのと反比例して、長崎に於ける密輸は、急速に増加していた。

密輸は、渡来したオランダ船・唐船が、長崎湊の内外で、日本の商人たちと、秘密裡におこなう「抜荷」と、江戸・大坂の豪商の命令で、船頭が海外へ渡航する「抜船」のふたつがあった。

江戸時代は、前期が、「抜船」の方がさかんであり、中期から後期にかけて、「抜荷」の方が、比率が高くなった。

元禄・享保を経て、明和の今日、抜荷は、かなり堂々と大っぴらに行われていた。

長崎奉行が、多額の賄賂を受けて、見て見ぬふりをしているからであった。長崎奉行が、短い任期の間に、莫大(ばくだい)な財産をつくることは、常識となって居り、旗本たちはあらそって、その地位に就きたがったものである。

四

長崎は、いわば、大坂と同様、武士を必要としない町であった。

『長崎奉行三千両、代官千両』の運動費を使っても、その職に就けば、わずか一年の任期で、子孫をゆたかにすごさせるだけの莫大な貯蓄ができた、ということが、それを証明している。

貿易にも市政にも、一切そ知らぬふりをして、賄賂だけを受けとりながら、洋式または唐式の生活を愉しんでいれば、しこたま、金は懐中にころがり込んだのである。

奉行所の幕吏も、奉行にならって、袖の下を取っていたし、また、一年交替で湊の警備にあたる福岡や佐賀の家臣たちも、ただ形式上の任務をはたすだけで、かなりの金子をせしめて、城下へひきあげて行った。

長崎の市政は、完全に、町人の手ににぎられていた。町年寄や会所役人や通詞や、そして、江戸・大坂の大商人が置いた支店の番頭たちが、貿易の実権者であった。

そのむかし――戦国時代、堺湊が、そうであったように、長崎湊は、町そのものが、城下町とは全く異種の経営をされていたのである。

堺湊の納屋一族といえば、諸大名に一歩も踏み込ませぬ兵力（浪士千余）をやしない、数十艘(そう)の朱印船を擁し、それぞれ数千坪の屋敷をかまえていたものであった。その金権は、織田信長の覇権に拮抗(きっこう)して、断乎(だんこ)としてゆずらなかった。

長崎の町年寄は、往昔の堺納屋衆に似て、その屋敷は五千石以上の旗本の邸宅にも劣らぬ構えを示し、その生活は、十万石の大名のくらしをしのぐものがあった、という。

町年寄の下には、二千人に近い地役人がいて、かれらもまた、大いに甘い汁を吸っていた。

まともな、封建制度下の貿易で、このように、町人が富有になる道理がないことは、常識で判断できる。
　密輸のおかげであった。
　もし、長崎奉行が、幕府の法度を盾に取って、断乎として、密輸を禁止し、密輸者を処罰すれば、当然、自身の蓄財を棒に振ることになる。そのような潔癖で剛直な旗本は、これまで、一人も、長崎奉行になってはいなかった。
　平賀源内は、宝暦二年（一七五二年）、二十七歳の時に、はじめて、長崎に遊学して、
　――この町こそは、おれの智略をいくらでも発揮できる！
　と、看てとったのであった。
　十余年を経て、再び、長崎に現れた源内は、いよいよ、その智略を実行に移す肚であった。
　さいわいに、源内の懐中には、将軍家側衆田沼意次の書状があった。
　源内は、長崎奉行新見加賀守正栄に面会をもとめ、田沼意次の書状を示し、
「この平賀源内が、オランダ商館ならびに唐人屋敷の連中と、自由に交わることを、みとめて頂きたい」
　と、申し入れて、許可を得たのであった。

五

　抜荷は、丸山の遊女が、出島及び館内に自由に出入を許されているのを利用して、こっそりと、オランダ人・唐人から品物を受けとってくる単純なやり口から、江戸・京坂その他の豪商が、長崎奉行所の幕吏そして町年寄使用の地役人を買収・結託して、大きな密輸組織をつくって行くのまで、あらゆる方法が、巧妙に、狡猾に、考えられ、実行されていた。
　現在、長崎県立図書館には、寛文六年（一六六六年）から慶応三年（一八六七年）まで、およそ二百年間にわたる長崎奉行所の犯科帳（一四五冊）がある。その犯科帳に記述された犯罪の大半を占めているのが、密輸である。
　しかし、犯科帳に記述された密輸事件は、実は、氷山の一角でしかない。
　長崎奉行自身が、見て見ぬ振りをして、多額の賄賂を受けとった密輸は、闇から闇に葬られていた。
　そこが平賀源内のつけ目であった。
　田沼意次の放った隠密・鬼堂天馬は、江戸・京洛・大坂・堺・兵庫そして長崎の豪商たちの、長崎を舞台とした大規模な密輸組織を、くわしく、調べあげていたのである。
　さらに――。
　薩摩の島津家をはじめ、西国諸大名が、密輸をやっていることも公然の秘密であった。
　そのことも、長崎奉行は、知っていて知らぬ振りをしているのであった。
　源内は、奉行と対座すると、田沼意次がすでに調べあげている旨を、それとなくにおわせておいて、おのが用向きをきり出したのであった。
　奉行が、源内の行動の自由を許可しないはずがなかった。

　風頭山中腹の窯の口が、鉄棒で突き崩されるのを、平賀源内は、腕組みして、じっと見まもっていた。
　五番屋伊助は、源内がつくった火浣布の手袋をはめながら、
「さて、どんな焼きあがりになって居りましょうかの」
　と、振りかえって、にやりとしてみせた。
　――おれの製った軟陶三彩の交趾手が、千金の高値で、豪商どもに売られるのだ！
　こういう瞬間こそ、平賀源内という男の五体の血は、熱し、沸きたつのであった。
　ふしぎな男だった。
　ひとつの事だけに、生涯を賭けて熱中することのできぬ性格であった。
　ただ、おのれの異常な多才にまかせて、あらゆるものに好奇心を燃やし、手を出した。
　俳諧、漢詩、南蛮科学（磁針器とか量定器とか時計とかエレキテエルとか）、医学、本草学、物産学、金銀銅の鉱山さがし、小説……。
　およそ、この世で、源内の興味をそそらぬ事柄は、何もなかった。
「おれの脳中には、一流と称されるに足る人間が、十人以上、住みついているのだ」
　この高言を、源内は、親友の杉田玄白にきかせている。

六

　壺一個、皿一個が、窯の中から、とり出された。
「うむ！」
　平賀源内は、自身が絵筆をとって描いた図へ、食い入るように、視線をあてた。

壺は、いわゆる茄子と称される茶入れであり、図柄は、世界地図であった。皿は、縁が輪花となって居り、図柄は、獅子であった。

「出来た！　出来たぞ！　おれが、唐人屋敷で観た交趾手と、寸分ちがわぬ焼きあがりだ。緑と黄と紫が、この彫線によって、混りあわずに、みごとに、それぞれ、美しい対照の妙を浮きあがらせて居る！　この茶入れの海の緑と陸の黄の鮮やかさ！　この皿の、唐獅子のたてがみの紫の華やかさ！　……三千両とふっかけても、江戸の札差どもは、よだれをたらして、押しいただくぞ！」

「……………」

五番屋伊助は、無表情で、源内が物の怪にでもとり憑かれたように、しゃべりたてる様子を、黙然と眺めていたが……。

不意に――。

さっと、茶入れを持ちあげると、火待ち石めがけて、たたきつけた。

壺は、みじんに、砕けた。

「な、なにをする！」

愕然となって、胸ぐらをつかもうとする源内の手を、ふりはらった伊助は、皿の方も、たたきつけるべく、つかみ取ろうとした。

とっさに、源内は、足払いをかけるや、仰のけに倒れた伊助に、馬乗りになると、拳を、滅茶滅茶に、その顔面にくれた。

目じりが切れ、鼻血が飛び散り、唇が裂けてもまだ、源内は、伊助を、なぐりつづけた。

……ようやく。

顔面のかたちが変ってしまってから、源内は、われにかえった。

しかし、依然として、馬乗りになったなりで、

「おのれは、どうして、壺を割った？　この源内の目に、まさしく交趾手そのものと映ったのだぞ！　おれでさえ、見わけがつかぬくらい立派に焼きあがったのを、なぜ、砕いたぞ！」

と、呶鳴った。

伊助は、あえぎながら、

「た、たしかに……、われながら、すばらしい、出来、だと、思います」

「そ、それなのに、どうしてだ？　どうして、たたきつけた？」

「……わ、わしは、たった、ひとつだけ、とんでもない、まちがいを、してしもうた」

「まちがい？　なんのまちがいだ！」

「唐物茶入れの糸切りは、左廻りであるのに、わしは、右廻りに、切って、しもうたので、ございます」

「…………」

源内は、憮然となって、伊助から、はなれた。

伊助は、のろのろと身を起すと、

「わしは、もう、こんな、贋もの製りは、まっぴら、ごめんを、蒙ります」

と、云った。

「もう一度、焼くんだ！」

源内は、狂ったように叫んだ。

七

源内が、ふらりと、丸山の廓へ、姿を現したのは、その日の黄昏どきであった。

風頭山の中腹にある窯場で、五番屋伊助を、脅しつけ、なだめすかして、もう一度だけ、贋三彩陶を焼くことを承知させた源内は、その右手に携げた包みの中に、伊助が砕きそこねた唐獅子図の皿を持っていた。

伊助は、焼きあげた唐物茶入れの壺も、その皿も、二つとも砕こうとしたのであった。

茶入れの方は、本物の壺の糸切りが左廻りであったのを、あやまって、右廻りに切ったためであった。

皿の方には、そんなあやまちは冒していなかった。伊助が、それをたたき割ろうとしたのは、法花系三彩の唐獅子と、あまりに図柄が、見劣りしたからである。その獅子は、しかし、皮肉にも、源内が描いたものであった。

伊助の色釉の配分と染付彩は、さすがにみごとであったが、その美しい色彩が、かえって、獅子の姿を、迫力のないものにしていたのである。

素人目には、判らぬが、伊助は、源内の描いた獅子を、焼きあげてみて、所詮は素人芸だ、と看てとったのであった。

伊助から、歯に衣きせぬその説明をされた源内は、

「よし！　では、この皿を、さんざ骨董をいじくった数寄者の唐人自身に、目利きさせてくれよう」

と、包んだのであった。

丸山の廓に登楼して、「唐人行き」の遊女に、その皿を、唐人屋敷へ持って行かせて、鑑定させるつもりであった。

江戸の新吉原、京の島原、大坂の新町とならび称される丸山の廓は、井原西鶴をして、『長崎に丸山というところがなければ、上方の金銀は、無事に帰宅するだろ

う』と、『日本永代蔵』で書かせたほど、通人や遊冶郎のあこがれの的であった。

そして、前三都の廓には、絶対に見られない遊女の所行が、幕府によって、みとめられていた。

遊女が、廓を出て、出島のオランダ商館と市の中央の唐館構内に行き、一夜をすごすことであった。

これを、「オランダ行き」また「唐人行き」といった。

元文二年（一七三七年）の記録では——。

丸山遊女の「オランダ行き」は延人数三百三十九人、「唐人行き」は一万六千九百十三人——一日平均五十人が行った計算になる。

遊女たちを使って、商人たちが、抜荷をやったのは、当然の手段といえよう。

丸山には、千数百人の遊女がいたのである。

源内があがったのは、引田屋（後年の『花月楼』）であった。

引田屋は、寛永年間の創業で、丸山の青楼随一を誇っていた。

門前のひともと柳の蔭に、芭蕉門下の向井去来の詠んだ、

　いなづまやどの傾城とかり枕

という句を刻んだ石が据えてある。

源内は、この引田屋の女将と親しくなっていた。

八

「なんてまあ、こんな立派な唐皿ば、どこで手に入れなさったと？」

引田屋の女将は、源内が包みをひらくと、思わず、手に取って、感嘆の声をあげた。

「あいにく、こいつは、贋ものかも知れんのだ」

源内は、にやりとして、云った。

「なに云うとりんさる。こんな立派な唐皿ば、千両出しても、惜しゅうありまっせんが……」

「明日、唐人行きの女郎に、持って行かせて、鑑定してもらって来てくれ」

「余計な手間ばかけんと、うちの番頭に、寄合所の旦那衆に観てもらいますばい」

「そうはいかん。唐人の中の目利きにたのみたい」

「平賀さんらしゅうもない、要心深かのう。はいはい。しかとおあずかりつかまつりまっしょ」

女将と入れちがいに、すっと障子を開いて、入って来たのは、公儀隠密・鬼堂天馬であった。

「お主が、思案橋を渡るのを見かけた」

嫖客連が、行こうか戻ろうか、と思案した橋で、この橋を渡って、もうひとつ小さな橋があり、これを思切橋といい、そのさきの船大工町の境に、廓の大門があった。

鬼堂天馬は、思案橋を眺める旅籠に、腰を据えて、待っていたに相違ない。

「大奥では、あの麻薬が、女中どもの間で、うばい合いになって居るだろう」

源内は、云った。

「おかげで、わが殿（田沼意次）は、大奥の実権をにぎる松島という年寄を、完全に味方にすることができた。……勿論、上様も、いまだ、麻薬とはご存じないままに、服用あそばされて居る」

「主殿頭殿が、御側御用人に昇るのは、もうすぐだな」

「うむ。今年うちにも、下命があろう」

うなずいてから、鬼堂天馬は、

「というお主は、この長崎で、何をする計画だ？　よもや、あらためて、オランダ語を学び直そうという殊勝な料簡ではあるまい」

と、薄ら笑った。

どういうわけか、平賀源内は、語学能力だけは、さして秀れていなかった。

あまりに八方へ手をのばしたため、オランダ書を翻訳するだけの語学力を、身につけていなかったのである。

源内が、長崎奉行に提出した田沼意次の添状には、

『この者、阿蘭陀本草翻訳御用を仰せつけられ、云々』

と、記してあったが、これは名目にすぎなかった。

源内は、すでに、ドバネウスの『紅毛本草』（Cruydt-Boeck）というオランダ書を、入手していたが、図譜と挿絵はおよそ判じられたが、文章の方は、さっぱり読みこなせず、通詞の語学力にたよらなければならなかった。

「おれが、長崎に来た目的は、金もうけさ」

源内は、こともなげにこたえていた。

九

金もうけが目的、ときいた鬼堂天馬は、打てばひびくように、

「抜荷か」

と、云いあてた。

「勿論、そうだ」

「しかし、抜荷をやるには、資金が要るぞ」
「その資金を、これからつくるのだ」
「どうやって？」
「交趾手、という平賀源内焼きをつくる」
「交趾手？……ああ、唐の軟陶三彩のことだな。その贋ものをつくるのか？」
「一万両、つくってみせる！」
源内は、昂然とうそぶいてみせた。
「贋の唐物で、一万両つくるのは、容易ではあるまい」
「見そこなうな。ただの風来山人・天竺浪人・鳩渓平賀源内ではないぞ。おれは、いったん、こうと思いきめたことは、絶対に成しとげているし、これからも、そうだ」
「火浣布を発明したお主だからな」
公儀隠密である鬼堂天馬でも、こういう場合、平賀源内のぎらぎらと煌かせる眼光を受けとめるのに、背筋に微かな寒気をおぼえるのであった。
源内が、その石綿を発見したのは、三年前、秩父郡中津川村の両神山に於てであった。
その石綿で織った布で、源内は、香敷をつくり、江戸滞在中のオランダ船長に見せ、公儀おかかえ儒者の青木昆陽にたのんで、将軍家治に献じていた。老中・若年寄に呈上し、そして京都所司代には、襦袢を贈っていた。
このたび、長崎にやって来てからは、唐人屋敷の主だった商人、乙名、唐通詞にも、香敷を贈呈したのである。
中国の古い熟語をつかって名づけたこの布は、唐人たちを大いによろこばせた。源内は、額商（官商と対照される民間の商人）の一人から、金子はいくらでも出すゆえ、胡服を織ってもらえまいか、と注文を受けていた。
「お主は、大坂あたりの商人をだまして、贋ものを売りつけるこんたんであろうが……、むかしはいざ知らず、当今は、相当な目利きの骨董屋が居って、お主の思惑通りには、いかぬかも知れぬ」
「まあ、見ているがよい。おれはやる！」
源内は、強い語気で誓ってみせてから、
「それよりも、禁門影人、と偽名をつかっているあの貴公子は、お主の主君に近づいたか？」
と、問うた。
「うむ。夜半、案内も乞わずに、屋敷内へ忍び入って、わがあるじと対面し、世直しをやる、と高言してみせた」
「宮廷内で最高位の身分に生れながら、自ら素浪人になって、おのが一個の力で、世の中を直そうとは……見上げた曲者よ」

源内は、あらためて、禁門影人の風姿を思いうかべた。
「そうだ！　お主は、贋唐物などで、金もうけをする必要はない。あの青年が仕立てた船で、ばはん（密輸）をやればいい」
鬼堂天馬が、云った。

十

禁門影人が、出府してから、どのような行為をやってのけたか――そこは、公儀隠密だけあって、鬼堂天馬は、ことごとく、探知していた。
佐渡の金山から島抜けした銭屋五兵衛を、江戸へともない、五兵衛が上野寛永寺にあずけている大金を、せしめたこと。
一、田沼意次へ五万両の賄賂。
一、影人自身、五兵衛から六万両を、礼金として受けとり、それはそのまま、寛永寺にあずけておいたこと。
一、五兵衛のために、抜荷を働いた船頭十一人に、一千両ずつ、呉れてやったこと。
「禁門影人が、すばやく、みごとに、金銀の配分をやってのけたのは、今春だった」
それから半年が過ぎていた。
「それがしは、その直後、江戸をあとにしたゆえ、以後のかれの行動は、知らぬ。……これは、予感だが、禁門影人が、あのまま、何もせずに、江戸に逗留しているはずはない。寛永寺から、六万両をひき出し、銭屋五兵衛が使っていた十一人の船頭どもに、命じて、抜荷の千石船を仕立てたのではあるまいか。とすると、その千石船は、まず、朱印船として、この長崎に寄航するに相違ない」
すなわち。
禁門影人が、田沼意次にたのんで、将軍家治から、朱印状をもらい、船頭十一人に渡した、という想像は、妥当なところではあるまいか。
「船か――」
源内は、宙へ双眸を据えて、つぶやいた。
好奇心の権化のようなこの男は、天馬の話をきいているうちに、贋の唐三彩陶器を焼く野心が、煙のように薄れて、にわかに、渺々たる大海原の波浪を乗りきって行く大船の姿が、脳裡にうかんだのである。

「鬼堂――、お主、造船についての知識は、くわしいか？」
「あいにくだが、船に関しては、語る資格はない」
天馬は、かぶりを振った。
これは、公儀隠密であっても、やむを得ぬことであった。
日本は、造船術が発達せぬままに、徳川幕府が鎖国してしまったからである。
そのむかし、平清盛は、朝鮮の船匠を、兵庫に呼んで、造らせたが、失敗している。源実朝は、宋の怪僧・陳和卿にだまされて、鎌倉の由比ヶ浜に、航海不可能な巨船を造っている。徳川家康は、慶長五年（一六〇〇年）に、豊後に漂着したオランダ船リーフデ号のイギリス人三浦按針とオランダ人耶揚子を、江戸へ招き、ヨーロッパ形船舶を、伊豆の伊東に於て、造らせている。
三浦按針が、造ったのが、安宅丸（千五百石積み）であり、このスクーナー型が、日本に於ける最初のヨーロッパ形帆船であった。
伊達政宗が、支倉六右衛門常長に命じて、ヨーロッパ派遣の堅牢無比な大帆船を造ったのは、家康が三浦按針にたのんで造らせた安宅丸を、そっくりまねたおかげであった。
もし、徳川幕府が、鎖国制度を布かなかったならば、家康・政宗の造った西洋形帆船は、さらに、技術を発達させていたに相違ない。

十一

家康が、三浦按針に造らせたスクーナー型帆船安宅丸は、上総大多喜浦で難破して本国へ帰ることができなくなっていた呂宋の総督ヴィヴェロに、貸し与えられて、航海可能かどうか実験された。
伊達正宗が慶長十八年（一六一三年）に造らせた帆船陸奥丸は、支倉六右衛門が、伝道師ルイス・ソテロの案内で、はるばるスペイン国王及びローマ国王の許に使いして、八年後の元和六年（一六二〇年）八月二十六日、陸前月ノ浦に帰朝した。
しかし――。
安宅丸も陸奥丸も、三代将軍家光の狂的な鎖国制度実施の犠牲となって、その姿を消したのであった。
徳川幕府は、民間に於て、五百石以上の船舶を造ることを、禁じたのである。
大正年間、イギリスのバラード中将は、『日本の世界政治史に及ぼした海の影響』で、次のように書いている。
『ヨーロッパ諸国から見れば、日本が三百年間、鎖国主義をとったのは、もっけの幸いであったというべきである。もし、日本が、豊臣秀吉の朝鮮侵入の際のにがい経験（日本水軍が碧波亭前洋に於て、韓将李舜臣に、惨敗した事実）を逆に生かして、さかんに大艦巨船を建造し、ヨーロッパ諸国と交易し、あるいは、戦ったならば、スペイン・ポルトガル・オランダなどは、東洋に植民地をつくることはできなかったであろう。いや、インドに於けるイギリス帝国の支配さえも、おぼつかなかった、とも考えられる』
徳川幕府は、将軍家御召船はじめ数十隻かの軍船を保有し、また、海に沿った領土を持つ大名たちも、かなりの数の軍船を所有していた。これらは、関船と称されていたが、太平洋を乗り越えたり、南支那海を押し渡るだけの能力はなかった。
商人は、米何石積みという廻船を航行させていた。この水運は、江戸の人口がふくれあがるにつれて、米の需要に応じて発達した。五百石積みでは、間に合わなくなり、幕府の特別許可を得て、ついに千石船が出現したのである。
沿海航路では、むしろ、五百石以下の船の方が、難破の危険がすくなく、四季常に荒れる日本海に面した小さな港などに、船がかかりするには、都合がよかった。
それを、敢えて、千石船を造ったのは、廻米の利益が大きかったこともあるが、同時に、密輸という法度破りをするためであった。
加賀の二代目銭屋五兵衛が、持船のすべてを千石積みの大船にしたのが、そのことを証明している。
「公儀隠密ならば、千石船が、どれくらいの費用で造れるか、知って居ろう」
平賀源内は鬼堂天馬に、問うた。
「そうさな。二十二挺立ての関船の造り代は、百石積みの廻船と同額の費用で、ざっと、銀五貫七百匁（小判九十五両）ときいたことがある」
「すると、千石船ならば、一艘は約一千両というわけか」

十二

「あの貴公子は、底知れぬ度胸の持主ゆえ、六万両があり、船頭十一人が居れば、十艘の千石船を、造ったであ

ろうな。しかも、廻米船とみせかけた数十挺立ての関船をな」
　源内は、推測した。
「あるいは、そうかも知れぬ」
「大砲も備えつけたに相違あるまい」
「それはどうかな。大砲を製る技倆を持った鍛冶など、当節、どこにも居らぬ」
「製ったのではない。抜荷に熟練した船頭どもなら、外国船から、ひそかに、大砲や鉄砲を買うすべを知って居ろう」
　源内の宙に据えた双眸には、舳艫相銜んだ十隻の擬装抜荷船が、まっすぐに南下して来る光景が、映っていた。
　こうなると、源内の想像力は、油をそそがれた焚火のように、激しい音をたてて、燃えひろがり、手がつけられなくなる。
「おい、天馬！　禁門影人の抜荷船団が、どこまでやって来たか、早急に、つきとめてくれ。おれも、乗り込むぞ！　おれは、その一艘で、オランダへ渡ってやるのだ！」
「まあ、待て。あの青年が、はたして、船を造ったかどうか——まず、それが、判らねば……」
「いや、造ったに相違ない！　おれは、確信する！」
「造ったのであれば、かならず、この長崎へ来る」
「来ないかも知れんではないか。ここを通り越して、平戸か、五島列島のどこかへ行ってしまったら、どうする？　いや、ずっと彼方——琉球へ走るかも知れぬぞ」
　源内は、いらだたしげに、云った。
「朱印状を持っている限り、拠点を、この長崎にすることは、十中九まで、まちがいはない」
「おれは、のこりの一の場合をおそれるのだ！」
　源内は、叫んだ。
「気早やな男だな、お主は——」
　天馬は、いささかあきれて、かぶりを振った。
「天馬！　この平賀源内には、日本という国は、狭すぎるのだ！　おれが驥足を展ばす天地は、地球のむこう側にある。……おれは、出島の商館のカピタンに、きいたのだ。欧羅巴には、オランダ、フランス、アンゲリヤ（イングランド）、イスパニヤ（スペイン）、ポルトガルがある。どの国も、文化文明は、わが日本より百年もさきに進んでいるそうだ。おれの最後の目的は、そのヨーロッパ洲へ渡ることにある！」
「それならば、なおさら、あわてずに、その秋の来るのを待つべきだろう」

「たわけ！　おれは、もう四十の坂を越えたのだぞ！　人生五十年——一日たりとも、無駄にはできんのだ！」
　源内は、われを忘れて、天馬の胸ぐらをつかんだ。
　そこへ、女将が、あわてて、入って来た。
　酒肴をはこんだ遊女が、てっきり喧嘩口論だと、勘ちがいして、注進に及んだのであった。

十三

　公儀隠密・鬼堂天馬は、平賀源内を、六日間、丸山の引田屋に待たせた。
　そのあいだに、一人の遊女が、五番屋伊助の焼いた贋三彩陶の皿を、唐人屋敷へ持って行き、ヴェテランに目利きさせて来た。
　遊女は、気の毒そうに、
「これ、ひと目、見んさって、獅子が死んでいる、とむごいことば云いきりなさったばい」
と、報告した。
　——くそ！　看破しやがったか！
　源内は、むなくそのわるさとともに、今更ながら、五番屋伊助の眼力の鋭さを、思い知らされた。
　源内にとって、さいわいであったのは、もうかれの意識が、贋唐器製りから、禁門影人が仕立てたであろう抜荷船の方に、向けられていたことであった。
　ここで、ついでに明かしておけば、源内が、全く興味を持たぬものが、この世に、ひとつだけあった。
　女であった。
　源内は、四十一歳のこの年まで、ただの一度も、恋をせず、女体の味を知ろうとしなかった。
　この日本四大遊廓の中の随一の青楼で流連しながら、遊女を抱いてはいなかった。
　女将が、いくらすすめても、頑として、拒否していた。
「華厳経にある。女は地獄の使いにして、三千界の有るところ、男子の煩悩の根元だ、と。仏説に於て、女人は、すべて、否定されて居る。五障三従、十二の角。……漢のことわざでは、女のえくぼは城を傾く。まさに、そうではないか。女郎を傾城という。女のために国を滅すことを、傾城という。これが遊女の代名詞となったのは、故なきにあらず。かぞえきれぬ実例があるからだ。本邦のことわざにも、ひとつでも、女に味方することわざがあるか。女の賢いのと東の空明りとは、あてにならぬ。娘道成寺では、女子は悪性もの、といい、商家では、女の智恵は鼻の先、学塾では、女の話は一里限り

――つまり、見聞が狭いので話題が限られる、と相手にせぬ。寺院では、女の力と首のない石仏、とさげすむ」

「それは、いくらなんぼでも、あんまり、ひどか！ ちゃんと、婦徳というものがありますよ。わたしだって、ちゃんと、女大学を学んでいますばい。『教女遺規』に、あるばい。幽間貞静、守節整斉にして、おのれを行うに恥あり、動静法あり、これを婦徳という、とね」

「ばかやろう。それは、男が、女に教えるためにつくった文句じゃねえか。その『教女遺規』にあるぞ。『婦人、口大に舌長ければ、男子、家敗れ身亡ぶ』と。……いいか、美女は、たしかに、この世で最も麗しい存在だ。ところが、こいつが、漢のことわざでは、生を断つ斧だ。皮一枚剝げば、髑髏じゃないか。『後漢書』に曰く。『楚王、細腰を愛し、宮中、餓死多し』――おれは、生涯、女は抱かん！」

平賀源内の自我意識は、おそるべき固さであった。

十四

深夜――丑刻（午前二時）を、まわっていたろう。

源内は、ふっと、目覚めた。

闇の中に、人の気配があった。

「天馬か？」

「うむ」

鬼堂天馬は、行燈に火を入れて、あかりを、部屋へにじませると、

「お主とそれがしの推測は、的中した」

と、云った。

源内は、掛具をはねて、起き上った。

「やっぱり、禁門影人は、抜船を造ったか！」

「うむ。明日は、この長崎に入って来るだろう」

「どうやって、さがしあてた？」

「それがしは、薩摩の沖にある甑島列島の上甑の獅子ノ口で、辛抱づよく、待っていた。……来た。千石船が十艘！」

「どうして、それが、禁門影人の船と判った？」

「あの貴公子の度胸には、ただただ、舌を巻くばかりだ。十艘とも、堂々と、親柱（正檣）に張った帆に、菊の御紋を大きく染め抜いていた」

宮廷が、一艘の御用船も所有しているはずはなかった。したがって、菊の紋を、船印にしている船など、当代に、存在すべくもなかったのである。

「しかも、廻米船の構造ではない。親柱のほかに、子柱（前檣）を立て、この子柱の上には、日の丸の旗をかかげている」

旭日旗を、船印として、掲揚したのは、そのむかし、伊達政宗が、ヨーロッパへ派遣した陸奥丸だけであり、それ以後、絶えていた。（日の丸を、日本の総船印として船舶にかかげることにしたのは、安政初年、島津斉彬である）

「やるのう、あの若い曲者は！」

源内は、双眸を、光らせた。

十艘の千石船は、いま頃は、天草灘を横切っているであろう。

「海の男は、無限のひろがりをみせている大海原で生きて居り、暴風雨という魔物と戦って生きのこるゆえに、人間として、こうと約束したことは、絶対に守る、嘘をつかない、単純で明快な気象の持主であることを、禁門影人は、知っているのだ。そこで、銭屋五兵衛の使っていた船頭十一人を、自分の家来にした。船頭どもの剛腹さ、胆力は、陸でくらす者の持ち合せぬものだ」

天馬は、云った。

「それで、どうだ、というのだ？」

源内が、問いかえした。

「つまり、船頭どもを、われわれが横あいから、顔を出して、くどいて味方につけようとしても、そうは問屋がおろしてくれぬ。小ずるく利用しようとすることは、不可能だ」

「しかし、お主は、贋唐物をつくるより、禁門影人が仕立てた船で、ばはん（密輸）をやれ、とそそのかしたぞ」

「つまり、われわれの方から、あの船団に協力するのだ」

「協力とは？」

「金もうけの野心をすてて、船頭どもに、力をかしてやることだ」

抜荷船

一

鏡のようにおだやかな海原を、微風が、おもむろに渡っていた。
その微風を、正檣、前檣の純白の帆にはらませた千石船が十艘、整然と、等距離をたもって、天草灘の沖あいを、西へ進んでいた。
船体は、黒漆で塗られていた。海原の紺碧の上に、その漆黒は、いかにも、したたかな強靭さを示していた。
さらに——。
正檣の帆に染め出された菊の紋は黄金色であり、前檣の上にかかげた旗の〝日の丸〟は真紅であった。
この十艘の帆船の形・大きさ・船印は、すべて、禁門影人の指示によるものであった。
造られたのは、伊豆の伊東であった。禁門影人は、慶長のむかし、徳川家康が、イギリス人三浦按針（ウイリアム・アダムス）とオランダ船長ヤンヨーステンに命じて、八十噸級（約千五百石積み）の巨船安宅丸を造らせた場所を、そっくり、かりたのである。
ちなみに……。
江戸の地名に、八重洲河岸（現代の東京駅八重洲口あたり）、日本橋安針町とつけられているのは、前者にはヤンヨーステンが住み、後者には、三浦按針がすごしたからである。
三浦按針は、豊後に漂着したオランダの商船リーフデ号の水先案内人であり、造船技師でもあった。
禁門影人は、田沼意次にむかって、
「江戸城内の書庫に、三浦按針の書きのこした安宅丸の建造次第が、かならずあるはずゆえ、さがし出して、お借りしたい」
と、申し入れ、それから三日後には、按針の造船覚書を、懐中にして、江戸を出ていたのであった。
箱根の山を越えた時には、十一人の船頭と水主百六十七人が、影人のあとに従っていた。
もとより——。
影人のえらんだ伊豆伊東には、造船所など設けられてはいなかった。
影人は、三浦按針が、指揮して、やってのけたのを、

そっくりそのまま、踏襲したのである。
伊東の湯川の河口を利用し、そこの砂の上に船をのせる敷石を置き、半ばまで造った頃より、砂を掘りのけて、敷石の柱をすこしずつ下げた。船体が水中に浮いた時、堰き止めていた湯川の水を、どっと流して、その圧力で、船を海へ押し出した。
主檣・前檣を立てるのも、胴間はじめ、甲板室、甲板下室などの完成も、海上で為された。
こうして、つぎつぎと、漆黒の千石船が十艘、伊東の浜から、沖へすべり出て行ったのである。
禁門影人は、和船造りの船大工など、一人も使わなかった。
船頭と水主たちの力だけで、造りあげさせたのであった。
「これは、おれたちの手で造りあげた船だ！」
海の男たちの単純明快な気象が、その船を、肉親よりも愛することを、禁門影人は、計算に入れていた。

二

微速で、天草灘を西航する船団の、先頭をゆく船の舳に近い舷側に、三つの人影が、ならんで、南方の地平線を、視ていた。
放浪の勤王浪人・高山彦九郎（二十歳）
居合い抜きの達人・松井源水（三十歳）
そして、大坂から乗りこんで来た、
戯作者・無腸上田秋成（三十三歳）
船頭・水主のほかに、乗っているのは、この三人だけであった。
かれらもまた、禁門影人によって三人組にされたのである。
影人のすすめで、即座に承知したのは、松井源水と上田秋成であり、高山彦九郎は、いったんは、激しい勢いで、拒否したのであった。
影人の節介で、八丁堀長沢町の山縣大弐の道場を追い出された彦九郎は、いったん、故郷の上州新田郡細谷村へ帰り、前年夏に病没した母しげ子の墓参をし、さらに、愛する孫の帰国を待っていたように、祖父貞正が古木の枯れるがごとく逝くのを、看とってから、江戸へひきかえして来たのであった。
千住大橋を渡ったところで、一人の職人ていの男に呼びとめられた。
「高山彦九郎——とおっしゃる御仁でござんすね？」
「そうだ」

「あっしは、吉五郎と申しまして、浅草馬道の源水長屋に仮寝して居りやすけちな夜働きでござんす」
「盗賊などに、拙者は、用はない！」
「そちらさんは、ござんすまいが、こっちには、ありやす」
「貴様、拙者の行手をふさぐと、無礼討ちにするぞ！」
彦九郎の左手が、差料の鯉口をきると、吉五郎は、にやりとして、
「これでも、木鼠と、異名を持っている夜働きでござんしてね、あっしは——」
「この高山彦九郎には、斬れぬ、とあざけるかっ！」
「勘忍家督、短気は損気、辛抱は金……と、云いやすぜ」
「うぬがっ！」
呶号もろとも、抜き撃ったが……。
木鼠吉五郎は、五歩のむこうへ跳び退っていた。
「これから、あっしの親分の松井源水の許へ、案内いたしやす」
吉五郎は、眉毛一本うごかさずに、そう告げると、くるりと彦九郎に、背中を向けたことであった。
「何用あって、拙者を、松井源水に会わせるのだ？」
彦九郎は、いらだちつつ、問うた。
「あっしは、ただ、そう命じられただけでござんしてね」
「松井源水にか？」
「いえ、別のおかたにね」
「誰だ、それは——？」
「おききになると、あっしは無駄骨を折ることになるかも知れやせん。……ともあれ、松井源水にお会いなさいまし」
彦九郎が、源水長屋まで、巨軀をはこんだのは、木鼠吉五郎のおちつきはらった度胸っぷりに乗せられたからであった。

三

浅草馬道の三丁目中横丁の長屋で、高山彦九郎を迎えた松井源水は、三尺五寸の大刀を居合で抜く人物とは見えぬ小男であった。風貌も、ごく平凡で、三十歳の壮者とは思われぬ猫背で、口のききかたも、ぼそぼそしていた。
「目下、禁門影人様は、伊豆の伊東で、船を造っていなさる」
「それが、拙者となんの関係がある？」

彦九郎は、肩をいからせ、胸を張った。
「その船に、乗ってもらいたい、という伝言だ」
「ことわる！」
彦九郎は、即座に、叫びかえした。
源水は、すでに、その拒否を予想していた無表情で、
「あんたとわしが、勝負する。あんたが負けたならば、船に乗ってもらう」
と、云った。
「よし、立ち合ってくれる！　お主の大道芸などに、引けをとる高山彦九郎ではないっ！　木太刀か？　それとも、真剣か？」
「木太刀だ」
「血反吐をはいて、ぶっ仆れても知らんぞ」
「いや、勝負は、立ち合いではない」
源水が、かぶりを振った時、木鼠吉五郎が、裏口から入って来て、
「用意はできやしたぜ」
と、告げた。
裏手には、小さな稲荷の祠の前に二十坪あまりの空地があった。
その中央に、三歩ばかりの間隔をとって、太股ほどの青竹が地べたへ立てられ、その二本の上に、それぞれ豆腐が三丁、重ねられ、それに、同じ太さの青竹が、水平にさしわたしてあった。
「豆腐を砕かずに、青竹を、まっ二つに折ることができるかな？」
源水は、そう云って、彦九郎に、木太刀を手渡した。
「やってくれる！」
彦九郎は、位置を定めると、ゆっくりと、大上段に、ふりかぶった。
猛気を五体に満たす静止不動の秒刻は、かなり長いものであった。
「えいっ！」
凄じい懸声とともに、彦九郎は、木太刀を撃ちおろした。
ぱっ、と——六丁の豆腐が、みじんとなって、八方へ飛び散った。
地面へ落ちた青竹は、たしかに、まん中で石榴のようになって折れてはいたが……、左右に立てた二本の青竹も倒れてしまっていた。
「くそっ！」
彦九郎は、木太刀を、足もとへ叩きつけて、
「お主、見せろ！」
「造作もないこと」

源水は、吉五郎が、ふたたび、二本の青竹を立てて、豆腐三丁ずつをのせ、新しい青竹を、その上に架けるのを待って、何気ない様子で、近づいた。

木太刀は、その腰にあった。

心気を虚空にしずめる間も置かず、懸声も発せず、源水は、文字通り抜く手も見せずに、木太刀を、青竹へ呉れた。

次の瞬間には、青竹は、刃物で両断されたごとく真二つになって、落ち、撃った木太刀の方は、腰にもどっていた。六丁の豆腐は、三丁ずつ、石のようにしずかに二本の青竹の上にのったままであった。

四

高山彦九郎は、松井源水との勝負に敗れて、しぶしぶ、船に乗った。

松井源水の方は、四代目で、大道芸を披露するなりわいに、あきていた折柄、禁門影人の命令を受けると、願ってもない冒険だ、と悦んだのである。

そして——。

大坂堂嶋で、足駄・煙草・紙・油などをあきなう商家のあるじとして、その経営を番頭にまかせておいて、無我夢中で、怪異を主題にした物語を書いては破りつづけていた上田秋成は、禁門影人の手紙を受けとるや、たちまち、年商二千両と優しい病身の妻たまを、すてる決心をしたのであった。

秋成は、『諸道聴耳世間猿』とか『世間妾形気』といった、これまで出版した戯作にあきたらなくなり、古代文章を駆使して、人生の奥にひそむ怪異の心霊を主題とした小説を、書こうとしていた。

題名だけは、すでにできていた。

『雨月物語』

しかし、この一年余、反故の山をつくって、いまだ一篇も脱稿していなかったのである。

当然——。

果しない、紺碧の大海原が、一片の雲影もない蒼穹に溶け込む水平線へ、視線を送る三人の眼眸は、三様の色を示していた。

彦九郎は、ようやく、海というものに、心をうばわれはじめていた。紺碧の海には、魂を吸い込む深さがあり、千古の神秘をこめた黒潮の底には、どのような沈黙の世界があるのか？　綿津見（海神）のいろこの宮殿は、この奥底にあるのであろうか？

源水の方は、彦九郎が、海の神秘な深さに惹き込まれ

ているのに対して、

「われわれの祖先は、この黒潮に乗って、やって来たわけだな」

ぼそぼそとしてはいるが、明るい声音で、つぶやいていた。

「想えば、太閤秀吉は、気宇の大きな人物であったな。太閤は、天正十九年に、原田孫七郎なるさむらいをして、呂宋（フィリピン）を訪わしめている」

天正十九年（一五九一年）といえば、マジェランが、フィリピンを発見してから、七十一年後のことである。

イスパニヤ（スペイン）のフィリピン総督は、秀吉に返書を送って来て、敬意を表している。

「山田長政も浜田弥兵衛も、この大海原を越えて、行った」

「…………」

「どうだ、彦九郎——、お主も、ひとつ、南蛮へ押し渡ってみるか？」

「う、うむ！」

彦九郎は、一瞬、総身の血汐が、熱くなるのをおぼえた。

かたわらの上田秋成は、また、別のことを、想っていた。

——平安なかば、延長・承平の頃、紀貫之は、南海の船旅を、一管の筆にまかせて、あの『土佐日記』を著したのだ！

『土佐日記』の作者は、任地をはなれる名状しがたい憂愁と、家郷へ帰るまどかな想念の交錯の中で、風吹きぬべしと同じ泊に、日を重ねたのだ。

五

天草灘の沖あいを、西航するこの十艘の千石船は、すべて、

『日本丸』

と名づけられ、第一号、第二号、第三号……と、その順列で、微速前進していた。

先頭の第一号が、主船であった。指揮をとる船頭は、江戸三郎次といい、その先祖は、関東を征覇した江戸氏だと称していた。

しかし、その面貌、骨格は、あきらかに、一代前か二代前が異邦人であったに相違なかった。蝦夷で生れて育った、と自身の口から云っているところをみると、難破漂着したオロシャ船の船員と蝦夷女とのあいだに生れたのかも知れない。

年齢は四十なかばに達していたが、五体の動きは、剽悍という二字にぴったりであった。

日本丸十艘が、伊豆伊東を出帆するにあたって、誰が十一人の船頭の長になるか、評議されたが、

「江戸三郎次がよかろう」

という禁門影人の指名に、誰も反対する者はいなかった。

十二歳の時から、船に乗っている、というだけあって、経験もまた最もゆたかであった。

高山彦九郎と松井源水と上田秋成が、三人三様の心をこめて、南方の水平線を眺めやっているところへ、江戸三郎次が、近づいて来て、舳先に立つと、

「もしかすると、大時化が来るかも知れん」

と、云った。

「…………？」

彦九郎も源水も秋成も、海に対する知識は皆無であった。

秋の海原は、おだやかな微風を透して来ていたし、空は晴れわたっていた。

「大時化の来る徴が、どこにあらわれたというのか？」

源水が、問うた。

「あんたらが眺めとる水平線が、すこしばかり、靄のように黄色がかって居るじゃろう。その上に、うっすらとじゃが、高い山脈のように灰色の雲が、流れとる」

そう説明されても、三人には、それが暴風雨の前ぶれとは、とうてい思われなかった。

「あんたらには、見当つかんじゃろう。……あと一刻も経つと、あの灰色の厚い雲が、空一面を掩う。風が強くなる」

「それまでに、船がかりしなければいかんのか？」

彦九郎が、問うた。

「半刻後には、どこかへ逃げ込むか、乗り切れるか——程度が、わからない」

江戸三郎次は、三人に向って、汐焼けした、漆黒の髭だらけの、彫の深い顔に、皓い歯をみせた。

「海ちゅうやつは、気まぐれな魔神でのう。なめてかかっても、いかんし、歯向っても、いかんわい。逃げの一手じゃが、さりとて、おそれてもいかんわい。まあ、それじゃから、海での生甲斐をおぼえる、ちゅうことかのう」

六

嵐は、確実に、船頭長・江戸三郎次の予言通りに、日本丸十艘に、襲いかかって来た。

しかし、密雲が空をびっしりとふさいで、視界を黄昏の暗さにし、烈風を吹きつけて来た時、別のあらしが、出現したのであった。

白く逆立った波浪を切って、二隻の外国軍艦が、突き進んで来たのである。

「おっ！　ありゃ、オランダのいくさ野郎じゃねえか！」

江戸三郎次は、傍にいた水主がしらの甚兵衛に叫んだ。

日本の船乗りたちは、オランダ商船を、〝あきない野郎〟、オランダ軍艦を、〝いくさ野郎〟と呼んでいた。

三郎次は、伊豆伊東の浜で、その出帆を見送った禁門影人から、

「もしかすると、将軍家側衆である田沼意次を、憎み、敵とみなしている宿老の松平右近将監が、この日本丸のことを、黙視せず、手飼いの隠密を、長崎へ趨らせて、オランダ商館に、軍艦によって撃沈せしめてもらいたい、と依頼するかも知れぬ。あらかじめ、その覚悟をしておいてもらいたい」

と、云われていたのである。

日本丸は、一艘に鉄砲百挺ずつ、のせていたが、大砲は一門も備えつけていなかった。

禁門影人は、戦国時代から、全く発達していない、いわゆる〝大筒〟という古めかしいしろものなど、役に立たぬ、とみて、三郎次に、

「長崎港に入ったならば、まず、唐人屋敷の信頼のおける者をくどいて、最新式の洋砲を、ひそかに購入して、備えつけよ」

と、命じていたのである。

大砲が、日本へもたらされたのは、天文年間、ポルトガル人によってであった。大友宗麟が、これを贈られている。

大砲の威力に目を着けた最初の人物は、織田信長であった。

信長は、石山本願寺（のちの大坂城）を攻めるにあたり、九鬼嘉隆に命じて、鉄板張りの戦船五艘を造らせ、これに、国友鉄砲鍛冶が製った大砲三門を搭載した。

九鬼戦船は、伊勢湾を出て、紀州をまわり、堺に寄ってから、大坂湾に突入した。

本願寺方は、雑賀淡輪の一揆をして、小舟数百艘に弓矢と鉄砲を持たせ、堺に寄港しようとする九鬼戦船を、阻止しようとした。

九鬼嘉隆は、この小舟隊を、近くまでひき寄せておいて、三門の大砲で、一挙に撃ちはらい、悠々と入港し

た。
ところが、次の天下人となった豊臣秀吉は、朝鮮の役までは、大砲の威力をかえりみなかった。
文禄の役で、わが水軍が、碧波亭前洋に於て、李舜臣の建造によるたった一隻の亀船に備えつけられていた大砲によって、惨敗した時、秀吉は、愕然となり、大砲の威力というものを知ったのであった。
そこで、秀吉は、大いそぎで、一貫目玉詰めの石火矢船を造って、第二回目の朝鮮侵攻で、李舜臣に代った朝鮮水軍司令官・元均の指揮する水軍を、湊川島沖で破り、その亀船を捕獲したのであった。
しかし、もうその時は、秀吉自身の寿命が尽きていた。

七

大砲に対する徳川家康の態度は、どうであったか？
家康は、慶長五年（一六〇〇年）、石田三成と天下分け目の決戦に臨むにあたり、国友鉄砲鍛冶に命じて、

一貫目玉の石火矢　五挺
八百目玉の大筒　十挺

急遽、これだけ造らせている。
これらの大砲は、関ケ原で、大いに威力を発揮した。
次いで、慶長十九年（一六一四年）の大坂冬の陣、元和元年（一六一五年）の夏の陣に於ても、大坂城めがけて、徳川方の砲門は、火を噴いた。
その後、寛永十五年（一六三八年）島原一揆がたてこもった島原の原城が、十万の軍勢を以て攻めても、不落とみた松平伊豆守信綱が、平戸にいたオランダ人に協力を依頼して、砲撃してもらっている。
しかし、この島原の役に於けるオランダの大砲（五ポンド砲と十二ポンド砲）は、さして役に立たなかった。のみならず、一門は、砲筒が炸裂して、操作していたオランダ人が、腹部に重傷を負い、竹柵の外へほうり出されて死んでしまった。
この光景を、長崎奉行が目撃していて、
「大砲は、役に立ち申さず」
と、松平信綱に、申告した。
天下は泰平となり、日本では、それなり、大砲の発達は、停止したのである。
あれから百三十年の間に、ヨーロッパに於ては、大砲が戦争の最大武器となっていた。
そのことを、幕府の要職にある面々のほとんどは、すこしも知らなかった。

禁門影人は、知っていたのである。
「こん畜生っ！　あのオランダのいくさ野郎め、おれたちを木っ葉みじんにしようと突っ走って来やがる！」
江戸三郎次は、歯がみした。
文字通り、じだんだをふみたい焦躁にかられた。
もし、唐人から洋砲を購入して、その操作を教えられ、試撃もやっていれば、堂々と、海戦をやってのけられたのである。
鉄砲と大砲とでは、喧嘩にならなかった。しかも、日本丸にとって、不運であったのは、大時化が、そこまで来ていたことであった。
オランダ軍艦は、これぐらいの嵐には、ビクともしないであろう。
日本丸は、暴風雨をかわすのだけでも、容易ではなかった。
船足の遅速の差は、問題にならなかった。
あっ、という間に、日本丸十艘は、二隻のオランダ軍艦の砲撃圏内に入れられた。

八

オランダ軍艦二隻は、一切なんの予告もなしに、七門の砲口から、轟然と火を噴かせた。
砲弾は、狂いもなく、すべて、標的に命中した。
船腹に、ぱっくりと穴があいた。
主檣が、ふっ飛んで、ちぎれた帆が、烈風に舞いあがった。
その時、風向きが一転して、日本丸は、その胴体を、オランダ軍艦の大砲が狙うに恰好の方角に、さらけ出した。
さらに、七弾が、撃ちかけられて来た。
まっさきに、第五号が舳先を砕かれて、平衡を失い、あっという間に、沈没した。
第七号が、船体を呻かせつつ、無謀にも、敵めがけて、突進した。
これは、近距離から、砲弾を、もろに、甲板に落され、鉄砲をつかんだ水主たちが、木の葉のようにはね跳ばされた。
烈風は、いよいよ、吹きつのり、その嵐は、北東から襲いかかって来た。
押し流される三号、四号、九号の後方へ、オランダ軍艦は、まわり込んだ。
この三艘は、たちまち、花火のように火の粉をはじかせて、猛焔につつまれた。

巨竜のような凄い波濤が、小山のごとく、船首を押し上げて来るのに対して、敵は、まるで、大人が嬰児へ石を叩きつけるように、砲撃を加えたのである。
ひとたまりもなかった。
小半刻も経たないうちに……。
日本丸は、八艘が撃沈された。
一艘だけが、辛うじて、強風に乗って、東南へ、遁れた。
主船は、主檣をふっとばされたまま、暗礁に激突して、大きく傾いた。
それを見とどけておいて、オランダの〝いくさ野郎〟二隻は、悠々と、逆巻く巨濤の彼方へ、消え去った。
「くそったれめ！」
江戸三郎次は、舷側からのり出して、暗礁を、すかし視ていたが、とうてい、それからはなれることは不可能と、さとって、唸った。
いや、たとい、暗礁からはなれることはできても、主檣を、根もとから折られては、航行は絶望であった。
「大砲というやつは、途方もない威力をふるうものだな」
さいわいに、負傷をまぬかれた松井源水が、高山彦九郎にそう云って、今更ながら、その砲撃の凄じさを思いうかべて、胴ぶるいした。
上田秋成は、ようやく、烈風の吹きすぎたあとの、大きな波のうねりへ、じっと視線を投じて、なにか、深い想いにふけっていた。

九

夜が、明けそめた。
大きく傾いた日本丸主船の甲板上に、船頭長・江戸三郎次と、便乗の高山彦九郎と松井源水と上田秋成が、舷側に寄って、じっと、海面を見おろしていた。
座礁した場所は、長崎港から、南方へ、まるで腐蝕した古代の武器である戈の形状で突き出た地域であった。
長崎半島は、地下人には、野母半島と呼ばれていた。
突端の岬には、権現山がそびえ、南岸に野母崎があり、権現山の山頂には、遠見山番所が寛永年間に設けられ、外国船の無断来航を、監視していた。
日本丸主船が、暗礁に乗りあげたのは、野母崎とは反対側の、――西海岸に面した脇岬の沖であった。
そこが、脇岬と判ったのは、北方の殿隠山の麓に、観音寺をみとめたからであった。
それは、〝みさきの観音〟と呼ばれ、はるかむかし、

和銅二年（七〇九年）に建立された古刹であった。
この〝みさきの観音〟は、足利時代から、南蛮船が、はるばるやって来て、長崎に入ろうとして嵐をくらい、流されて、風待ちのために入港した際、かれら異邦人の宿泊所にあてられたものであった。
その伝統が、いまも、ものをいい、徳川期に入ってからも、長崎を本拠とする抜荷商人、そして西国大名たちは、
『観音詣で』
と称して、ここで、オランダのみならず、清国やイギリスやポルトガルの各商船と、莫大な取引きをやっていた。
……朝陽を受けた海は、美しい。
いま――。
船頭長・江戸三郎次は、生き残った水主のうち、九歳から船に乗せて、きたえあげた黒太という二十歳の若者をえらんで、海中へもぐらせ、暗礁をさぐらせていた。
――どうしたのであろう？
江戸三郎次自身が、不安になるほど、黒太は、海面へ浮きあがって来なかった。
「鱶にでも、食われやがったかな！」
思わず、もらしたほどであった。
海に対する知識が皆無の彦九郎・源水・秋成は、ただ、重い沈黙の中で、かたずをのんでいる。
やがて――。
黒太が、ぽっかりと、海面上へ首をのぞかせた。
「てめえ、なにを、まごまご、手間どっていやがったんだ！」
三郎次は、心配を、その呶号にした。
黒太は、甲板上へ立つと、ぶるっと、たくましい裸体をふるわせて、大きく深呼吸してから、
「おかしら、乗りあげたのは、暗礁じゃありませんぜ」
と、云った。
「なんだと？」
「船でさあ。そうさな、二千五六百石もある、どでかい船が、沈んでいやがって、その上へ、乗りあげてしまったんですぜ」

十

「おい、てめえ、正気か？　海底で、幻を見たんじゃあるめえな？　……おれは、この野母半島で、大きな船が沈んだ、などという噂を、きいたことはねえぞ。記録にだって、残されちゃいねえ」

江戸三郎次は、炬眼を、ぎょろりとひき剝いた。

するとーー。

若い水主の黒太は、海中からひろって来た、ひとつの品をさし出した。

「こいつが、証拠でさあ」

「……？」

三郎次は、沈んだ巨船の胴体内にもぐり込んだ黒太の不敵な度胸に、舌を巻きながら、その品を受けとった。

それは、ひとかかえもある楕円（だえん）の玻璃（ガラス）板であった。

その中央に、色あざやかに、貝と珊瑚で細工した紋章が象眼してあった。

いや、紋章というのは、あたらなかった。八方へ光を放つ旭日（きょくじつ）の船印であった。

「こんな船印をかかげた朱印船は……」

三郎次は、首をひねった。

とたんにーーすかさず、

「わしは、百年前に、末次平蔵が、旭日の船印を、親柱の上にかかげた、と何かの書物で読んだ記憶がある」

上田秋成が、云った。

「末次平蔵?!」

この朱印船貿易家の名は、百年を経たいまも、その勇名をのこしている。

末次氏の始祖興善は、徳川幕府が開港したばかりの長崎へ、博多から、やって来ると、私財をなげうって、ひとつの町をつくり、自分の名をとって、興善町とつけた。その町名は、いまも、のこっている。

二代目平蔵政直は、金屋町の乙名をつとめ自ら朱印船に乗り込み、安南に渡って、莫大な利益をあげた。

一代にしてたくわえた富は、二十万石の大名をしのいだ、という。

元和五年（一六一九年）ーー。

末次平蔵は、長崎代官として権勢をふるった村山東安と対立、抗争して、失脚させたばかりか、これを、キリシタン宗徒として、幕府に、品川湾をのぞむ丘で、処刑させることに成功したのであった。

村山東安は、怪物というにふさわしい人物であった。

はじめ、金屋町で小さな南蛮菓子屋をひらいていた。

そのうちに、豊後臼杵で、修道士ルイス・ダルメイダにカステラの製法を学んで、売り出し、これが大当りをとった。

ひとつには、東安が、稀代の美男であって、長崎中の女を魅了したこともあった。

町の人々が、かれを、和奴唐（わぬとう）、と呼びならわしていたところをみると、東安は、西洋人との混血児であったに

相違ない。

カステラ、というのは、スペインの古い王国の名で、ポルトガル人は、スペイン人のことを、俗に、カステラと呼びならわした。

村山東安は、このカステラを、豊臣秀吉が、文禄元年に、朝鮮侵攻にあたり、肥前名護屋に本営をかまえた際、その面前で、製ってみせて、一躍、長崎代官にとりたてられたのであった。

十一

権勢ならぶ者のない長崎代官・村山東安を、キリシタンであると幕府に訴人して、これを処刑させた末次平蔵政直は、たしかに、只者ではなかった。

平蔵政直は、村山東安に代って、長崎代官となり、いよいよ、その富と権力をふくれあがらせた。

末次氏は、その後、三代にわたって、長崎代官をつとめ、その巨富は、薩摩七十二万石の島津氏も、及ばない、といわれた。

ちなみに、その当時は、長崎奉行は、長崎に常駐せず、一年の大半を、江戸ですごしていたのである。

すなわち、日本唯一の外国貿易港の実際上の支配者は、長崎代官であり、その下に町年寄がいた。

やがてーー。

四代平蔵茂朝に至って、悲運が襲って来た。

幕府鎖国令を破って、カンボジヤなど南方諸国と密輸をやっていたことが、露見して、平蔵茂朝は、隠岐へ流され、家財ことごとく、没収された。（長崎代官職を狙う人物の密訴があったに相違ない）

その時、末次家が、幕府に没収された財産は、骨董品、不動産を除いて、金銀だけでも、六十万両余であった、と伝えられている。

延宝四年（一六七六年）のことである。

「ふうむ！　この玻璃（ガラス）板の船印が、末次平蔵のものだ、とすると、この日本丸の下に沈んでいるのは、末次船、ということになるぜ」

江戸三郎次が、目を光らせた。

「もしかすると……」

上田秋成が、云った。

「末次平蔵は、家をとりつぶされるのを、事前に知って、たくわえた金銀を、船でどこかへはこぼうとしたのかも知れんな」

「いや、はこぼうとしたのではなくて、もう、どこかへ、莫大な千両箱の山を、隠しておいたのかも知れん」

これは、松井源水の推理であった。
高山彦九郎には、こういう場合、なんの意見も、脳裡にうかばず、むすっとして、腕組みしていた。
「……そういえば」
若い水主の黒太が、云った。
「沈んだ巨船の隣りに、暗礁があったが、太陽の光が、碧い水底にさし込んでいたので、よう透きとおって居って、暗礁に、ぽっかり、大きな洞窟が口をあけていたのが、見えた」
「………」
一同の視線が、黒太に集中した。
「末次平蔵が、莫大な金銀を、かくした、とすると、その洞窟の中じゃなかろうか？」
「あるいは！」
「しかし、洞窟の中は、まっ暗闇じゃけん、もぐっても、どうにもなりゃせん」
「しかし、一度、さぐってみる必要があるぞ！」
高山彦九郎が、はじめて、大声を発した。
「さぐる手段が、何もないわい。それでは、話にならん」
三郎次が、投げ出すように云った。

十二

旭日旗をかかげ、主帆に菊の紋を染めた千石船十艘が、二隻のオランダ軍艦によって、その大半が撃沈された報は、次の日には、もう、公儀隠密・鬼堂天馬の耳に入っていた。
天馬は、その夜更けて、長崎奉行所へ忍び込み、奉行の寝室を、無断で訪れた。
新見加賀守正栄は、不意に、行燈に火を入れられて、はっと目覚めた。
掛具をはねて、起き上った加賀守は、蚊帳の外に、うずくまる黒い人影を、
「何者だ？」
と、誰何した。
「上様側衆田沼主殿頭の手の者とお心得下さい」
「わしに、何用だ？」
「昨日、大時化の来た天草灘の沖あいにて、オランダ軍艦が、十艘の千石船を撃ち沈めたのは、お奉行――お手前様の指令でありましょうや？」
「わしのかかわり知らぬことだ。夕刻、報告を受けただけだ」

「では、代官の磯辺仙十郎殿が、閣老のどなたかの密命によって、オランダ商館に依頼した、と受けとって、よろしいのでありましょうか！」
「そうと推測するしかあるまい」
奉行は、こたえた。
新見加賀守が、この長崎へやって来たのは、先月末で、まだ一月も経っていなかった。
長崎奉行は、定員二名で、一人は江戸に滞在し、一人が長崎に赴任して、毎年初夏に交替していたのである。
その職務は、長崎一円の管轄統治、オランダと中国との貿易の監督、そして、九州の諸大名の動静をさぐることであった。
たとえば――。
もしかりに、イギリスとかスペインとかの軍艦が、不法に海域を侵して来た場合、長崎奉行は、即刻、将軍の名を以て、西国大名衆に、撃ち払い命令を下す権限を与えられていた。
しかし、寛永以来、天下泰平はつづいて居り、奉行は、棚の上にまつりあげられ、町の行政は、町年寄（定員七名）がその手ににぎり、代官がその上にいて、権力をふるっているのが実状であった。
「日本丸と名づけたその朱印船十艘は、田沼殿の許可によって、建造された、ときいた。わしが、どうして、田沼殿にさからって、オランダの軍艦によって、撃ち沈めたりいたすものか」
新見加賀守は、いまいましげに、云った。
「ご老中松平右近将監様が、わがあるじの江戸城内に於ける威勢に対して、いやがらせをなされた、と考えられましょうか！」
「いや、そうではあるまい。わしが感じた江戸城内の様子は、宿老たる松平右近将監殿が、田沼主殿頭殿に、一歩ゆずった、というところだ。むしろ、このたびの異変は、別の御仁のしわざかと思われる」
「若年寄・水野壱岐守忠見殿！」
鬼堂天馬は、ずばりと云いあてた。
「わしの口からは、どなたとも、その名を云えぬ」
加賀守は、かぶりを振った。
水野壱岐守忠見は、三十六歳の壮齢で、若年寄中、ひと首抜け出た切れ者であった。

十三

鬼堂天馬は、長崎奉行所を抜け出ると、その足で、まっしぐらに、野母半島を趨って、突端の岬に至った。

日本丸主船が、脇岬の沖で、座礁している惨めな姿を、みとめるのに、天馬は、さして、時間を費さなかった。

そして、次の日の朝には、もう長崎の町へ、ひきかえして来ていた。

丸山の廓の大門をくぐり、引田屋へあがって、そこに居候をきめ込んでいる平賀源内と対座すると、

「お主の智慧をかりなければならぬ」

と、云った。

天馬は、小舟を、座礁した日本丸へ、漕ぎ寄せて、どうやら、末次船らしい巨船の上へ乗りあげているのを、見とどけて来たのであった。

その話をきいた源内の表情が、いきいきしたものになった。

源内は、南蛮船の来航、朱印船の渡航などの歴史には、くわしかった。

「沈んでいるのは、絶対に末次船に、まちがいはない！　なぜならば、末次平蔵茂朝は、脇岬を、おのが抜船の母港にしていたからだ。……密輸が発覚して、かれが、家財没収の上、隠岐へ流された際、金銀だけでも六十万両あった、というが、おれは、末次平蔵ほどの曲者ならば、日本の大判小判に、外国金貨を合せて、二百万両以上、保有していた、とにらんだものだ」

「ふむ?!」

「ばかげた話さ、鎖国などという制度は——。寛永年間に、幕府が、国を鎖すまでの朱印船の渡航をしらべてみると、長崎から出て行った船だけでも、三十年のあいだに、三百五十余艘だ。……村山東安、末次平蔵、船本弥七郎、糸屋随右衛門、後藤宗印、荒木宗太郎ら、長崎商人が、どれだけ巨額の金銀を、外国から持ってかえって来たか！　……天馬！　その末次船が、もし、平蔵茂朝の流罪の時、ひそかに出帆しようとして、暴風雨に遭って沈んだものとすれば、かならず、莫大な金銀を積んでいたに相違ないぞ！」

「そこで、お主の智能の働きが、必要となるのだ。海底へもぐった若い水主が、末次船のとなりの暗礁に、洞窟があるのを、発見している。金銀が、その洞窟の中に、かくされてあるとすれば、どうやって、それをたしかめるかだ。海底の暗黒の洞窟内を、さぐる手段を、お主に、考えてもらいたい」

「ふうむ！」

源内は、宙をにらんだ。

暗礁の中に、百年間、しずかにねむっている黄金の山が、脳裡に描かれた。

——すごいことになるぞ、これは！

「源内！　どうだ、手段はあるか？」

天馬が、いらいらしながら、問うた。

「ある！」

源内は、大きくうなずいてみせた。

「おれに、まかせろ！」

「たのむ！」

天馬は、頭を下げた。

「はっはっはっ……」

源内は、狂ったごとく哄笑してから、

「あるとすれば、百万両以下ということはないぞ！」

海底秘宝

一

早朝——。

平賀源内と鬼堂天馬は、肩をならべて、丸山の廓の大門から、出て来た。

野母半島突端の脇岬の海底にねむっている（源内の推定では、百万両以上の）莫大な金銀を、ひそかに、ひきあげよう、という計画で、二人の心は、照りつける初夏の陽光よりも、熱くなっていた。

やがて、源内が天馬をともなったのは、丸山とはちょうど反対側にある筑後町であった。

もとは、ちゃんとした商人の屋敷であったろうが、門は消えはて、土塀は崩れてしまった、おそろしく古びた家へ来て、

「ここだ」

と、源内は、天馬に、にやりとしてみせた。

源内は、前夜、「おれは、いま、日本中の人間が、ひと目見て、びっくり仰天、腰を抜かす奇器の発明をしている。明朝、そこへ、案内する」と、天馬に告げていたのである。

——贋の唐物を焼く窯場のほかに、この長崎に家を買っているだろう、と想像はしていたが……。

天馬は、源内のうそぶきに興味をそそられて、ついて来たものの、そのぼろ家を眺めて、

——秘密の仕事場を兼ねているにしても、これは、あまり粗末すぎる。

と、眉宇をひそめた。

天馬は、源内が、江戸神田橋本町にも、大坂道頓堀にも、家を持ち、兵庫の武庫山中には、麻薬を製する仕事場を、この長崎の風頭山の中腹には、明・清の法花系の贋三彩陶を焼く窯場をつくっていることを、知っていた。

ほかにもまだ、幾箇所か、秘密の家や仕事場を持っているに相違ない男であった。この平賀源内という奇才は——。

「お主が買い求めた家か？」

天馬が、問うと、源内はかぶりを振った。

「変窟者ゆえ、出島のオランダ商館から追放された通詞の隠居所さ」

そうこたえておいて、庭へまわると、

「おい、庄三、いるか？」

と、屋内へ呼びかけた。

「先生か」

障子戸の破れた箇処から、首がひとつ、ぬっとのぞいた。

あばただらけの、どことなく飄逸なけしきをただよわせた面相であった。

「どうだ、エレキテエルはできたか？」

「春から夏まで、一日中、眠たか、ねぶたか」

「ばか者！　おれは、貴様らに、ただ飯を食わせてやれるほど、懐中はゆたかではないのだぞ！」

「横道もん、と叱られるのを覚悟しとりましたばい。ばってん、ねぶたかもんは、どうにも、しかたなか。上まぶたが、下まぶたへ、くっついてしもうて……」

「弁解無用だ！　貴様は、おれが、唐人屋敷から買ったエレキテエルを、一ケ月もあれば、修理復元してみせる、と豪語したのだぞ！」

二

畳はぼろぼろ、壁は剝げ落ち、天井は穴があき、とう

てい、普通の人間なら、住むに堪えぬ屋内であった。

「庄三、ともかく、エレキテエルの修理は、毎日、やって居るのだろう？」

「ああ、せせっていることはせせっているんじゃが、なにせ、火花ばかり、散って、おとろしかけん、自分の電気の無知識に、いらいらして、ついつい、失望くうことになるばい」

「ともかく、どこまで、修復したか、実験してみせろ」

「ばってん……」

「ぐずぐずしては居れんのだ。持って来い！」

源内は、どなりつけた。

庄三が、奥に入ると、天馬は、

「その……エレキなんとか、というのは、どんなしろものだ」

と、問うた。

源内は、腰にぶら携げた大きな革袋から、オランダ製の鉛筆をとり出すと、

破れ壁へ、

Electriciteit

と、オランダ語を、書きつけてみせた。

「オランダ通詞の西善三郎という男が、船長からもらっていたが、こわれていたので、唐人屋敷の官商に呉れていたのだ。それを、おれが、もらい受けた。一口でいえば、摩擦起電機だ」

「後藤梨春の『紅毛談』に、えれきてりせいりてい、という医療器械のことが記してあるが、それと同じしろものか？」

「たぶん、同じだろう。……かんたんにいえば、人工で、稲妻を起すのだな」

筆者が、ここで、つけ加えておけば——。

米国のフランクリンが、電気と稲妻が同一である、という仮説によって、避雷針を作ったのが、一七四九年(寛延二年)——十八年前であった。

フランクリンよりさきに、ヨーロッパでは、静電気の実験は、さかんに行われていた。一七三三年には、フランスでは、デュ・フェーという科学者が、ガラスと琥珀をこすり合わせて、二つの性質のちがう電気(陽電気と陰電気)を起す実験を行い、その電気を蓄積する装置のライデン瓶も、発明していたのである。

ともあれ——。

当然——。

ヨーロッパに於ても、ようやく、プラス・マイナスの電気学が、その発達の第一歩を踏み出したばかりであった。

日本人の平賀源内が、電気や放電現象の原理を、急に

知ろうとしても、無理な相談であった。
さいわい、三十年も、オランダ商館の通詞をつとめた庄三という変り者が、電気の知識をもっていたのである。
奥から、庄三がはこんで来たのは、高さ三十センチ、縦二十センチ、横四十数センチの木製の箱であった。
箱の側面にハンドルがつけられ、蓋のまん中から、銅線が、アンテナのように直立していた。前面にガラス張りの小窓がとりつけられていた。

三

「やってみせろ」
源内は、庄三をうながした。
「エレキよ、うまく火を出してくんろよ。さもないと、源内先生に叱るるばい」
庄三は、ぱんぱんと、柏手を打ってから、ハンドルを、にぎった。
源内と天馬は、息をつめて、見まもっている。
「よいしょ!」
庄三は、ハンドルを、ぐるぐると、まわした。
しばらくは、箱の中の機械は、なんの反応も示さなかった。
「この横道もんめが! はよう働いて、源内先生を納得させんかい」
庄三が、呶鳴りつけつつ、ハンドルの回転速度を増した。
と――。
ガラス張りの小窓の中で、パチパチと音たてて、火花が散りはじめた。
「おおきに! おおきに! こぎゃんあんばいで、働け働け!」
庄三は、小窓のガラスを、ひょい、とはずした。
火花は、源内めがけて、ぱあっ、と飛びかかった。
「庄三、ようやった! ちゃんと、完成しとるじゃないか」
源内は、その火花をいとおしむように、見つめながら、云った。
「いいや、いまは、源内先生に叱るるけん、働いたばい。この把手をまわせば、いつも、火を発するとは限らんばい」
「これでいい! これでいいんだ! こいつが、百万両をさがし出す役目をするんだ!」
源内は、叫んだ。
「いいか、庄三、今日中に、この小窓に、玻璃の円筒を

とりつけてくれ」
「はあ?!」
庄三は、百万両、ときかされて、きょとんとしていた。
「よく、きけ、庄三! このエレキテエルが、海底を照らし出す蠟燭のつとめをするのだ。火急だ! 三日も四日も、待っては居れん!」
「そうばってん、ここでも、やっと火が出るちゅうに、水中で、成功する確率は、千に一かも……」
「黙れ! おぬしは、この箱の中に、海水が一滴も入らんように、工夫してくれればいいのだ。……これだけの明りがあると、海底の洞窟を照らすのは、造作もない」
「やってみることは、やってみるばってん、火花が出なくとも、しかたなか」
「その時は、その時のことだ。……おれは、自信があるぞ! 庄三、たのむ!」
源内は、物の怪にでもとり憑かれたように、声音を、うわずらせていた。
鬼堂天馬は、奇器を見せられたが、冷静であった。
脇岬の海中が、どこの海よりも透明の度合いがいい、と思い出していた。
――ただ、洞窟の中に、人に食いつく、海の化物がいなければいいが……。

四

「では、それがしは、今日のうちに脇岬へ行って、お主が、そのエレキテエルをたずさえて来るのを、待っている」
鬼堂天馬は、差料を腰にした。
「べつに、急ぐ必要もなかろう。おれと一緒に行けばよいではないか」
「そうは参らんのだ」
「十艘のうち、八艘は、撃ち沈められ、主船は座礁し、一艘だけが、ようやく遁れた、というに、またふたたび、オランダ軍艦が、現れて、大砲を撃ちかけて来るはずはあるまい」
「オランダ軍艦は、依頼された仕事は、みごとにやってのけたゆえ、もうやっては来ぬ。その代り、別の敵が来るに相違ない」
「別の敵?」
「お主の仲間ではないか」
「いや、敵だ」
「田沼主殿頭を敵視する閣老の手の者どもか!」

「そうだ。それがしは、若年寄・水野壱岐守忠見が、ひそかに、オランダ商館に、依頼して、日本丸船団へ、軍艦二隻をさし向けた、と推測している。次は、壱岐守の手飼いの隠密衆が、日本丸の生き残った連中に、牙をひき剝いて、とびかかって来る。……日本丸に乗り組んだ者全員を、みな殺しにせよ、という壱岐守の下知、と看てとった」

「お主一人で、かれらに立ち向う存念か！　無駄死するだけではないか」

「味方がいるのだ、座礁した日本丸に――」

「船頭や水主どもでは、勝味はないぞ」

「いや、お主も知っている若いあばれ者の高山彦九郎と、居合抜きの名人松井源水が、便乗しているのだ。それがしと合せて、三人が、敵の襲いかかって来る前に、こちらから、攻撃をしかけてくれる」

そう云って、天馬は、不敵な微笑をみせた。

「おれも、剣を学んで居れば、加わるのだが……、あいにく、その修業だけは、苦手で、一度も道場へかよって居らん」

源内は、がしがしと、頭をかいた。

「お主には、そのエレキテエルという、奇器を役立ててもらえば、こんなありがたい話はない。乱闘は、高山彦九郎と松井源水とそれがしに、まかせておいてくれ」

そう云いおいて、天馬は、影のように、おもてへ出て行った。

源内は、

「きいたか、庄三――、あの男は、一命をすててかかって居るのだぞ。おぬしも、必死になって、エレキテエルを完成しろ！」

と、命じた。

「やってくれようばい」

庄三は、合点した。

「首尾よく、百万両を、海底の洞窟から、ひきあげることに成功したなら、おぬしにも、千両や二千両、めぐんでやれるぞ」

「金は、要らん」

庄三は、かぶりを振った。

「何が欲しい？　云ってみろ」

「オランダ国へ渡ってみたい。世界地図を見ると、日本ちゅう島国は、こまーんか、こまーんか！」

庄三の返辞は、それであった。

五

満天に星が煌いていたが、凪いだ海を、すべるように進む小舟を、浮きあがらせる明るさはなかった。

漕いでいるのは、鬼堂天馬であった。

子刻（午前零時）を待って、野母半島の突端である、大立神岩と小立神岩のちょうど中間の断崖が屏風のように海へ落ちたところから、そっと、漕ぎ出たのである。

それより一刻ばかり前、天馬は、遠見番所を設けた遠見山の北東にある殿隠山の頂上から、松明を振って、日本丸主船に、合図を送っていた。

敵――公儀隠密衆は、脇岬の弁天山の麓に、集結している。

そう報らせたのである。

最初に、日本丸を訪れた際、

「次は、かならず、公儀隠密衆が、襲って来る。先手を打って、こちらから、攻撃することにする。敵が集結するとすれば、岬の弁天山の麓の漁師小屋であろうから、それを突きとめたならば、殿隠山の頂きから、松明で合図する」

船頭長・江戸三郎次に、そう云いおいたのであった。

隠密であるがゆえに、隠密である敵が、どう動き、どこへひそみ、どのような急襲を企てるか――天馬には、およその見当がついたのである。

見当は、的中していた。

玻璃に墨を塗ったような深夜の海を、しずかに、傷つき傾いた巨体へ近づきながら、天馬は、爽快な気分になっていた。

自分という男は、隠密になるために生れて来たような心地であった。

ぎいっ、ぎいっと漕ぎすすむうち、行手に、たわむれかかるように、海面いっぱいに、黄を及びた白い光の粉が、ちらばった。

微生物が、この小舟にはね散らされて、突然、光を発したのである。

――敵が、まだ起きていて、こちらをすかし視ていたなら？

天馬の神経は、緊張した。

さいわいに、どうやら、漁師小屋に集結した隠密たちは、今夜は、急襲にそなえて、睡っているようであった。

つまり、敵がたは、この鬼堂天馬の存在に、気づいていないのであった。

――奴らは、遁れた一艘が、主船を救いにやって来る

のを、待っているのだ。
その一艘が座礁した主船に、寄り添ったところを、一挙に襲う手筈だ、と受けとれた。
天馬は、脇岬を、天草灘から守るようなかたちで、どっしりと海に居すわっている樺島を、外からまわり込む予定であったが、その予定を変えて、脇岬と樺島との中間に浮かぶ小さな島わきをこすり抜けると、一直線に、日本丸へ、近づいた。
舷側からたらされた縄梯子を、登って、甲板に立つと、そこに、江戸三郎次はじめ、高山彦九郎も松井源水も上田秋成も、待ち受けていた。
天馬は、告げた。
「夜明け前に、こちらから、斬り込む」
「この三人だけでかね？」
三郎次が、天馬と彦九郎と源水を、指さした。
「そうだ」
「わしらの鉄砲の援護射ちは、必要ないのかい？」

六

「鉄砲の援護は、逆に、藪蛇になるおそれがあるのだ」
天馬は、こたえた。
「というと？」
「それがしが、突きとめたのは、漁師小屋の一軒に、隠密が八人、集結している、ということだけだ。……あるいは、後備えとして、遠見山の山中に、十人以上、もしかすれば二十数人が、ひそんでいるやも知れぬ。……漁師小屋の八人を片づけるのは、われら三人だけで、充分だ。しかし、遠見山に、ひそんでいる連中が、もし、オランダ商館から、新式の大砲でも借り受けて、狙いをつけていたならば、これは、尋常の戦いでは、勝味はない。……そこで、われわれ三人は、漁師小屋の八人を片づけたならば、これで、済んだ、というふりをして、敵の目をわれわれにだけそそがせる。幾人かは、われわれを襲って来るだろう。……しかし、敵は、あとの一艘が、この主船を救いに来るまで、大砲を撃ちかけては来ないだろう。そのあいだに、それがしが、遠見山の山中を、さぐって、後備え陣が、大砲を据えつけているかどうか、突きとめる」
天馬の作戦は、きわめて用心深かった。
「もし、ひそんでいたら？」
「その時は、お主と水主十人ばかりの手を借りる。鉄砲をかまえて、奇襲だ」
「よっしゃ！　判った」

江戸三郎次は、合点した。
やがて——。
天馬が漕ぎ着けた小舟に、高山彦九郎と松井源水が、乗り込んで、日本丸をはなれ、岬の浜辺へむかった。
短かく切った二挺の艪で彦九郎と源水が、小舟の左右の海水を、櫂の要領でゆっくりと、掻いた。
艪音を、消して、進んだのである。
艫に腰を据えた天馬が、方角を指示した。
小舟が、庭の置石のように散らばった岩のひとつの陰に着いた時刻は、天馬の予定通りであった。
満天の星屑が、ほぼ、消えかかっていた。
「あれだ！」
天馬が、一軒の漁師小屋を、指さした。
「斬り込むのか？　それとも、おびき出すのか？」
彦九郎は、若い血汐をおどらせつつ、訊ねた。
「おびき出す。……うまくやれば、斬り合わずに、みな殺しにできるかも知れぬ」
「どういうことだな？」
源水が、問うた。
「これだ」
天馬は、かついだ革袋を、たたいてみせた。
何を入れているのか、二人が、疑問を抱いていた革袋であった。
「ははあ、それは、火薬だな」
「左様——」
三人は、上半身を跼めて、岩から岩へ跳び移り、小屋に十数歩の地点で、砂地へ、伏せた。
八人の隠密は、見張りも立てずに、睡っているようであった。
「ここで、待っていてくれ」
天馬が、云いのこしておいて、匍いながら、小屋へ近づいて行った。

七

彦九郎と源水は、砂地へ、ぴったりと貼りついたごとく、伏せて、小屋の前の天馬の敏捷な動きを、すかし視ていた。
小屋から、すこしはなれた場所で、小さな火花が散りはじめると、天馬は、風の迅さで、二人の伏せている場所へ、駆けもどった。
火花は、闇に散りながら、小屋へ迫って行く。
天馬は、火薬粉を、地面に細く長く、まいて来たのである。

小屋の前には、一貫目の榴弾(ボム)を置いて来た。この爆発力は、猛烈なはずであった。

彦九郎は、天馬がかたわらに伏せると、

「あれは、小屋をふっとばす威力があるのか?」

と、息をはずませつつ、問うた。

「いまが、はじめての実験だ。はたして、首尾よく、ゆくかどうか——」

こたえる天馬の声音は、おちついていた。

火花は、地面を匍い進んで、ついに、小屋の前に来た。

一瞬——一貫目の榴弾が、轟然と炸裂して、そこを真昼のあかるさにした。

小屋の板戸や壁は、四散した。

しかし、小屋そのものは、ふっとばなかった。

火焔と硝煙の中から、黒影が、つぎつぎと、躍り出て来た。

それにめがけて、天馬・彦九郎・源水は、奔った。

敵八人のうち、榴弾で重傷を負っている者が三人あまりいた。

闘いは、十とかぞえる間もなく、終った。

源水が、みごとな居合で、三人を斬った。

彦九郎が、二人を、たおした。

天馬は、重傷を負った者たちに、容赦なく、とどめを刺した。

「ここで、朝まで、待っていることにしよう。後備えの面々が、遠見山にいるならば、遠眼鏡で、われわれの姿を、みとめるだろう。そして、すぐに、討手を幾人か、馳せつけさせる」

天馬が、告げた。

「やって来やがれ! 斬りまくってやる!」

二十歳の、野性の猛気を、巨軀に満たした彦九郎は、生れてはじめて、人を斬った興奮で、原始の人間がおそろしいけものを相手にする時のような闘志で、唸るように云った。

源水は、一太刀ずつで、敵三人を、斬っていながら、ただ、猫背の小さな姿を、うっそりと、立たせているだけで、無言であった。

……小屋は、焼け落ちた。

空が乳色になると、とろりと凪いだ海原が、灰色から、澄んだ碧色に変りかけて来た。

水平線が、くっきりと空との区切りを示した。その彼方から、徐々に、橙色の大陽が、昇りはじめた。

——敵は、来るか? 来ないか?

彦九郎は、美しい朝の海に背を向けて、襲撃して来るであろう西の方角を、にらんでいた。

その心中のさわぎを、看たように、天馬が、云った。

「現れるとすれば、四半刻うち——もうすぐだ」

八

その四半刻が、緊迫した待機のうちに過ぎた。

突如——。

山麓の松の木立の中から、敵の群が出現する代りに、遠見山をゆるがせて、大砲の轟音とともに、朝の中空を、一弾が、日本丸めがけて、撃ちかけられた。

さいわい、射程が狂って、日本丸の上を飛び越えると、高い水柱を噴かせた。

「しまった! 奴ら、血迷やがった! お主ら、ここを守ってくれ。それがしは、けものみちから、奴らの待伏せ場所へ、登る!」

さすがの鬼堂天馬が、激しい気勢を示した。

「お主、たった一人で、大砲を、ぶちこわせるのか?」

「よもや、それがしが、出現するとは予想もして居るまい。敵の虚を衝いてくれる。生還は、期しては居らん。……たのんだぞ!」

天馬は、疾風を起して、岬を奔馳して行き、あっという間に、姿を消した。

殿隠山からは、さらに、つづけて、砲撃が、日本丸めがけてあびせられた。

日本丸から、あわてて、鉄砲をつかんだ水主たちが、数艘の端舟へ、跳び降りるのが、見えた。

それとほとんど同時に、彼方の木立の中から、十人あまりの隠密が、躍り出て、彦九郎と源水めがけて、殺到して来た。

「働きどころだな」

源水は、ぼそりと云った。

「これが、高山彦九郎正之の生甲斐だ!」

「犬死は、せんでもいい」

「こんなところで、無縁仏になってたまるか!」

先頭をきって突進して来る者を、一瞥した源水は、

——あれが、最も手練者だ。

と、視てとるや、

「よいか、彦九郎——、わしの隙をうかがった奴を、斬ってくれ。わしの居合は、先制攻撃ではない。狙って斬りかかって来たのを、たおす。お主は、あくまで、わしの助太刀の役目をはたす。そうでなければ、二人とも殺られるぞ」

と、忠告した。

「よし、判った!」

たちまち――。
十人対二人の、凄じい修羅場が、浜辺にくりひろげられた。
松井源水がふるう三尺五寸の長剣の威力は、鬼神のごとく、目にもとまらぬ太刀行きを発揮した。
彦九郎は、源水の忠告を守って、源水の背後へまわり込んで隙をうかがう敵へ、野獣のごとく、斬りつけた。
日本丸から、五艘の端舟が、漕ぎついて、江戸三郎次以下、十数人の水主が、鉄砲をかざして、浅瀬へ跳び降りた時、敵十人のうち、九人までが、すでに、砂を血汐で染めていた。
残った一人を、三郎次が、鉄砲で、仕止めた。
そして、三郎次が指揮する海の荒くれの鉄砲隊は、遠見山めざして、駆け登って行った。彦九郎と源水が、これに加わった。

九

大坂の戯作者・上田秋成は、砲弾の飛来する日本丸主船に、残っていた。
生死紙一重の瞬間に、置かれた秋成は、恐怖よりも、一種名状しがたい快感をおぼえていた。
ただの戯作者ならば、恐怖で腰を抜かしているところである。
上田秋成は、才能も非凡であるとともに、性格も異常であった。
余談であるが……。
われわれ文筆にたずさわる徒は、いざとなると、死をおそれぬ度胸がある。
当代の若い作家は、どうであるか知らぬが、すくなくとも、われわれの先輩は、そうであった。
筆者は、一時、ガンのノイローゼにかかり、国立がんセンターにかよって、精密検査をしてもらったことがある。その時、きいた話であるが、ある高僧善知識が、診察を受けに来た。
医師は、相手が、名だたる高僧ゆえ、生死に関しては、すでに悟りをひらいていると思い、胃ガンである旨を、当人につたえた。
とたんに、高僧は、気絶して、その場へ倒れた。
それに比べて、今東光大僧正は、T病院で、腹中に、鶉の卵大のガンの塊が出来て居り、すぐに手術をする、と云われるや、
「大僧正たる身が、腹を切られてたまるか」
と、遁走した。

一年後、その塊は、野球のボール程の大きさにふくれあがり、大僧正もついに意識不明に陥ちて、国立がんセンターで、切りとられた。
手術後、大僧正は、「こんなしろものに、なやまされていたのは、腹が立つ。スライスして、食ってやる」と、医師に、請うた、という。
大佛次郎、尾崎士郎、高見順、中山義秀らは、ガンで逝ったが、これら先輩の晩年の態度は、実に従容たるものであった。
文筆の徒で、ガンに冒されて、恐怖にのたうちまわった例を、筆者は寡聞にして、知らない。
われわれ物書きは、世間の常識の目から見れば、放蕩無頼の生活を送っている。
しかし、いざ、生死の瞬間に置かれると、即座に、覚悟をきめるだけの度胸を持ち合せているのである。
上田秋成は、たかが、大坂堂嶋の商家の出で、剣をふるったこともなければ、禅の修行もやったことはなかった。
にもかかわらず……。
オランダ軍艦の砲撃と、大時化をくらいながらも、表情も変えず、平然としていた。
そして、いままた、遠見山から、砲弾をあびせられる座礁船の甲板上に立って、逆に、この危機一髪の経験を、快感をおぼえる記憶として、脳裡に、五感に、のこそうとしているのであった。
――そうだ！　『雨月物語』が書けるぞ！
人生の奥にひそむ怪異の心霊を主題とした小説は、この瞬間に、秋成の心中で、成ったといえる。

十

鬼堂天馬は、けものみちを、文字通り野生のけもののごとく、駆け登って行った。
敵が、大砲を据えつけている遠見山の下方に、古刹〝みさき観音〟があった。
そこから、遠見山まで、ほぼ直線の坂路が、通じていた。
天馬は、〝みさき観音〟わきの密林の中のけものみちを、南へ駆け登り、堂山峠へ達した。
すなわち。
敵が拠点としている遠見山の裏側へ、まわり込んだのである。
――江戸三郎次たちが、〝みさき観音〟から、鉄砲をかまえて、まっすぐに、遠見山へ肉薄するまで、一服するか。

遠見山の頂上には、どれくらいの頭数の隠密が、集結しているのか――こればかりは、天馬にも測りかねたのである。

　しかし、江戸三郎次ら三十数人が、鉄砲を撃ちかけつつ、肉薄して行けば、敵の目は、それにあてられ、防戦の陣を布くに相違なかった。

　そこに、かれらの背後に、隙が生じる。

　天馬は、ただ一人だけでも、その隙をとらえて、背後から、襲う自信があった。

　虚々実々の攻防戦であった。

と――。

　天馬が、堂山峠近くに、ひそんでから、ものの数分も過ぎた時。

　遠見山から放たれた砲弾のひとつが、日本丸主船に、命中した。

　みるみる、船体は、さらに大きく傾いた。

　もはや、横転して沈没するのを、待つばかりとなった。

　この光景を、ふりかえって目撃した江戸三郎次以下三十余人の水主が、逆上しない道理がなかった。

――おちつけ、三郎次！　血迷ったならば、敵のえじきになるぞ！

　天馬は、絶叫したかった。

　いくばくか過ぎて――。

　銃声が、起った。

　すると、これに応じた銃声が、つづいた。敵も、鉄砲を用意していたのである。しかも、オランダ銃を――。

　もはや、天馬に、猶予は与えられなかった。

「くそ！　イチかバチか、突入だ！」

　天馬は、密林の中を、あるいは跳躍し、あるいは滑走して、遠見山へ向った。

　悲鳴、絶叫、唸り声が、銃声とともに、こだまを呼んでいた。すべて、攻めかかる日本丸側からであった。

　天馬は、悪鬼と化したごとく、灌木をはねのけ、巌を躍り越えた。

――奴ら！

　天馬は、木立の中から、大砲のまわりに群れている二十数人の、いずれも鉄砲を、膝撃ちにかまえて、坂路の下方めがけて、放っている隠密たちを、見出した。

　すでに、天馬の手には、火のつけられた一貫目の榴弾が、つかまれていた。

「南無！」

　と、祈り、

「八幡っ！」

と、叫んで、渾身の力をこめるや、その榴弾を、大砲めがけて、投擲した。

十一

　この凄絶な戦いは、五分と五分であった、といえる。

　天馬が、投擲した榴弾は、狙ったところをあやまたず、大砲わきに積まれた砲弾に落ちて、炸裂し、五個の砲弾を爆発させた。

　オランダ製の新式大砲は、砕け散り、敵がたのうち、十人以上が、肉片となって、姿体のあとかたをとどめなかった。

　生き残った面々も、阿修羅となった高山彦九郎と松井源水が、襲いかかって、またたく間に、斬り伏せた。

　しかし――。

　江戸三郎次が、率いた水主三十余人のうち、大半が死傷してしまった。三郎次自身、左肩を、撃ち抜かれていた。日本丸主船は、みにくく、海面上に胴体をさらして、もはや、廃物になっていた。

　鬼堂天馬は、惨状へ、冷たい視線をまわして、

「敵が、一人、遁走するのを、見とどけた。……その報告によって、やがて、第二波の攻撃をしかけて来るだろう」

　と予測した。

「来やがったら、斬ればよいのだ！」

　彦九郎が、叫んだ。

　その単純なうそぶきをきき流して、天馬は、水主に手当をしてもらっている三郎次に、

「お主は、あらかじめ、こういう場合を、予想していたのではないのか？」

　と、問うた。

「あの若宮に、もし万が一、関船が大砲を撃ちかけて来たなら、一艘でも二艘でも、必死に逃げよ、と命じられた」

「そして、一艘は、ぶじに遁れた」

「うむ」

「どこの海辺へ、ひそむか、あらかじめ打ち合せはしてあったのだな？」

「ある」

「こちらが連絡しない限り、ここへは救助に現れぬのだな？」

「そうじゃ」

　三郎次は、斃れた水主たちを、眉宇をひそめて、眺めやりながら、万感を語気にこめて、

「海の上で、死なせてやりたかったのう」
と、つぶやいた。
天馬は、隠密らしく、物体と化した人間たちに、憐憫の情を催したりする慈悲心など持たなかった。
「いそがねばならぬ！」
自分に、云いきかせてから、
「松井源水、お主は、いちばん、敵に目立たぬ。これより、長崎へ行ってくれ。平賀源内が、エレキテエルという奇器を、製っている。これがあれば、海底の暗黒が、照らせる。……お主に、源内の護衛役をつとめてもらおう」
と、たのんだ。
「引き受け申した」
「源内を、ここへ連れて来るのは、陸路は危険の率が高い。海路をたのむ」
「承知いたした」
「海路、かならずしも、安全ではないが、源内に、航行のことは、思案させるのだな」

十二

長崎奉行所には、江戸表から、一人の切れ者が来訪していた。
大道寺左近という、三十を越えたばかりの目付であった。
若年寄・水野壱岐守忠見の耳目となって、辣腕をふるっていた。
公儀目付は、むかしは二十数人であったが、八代将軍吉宗の頃から、十人という定員になった。
その職務権限は、非常に幅びろいものであった。用部屋（老中・若年寄の執務部屋）から、まわされて来る願書とか伺い書とか建議書に対する意見を述べることから、旗本以下の幕臣の監察、江戸城内の巡視、評定所（現在でいえば、大臣の閣議室）に列席して、老中・若年寄・町奉行・勘定奉行・寺社奉行の質疑に応えることなど、すべての幕府の政務に干渉していた。
さらに、目付の最大の強味は、将軍家に、じかに、自分の意見を申したてるのが許されていたことである。
場合によっては、幕府の最高位にある老中をも、その公の行為がよろしくない、と看たならば、将軍家に、上申した。
大道寺左近は、若年寄・水野壱岐守忠見の片腕であった。
『十人目付』は、それぞれ、自分の上に、しかるべき若年寄を据えていたのである。

水野壱岐守のねらいは、側衆として力を増して来た田沼意次の進路をはばむ一点にあり、その意志を承けて、大道寺左近が、暗躍していた。
禁門影人が、伊豆伊東で、日本丸十艘を造ったのを、部下の探索によって知った大道寺左近は、
「田沼意次殿に、かくし大金をつかませてはなりませぬぞ」
と、水野壱岐守に忠告して、この十艘を、撃ち沈める計画を練り、そして、実行したのであった。
大道寺左近にとって、長崎奉行など眼中になかった。
現在、長崎に在る奉行の新見加賀守正栄は、大道寺左近の指令のままに、オランダ商館にたのんで、二隻の軍艦を、日本丸十艘撃沈にさし向けたのであった。新見加賀守は、日本丸が田沼意次の許可による朱印船とは知らなかったのである。
「当地で奉行を一年勤めるならば、十万両が懐中にころがり込む由。〝奉行三千両、代官千両〟とは、よくぞ申したものでござるな」
目付という職務をやりとげる冷酷非情を、その眼光にも言辞にも示している大道寺左近であった。
新見加賀守は、温厚な性格であるだけに、ただ、苦笑するばかりであった。
そこへ——。
顔の半面が焼けただれた男が、木戸をくぐって、庭へ入って来た。
大道寺左近が、野母半島の先端へ、おもむかせた三十余人のうちの一人であった。
「なんとしたぞ、その有様は——？」
公儀目付は、眉宇をひそめた。
「てまえ、一人のみ、生きのこりました」
隠密は、そう告げて、がっくりとうなだれた。

十三

公儀目付・大道寺左近は、重い火傷を負うた身で報告に馳せて来た隠密から、脇岬の浜辺の漁師小屋にひそんだ八人も、遠見山に大砲を据えつけた二十四人も、全滅したことを、きかされた。
報告をすませた隠密は、そのまま、俯伏して、事切れたが、大道寺左近は、表情を動かさなかった。
かなり長い沈黙を置いてから、
「うかつであった！」
と、もらした。
「…………？」

長崎奉行の視線を受けながら、ふっと、自嘲の薄ら笑いをうかべて、
「田沼主殿頭殿の手飼いに、鬼堂天馬という男がいたことを、身共は、忘れていた。あの男ならば、身共が放った隠密どもを、みな殺しにする知能と実力をそなえて居る！」
と、云った。
それから、やおら、長崎奉行へ視線をあてて、
「まさか、鬼堂天馬は、この奉行所には、現れなかったでしょうな？」
と、糺した。
「いや、そのような者は、訪れては参らなかった。誓って、断言でき申す」
「では、鬼堂天馬ではなく、他の人物でもよい。田沼殿にかかわりのある者が、参ったことは――？」
「側衆殿の添状を持参した平賀源内と申す、自ら大山師とうそぶく者は、訪れ申したが……」
「あの平賀源内が、この長崎に現れたと！」
大道寺左近の双眼が、鋭く光った。
「あの山師が、鬼堂天馬なる隠密と、共謀いたした、と推測されるのか？」
「おそらく……」
左近は、すばやく脳裡を働かせていたが、
「平賀源内は、まだ、この長崎に逗留いたして居り申すか？」
「オランダ商館と唐人屋敷へ、自由に出入できる手形をくれ、と申したゆえ、たぶん、まだ……」
「住居は、お判りか！」
「さあ、それは、ききもらしたが――」
「奉行としては、落度でござったな。あの平賀源内と申す男、端倪すべからざる曲者でござる。……鬼堂天馬と組んで、何か、大きな企てを成そうといたして居るに相違ない」
左近は、懐中から、竹笛をとり出すと、ひゅーっと吹き鳴らした。
さっと、隠密が一人、庭へ入って来て、うずくまった。
「平賀源内が、この長崎の、どこにかくれて居るか、探せ」
左近は、命じた。
「かしこまりました」
「明朝までだぞ。猶予はならぬ！」
「はっ」
隠密は、消えた。

「平賀源内を捕えて、拷問にかければ、鬼堂天馬の行動は、明白となろう」
この言葉は、大道寺左近が自分に云いきかせたものだった。

十四

平賀源内は、その日の朝は、上機嫌であった。
ちょっと強い風を、まともにくらえば、音たてて崩れてしまいそうなおんぼろ家で、元オランダ商館通詞・庄三がつくったまずい芋粥を、文句も云わずに、三杯も胃袋に流し込んでから、
「うむ！　よく、出来た！」
と、かたわらに置いてある玻璃の円筒をとりつけた箱を、持ちあげて、左見右見するのだった。
庄三が、二昼夜一睡もせずに、ついに、今朝がた完全に修復したエレキテエルであった。
源内は、朝食前に、浜辺へ出て、その箱をかかえて海中へもぐり、ハンドルを廻転させてみたのであった。
箱の中には、一滴の海水も入らず、火花が激しく散って、玻璃の円筒から、海底をあかるく照らし出したのである。
「庄三、望み通り、オランダへ密航させてくれるぞ」
「ありがたか」
庄三は、ちょっと照れながら、両手で、蓬髪を、がしがし、ひっかいた。
「こいつのおかげで、脇岬の沖の底にねむっている大判・小判・オランダ金貨を、ひきあげたあかつきには、一千両でも二千両でも、好きなだけ、オランダ行きの路銀にしろ」
「一千両とか二千両とか、わしなんぞに、もったなか。……それにしても、そぎゃん莫大な金が海の底に沈んどるちゅうなんて、作り話じゃなかろか？」
「真実だ！　ちゃんと、鬼堂天馬が、その証拠をつきとめて居るのだ。わがエレキテエルが、その役に立つとは、これぞ、占星術で明白となったおれの今年の幸運だ」
「はあ……？」
庄三に、どうも、実感がわかないのは、むりもなかった。
無欲なこの変り者にとっては、自分とは無縁の夢物語としか、受けとれなかった。
「庄三、もう二夜も一睡もして居らんのだろう。果報は寝て待てだ。一昼夜でも二昼夜でも、ぶっ通し、睡れ。

おれは、これから、脇岬へ行って来る」
　次の間で、庄三の高いびきがひびいて来た時であった。
　玄関に、訪客が立った。
「平賀源内殿は、こちらに逗留しておいでか？」
「誰だ？」
　源内は、玄関へ出て、一瞥して只者ではない、と直感した。
「公儀お目付・大道寺左近の配下でござる」
「何用だ？」
「貴殿のかくれ家をさがすのに、手間どり申した。風頭山の中腹で、窯場をつくって、贋の唐物を焼いて居られるのは、すぐに突きとめ申したが、よもや、こんな古い家を仮住居にされているとは、意外でござった」
「だから、おれに、なんの用件だ、ときいている？」
「長崎奉行所にて、公儀お目付・大道寺左近が、待って居り申す。案内いたす」

十五

「おれが、いやだ、とかぶりを振ったら、どうする？」
「当方が、修練を積んだ隠密であることを、お忘れなく——」
「こういう場合にそなえて、武芸の稽古もしておくのであったな」
「では、案内いたす」
「ふん——。人は刀俎たり、我は魚肉たり、か」
　源内は、自嘲の独語をもらした。
　せっかく、莫大な宝を、手のとどくところに発見しながら、恐るべき邪魔ものが、前面に立ちふさがったのである。
　——公儀目付をむこうにまわしては、三寸の舌を掉かしても、徒労だな。
　いまいましいが、狼の前へ曳かれる羊たらざるを得なかった。
　なにしろ、源内は、剣道場へなど、生れて一度もかよったことはなかったのである。げんに、腰にしている差料は、ほんものは重すぎるので、竹光に代えていた。
　——こういう場合にそなえて、懐中にかくしておけるような軽便な鉄砲でも、発明しておくのであったな。
　源内は、舌打ちした。
　鉄砲という武器が、天文十二年（一五四三年）に、いずこの国のものともわからぬ一艘の船によって、大隅国種子島へもたらされて以来、今日まで、なんの進歩も示

していなかった。
　船頭あがりの、讃岐馬宿の士・久米栄左衛門通賢という天才によって、撃発銃が発明されたのは、平賀源内の没後三十四年——文化十年（一八一三年）である。
　一分間に十発を発射できる元込め雷管銃を、江川太郎左衛門の塾生・松代藩士・片井京助が、発明したのは、さらにそれから四十年後の安政元年。米国水師提督ペルリが来航した年である。
「庄三、いいか、おれの財産は、大切に守って、待っていてくれ」
　源内は、奥から出て来て、不安な表情で仰ぐ庄三に、目顔で、
　——エレキテエルは、かくせ！
と、命じておいて、草履へ足をのせた。
　その時——。
　隠密は、背後に、尋常ならぬ気配を感じて、ぱっと、向きなおった。
　門跡に、一人の小男が、猫背姿を、うっそりと、たたずませていた。
「おっ！」
　源内は、一瞥して、蘇生のよろこびの声を発した。それは松井源水であり、源内は顔見知りであった。
「松井！　これは、公儀お目付・大道寺左近の配下だ。……たのむ！」
「心得申した」
　源水は、すたすたと、隠密へ近づいた。
　隠密は——隠密もまた、その小男が、浅草で、大道芸とはいえ、神技といえる居合の迅業を使っている松井源水と、看てとるや、大きく跳躍して、雑草の茂るにまかせた庭へ、立つとともに、抜刀した。

十六

　松井源水と公儀目付・大道寺左近の放って来た隠密との、不動の対峙は、長い時間が、費された。
　見まもる平賀源内は、照りつける陽ざしの中で、石仏にでもなったように、身じろぎもせず、かまえた白刃を、ほんのわずかさえもうごかそうとせぬ二人に対して、じりじりと焦躁感にかられた。
　——鉄砲があれば、一発で片がつくものを、刀というしろものは、使い手が芸者であればあるほど、こういうあんばいに、いたずらに、時間を食う。
　それが、なんとも、源内には、いらだたしく、やりきれなかった。

こんな決闘は、古いのだ、と思う。
——まるで、二百年前、三百年前と、すこしも変ってはいない斬り合いだ！
源内が、我慢しきれずに、なにか叫ぼうとした——そのせつな。
隠密が、地面を滑走した。
一拍子おくれて、松井源水も、奔り出した。
両者は、すれちがい、位置を入れかわって、ぴたりと、にらみ合った。
幾秒間が、過ぎたろう。
隠密の口のはしから、ぷくっ、と血泡が噴いた。
大きく口を開くとともに、口腔内にたまっていた鮮血が、あごを流れて、胸もとへしたたった。
しかし、なお、隠密は、しばらく、構えを崩さなかった。
白刃を杖にした時には、もう、意識はうすれているようであった。
がくっ、と膝を折って、坐り込むと、徐々に、うなだれた。
俯伏さず、うなだれたまま、事切れたのは、いかにも隠密らしい、凄絶な最期であった。
松井源水は、二の太刀をあびせる必要がないのを、たしかめてから、長剣を腰におさめると、源内に向きなおり、
「お待たせいたした。千々石湾側に、舟を、用意して居ります」
と、告げた。
「よ、よし！」
さすがに、源内も、目にもとまらぬ、ただ一太刀の勝負に、興奮して、胸の動悸を早いものにしていた。
「庄三」
「へ、へい——」
「エレキテエルを、くれ」
「へい！」
庄三が、奥からかかえて来た箱を受けとった源内は、
「これがあれば、海底の宝は、一目で見わけられる！」
と、笑ってみせた。
源水の方は、その奇妙な箱に好奇心をそそられるよりも、第二、第三の敵が、そこいらにひそんでいるのではあるまいか、と神経を八方に配っていた。
どうやら、ここへやって来た隠密は、そこに斃れた一人だけのようであった。
「では、いそぎましょう」

江戸城異変

一

江戸城表御殿と大奥の中間に、中奥がある。
ここが、将軍家の官邸であった。
つまり、表御殿が幕府の政庁であり、大奥が将軍家の私邸であった。
表御殿は当然のことながら、中奥にも、女人は一人も置いてはいなかった。
将軍の起き臥しは、大奥よりも、むしろ中奥の方が多かった。
女人ばかりの大奥は、将軍が豪放の性格、英知の気象の場合、鬱陶しかったのである。
八代将軍吉宗は、徳川幕府中興の英主と仰がれるだけあって、ほとんど中奥ですごした。
九代家重は、病弱で暗愚ゆえに、大奥ぐらしが多かったが、当代家治は、祖父の知能を受け継いでいたし、祖父の将軍ぶりをみならっていたので、一年の大半を、中奥で起居していた。
十代家治は、資質が良く、幼童の頃よりその聡明をうたわれて居り、また少年期を、西丸御殿の大御所吉宗の手許で育てられ、その薫陶を受けていたおかげで、将軍職に就くのに、ふさわしい人物であった。
しかし——。
三代家光・五代綱吉・八代吉宗と、それぞれ施政ぶりはちがっていたが、この三人によって、将軍独裁体制が確立されて、その体制を受け継いだ家治は、逆に、もはや、何もすることがなかった。
家光・綱吉・吉宗の努力は、将軍の権威を絶対不動のものにすると同時に、老中・若年寄・奉行・目付らの封建官僚の地位をゆるぎないものにしたからである。
もはや、将軍が自ら口を出して、政治を行わずとも、これら幕府の高級官僚団が、おのおのの役務を忠実にはたしているおかげで、その運営は、表面上はきわめて、円滑であった。
裏がえしていえば、将軍は棚の上へまつりあげられ、高級官僚同士が、陰に陽に、実権争奪をやっている時代となったのである。
八代吉宗が、宝暦元年（一七五一年）六月二十日に、

大御所として、六十八年の生涯を閉じてから、幕府の政治は、老中・松平右近将監武元によって、行われて来ていた。

松平武元は、上州館林・五万四千石の譜代大名で、若年から吉宗に信頼され、奏者番・寺社奉行・西丸老中と、順風の出世コースをたどり、延享四年（一七四七年）に、本丸老中になっていた。

奇しくも、その年、桜町天皇が、二十八歳の若さで退位され、代って、桃園天皇が、わずか七歳で、即位されていた。

二

今年——明和四年（一七六七年）夏。

老中首座にある松平右近将監は、ようやく、老いて（五十七歳になり）政治の実権をふるうことに、疲れていた。

老中には、他に、

松平右京大夫輝高（上野高崎・八万二千石）
松平周防守康福（三河岡崎・六万石）
阿部伊予守正右（備後福山・十万石）

などがいたが、かれらは、独裁の権力を、一手につかむ野望など、持ってはいなかった。

最大の野心家は、この年、側衆から側用人に昇格した田沼主殿頭意次であった。

将軍家治の信頼は、松平武元から、田沼意次に移ろうとしていた。

意次は、側用人になってからは、早朝より、夜おそくまで、中奥に詰めて、将軍家治と対話する機会を、多くつくり、次第に、施政に関して発言力をつよいものにして来ていた。

意次は、家治に向って、あいまいな、むだな言葉を、ひとつも吐かなかった。

どんな事柄に対しても、明快な意見を述べた。

昨年暮、『柳子新論』という過激な勤王論をふりかざし、公言してはばからなかった市井の反逆者・山縣大弐が、同居させていた食客の藤井右門とともに、ついに、幕吏の手で逮捕されていた。

大弐とその門弟たちを、入獄させてから、すでに、半年以上も経っていた。

中奥で、意次と二人きりでいた家治は、ふと思い出して、

「右近（松平武元）は、山縣大弐と申す浪人を、近く処刑する存念のようだが、そちの意見は、どうか？」

と、問うた。

「わたくしは、ご老中とは、反対の意見を持ちまする。たしかに、山縣大弐の『柳子新論』なる文書は、はなはだ露骨に、公儀の政道ぶりを論難いたして居りますが、すべて事実でありますれば、閣老がたには、これをみとめる寛容があってよろしいか、と存じまする」

「いかなる男であろう、その山縣大弐なる浪人は？」

「わたくしのしらべましたところ、兵学、儒学、神道、歴史、陰陽道、音楽、天文……多方面にわたって、知識が該博でありまする。申さば、鋭利な剃刀でありますれば、これを市井で、おのれ勝手にふりまわされるのは危険と存じますが、ご城内へ入れて、上手に使えば、これほど、役立つ男は居りませぬ。殊に、かれの天文学は、『天経発蒙』と『星経淘汰』の二著があり、これを読むと、みごとに、西洋の天文学を、まなびとって居りまする」

「しかし、性情が、狂暴に近くては、使い難かろう」

家治は、去年の春、品川御殿山の花見をした御台所の倫子から、市井一介の浪人でありながら、衆人の前で、勤王思想をうそぶきたてた山縣大弐のことを、きかされていたのである。

「仰せの通り、たしかに、ふれれば切れる鋭利な剃刀でありまする。ただ、使いかた如何かと存じます」

三

家治は、意次の意見にうなずいたが、自分の意見は、口にしなかった。

その代りに、

「そちは、禁門影人なる青年と懇意にいたしているそうなが——？」

と、話題を転じた。

「はい」

「禁門影人は、先の帝（みかど）の異母兄にあたる由。そちも、当人の口から、きいて居るか！」

「はい。実母が身分いやしいため、皇子としては認知されず、生誕とともに、閑院宮家へ猶子とされ、有栖川家にて、十四歳まで育てれたとか——」

「自分は、御台（みだい）にきいたが、禁門影人とは、五十宮（いそのみや）であった頃、雙六（すごろく）あそびや花合せなどして、遊んだと申していた」

「左様の由にございます。ご当人も、三歳年上の五十宮様が、十一歳の時、江戸へ下向されて、その別離の悲しさは、いまも、胸の中にのこっている、と申されて居りました」

「ふむ」
家治は、しばらく沈黙を置いてから、
「会ってみたいものだな。禁門影人に」
と、つぶやくように云った。
「御台様の義理の弟君閑院和仁というご資格ならば、この意次、堂々とご城内へ、ご案内できるのでございますが……」
「当人の意志次第だな」
「ところが、ご当人は、あくまで、ただの素浪人禁門影人として生きてゆく、と申されて居りまする」
「強情のようだな」
家治は、微笑した。
凡庸な青年では、興味をそそられなかった。
どこやら非凡なにおいがする——と、家治の直感がはたらいていた。
「ぜひ、会ってみたい。意次——、そのように、とりはからってくれ」
「はい」
「自分が、城外へ出た折でもよいが、なろうことなら、ここへ連れて来てもらいたい」
「うけたまわりました」
意次は、頭を下げた。

自邸へ下って来た意次は、いつもの通り、自分でさっさと裃を取り、袴を脱いだ。
嫡子意知だけが、ひかえているのも、以前と変りはなかった。
意次は、側用人に昇格するとともに、五千石を加増され、遠州相良の城主となっていたが、その私生活ぶりは、宝暦八年（一七五八年）に、はじめて一万石の大名となった頃と、すこしも変化はなかった。
「禁門影人！　あの青年だけは、肚の中で、何を考えて居るのか、このわしにも、読みとれぬ。……もしかすると、徳川の天下をくつがえす大野望を、抱いて居るやも知れぬ。わしを味方にして、日本丸十艘をつくり、大がかりな抜荷をやろうといたして居るが、幾百万両か、莫大な金銀をつかんだあかつき、もしかすると、われわれの想像もしなかった、おどろくべき倒幕計画を実行するのではあるまいか？　昨日の味方であったわしを、今日は、平然として敵にまわす——そういう青年かも知れぬ」

四

禁門影人は、紺屋町三丁目新道にある『長唄お習いどころ』の居候になって、江戸ぐらしをつづけていた。

他人目には、まぎれもなく、色男、金と力はなかりける典型と、映った。
歌吉という小股の切れあがった、生れてまだ府内から一歩も外へ出たことのない江戸女の情夫然として、無為なその日その日を、のんびりとすごしているかに、みえた。
時折り、ふらりと他出して、（それも、ほとんどの場合、夜が更けてから）そのまま、三日も五日も、行方知れずになって、歌吉を、やきもきさせた。
——もう、これっきり、もどって来ないんじゃないかしら？
その不安は、歌吉が、いつの間にやら、影人に首ったけになっている証拠であった。
女は、環境の変化に、すばやく順応する天性を所有している。
わが家に、はじめて男を入れて、共にくらしはじめると、歌吉は、もういまでは、影人のいなくなった、一人ぼっちの生活は、想像しただけで、さびしくて、堪えられなかった。
もとは深川芸妓であった歌吉は、当然、幾人かの男に、肌をまかせていた。しかし、自らすすんで、燃えたことは、一度もなかった。
もののはずみで、刺客に尾けられている影人を、かくまうはめになって、ふっと、じぶんからすすんで、肌を与えた瞬間、生れてはじめて、身も心も物狂おしく、反応したのであった。
じぶんでじぶんがふしぎなほど、女であることの悦びに、官能が目覚めたのである。
今日も——。
何処へ行っていたのやら、影人は、五日ぶりに、ふらりともどって来て、歌吉を、ほっとさせ、いそいそと夕餉の仕度をさせていた。
影人は、箸を手にした時、唐紙のむこうに、人の気配を察知した。
「無香か？」
そう問うた。
「はい」
唐紙の蔭から、すっとすべり出て、両手をつかえる町娘を、歌吉は、あっけにとられて、眺めやった。
格子戸が開く音も、きいてはいなかった。
日本橋一丁目の近江屋から、かねて注文していた新しい蚊帳が、手代によってとどけられたのは、ほんの数分前であり、歌吉が受けとりに出た時、そこに、人影など

はなかったのである。
「冗談じゃないよ！　あたしゃ、きもがつぶれちまったじゃないか！」
「無断で、入りましたのを、お詫びいたします。お許し下さいまし」
　無香は、ひくく、頭を下げた。
「この娘は、伊豆忍者『捨て草』の最後の生き残りだ。わたしが、使って、九州まで行かせていた」
　影人が、説明した。
「お手つき忍びでござんすかえ」
　歌吉は、なにげなく云いながらも、目の色に嫉妬を示していた。
「明日はわからぬが、今日までは、まだ、生娘だ」
　影人は、云った。

五

　無香は、影人に報告しようとして、歌吉の存在を気にする表情になった。
「この女には、きかれても別状ない」
　影人に、云われて、無香は、はい、とうなずき、
「日本丸十艘は、五日前の大時化のさなか、天草灘で、二隻のオランダ軍艦に襲われて、八艘が沈み、船長が指揮する主船は、野母半島の脇岬沖で、座礁し、わずかに、一艘だけが、難をのがれました」
　無香は、影人の命令で、日本丸船団と平行して陸路を趨り、長崎港にぶじに行き着くかどうか、見とどけようとしたのであった。
　暴風雨のあの日、無香は、脇岬の沖にある樺島の行者山の頂上にいたのである。
　日本丸船団が、潰滅するありさまを、見とどけた無香は、文字通り疾風の速さで、江戸へ帰って来たのであった。
「伊東の浜辺で、出帆を見送った折、ふっと、不吉な予感がしたが、あの予感があたったとは――」
　さすがの禁門影人も、下唇を、歯が食い込むほど、噛んだ。
　とっさに、どうすればよいか――頭脳の働きが停止した影人であった。
「ちょいと、若様――、味噌汁が冷えちまいますよ」
　歌吉が、わざと癇症っぽく、云った。
「腹の虫が承知しないのなら、餌をくれてから、とっくりと、思案なすったらいいじゃありませんか」
「それもそうだな。腹の虫をしずめるには、酒がいいよ

うだ」
「あいな」
　歌吉は、ぽんと胸を叩いて、勝手の土間に降りると、燗徳利に、酒を注ぎながら、小声で、
「とんだ疫病神が、舞い込んで来やがったよ」
と、もらした。
　何も知らない歌吉にすれば、町娘に扮した女忍者は、禁門影人を、この家から連れ出すためにやって来た小憎らしい敵に思われたのである。
「天草灘って、どこなんだろ？　伊豆のむこうかしらね」
　地理を全く知らぬ歌吉にとって、見当もつかなかった。
　影人の方は、無香に、
「ご苦労であった。しばらく、休息して、待っていてもらおう」
「はい」
　歌吉が、酒をはこんで来た時には、無香の姿は、消えていた。
「おや?!　いなくなっちまった」
「…………」
　影人は、盃を口へはこびながら、遠いまなざしを、宙へ送っていたが、
「そうだ！　鬼堂天馬が、長崎へ行っているはずだ。あの男なら、この襲撃を、すぐ知るであろうし、そのまま、ひきさがりはすまい。あの男の働きに、期待をかけることにしよう」
「若様は、ずうっと、このまま、江戸にいて下さるんですね？」
　歌吉が、顔をのぞき込むようにして、視線をすがらせた。

六

　影人は、燗徳利を一本空けると、歌吉が、もう一本、あたためようとするのをことわってから、
「そなたに、云っておくことがある」
と、きり出した。
「あらたまって、なんですねえ」
　歌吉は、江戸女のカンの鋭さで、影人の云おうとすることが、さきに判ったおびえを、表情にみせた。
「申しきかせるべきことは、きかせておかねばならぬ」
「はい、うかがいますとも――」
「わたしには、京に、女がいる。つかさといい、美し

く、優しく、わたしに惚れている」
「若様に、そういうしとが一人も居なさらなかったら、その方が、ふしぎでござんすよ」
　こたえながら、歌吉は、胸が、裂けそうに音たてて鳴るのを、必死にこらえた。
「つかさは、徳大寺前大納言公城の次女だ。わたしが、父公城より、申し受けた時、つかさは、処女であった」
「…………」
「わたしは、心中に期するところあって、生涯妻を持たぬ、とおのれ自身に誓っている。しかし、つかさは、おそらく、いつまでも、わたしの帰りを待っているであろう」
「若様って御人は、女にとって、罪つくりな殿御でござんすよ。……若様に、いちど、惚れちまったら、もう、どんな男が、目の前に現れても、みんな、でくの坊に、見えちまう」
「べつに放蕩無頼ではないゆえ、女の数は、知らぬが……」
「いいえ、さっきの忍びの娘さんも、ちゃあんと、若様に、首ったけ、若様のためなら、いのちもいらない、と一途ひとすじに想っています。あたしだって、これでも、女のはしくれだから、ようく、その気持が汲みとれますのさ」
「その女心を、利用するわたしは、まことの悪党かも知れぬ」
　影人は、微笑した。
「木仏金仏のような朴念仁よりも、悪党の方に、女は、魅せられちまうんです。因果ですねえ」
「そこまで話が判っていれば、云いやすい。わたしは、たぶん、近い日に、この家から、姿を消すであろう」
「…………」
　覚悟をしていたとはいえ、歌吉は、息がつまった。
「身勝手な申し条だが、諒承してもらいたい」
「あいな！　合点承知ですよ。若様がいなくなっちまっても、あたしには、長唄という道連れが居りますから、どうぞ、ご安心下さいましな」
「そう云ってくれると、たとい、言葉の上だけであっても、わたしの気持は軽くなる」
「もし、若様が、黙って、いなくなっちまったら、あたしは、気が狂っていたかも知れませんよ」
　歌吉は、笑顔をつくってみせた。
　格子戸から、一通の封書が、投げ込まれたのは、歌吉が、影人の下で、思いきり身もだえて、ぐったりとなった直後であった。

七

　それから半刻ばかり後――。
　禁門影人は、田沼主殿頭意次邸の書院に、入った。
　歌吉の家へ投げ込まれた封書は、意次からのものだったのである。
　影人は、夜盗のごとく、高塀を乗り越えて、邸内へ忍び入ったのであった。
　書院には、意次が、すでに、さきに坐って、待っていた。
「お呼びたていたして、お許し下されい」
　意次が、頭を下げると、
「素浪人として、遇されてかまわぬ。いや、その方が、こちらは、気楽だ」
　影人は、云った。
「その、素浪人として押し通そうとされているお手前を、上様が、お招きなされて居るが、如何でござろうかな？」
　意次は、影人を正視した。
「将軍家は、すでに、お主の意のままにあやつることのできる木偶になりはてて居るのであろう。わたしが、対面しても、こちらには、なんの利にもなるまい」
「いや、利はござるな。御台所の義理の弟君としての資格にて、上様を、説得して下さる力をお持ちだ。お手前は」
「お主をして、一日も早く、幕閣中央の座に就けるように、すすめる役割をつとめて欲しい、というのか」
「左様――。この意次、すでに、年齢が五十に、手がとどき申す。幕政を左右する権勢を得たとしても、せいぜい、あと十年でござろう。急がねばなり申さぬ」
「それは、こちらも、希望しているところだ。側用人となったお主は、明日にも老中格になるのではないのか？」
「ところが、ひそかにさぐったところでは、閣老の中で、この意次を失脚させようと躍起になっている人物が、一人、居り申す」
「…………」
「若年寄・水野壱岐守忠見。この人物、老中・若年寄の中で、頭抜けた切れ者であり、なお、その右腕として、大道寺左近という目付が居り申す。この目付が、油断のならぬ曲者でござるわ」
　それをきいて、禁門影人は、大きくうなずいた。
「わたしのつくった日本丸十艘が、五日前、天草灘で、二隻のオランダ軍艦によって、八艘撃沈、主船座礁、かろうじて一艘のみが遁走した。おそらく、水野壱岐守――大道寺左近――その配下の隠密たちの暗躍による奇

襲であった、と合点される」
「いやはや！　お手前のせっかくの努力も、水の泡となり申したか」
　意次は、首を振った。
「沈められれば、また、造ればよい。襲って来たならば、襲いかえせばよい」
　影人は、不敵な言葉を口にしておいて、
「どうせ、将軍家に対面するのであれば、堂々と、先帝の兄として、大手門から、入城いたそうか」
　いま、影人は、その肚をきめた。
「供ぞろいの儀、この意次におまかせ頂きたい」

八

　先帝・桃園天皇の異母兄・閑院宮和仁親王ご参向。
　側用人田沼意次の口から、老中・若年寄・大目付の居ならぶ用部屋に於て、このことが、披露されたのは、その翌日であった。
　老中首座の松平右近将監武元は、夏風邪がひどく姿をみせていなかったが、他の閣老は、のこらず顔をそろえていた。
　この前代未聞の報せに、一同は、一瞬、唖然として沈黙した。
　江戸城を、直宮や親王が訪れて来た例は、いまだかつて、なかった。
　上野東叡山の輪王寺宮となった親王が、登城して来て、将軍に挨拶することはあるが、これは、天台座主としての身分地位による特例であった。
「先の帝に、おん兄の宮がおわしたとは、きこえ申さぬ」
　沈黙をやぶって、若年寄・水野壱岐守が、トゲのある語気で、云った。
「その有無については、上様が、御台様におたしかめあそばされて居ります。去年の春、御殿山の花見にて、御台様が、再会あそばされて居ります」
　そう告げたのは、大目付・大河内政之進であった。
　この報告の重さには、閣老たちも、さからえなかった。
「では、そのお方を、閑院宮とみとめるといたそう。しかしながら、浪人となって、ただ一人にて、出府されたものを、親王として殿中にお迎えいたすのは、如何なものであろう」
　松平右京大夫輝高が、小首をかしげた。
「前例なき親王ご参向を、お迎えする儀式は、致し様がない」

　水野壱岐守が、突っぱなすように、云った。
　すると、意次は、予想した当然の拒否に対する応答をした。
「上様は、前例がないゆえ、かえって、万事簡略に、気軽く、対面しよう、と仰せられて居ります」
「では、勅使を迎えるよりも、下のあつかいをしてもかまわぬ、との仰せか？」
　水野壱岐守が、意次を、睨みつけた。
「上様には、ご異存なき模様でござる。……ただ、上様は、この殿中で、一同が窮屈の思いをいたすのなら御浜御殿で、対面いたしてもよい、と仰せられて居ります」
　あくまで、これは、将軍家治の意志である旨を主張してみせる意次に、閣老たちは、拒否する理由が、見つからなかった。
「御浜御殿にて、上様と御台様、おそろいにて、和仁親王と対面あそばすのが、妥当なところではござるまいか」
　松平周防守康福が、折衷案を出した。
「あいや、しばらく、お待ち下され」
　水野壱岐守が、あわてて、とどめて、目下、江戸に帰って来ている京都所司代・阿部豊後守正允を呼んで、まことに、先帝には異母兄があったかどうか、しかと、たしかめる必要がある、と提言した。
　閣老たちは「もっともだ」とうなずいた。
　帝鑑の間に、阿部豊後守正允は、いた。
　茶坊主から、伝えられた豊後守は、用部屋へやって来た。

九

　先帝に異母兄がいたかどうか、と尋ねられた京都所司代・阿部豊後守は、微笑して
「禁門影人と仮名を使っておいでの青年のことでござるか。……身共に、従三位下権中納言、などと胸を張られたため、ものはためしに、町奉行所の揚り屋へ入れてみたのでござる。そこへ、徳大寺前大納言公城卿が、ご来訪に相成り、件の青年を一瞥するや、仰天して、若宮ともあろうおかたが、なんという不始末をあそばされましたか、と申されたことでござる。後日、ひそかに、しらべましたところ、まぎれもなく、先の帝の異腹の兄君でござった。閑院宮家の猶子となられたので、正しくは、閑院和仁、というのが、本名でござる」
　と、述べた。
　田沼意次の野望を打ちくだくべく、懸命になっている若年寄・水野壱岐守としては、京都所司代を用部屋に呼

んだのは、かえって藪蛇となった。
閣議によって、しかるべき佳日をえらび、御浜御殿にて、将軍家・御台所おそろいで、閑院宮和仁親王とご対面、と決定した。
「どういうことになるのかな」
「面白い事態を生みそうだな」
顔を見合せて、微笑したのは、下の諏訪で会った禁門影人の秀でた白面を思い浮かべた阿部正允と大河内政之進であった。

その宵——。
田沼意次は、自邸に泊めている禁門影人と、書院で対座した。
閣議の結果を告げた意次は、
「さて——、お手前は、もう一度、千石船を造られるか？」
と、問うた。
「いや、長崎にオランダ軍艦が入って来るかぎり、造るだけ徒労となろう。別に、海外との交易を計ることにいたそう」
影人は、こたえた。
「老婆心ながら、申しあげておくが、かまえて、身辺を警戒されるがよい。お手前は、危険な綱渡りをされて居る。水野壱岐守は、御浜御殿に於て、上様とご対面なさる前に、かならず、暗殺という非常手段に出て来るもの、と推測いたす」
「すでに、わたしは、幾度か、刺客に襲われた経験を持っている。……危険な綱渡りだからこそ、この若い血汐が、燃える」
影人は、笑ってみせた。
「当方にて、隠密どもに護衛させ申そう」
「懸念ご無用にねがいたい。わたしは、常に、孤独を好んでいる。それがゆえに、ただの素浪人としてすごしている」
「しかし、お手前の身に、万が一の不幸が起ったならば、この意次、御台様に申しわけが立ち申さぬ」
意次が云った——その時、影人は、右手を懐中に入れた。
次の瞬間、意次の脇差は、生きもののように、その腰から抜けて、二畳をへだてた影人の手もとに移っていた。
影人は、細紐を投げて、奪いとってみせたのである。
「わたしは、これくらいの修業は、いたしている。そして、自身、かなり運の強い人間だ、とも思っている」

亡霊

一

樺島という島は、太古はおそらく、野母半島と地つづきであったに相違ない。
脇岬とは、一衣帯水であった。
明和のこの当時は、脇岬に面する西側の深い入江に、十数軒の漁師の家があっただけである。
日本丸主船が、座礁した上に、遠見山から大砲を撃ちかけられて、ついに横転し、陽光に胴体をさらしてしまってから、船頭長・江戸三郎次と生きのこった水主六人、それに鬼堂天馬、高山彦九郎、上田秋成を加えた計九人は、船をすてて、樺島に移っていた。
漁師村をさけて、天草灘を見はるかす東端の行者山を、えらんだ。
行者山は、その名の通り、むかしは、修験道（山伏）が、修行した山で、牡蠣殻でふいた屋根の小屋が、幾棟か、建ちのこっていた。
充分に、住むに足りる小屋であった。
三郎次と水主たちは、一軒に同宿した。三郎次はじめ大半が、負傷して居り、たがいに手当をしあって、治癒をいそいでいた。
天馬と彦九郎は、もし敵襲があると、闘うことのできるのは、自分たち二人だけであったので、小屋には寝ずに、昼夜、交替で、四方の見張りをしていた。
上田秋成だけが、ただ一人、一軒の小屋を占めていた。
さむらいが、刀を腰からはなさぬように、秋成は、杉原紙数帖と矢立を、しかと持って、やって来て居り、一日中、筆を手にして、白い杉原紙を、にらんでいた。
かつて、禁門影人が入れられた京都町奉行所の揚り屋では、秋成は、書きかけた紙を、まるめたり、ひき裂いたりして、足の踏み場もないくらい、無駄な反故をつくったが、この樺島の山伏小屋では、ただ、白紙をにらみつづけているばかりで、一文字も書いてはいなかった。
「お主——おい」
見張りを天馬と交替した彦九郎が、朝陽を背にして、戸口に立った。
「ずうっと、紙をにらみつけている様子だが、いった

い、何を書こうとしているのだ？」
「死霊の物語だ」
秋成は、こたえた。
「死霊！」
「そうだ、死霊だ。わしは、大時化と砲撃をくらっている最中に、さか巻く波浪の上に現れては消え、消えては現れる死霊を視たのだ」
「恐怖で、きもが縮んで居れば、幻覚も起るだろう」
「幻覚ではない。わしは、恐怖など、おぼえはせなんだ。いや、むしろ、なにやら、ふしぎな酔い心地さえした。……そうして、わしは、はっきりと、死霊を視たのだ。それも、一人や二人じゃ、ありゃせん。百人、いやもっと大勢やったな」
「死霊も生霊も、そんなものが、この世に存在するなんぞ、拙者は、断じて否定するぞ！」
「否定するのは、そっちの勝手じゃ。わしは、しかと、この目で視たのや。死霊は、まちがいなく、この世にいる！」

二

「ふん！」
彦九郎は、いまいましく、鼻を鳴らした。
「死霊の物語を書いて、それが、いったい、天下になんの益になる！　男子、筆を把るならば、よろしく、腐敗堕落した当代世相を慷慨し、これもゆがんだ政道のゆえである、と弾劾すべきではないか。たとえば、山縣大弐先生の『柳子新論』のごとく、正々堂々たる大義名分の提唱をすることこそ、文章を書く者の気概ではないか」
「わしは、学者ではない！」
秋成は、吐いてすてるように、こたえた。
すでに――。
上田秋成は、古代の研究の第一人者本居宣長の著書を読んで、くそみそにやっつけていた。
秋成には、それだけの学識があったのである。
本居宣長の『手枕』や『古事記伝』を軽蔑していた。
本居宣長という国学者は、賀茂真淵に師事して、古道というものを第一義とし、太古のシンプルな時代をひたすらあこがれ、後世になって押し入って来た異邦の文化をことごとくのろい、大和魂の昂揚に、全力をあげて尽していたのである。
上田秋成には、この古くさい臭気が、堪えられなかったのだ。
しかし、秋成は、高山彦九郎ごとき若者に、学識をひけらかしてもはじまらないので、
「わしは学者ではない」とこたえたきり、もう口をひらこうとしなかった。
午になって、彦九郎が、ふたたび、小屋をのぞいてみると、秋成の姿はなかった。
「あいつ、われわれに協力して、見張りの役ぐらい、つとめてくれてもよさそうなものだ。浜辺にでも降りて、もう一度、死霊を視ようというこんたんか」
彦九郎が、ぶつぶつ云っている頃、秋成は、行者山から、尾根づたいに、西へ向って、たどっていた。
不意に――、
「おい、どこへ行く？」
とがめて、さっと前をふさいだのは、鬼堂天馬であった。
「わしが、あそこにいても、なんの役にも立たん。大坂へもどらせてもらう」
「お主は、怪我人の手当の手伝いさえ、ただの一度も、やって居らぬぞ」
「わしは、死霊の物語を書くことだけで、あたまが、一杯なのだ」
「死霊の物語？」
「そうや。わしは、これから、九州から中国へ渡って、西海道を旅しながら、さまざまの死霊に出会うつもりでいる。街道で、山野で、海辺で、神社や寺院の境内で……いや、旅籠の部屋で、わしの面前に、遠いむかし横死した貴人や、あわれな女子や、はては蛇や鼠のたぐいまでが、亡霊となって、現れるやろう」
――文人とは、黄金の宝などに目もくれずに、このような妄想にとりつかれた奇矯を平然と為さねば、文章が書けぬものか？
いささかあきれながら、天馬は、
「お主が、そうしたいのなら、止めはせぬ」
と、道をあけてやった。

三

同じ日の黄昏どき――。
松井源水は、エレキテエルをかかえた平賀源内を、舳先に乗せた小舟を漕いで、千々石湾を東へ――脇岬へ向って、進んでいた。
源水は、オランダ船や唐船が碇泊している長崎港の入江から、出て行くのは、敵がたに、追跡して来い、と招く結果になるのは、目に見えていたので、烽火山の麓から日見峠をたどって、島原の雲仙嶽を彼方にのぞむ太田

尾という浜辺へ抜け出たのであった。
そこから、海沿いに東へ趨ると、枇杷が崎に至る。
枇杷が崎の小さな入江・飯香ノ浦に、源水は、小舟を用意していた。
太陽が、日見峠のむこうへ沈みかかるのを待って、その小舟を漕ぎ出したのであった。
つかの間の残照に、凪いだ海面が、さらに深い翡翠色をたたえていたが、残照が消えるとともに、灰色に変じた。
月が中天に昇って来ると、海は、無気味な怪物のように、その月光を受けて、大きくうごきはじめたようであった。
風はなかった。
潮の流れが変って来たのかも知れなかった。
いずれにしても、源水も源内も、海に関する知識は、乏しかった。
「海というしろものは、なにやら底に、魔性の化身がひそんでいるようで、好きになれんな」
源内は、つぶやいてから、こころみに、エレキテエル箱のハンドルをまわして、海面を、円筒の玻璃窓の火花で、照らしてみた。
針魚の群が、非常な速さで、なめらかな海面すれすれに、走り過ぎるのが、見わけられた。
「その光は、いかん！　消されい！」
源水が、あわてて、叫んだ。
「ひどく用心深いな」
「相手は、公儀お目付の放っている隠密衆だ。どこで、目を光らせているかも知れぬ」
脇岬と遠見山に於ける凄絶な戦いのありさまを、源水は、源内に、まだ語ってきかせていなかった。
実際に目撃しなければ、その惨たる血闘の光景は、判るものではなかった。
源水は、源内の問いにこたえて、
「鬼堂天馬、高山彦九郎、上田秋成、それにこの源水と、四人を加えて、生存者はわずか十人」
と、それだけしかこたえていなかった。
「源水——」
「うむ？」
「いずれ、また、敵は——大道寺左近というお目付は、新手を、脇岬へ、送り込んで来るのだろう？」
「おそらく、もう一度、たたかいはさけられまい」
「その時は、どうなる？」
「わからぬ。こちらの戦闘力は、天馬・彦九郎・身共の三人だけだ。船頭も水主も、手負うていて、得物を使えぬ」

「文字通り死地に追い込まれているのではないか」
「そうだ。どう迎え撃つか——その手段は、天馬にまかせるよりほかはない」

四

源内は、しばらく、押し黙って、昏い海面へ、目を落していたが、
「むざむざ、全滅するまで、腕をこまねていることはない」
と、つぶやいた。
「われわれ三人だけでは、全滅してしまうと予測するのか？」
「当然の結果だろう。刀なんぞ、いくらふりまわしても、敵の頭数が多ければ、一人残らず斬り殺すのは不可能ではないか。一人が五人斬ったとして、十五人を斃し、こちら三人も血みどろになって、討死してしまう。つまり、敵が二十人いたならば、のこり五人で、全滅させられるという計算になるではないか」
「二十人が襲って来たら、一人が七人、斬ればよかろう」
「三十人ならどうする？　一人で、十人も、確実に、斬れるか？　敵はただのさむらいではないぞ。業をきたえあげた公儀隠密衆なのだぜ」
「…………」
「なんとかしなければ、いかんな。なんとか、敵の意表を衝く戦法を——」
源内が云った——その時。
「なんとかしなければならなくなったのは、いまだ」
「なに?!」
「むこうの大岩の蔭から、一艘、出て来た。おそらく、敵だ」
大道寺左近は、自分の放った隠密が、還って来ないので、次の隠密を、源内のかくれ家である庄三の屋敷へ、おもむかせたに相違ない。
庄三を捕えて、白状させるまでには、さして時間を費さなかったであろう。
大道寺左近は、追手の群を、野母半島に散らばせて来た。
そのうちの幾人かが、この小舟を発見したのだ。
「まずかったな、エレキテエルで、海を照らしたのは——」
「まずかった」

「どうする？」
「たたかうまでだ」
源水は、自嘲するような声音で、こたえた。
「あいつら、鉄砲を持っているのではないか？」
「オランダ銃をな」
「それじゃ、敵う道理がない」
「鉄砲玉というやつは、雨あられとあびせなければ、当るものではないことを、この半島の遠見山でたたかってみて、知らされた。さして、おそろしゅうはない」
「しかし、ここは、海上だぞ。距離が迫れば、われわれは、恰好の標的ではないか」
さすがに、源内は、背すじに戦慄が走るのをおぼえた。
「源内殿、お主は、泳げるだろう」
なにを考えたか、源水が、問うた。
「うむ、あまり水練はやっては居らぬが、泳げることは、泳げる」
源内は、こたえた。

五

源内・源水の小舟へ向って、まっすぐに進んで来た二梃艪の舟には、四人の隠密が、乗っていた。
そのうちの二人が、オランダ銃をつかんでいた。
距離は、みるみる、縮まった。
源内・源水の小舟は、いったん、烏帽子状の大岩の蔭にかくれた。
小舟が、その大岩の蔭から現れたならば、こちらの舟との距離は、数米の近くになる。
二人の隠密は、オランダ銃をかまえた。舟は、停止した。
その位置で待っていれば、小舟が、進んで来るにせよ、退るにせよ、月光に、そのすがたをさらすのを、さけられないのであった。
潮の流れもまた、止まったようであった。
海面に映る月光が、宝玉をばらまいたように、美しくひろがっていた。夜が、明るさを増したのである。
すうっ、と小舟が、大岩の蔭から、現れた。
しかし、銃撃は、あびせられなかった。
小舟から、人影は失せていたからである。
「あいつら、舟をすてたな！」
「浜辺へ、泳いだぞ！」
当然、そう受けとれた。
二梃艪が、せわしく、音たてた。
その瞬間であった。

大岩の頂上から、突然、火花が散り、橙色の光線が隠密舟へ投げかけられた。
四人の視線が、それを、まぶしく仰いだ——と同時に。
小舟に伏せていた黒影が、鳥の迅さで、飛び立って、隠密舟へ、突入した。
隠密たちの虚を衝く作戦は、みじんの狂いもなく、成功した。
松井源水の抜きつけの白刃は、まず、オランダ銃を持った二人を、一瞬裡に、斬った。
その血飛沫の消えぬうちに、また一人が、袈裟がけに、割りつけられて、海へ落ちた。
「くそ！」
計られて、惨敗した無念を、呻きにした最後の一人が、大上段にふりかぶった。
この隠密は、尋常一様の手練者ではなかった。
刃尖と剣先が、ふれ合わんばかりに、相青眼で、にらみ合った源水と隠密は、それなり、動かず、舟もまた、その対峙のために、不動でいる意志を示しているようであった。
大岩の頂きに腹ばいになった源内は、敵の視力をくらますべく、エレキテエルの玻璃窓からの光線を、すこしずつ、移動させていた。（わが国に、はじめて二千燭光のアーク燈が、アメリカ人技師ポプトルによってもたらされたのは、明治十五年であるが、それより百十数年前に、庄三という変り者が、竹を焼いた炭素と石油で、電燈を発明していたのである）
その光線が、ぴたりと、敵の顔へ当った——せつな、源水が、五体を躍らせた。
最後の敵もまた、海中に沈んだ。
「やったぞ！」
源内が、会心の叫びをあげた。

六

やがて、小舟は、弁天山・祇園山が、くろぐろと、夜空を截りぬいている脇岬を、南に臨む沖を、進んで来た。
「あれだな、座礁した日本丸主船は——」
舳先にうずくまっていた源内が、指さした。
月が中天になければ、それは、小さな島に見えたであろう。
「オランダ軍艦の大砲の威力を、存分に思い知らされた」
「生き残った連中は、あの船内で、すごしているの

か?」
「いや、身共が長崎へ、お主を迎えに行く際、鬼堂天馬は、船をすてて、樺島の行者山を、拠点にすると云っていた」
「お主と天馬と高山彦九郎の三人では、いまさきのような襲撃をくらっては、とうてい防ぎきれまい。諸葛亮孔明の神算鬼謀は、ないものかな?」
「身共のような居合抜きと独楽まわししか、芸のない者は、軍師の命令にしたがって、働くだけだ」
「この平賀源内も、軍略兵法だけは、学ばなかった」
「鬼堂天馬の策略に、たよるよりほかはあるまい」
「天馬は、刀や鉄砲のほかに、新しい武器を持って居らぬのか?」
「そうか。火薬を使えば、防げるな。……日本丸は、火薬を積んではいなかったか?」
「さあ、どうかな。鉄砲を、用意していたところをみると、火薬も持ち込んでいたであろうな」
「一貫目の榴弾で、敵に大きな打撃を与えた。まだ、二個や三個は、持っている、と思うが……」
「火薬の知識なら、おれにはあるぞ。このエレキテエルを利用して、水雷、地雷を爆発させることができる」
源内の脳裡で、その凄じい爆発光景が、想像された。

本草学にくわしい源内は、石油というものの応用方法を知っていたのである。
小舟は、なめらかな海面をすべって、樺島の西側の海岸線沿いに、まわって行った。
「やるべきことは、山ほどあるのに、人生五十年は、短かすぎる」
源内が、唐突に、感慨をもらした。
「もし、かりに、あそこの海底に、百万両の金子が、ねむっていたとして、それを手中にできたならば、お主は、何をする?」
源水は、問うてみた。
「そうさな。……禁門影人という高貴の青年は、それを世直しの軍資金にするだろうが、このおれなら……、オランダ軍艦の三倍もある巨艦を造り、百万両をそっくり積み込んで、はるか地球の裏側にあるヨーロッパへ行く」
「…………」
「長崎出島のオランダ・カピタンにきいたヨーロッパの現状は、文明文化の発達は、わが日本と数十年の差があるそうな。殊に、音曲などは、われわれの想像もできぬ、妙なる音色を出す楽器が、ごまんとあるそうな」
源内の空想力は、すぐに、方向を転じて、飛躍してい

た。
……小舟は、とある入江の浅瀬に、音もなく、すべって、着いた。

七

上田秋成の方は、樺島の漁師に渡し賃をくれて、野母崎の漁師村へ、身をはこんでもらい、海沿いの道を、長崎の方角へ向って、のそのそと歩いていた。
野母崎には、漁師以外に、他の職で生計をたてている者はなかったので、坊主あたまで、よれよれの帷子を尻端折りしている他国者の姿は、遠くからでも目立った。
三人の公儀隠密に、行手をふさがれたのは、漁師村を抜けて、ものの一里もたどらぬうちであった。
自我を曲げぬ野趣をむき出した醜い面貌は、充分に、隠密たちの不審をまねいた。
腰に矢立しかさして居らず、数帖の杉原紙で懐中をふくらませている風体が、かえって、
――こいつ、忍びの者ではないのか?
という疑惑をおぼえさせたのである。
「お主、どこから来た?」
「海から、はいあがって来た」
そうこたえて、秋成は、よごれた布で、顔や頸すじを拭いた。
「お主は、日本丸に乗っていた一人であろう!」
「そうや。ひどい目に遭うた」
「伊豆あたりの忍びか?」
「忍び?」
秋成は、相手がたを視かえして、
「あんたらは、日本丸へ大砲を撃ちかけた公儀隠密衆やろ。このわしが、どんな男か、看てとる目がないのか?」
「名のれ。素姓を申せ」
「浪華の戯作者――上田秋成」
「上田秋成?」
「生れて、父親を知らず、四歳にして母親を喪い、堂嶋永来町の紙油商・嶋屋なる上田氏に養われ、五歳にして、疱瘡に罹り、かくのごとく、世にもみにくき面相と相成りしも、幸か不幸か、我に、いささか文を読み書く才あり。十歳にして、文徴明の千字文をひらいて、くりかえし読むこと三千回。十五歳にして万葉をよみ、漢詩をつくり、二十歳にして俳諧の道に入りて、無腸と号し、松尾芭蕉の句のまやかしなるを知る」
「判った。上田秋成という名は、きいて居る」

一人が、云った。
「その戯作者が、なにゆえに、日本丸に乗った」
「好奇心が旺盛でなければ、おこがましゅう人に読ませる文章など、綴ることはできぬ」
「貴様が、すすんで便乗したはずはあるまい」
「もとよりのこと。禁門影人という、なにやら、高貴の身分をかくした青年に、すすめられて、乗った」
「ちょっと、待て。おのれが、まことの戯作者上田秋成かどうか、あやしいぞ。自作の俳句を二三云ってみろ」
別の一人が、もとめた。
秋成は、打てばひびくように、大声で、

「さよちどり加茂川越ゆる貸蒲団
あなかまと青梅盗む衣の音
梶の葉に硯はづかし墨の糞
月の秋や二百十日のはつかのと」

と、自作をならべてみせた。

八

「よし！　貴様を上田秋成とみとめてくれよう。しかし、どうして、ただ一人で、この道をひろっている？」
「われ一人だけ、生き残ったのでな」
秋成は、こたえた。
「一人だけ生き残ったと?!　いつわりを申すな。十人や十五人は、生き残って、どこかに、身をひそめているに相違ないのだ」
「顔が焼けただれたり、手足がもがれて、生き残った者が、五人いたのやけど、みんな、自決してしもうた」
「まことか？」
「わしが、この手で、葬ってやったのやから、まちがいない。……全員が、亡霊となって、脇岬で、夜な夜な、海上を、浜辺を、さまよう居る。……あんたら、亡霊というものを、視たことがあるか？」
「亡霊などというしろものが、この世にいるものか！」
「隠密という役務柄、亡霊の存在を、信じたくはなかろう。じゃが、亡霊は、ほんまに、いる。わしが、この目で、視たのだ。日本丸の船頭や水主や、それから用心棒の浪人などが、全員、亡霊となって、現れたり消えたりしている」
「………」
三人の隠密は、たがいに、顔を見合せた。
秋成は、ここぞとばかり、

「わしが、いくら戯作者とはいえ、日本丸で世話をかけた船頭や水主が、横死したのを、目撃している上からには、嘘をついて、かれらの魂魄を、けがすようなまねはせぬ。……まこと、しかと、わしは、この目で、亡霊となったかれらを、視とどけたのだ。生き残った五人が、自決するにあたって、わしに、宗旨を告げたので、京都へ上って、かれらの回向をしてやらねばなるまい。霊魂をしずめてやるために、ぜひともそうしてやろうと、わしは、海から、はいあがって来たのや。……信じてもらえぬのであれば、信じてくれんでもよい」
秋成の態度と言辞には、隠密三人をして、
——どうやら、真実らしい。
と、うなずかせるものがあった。
「どうしても、信じられないのなら、あんたらは、脇岬へ行ってみるがええ。但し、亡霊たちが、あんたらに、とり憑いても、それは、わしの知るところやないがな」
秋成は、そう云いおいて、歩き出した。
隠密たちは、道をあけた。
二十歩ばかりはなれてから、秋成は、振りかえると、
「亡霊の姿は、夜にならぬと現れぬが、昼間でも、座礁している日本丸の中に入ってみると、全身が金縛りになって、ふるえがとまらなくなる」
と、つけ加えた。
断乎として、亡霊の存在を否定する時代ではなかった。隠密といえども、脳裡に、その存在をみとめる気持は、一分や二分あったのである。
上田秋成としては、味方を見すてて、去るにあたって、隠密たちを、脇岬へ近づけまい、とするかれなりの思案をはたらかせた次第であった。

東の海、南の海

一

「美しゅう、晴れわたりましたこと」
御台所倫子が、愉しげに、声音をはずませて、云った。
「うむ。昨日のじめじめした陰天が、嘘のようだ」
将軍家治も、双眸をほそめて、視界いっぱいにひろがった江戸湾を、眺めやった。
ここ御浜御殿の数寄屋（茶亭）は、波に洗われる石垣ぎわに建っていた。
初夏の、海原を渡って来る風は、さわやかであった。
下総が、手のとどくほど近くにあった。
「そなたと、こうして、一緒に、海を眺めるのは、幾年ぶりであろう」
「はい……」
「わしが、将軍になってから、一度もなかったな」
「はい」
二人が結婚したのは、十四年前——宝暦四年十二月一日であった。
家治・十八歳。
倫子・十七歳。
かれらには、夫婦になるまで、六年間もの婚約時代があった。
その時代を、倫子は、この御浜御殿ですごしていた。そして、家治は、しばしば、遊びに来ていたのである。
少年少女の日の思い出が、昨日のことのように、よみがえって来て、殊更になつかしい将軍夫妻であった。
絵の中を動くように、彼方の海上を横切る帆船を、ともに見やって、なんとなく、十四年前に眺めたのと同じ船のような気がした。
同じ想いをわかせたことを、良人と妻は、互いの表情で知って、笑った。
なごやかな雰囲気が、茶亭内にたゆとうた。
露地に、近づいて来る足音がきこえ、
「上様——」
田沼主殿頭意次の声が、あった。
「うむ」
「閑院和仁様を、こちらへお招きあそばしますか？」

「うむ。案内して参れ」
その問答が、倫子を、おどろかせた。
「お上！」
「ははは……、わざとかくしていて、許せ。今日は、そなたの幼馴染を、ここへ呼んでおいたのだ」
良人の優しい心遣いに、倫子は、思わずなみだぐんで、礼を述べた。
やがて——。
来訪者は、客畳に就くと、
「禁門影人であります」
と、挨拶した。
閑院和仁、とは名のらなかった。
次の間にひかえた田沼意次は、ひやりとした。
——閑院宮の猶子だからこそ、こうして対座できるのではないか。禁門影人では、どこの馬の骨とも判らぬ素浪人でしかない。
将軍家が、素浪人と対座することなど、あり得ぬ。
家治は、しかし、仮名を名のられても、すこしも、機嫌を損じなかった。
「氏素姓は、あらそわれぬ。品格、おのずからそなわって居るな」

二

「将軍家に、ひとつだけ、おたずねいたします」
影人は、云った。
「なんであろうな？」
「将軍宣下の式典を、とり行われてから、すでに、七年余が経って居りますが、貴方様は、その間、将軍として、何をなさいましたか、おうかがいいたします」
この質問は、聴く耳にとっては、最大の侮辱と受けとれる。
「……む」
家治は、返辞に、詰まった。
影人は、つづけた。
「貴方様が、将軍の座にお就きなされた時、公儀の年貢収入は、百七十万石でありました。明和に入った今日、その収入は、増える代りに、二十万石ばかり、減って居ります。なれど、閣老の中、一人として、これを手当てすべく積極策を、とっては居りませぬ」
「お許の意見をきこう」
「これまでの政策は、すべて、節約であります。倹約令によって、世直しができるものなら、政治というもの

は、必要ございますまい。庶民は、くらし向きが苦しくなれば、おのずから、諸事万端、切りつめます」
「うむ」
「公儀が為すべきは、江戸・大坂の商人が、独占している商品の流通市場を、統制することにあります」
その言葉をきくと、聡明な家治は、
「意次には、それが、実行できる、といいたいのではないか？」
「いかにも、主殿頭には、やれます。大商人どもが、しこたま蔵に千両箱を積みかさねながら、なおも、公儀公認の株を楯にとり、それぞれの業種を独占して、さらに、懐中をこやして居ります。……主殿頭ならば、これら大商人から、思いきり運上金・冥加金をとりたてるでありましょう」
「お許の言葉、しかと、耳にとどめておこう」
酒肴が、はこばれると、影人は、もう、政治改革については、ふれようとしなかった。
なにげなく、沖あいへ、視線を向けたとたん、影人は、
「恐縮ながら、この数寄屋に、遠眼鏡のご用意は、ありませぬか？」
と、問うた。
「ありまする」
倫子が、こたえて、自身で立つと、別室に入った。
オランダ製の立派な望遠鏡が、影人に手渡された。
影人は、それを、眼にあてた。
――まちがいない！
一艘の帆船が、通り過ぎようとしていたが、影人は、その正檣の帆に、黄金色の菊の紋を、みとめたのであった。
生き残った日本丸最後の一艘がはるばる遁げ帰って来たのだ。
――錨をおろすのは、佃島の風待ち場だな。
影人は、直感した。

三

「将軍家に、ぜひともおききとどけたまわりたき、お願いの儀がございます」
望遠鏡を、倫子へかえした影人は、将軍家治を、正視して、きり出した。
――ひどくきついまなざしの若者よ。
家治は、双眸をほそめて、
「なにかな？」

「御座船を一艘、お貸したまわりとう存じます」
「それは、造作もないが……、お許は、伊豆伊東にて、千石船を十艘、造った由、意次から、きき及んで居る。その十艘は、いかがしたな？」
家治は、問うた。
「遺憾ながら、長崎へ向けて、出帆させましたところ、天草灘にて、嵐に遭い、九艘が沈み、一艘がいずこかを漂流いたして居ります」
影人は、オランダ軍艦から砲撃を受けた事実をかくした。
その事実を口にすれば、当然、田沼意次とこれを憎む幕府閣老との対立に、言及しなければならなかったからである。
若年寄・水野壱岐守忠見が、目付・大道寺左近に命じて、オランダ軍艦二隻を、日本丸船団にさし向けて来たことは、疑う余地はなかった。
これは、政治の裏側に於ける闘争であった。将軍家の耳に入れるべきことではなかった。
「嵐に遭うてのう……」
家治は、しかし、祖父吉宗の養育を受けただけの頭脳の持主であり、影人の言葉の蔭にかくされたものを、およそ察した。
「船足の早いのがよいであろう。が……、その期待はできまい。好むがままに、えらぶがよい」
家治は、云った。
「かたじけのう存じます。お借り受けつかまつります」
将軍の御座船は、寛永八年（一六三一年）から三年の歳月をかけて、幕府御船方・向井氏勝が、第二「安宅丸」を伊豆伊東で建造して以来、美術的な外観と内部装飾だけを誇って、当代に、いたっている。
寛文九年（一六六九年）に、長崎代官・末次平蔵（四代目）が、オランダ船をそっくりまねた新式帆船を造って、品川へ廻航して来たが、平蔵自身が密輸の罪を問われて、隠岐へ流され、末次家の家財ことごとく没収された際、その末次船は、幕府軍船にそなえつけられた棒火矢の試撃のえじきにされたのであった。
爾来、西洋帆船の建造は、一艘も、こころみられてはいなかった。
つまり、将軍の御座船は、きわめて、船足はのろかったのである。
将軍自身、御座船で上方へ旅した例など、一度もなかった。
「のろい船足を、早いものに造りかえることはできます」

禁門影人は、云った。
「自信があるようじゃな」
家治は、微笑して、好ましげに、正室の幼馴染の顔を、見まもった。
「十艘も、造ってみれば、かなりの知識が得られます」
影人も、微笑して、こたえた。

四

つまりは――。
禁門影人が欲したのは、船そのものではなく、白地に赤の葵紋をつけた『吹流』と称する幟と、『四半』と称する、金の采配を頂きにかざった旗であった。
将軍の御座船は、その幟と旗のほかに、紫地に葵紋を白抜きにした幕を張る。
この葵の紋こそ、いま、影人には、必要なのであった。
若年寄・水野壱岐守といえども、この葵の紋へむかって、オランダ軍艦から砲撃を加えることは、絶対にできぬのだ。
「お許は、よほど冒険を好む気象と見受ける」
家治は、云った。
「神武帝のあらあらしい血統を享けた皇族も、一人ぐらい現れてもよろしいかと存じますが――」
「たしかに、血気ありあまる皇族としては、遠い祖先を仰ぐと、いつの間にやら、束帯をまとい、眉墨を塗って、武器をすてて、笏を持ち、馬の代りに牛車に乗るのが、歯がゆかろうのう」
「その通りにございます。貴方様ご自身も、三河武辺の末裔たる身が、かような、江戸城内だけのくらしを強いられておいでなのが、時には、ばかばかしくお思いになることもございましょう」
遠慮のない言葉に、家治は、苦笑して、田沼意次を、視た。
意次は――意次も、さきほどからの禁門影人の言辞に、はらはらしていた。
――云いたいことを云ってのけるものだ。尤も、こういう人物が、公方の面前に出現したのは、この意次にとっては、きわめて好都合ではあるが……。
なごやかな対座は、一刻あまりつづけられた。
家治と倫子は、意次にうながされて、席を立った。
「今日は、愉しかった。……のう、倫子」
「はい」
倫子は、うなずき、影人に向って、

「くれぐれも、おん身を大切になさいますよう――」
と、云った。
「おふたかたのご長命を、お祈りつかまつる」
影人は、頭を下げた。
将軍夫妻が、御浜御殿を去ると、田沼意次は、影人に、
「御座船で、どこへ行かれるのか？　まさか、天草灘へ向われるのではござるまいな？」
と、問うた。
「日本丸を潰滅させられて、黙ってひきさがるこの禁門影人ではない」
きっぱりとこたえた。
「大道寺左近が、長崎におもむいた密報が入って居り申すゆえ、よほど警戒をされぬと――」
「その目付を、わたしの手で、片づける」
「…………?!」
「側用人殿が、政権を手中にするためには、邪魔者は、除かねばなるまい」
その言葉をきいて、意次は、ふっと、
――わしは、もしかすると、この青年の傀儡にされるのではあるまいな？
と、おそれをおぼえたことだった。

五

御浜御殿を出た影人は、紺屋町の歌吉の家へはもどらず、浅草馬道の源水横丁へ向って足をはこんだ。
――相変らず、尾行されている。
影人は、十数歩の後方に、こちらの生命を狙う者が、執拗に、くっついて来ているのを、察知しながら、平然と、ふところ手で、往還をひろって行く。
「旦那――」
ひくく呼んで、肩をならべた職人ていの男が、小声で、
「剣呑な付け馬を連れていなさるね」
と、云った。
源水長屋の住人の一人――夜盗の木鼠吉五郎であった。
吉五郎は、松井源水の右腕で、源水の留守中、手下たちの仕事の差配をまかされていた。
「尾けられているのが、日常のことになっているので、尾行者がいないと、かえって、さびしいな」
影人は、笑ってみせた。
「冗談じゃありませんぜ。あちらさんは、旦那の生命を

奪ろうと、牙をといでいるんじゃありやせんか」
「おかげで、絶えず神経がひきしまっていて、精神の修養にもなる」
「卵も切りようで四角になるが、旦那っておひとは、生きるってえことに、あっしら凡人とは、別の考えを持っていなさるんだね」
「人生五十年、沈香も焚かず屁もひらずに生きては、往生ぎわに、悔いがのころう」
「仰言ったことだ！　こういうおかたを、犬死させるわけには、金輪際、いかねえや。……旦那のかくれ家を、もう一軒、つくっておきやしょう」
「わたしのかくれ家より、佃島に流れ着いた日本丸の船頭と水主たちが、休息する場所を、さがしておいてくれぬか、朱引外（郊外）がいい」
「へい、合点！　……ごめんなすって——」
吉五郎は、行き交う人ごみにまぎれて、姿を消した。
影人は、源水長屋の一軒に、入った。
そこに、伊豆忍者「捨て草」の最後の一人——無香がいた。
ふつうの町娘らしく、せっせと拭き掃除をしていた。
影人が、すっと入ると、そこは、ただの娘ではない身ごなしで、たすきをはずして、
「お帰りなさいませ」
と、挨拶した。
「江戸の水になじんだ風情だな」
影人は、表情のない無香の顔に、どこやら、色香らしいにおいをかいだ。
無香は、だまって、茶をはこんで来た。
「そなた、こうしたしずかなくらしを、つづけたいのではないのか？」
「はい——い、いえ……」
はじめて、無香の顔に、微かな表情らしい色が浮いた。
「そうさせてやりたいが、あいにく、出会った男が、波乱を好むように生れついていて、そなたには、気の毒だ」

六

「わたくしは、伊豆の『捨て草』として生き、そして死ぬように、父から命じられて居ります」
無香が、抑揚のない、くぐもった声音でこたえた。
「その父に生涯を閉じさせたわたしが、ただの娘になれ、とたのんでも、肯き入れまいな」

「…………」
「いや、わたし自身、そなたを、忍者として使っているのだ。ただの娘になれ、とたのむ資格はない」
「貴方様のためなら……」
そう云って、視線が合うと、ふっと、顔を伏せて、
「貴方様の大きなお志のために、役立つのでございますならば、いつ生命をすてても、惜しいとは思いませぬ」
と、云った。
影人は、その時は、なんともこたえなかったが、夕餉の膳部に就いて、三四杯、盃を口にはこんでから、
「予想は、していた、そなたが、いずれ、わたしに惚れるであろうことは——」
と、云った。
無香は、うつ向いて、膝で、両手をしかと組んだ。
「うぬぼれて、予想したわけではない。そなたにとって、生れてはじめて、身近な場所に現れた男が、わたしだからだ。……堂上の姫君であろうと、裏長屋の貧しい娘であろうと、年頃になれば、自分の最も近いところにいる男の中から、好きな相手をえらぶものだ」
「…………」
「まして、そなたは、もの心ついた頃より、父親以外の男と、口をきいたことさえなかった。……天涯孤独となったそなたが、父の敵と憎まねばならぬ男でありながら、憎む代りに、惚れたのは、自然の理であろう」
「…………」
無香が、唇をかみしめ、泪ぐむのを、影人は視やりながら、
「そなたが、わたしに惚れたことを、坊主の説教口調できかせるのも、妙なあんばいだ。黙って、抱いてやればよいのだが……」
と、云ってから、
「抱いてやる代りに、ひと仕事してもらうことになる」
「はい」
「佃島に、たった一艘残った日本丸が、よたよたと、たどり着いて、救いを待っている。……間もなく木鼠吉五郎が、船頭と水主たちの休息場所をつくって、報せに来る。そなたは、闇にまぎれて、舟を漕ぎ出し、佃島へ行って、その休息場所へ、疲れはてた一同を、案内してやってくれ」
「かしこまりました」
「たぶん、邪魔者が、行手をはばもうとするであろう。そなたの術で、除くよりほかはあるまい。……わたしの方は、今夜のうちに、将軍家御座船を、借り受ける。船頭と水主たちが、乗ってくれなければ、御座船は、天草灘ま

で航海はできぬゆえ、邪魔する者どもは、容赦なく、除かねばならぬ」
影人は、きっぱりと云った。

七

一刻（二時間）ばかり過ぎてから、星あかりの中を、無香は、鉄砲洲の西本願寺と南小田原町をむすぶ本願寺橋の上に立っていた。
佃島に渡るには、船松町の渡し場からは、目と鼻の近さであったが、そこは避けたのである。
一橋邸を右に見て、大川へ出、南から遠まわりすることにしたのであった。
源水長屋の金太駕籠の人足にたのんで、本願寺橋ぎわに、舟を用意してもらったのである。
無香は、ひらっ、と欄干をおどり越えて、舟へ降り立った。
艪を取って、漕ぎ出そうとした——とたんであった。
突如、舟底が破れて、水が噴きあがった。
どうやら、漕ぎ出せば、舟底が破れる仕掛けが、なされていたようであった。
無香は、しかし、あわててはしなかった。
いや、このような妨害は、あらかじめ、予測していた。
次の瞬間——。
橋下にひそんでいた舟から、手裏剣が飛来するのを、かわしざま、無香は、舷を蹴って、からだを宙のものとした。
鳥のごとく翔びつつ、無香の秘術は、発揮された。
鉛玉を先端につけた縄を、舟にうずくまる敵めがけて、とばしたのである。
無香が、その舟に移った時には、鉛玉を額の中央に埋められた敵は、大きくのけぞって、水中へ落ち、高い飛沫をあげていた。
そのまま、無香は、何事もなかったように、その舟を漕ぎ出した。
「やってのけたことだぜ、無香さん」
いつの間にか、橋の上に現れた木鼠吉五郎が、声をかけて来た。
「日本丸の衆をかくす場所で、待っていて下さい」
「もしかすると、大川で、待ち伏せている新手がいるかも知れねえぜ。おれが、漕ぐことにしようか？」
「いいえ、一人で大丈夫です」
「そうさな。考えてみりゃ、こちとら、金鎚だった。なまじ、漕いだら、足手まといになるだけだろうぜ。……くれぐれも、用心してくんな」
「ご心配無用です」
無香の声音は、澄んでいた。
星の夜空の下を、遠ざかる艪音をききながら、吉五郎は、
「けなげなものだぜ。禁門の旦那は、どうして、あの娘を、おぼこのままにすてておくのかねえ。もし、万が一、大川で、敵の奇襲をくらって、受けそこなって、仏になっちまったら、男を知らねえ生のままじゃねえか。もったいねえやな」
夜盗らしい独語を、もらしたことだった。
佃島の風よけ場では、ぼろぼろになった日本丸に、十三人の海の男たちが、救いの神のやって来るのを、首を長くして、待っていた。

八

南の海では——。
野母半島の脇岬と一衣帯水の樺島に、日本丸船団の生きのこりが、東端の行者山にたてこもっていた。
船頭長・江戸三郎と水主六人、鬼堂天馬、高山彦九郎、松井源水。
それに、松井源水が長崎からともなった平賀源内が、加わっていた。
たてこもって、すでに十数日が無為に過ぎていた。
鬼堂天馬は、平賀源内から、若年寄・水野壱岐守の右腕である目付・大道寺左近が、長崎に来ているときいて、
——隠密群を放って来たのは、大道寺左近であったか！
と、おのれにうなずき、
——大道寺左近ならば、かならず、この樺島のかくれ場所を突きとめて、新手を襲撃させて来るに相違ない。
と、覚悟をきめ、自分、彦九郎、源水、そして水主たちと、昼夜、一瞬も油断なく見張りをつづけていた。
ところが……。
十数日も経ちながら、敵は、全く、襲って来る気配がなかったのである。
「どうも、面妖しい！」
天馬にとって、敵が沈黙をまもっているのが、かえって、無気味であった。
大道寺左近という切れ者のおそろしさを、鬼堂天馬は、充分に知っていた。

げんに、松井源水が平賀源内を、ここへともなうのを、さぐりあてて、隠密たちを襲いかからせている。

「大道寺左近の使っている隠密どもが、われわれがここにひそんでいるのを、突きとめないはずはないのだが……？」

実は、行者山から立ち去った上田秋成が、野母崎の海沿いの道で、左近手飼いの隠密につかまって、日本丸全員が死亡した、といつわり、

「脇岬では、夜な夜な、海上を、浜辺を、亡霊となってさまようて居る」

と、おどしてくれたおかげとは、天馬は、夢にも知らぬことであった。

じっと脇岬を眺めやる天馬のそばに、源水が寄って来て、

「敵がたは、われわれが動き出すのを、辛抱強く待っているのではあるまいか」

と云った。

「こういう場合、こちらがひそんでいると判明すれば、隠密というものは、待っては居らん。身をすてて、攻めかかって来る」

「すると、われわれが、どこかへ遁走したと思って、あの野母崎から、ひきあげたか？」

「そうは考えられん。ひきあげるとすれば、この樺島をも、くまなくしらべて行くだろう」

天馬は、首をひねった。

同じ隠密として、敵がたの行動を測りかねるのは、いらだたしかった。

「といって、このまま、いつまでも、ここにひそんでいるわけにもいくまい」

「そうだ。もはや、忍耐は、限度に来ている」

九

天馬と源水が、小屋にもどると、ようやく、体力気力をとりもどした船頭長・江戸三郎次が、待っていて、

「また、時化が、今夜来るらしい」

と、告げた。風は、もうかなり強く吹きつけていた。

「大きいか？」

「この小屋をふっとばすほどじゃねえだろうな」

天馬は、ちょっと考えていたが、

「時化の去ったあとの、うねりの高い波の底は、どうだ？」

と、問うた。

「この脇岬は、海の中が、大層透明だから、すこしばか

り潮の流れがはやくても、底をさぐるには、さしつかえはなかろう」

「よし。おれに、海中に長くもぐっていられる若い水主を二人ばかり、貸してくれ」

「黒太と政七がよかろう。いよいよ、暗礁の洞窟を探りなさるんかい？」

「そうだ。……洞窟内をさぐってみて、そこに何もなければ、この行者山にひそんでいる意味がない」

「ひっくりかえっている日本丸には、敵の目が、脇岬のどこかから、遠眼鏡をあてて、光っているのじゃないのかね」

「のるかそるか。やってみることだ」

天馬は、源内を呼び、二人の屈強な若い水主に、エレキテエルの使いかたを、くわしく教えさせた。

その夜、暴風雨は、凄じい勢いで、天草灘を直撃して来て、行者山の五つの小屋のうち、三つの屋根を、吹きとばした。

夜が明けた時、烈風はおさまっていたが、まだ波のうねりは高く、漁舟の影は、ひとつも見あたらなかった。

天馬は、二人の水主をつれて、西側の浜辺に降りていた。黒太が、エレキテエルを、小脇にかかえていた。

彼方に、日本丸主船が、みにくく、胴体を逆にして、舳先を天に向けていた。

「舟を漕ぎ出すのは、まずいな」

「大きな材木が流れ寄せるようにみせかけて、それにすがって、首だけ出して行けばええ」

黒太が、智慧を働かせた。

その材木は、政七が、すぐ松林ぎわで見つけて、黒太とともに、砂地を押して来た。

すがって行くに、恰好の太枝が、数本ついていた。

「よかろう。行くぞ」

うねりあげる波浪は高かったが、三人はそれを逆に利用して、材木を暗礁へ進めた。

決して、なまやさしい泳ぎではなかったが、三人とも、充分に自信があった。

ひっくりかえった日本丸にたどり着いた時、まぶしい夏の朝の陽光が、照りつけていた。

巨浪は、日本丸の胴体にぶちあたって、白い飛沫をあげていた。

「黒太、先頭になって、もぐれ。まず、沈んでいる末次船を、エレキテエルで照らせ」

「へい！」

大きく深く息を胸に吸い込んでから、黒太がもぐった。天馬、政七の順で、つづいた。

十

岩礁にしがみつくようにして沈んでいた末次船は、百年という長い歳月を経ていた。

ただの帆船なら、腐りはてて、ばらばらに解体され、あとかたもなく、形をとどめていないはずであった。

オランダ帆船の末次船は、船体に特殊な塗料がほどこされていた。そのおかげで、猛禽のくちばしのように、船首が、暗礁の岩と岩のあいだに、突出していた。海底は、珊瑚礁になっていて、それに、はっきりと、まだ崩れていない残骸が、居すわっていた。

船が積んでいたであろうさまざまな品物が、毀れたり錆びたりして、散乱していた。

三人の冒険者は、岩盤にしがみついた。

暴風雨のなごりの巨大なうねりをみせている波浪の下で、海底もまた、潮流は渦巻きになって居り、黒太、政七、天馬は、岩盤にしがみついていなければ、その渦巻きに、翻弄されそうであった。

ただ——、

さし込む真夏の朝の陽光が、海中をあざやかに明るく照らしていた。

岩盤は青褐色に、珊瑚は淡紅色に、そして砂は黄灰色に、それぞれ積翠の海水を透かした光で、美しい色彩を浮きあがらせていた。

はげしく動く海流に乗って、すばやくかすめるさまざまな魚も、それぞれ、おのれのからだの模様を誇らしげに、光らせているようであった。

黒太が、末次船の舳先が突出した岩礁のむこうを、指さした。そこが洞窟であった。

その時——。

その岩礁のむこうで、もうっと、砂煙りが舞いあがり、あたりは、濃霧につつまれたようになった。

三人は瞬間、本能的に、危険を直感して、大いそぎで、海面へ、魚のようにかけあがった。

日本丸主船の洞体にすがった天馬は、ふうっ、と呼吸して、

「怪物が、洞窟にひそんでいるようだな」

と、云った。

「どでかい海蛇か、鱓でさあ、怪物の正体は——」

海で二十余年間をすごした政七が、云った。

「やっつけるには、銛がいるぜ」

黒太が、云った。

「この日本丸の中に、銛は用意してあるはずだ」

「おいらが、さがして来る」

黒太が、エレキテエルを天馬にかえしておいて、逆転した船体の中へ、もぐり込んで行った。

海の中の働きは、水主たちの経験がものをいい、鬼堂天馬といえども、かれらに従わざるを得なかった。

十一

「旦那——、こいつは、明日まで、凪ぐのを待たなけりゃ、仕事になりませんぜ」

政七が、まだあわただしい雲行きの空を仰ぎながら、云った。

「あの潮の渦を通り抜けて、洞窟の口まで行けば、五体の自由をとりもどせるのだろう」

「そりゃ、そうでがすがね」

「怪物退治だけでもやっておいた方がいいだろう」

「洞窟の口へ、泳ぎつくまでに、体力を半分もすてて居りやすぜ」

政七は、気乗り薄な態度をみせた。

「黒太なら、やれるだろう」

天馬は、海中に棲むもの凄い生きものに対して、興味をわかせていた。

「どうだかね。あいつ、体力はいちばんあるだろうが、海蛇や鱓を、やっつけたことは、まだ一度もあるめえ」

ふたかきばかりのところへ、ぶくっ、と頭を現した黒太が、

「醤油とか、味噌とか、樽づめのものは、島へ持って行けますぜ」

と、船内をゆっくりと見まわして来るだけの余裕があった、というおちつきを示しながら、さがしあてた銛を、頭上へかかげてみせた。

「黒太、おらにかせ」

政七が、片腕をさしのばした。

「おっさんは、みていろよ。怪物退治は、おれがやる」

「おっさんといわれる年齢じゃねえぞ」

「四十をとっくに越えているじゃねえか」

「若けえことよりも、経験の方が、ものをいうのが、海や山で生きる野郎のくらしだ。……おらは、てめえの年頃には、もう立派な一人前の漁師だったんだ。海女よりも、二倍も長え時刻、海底へもぐっていたんだぞ。やっつけた鱓や鮫の数は、十や二十じゃねえ」

「しかし、年齢には勝てねえんじゃねえか」

「つべこべぬかさずに、銛を、ほうれ！」

政七の形相に、黒太は眉をしかめて、銛を投げて寄越

した。
「待っていろ」
政七は、もぐって行った。
「頑固なおっさんだあ」
黒太は、吐きすててから、
「旦那、本当に、あの洞窟の中に、途方もねえ金銀が、かくされていると、お思いですかい？」
と、問うた。
「一応のぞいてみる興味をおぼえさせるではないか、この下に、洞窟があることは――」
「そりゃそうだが……夢みてえな話だ」
黒太が、首をふった――その折。
海面が、にわかに赤く染まった。
と、みるみるうちに、大きくひろがった。
「血だっ！　おっさん、やられやがった！」
黒太が、わめいて、海底へ突っ込んで行き、天馬もつづいた。
岩礁のむこうに、砂煙りがあがって居り、それが、赤く一変したように眺められた。
黒太が、その砂煙りの中へ、泳ぎ込んで行った、とみるや、政七をかかえて、出て来た。
海面めざして、かかえあげられる政七の片脚は、失われていた。

十二

日本丸の船腹につないだ材木の上に、横たえられると、政七は、意識を失った。
海の怪物に、膝から食いちぎられた傷あとは、正視に堪えなかった。
出血のおびただしさをみて、天馬は、
――たすかる見込みはない。
と、看てとった。
血止めをしてから、天馬は、政七の顔をたたいて、意識をとりもどさせた。
「おい、政七！」
「……く、くそ！」
うつろな視線を、宙に送って、政七は、おのれの失敗を、ののしった。
「こんな、はずじゃ、なかった。……あん畜生め！　まさしく、化物だった。おらのからだの、二倍も、ありやがった」
「銛を、打ち込んだか？」
「一本や、二本の銛で、くたばる奴じゃねえ」

政七は、最後の気力をふりしぼると、
「旦那……、洞窟の中に、もぐるのは、あきらめるんだな」
その言葉を、この世にのこして、がっくりと落ち入った。
その時、岩礁の上の海面が、波浪をひき裂くように、凄じい飛沫をはね散らした。
「血をかいで、鮫の群が、寄って来やがった！」
黒太が、うなった。
――どうやら、この海中は、大道寺左近手飼いの刺客どもより、あつかいにくい敵が、横行しているらしい。
天馬は、微かな戦慄をおぼえた。
「ひとまず、島へ、ひきかえそう」
「旦那！」
黒太の双眼が、血走っていた。
「政七のおっさんの仇を討たずに、ひきさがるんですかい！　おれは、いやだ！　こうなりゃ、なにがなんでも、怪物をやっつけて、洞窟内をさぐってくれるぞ！」
二十歳の血気の若者は、なかば逆上していた。
「ひきさがるつもりはない。しかし、犬死をする必要もない。……手段を考えるのだ」
鮫の群が、散るのを待って、天馬と黒太は、樺島の浜辺へ泳ぎかえった。
江戸三郎次は、この悲惨な報告を受けると、
「海の男が、海で死ねりゃ、本望だ」
ぼそりとつぶやいた。
陸の荒くれとは、おのずからちがった度胸が、かれらには、そなわっていた。
「三郎次、船頭の長として、どうやって、洞窟へもぐれるか、考えてみてくれ」
「さてのう。……化物みてえな海蛇や鱓や鮫なら、まともにたち向って、勝てるのぞみは、百に一もねえ」
「彼奴らを、追い散らす策はないか？」
「………」
三郎次は、しばらく、返辞をしなかった。
「たのむ！」
「旦那！　百万両以上の末次金が、洞窟の中に、まちがいなく、かくされているのなら、これア、あっしらも、生命をすてて、もぐり込む甲斐があるんだが……」

御座船江戸丸

一

当時――。

将軍家御座船は、川遊びなどする御召船と、関船と称する軍艦の二種類があった。

どちらも、構造も数も厳しく秘密にされて、江戸では、新佃・万年橋・北新堀・霊岸大橋側に、船庫があって、船奉行が管理していた。

一般庶民は、その姿など、見たこともなかった。

将軍が、時たま、川遊びに、御座船を大川へ漕ぎ出させることはあったが、その時は、庶民は、舟を出すことも、河岸道で見物することも禁じられた。

船宿の二階などで、障子の蔭から、こっそり、眺める連中はいたが、遠くて、その大きな帆をみとめる程度にとどまった。

御船手方記録によれば……。

天地丸（長さ十五間三尺・七十二挺立て）

三浦丸（長さ八間・二十四挺立て）

麒麟丸（長さ八間二尺・三十二挺立て）

などの大型船が、霊岸島船庫に、入れられてあったが、いずれも、あまり形のよくない、船足ののろいものであった。

ただ――。

船足はのろいが、暴風雨に遭っても、ビクともしないように、堅固な造りであったことは、証明されている。

肥後熊本城主細川氏が、八代将軍吉宗の命令によって、御召船泰宝丸で、春の荒天に、太平洋へ漕ぎ出し、瀬戸内海を航行し、玄海灘を乗りきって、なんの故障もなかった事実がある。

天地丸・三浦丸・麒麟丸・泰宝丸など、いずれも、軍船であり、すくなくも、三十隻以上が、各船蔵に、ねむっていた。

東方の海がしらみ、淡々とした明るさが、雲影のない空を浮きあげた頃あい――。

一隻の御座船が、ゆっくりと、霊岸大橋側の船蔵から、すべり出た。

二十挺立ての、関船としては、最も小型であった。

主帆・前帆に、将軍家の持ちものであることを示す、

大きな朱の丸のまわりを八つの小さい朱の丸がとり巻いている船印が描いてあり、さらに、艫には、白地に赤の葵紋をつけた『吹流』が、なびいていた。

大川に出ると、舷側に、紫地に葵紋を白抜きにした幕が、垂らされた。

もし、将軍家が、乗っていれば、主帆・前帆は、朱の丸の代りに、葵の紋の船印になる。

つまり――。

夜明けに出帆したこの御座船は、試行と見受けられた。

そう見せかけたこの江戸丸という関船の舳先に立っているのは、禁門影人であった。

順風であった。

二十挺の艪を漕いでいるのは、天草灘から逃げもどって、数日間たっぷりと休息をとった日本丸の水主と、あらたに、加えられた銭屋五兵衛の乾分たちであった。

影人のそばへ寄って来た三十なかばのたくましい船頭が、

「公方さんの御召船を、借り受けるたア、旦那も、やりなさるものだ」

と、云った。日本丸を、佃島までたどりつかせた鬼吉という海の荒くれであった。

二

「野母半島の脇岬沖で、座礁した主船に乗り組んでいた連中のうち、幾人が、生き残っているかな？」

東方の水平線に、巨大な真紅の日輪が、昇りかかったのを、じっと、見やりながら、影人が、独語するように、云った。

「三郎次は、不死身の男でさあ。それに、旦那が、便乗させた松井源水、高山彦九郎、上田秋成なんてえ面々は、死神が迎えに来たって、反吐を吐きかけて、追っぱらうような、ひと癖もふた癖もある、しぶとい気魄を持っていますぜ。海の藻屑になんぞ、なる御仁たちじゃありませんや」

鬼吉が、こたえた。

「敵にまわった相手が、それ以上にしぶとい悪党なのだ。その男の手飼いの隠密も、五人や七人ではあるまい。座礁した主船の生き残りを、みな殺しにしようと、襲って来ているに相違ない」

そう云ってから、影人は、

――待てよ。鬼堂天馬が、長崎にいる！

と、思い出した。

——あの隠密が、長崎にいるとすれば、大道寺左近の打って来る手を、たたきつぶす力を発揮することに、期待がかけられる！

「旦那——」

鬼吉が、呼んだ。

「——うむ？」

「お詫びしなけりゃならねえことがありやす。……実は、旦那のお許しを得ねえで、一人、よけいな者を、乗せているんでがすがね」

「…………？」

「旦那が使っていなさる娘御でさあ」

——無香を、乗せたのか！

「当人のたのみか！」

「そうでさあ。わっしどもを、佃島の風よけ場から、ぶじに、木更津のかくれ家へ、連れて行ってくれた恩がありやすので、たのまれると、無下にことわれなかったんでさあ」

影人は、船内へ降りた。

将軍家の御座所を、影人は、居室にしていた。

鬼吉に告げられた無香が、影のように、すっと入って来て、両手をつかえた。

「無断にて、乗り込みましたこと、お詫びつかまつります」

「いまさら、海へ投げ込むわけには、参るまい」

「では、天草灘まで、お供を……」

「この航行のあいだに、わたしは、そなたを抱く——かも知れぬ」

「は、はい」

無香の頬が、紅潮した。

はじめて、娘らしい、羞恥心が未知の営みに対して、好奇のはたらきを示したのである。

「しかし、あらかじめ、申し渡しておく」

「はい」

「わたしに抱かれても、女になってはならぬ！ そなたは、あくまで、伊豆の捨て草だ。捨て草として生きるのだ。そのことを、忘れるな」

「はい、忘れませぬ」

無香は、じっと、影人を見かえして、こたえた。

三

江戸湾を出て、はるか遠い天草灘に行き着くには、相模灘、遠州灘、熊野灘を経て、瀬戸内海に入り、馬関海峡を抜けて、まわり込むことになる。

二十挺立ての御座船江戸丸は、順風に帆をはらませて、この航路を進んで行った。

遠州灘を過ぎようとした折であった。

将軍家御座所へ、鬼吉が降りて来た。

影人は、地図をひろげていた。

ただの地図ではなかった。

「旦那、そいつは、地球図じゃねえんですかい？」

鬼吉が、のぞき込んだ。

「そうだ。お前は、銭屋五兵衛の命令で、どこまで行った？」

「へえ——、その高砂のむこうの、呂宋に六度ばかり、そのむこうは、と……」

人差指で、カンボジヤをぽんとたたいて、

「ここに一度だけ、行ったことがありやすよ。いい女がいたので、いっそ住みついてくれようか、と思ったね。緞子だの天鵞絨だの猩猩緋だの、五合の米で、なんでも買えたし、前後左右どこを見渡しても、法度やらしきたりやらで、がんじがらめになっているおらが国さに比べりゃ、極楽だったのう、ここは——」

と云った。

「わたしは、このシャム、カンボジヤの沖合いを通り抜けて、インド洋を渡り、アフリカというこの巨大な大陸をぐるりとまわって行くつもりだ」

「へえ？」

「ポルトガルはここだ。さらに、さかのぼると、オランダが、ここにある」

「なるほど、オランダてえのは、気が遠くなるほど、遠方でがすねえ」

「なにか、用か？」

「どうも、怪しい船が二艘、あとにぴったりくっついて来てやがるんでさあ」

影人は、艫に出てみた。

一瞥しただけで、漁船でもなければ、菱垣船でもなかった。

「旦那、もしかすると、江戸湾ののどくびをつかんでいる観音崎灯台の合図で、浦賀奉行が追いかけさせて来たんじゃありやせんかねえ」

「…………」

「一戦交えやすかい」

江戸丸には、大砲二門、据えつけてあった。

鬼吉は、オランダ軍艦に砲撃された時の無念さを、よみがえらせていた。

「まあ、待て。こちらの大砲は、撃沈させる威力を持たぬし、また、あの船は、大砲を備えては居らぬ」

影人は、その二艘が、幕府の軍船ではない、と看てとった。
——あるいは、若年寄・水野壱岐守が、ひそかに造った私船かも知れぬ。
そうだとすれば、わざとひきつけて、乗り組んだ隠密衆を、全滅させる、という作戦をとるべきであろう。
「大砲を備えては居らぬが、オランダ銃を修練した隠密どもが、手ぐすねひいているやも知れぬ。ひきつける以上、充分に警戒する必要があろう。一同、身を伏せて居るがよい」

四

影人は、鬼吉に命じて、わざと江戸丸の速度をおとさせた。
百五十石積みばかりの二艘の船は、みるみる、距離を、縮めて来た。
照りつける陽光は、強烈であったが、この季節は、時化が襲って来ないかぎり、潮の流れは平穏であった。
二艘の船は、江戸丸をはさむように、左右へより添って来た。
右側の船の舷ぎわに立った船頭が、大きく手を振って、
「公方様の御座船とお見かけして、おねげえつかまつります」
と、叫んだ。
「なんのたのみだ？」
「大きな声じゃ打ち明けられねえんだが……」
そのくせ、声をはりあげて、
「わっしら二艘は、大奥の御年寄・松島様のやとい船でさあ」
「なんだと？」
鬼吉は、うしろに腰をおろしている影人を、ふりかえった。
江戸城大奥では、将軍家治の乳人あがりの老女松島が、いま、一番の権力をにぎっている。田沼意次とも親しかった。
田沼意次は、須絵という妾を使って、家治の愛妾阿保方（津田氏）はじめ、侍女・下婢にいたるまで、オランダから輸入した、各種さまざまな西洋各国の珍しい品物を、賄賂していたし、鈴木春信の描いた艶麗な春画を贈って、大奥数百人の女中たちに、臥床の中で、自慰にふける手だすけをしていた。
さらに——。
鬼堂天馬から受けとった平賀源内の精製した麻薬を、

頭痛持ちの家治にのませ、次いで、松島の手に渡して、女中たちに、その快味をおぼえさせていたのである。
老女の松島は、目下は、そのむかしの権力者春日局気どりであった。
御台所倫子も、松島の進言を、しりぞけたことはなかった。
倫子は、ついに家治の嗣子をつくれず、側室知保が、若君竹千代を産み、その竹千代は、西丸御殿で、御台所〝おん養い〟となっている。知保は、若君ご生母・お部屋様阿保方となり、その後見役をつとめているのが、老女の松島であった
「その松島様が、どうしたい！」
「松島様がよう、大奥の女中衆を二十人あまり、おつれになって、下関の阿弥陀寺町にある赤間神社へ、参詣なさろうとしているんだ」
「いいかげんなことを、ほざくない！　大奥の女中衆が、長旅なんぞする話は、きいたことがねえぞ」
「おめえは、松島様が、大奥でどんな偉え御年寄か、知らねえんだよう。公方様も、寛大なおかたでよう、赤間神社への参詣を、許して下さったんだとよう。……松島様の先祖は、平家の、なんとかっていう——そうそう、平知盛という大将だったんだそうな」
それをきいて、影人は、うすら笑った。
「つじつまは合っているな」

五

平知盛は、清盛の子で、武辺のほまれが高かった。
文治元年（一一八五年）二月——。
幼帝安徳帝を擁した平家の軍勢は、源義経に、屋島を追い落されて、瀬戸の海を漂いつつ、落ちて行き、長門の壇の浦にたどりついた。
三月二十四日、義経が、七百余艘をひきいて、押し寄せて来た。
平知盛は、生き残った平家の士兵をはげまして、総指揮をとって奮戦したが、衆寡敵せず、みるみる敗色濃くなった。
その上、民部大輔成良という者が、裏切って、味方の計略を、源氏がたへ密告したため、平家は、一瞬にして、潰滅した。
知盛は、安徳帝が、入水崩御されたとき、いまは、これまでと、中納言教盛とともに、腹をかっさばいて、海中へ沈んだ。
知盛は、その最期まで、あっぱれな態度を示した武将

であった。
　壇の浦で、敗色濃くなった時、知盛は、小舟を走らせて、安徳帝の御座船へ至り、
「世の中も、いまは限りとみえ申す。おそれおののいて、見苦しい振舞いをいたす者どもは、みな、海中へ投げ込み、船の掃除をなされよ」
と、云い、恐怖のため発狂した者などを、片っぱしから、突き落した。
　女房たちは、知盛をとりまいて、いくさの模様を、問うた。
　知盛は、笑って、
「都を出て以来、そなたたちは、さだめし、男に飢えておいでてござろう。この知盛、ただいま、吾妻男どもをたくさん、ひっ捕えて参り申すゆえ、期待してお待ちあれ」
と、云ってのけた、という。
　下関阿弥陀寺町の赤間神社は、入水した幼い安徳帝をいたみ、その遺影を奉葬して、建立された社であった。
　神社のすぐ近く——紅石岩の裾には、俗に〝七盛塚〟と称される平氏一門の墓碑があった。
　平有盛・清経・資盛・教経・経盛・知盛・教盛らの銘が刻まれている。そのほか、山肌の崩れかかったその一画には、名も知れぬ平家のさむらいの五輪塔が、無数に建てられている。
　俗界とへだてられたそこは、平家怨霊の無気味な静寂がある。
　京都御所からは、毎年三月二十四日に、安徳帝の御霊をなぐさめるために、上﨟が、官女多数をしたがえて、参拝して来た。
　江戸大奥から、第一の権力者松島が、女中三十人をしたがえて、はるばる、赤間神社と平氏一門の塚へ、詣でようとしていても、べつだん、ふしぎではない。
　まして、松島が、平知盛の後裔というのであれば、かねての念願であった、と受けとれる。
　尤も——。
　江戸城大奥の女中は、府内へ出ることは、許されているが、箱根路を越えて、長旅をする、などという例は、春日局が京都の禁裏へ上った特別の例外はあるが、きいたことがない。

六

「どうしやすね、旦那？」
　鬼吉が、影人に、返辞をもとめた。
　影人は、やおら、身を起して、舷側へ寄った。

「大奥の御年寄松島殿とやら、顔を見せて頂こう」
　江戸丸をはさんだ二艘の船に、つぎつぎと、大奥女中姿が、現れた。
　最後に、姿をみせた三十なかばの女人が、
「わたくしが、松島でありまする」
「なぜ、こちらの船に便乗したい、とのぞむのだ？」
「この船頭が申すには、もし、熊野灘あたりで、時化に遭うたならば、ひとたまりもない、とおそれて居りまする」
　たしかに、二艘とも、江戸湾内で遊ぶべく造られたらしい三十石船であった。
　沿海航路は、すくなくとも百石積み以上の船でなければ、風雨とともに襲いかかって来る巨大な波浪を、乗りきれぬ。
　五百石船でも、時化が来ると、いそいで、最寄りの湾内へ、避難しなければならない。
「船頭に、下関まで行く、と告げなかったのは、面妖しいではないか。公然と箱根の関所が越えられるものなら、陸路をゆるゆると、遊山気分で道中すればよかろう」
「わたくしは、いちど、船旅をしてみたかったのです」
「ものはためしに、その船で、熊野灘を乗り越えて、瀬戸内の海を航行してみてはどうだ？」
「船頭が、無謀なまねはしたくない、と申して居りまするし、さいわい、上様の御座船をお見受けしたので、あとを追って参りました。なにとぞ、お願い申しまする」
　松島は、頭を下げた。
「よかろう。おい、鬼吉、かまわぬな？」
　影人は、しかし別の意味の目くばせを、鬼吉に、送った。
「へい、承知しやした」
　鬼吉は、身を伏せていた水主たちに、合図した。
　一斉に——。
　左右の舷から、それぞれ五つばかり、縄梯子が投げられた。
　縄梯子が、渓谷に渡された吊り橋の役目をつとめることになった。
「渡って来て頂こう」
　影人に、うながされて、松島は、
「このような重い身装をいたして居りまするし、なにぶんにも、大奥でしかすごして居らぬ女子たちでありますれば……」
「三十石船で、はるばる下関まで航海しようとしたほどの度胸があるのであろう。裳裾がみだれるのを、気にするのなら、いつ飢えた狼と化すかわからぬ水主どもの世

話にはなれまい」

松島は、ちょっとためらっていたが、

「やむを得ませぬ」

女中一同に、さしわたされた縄梯子を渡るように、命じた。

女中たちは、裾をはし折って、つぎつぎに縄梯子に乗った。

江戸丸の水主たちは、黙って、女中たちが、渡って来るのを眺めていた。

先頭の女中十人が、江戸丸の舷へ、手をのばせばとどくところまで来た――とたん、状況は一変した

七

江戸丸側から、ぱっと、縄梯子が、はずされたのである。縄梯子にすがりついた二十人の女中は、海面へ、なだれ落ちた。

いや、落ちた、とみえた瞬間、それぞれが、猿(ましら)に似た敏捷(びんしょう)さで、三十石船へ、かけあがった。

さらに――。

次の瞬間には、彼女たちの右手から、手裏剣が、江戸丸船上めがけて、放たれた。

水主一同は、ぱっと身を伏せた。

身を伏せなかったのは、影人だけであった。

「松島に化けた女頭領、あたまかくして、尻かくさずだったな。問答のあいだに、すでに、尻尾(しっぽ)を出したのは、やはり、女人は、隠密になりきれぬ、ということだ」

「…………」

無念を、おもてにみなぎらせて、唇(くちびる)を嚙むのに向って、

「そなたが、まことの大奥の御年寄松島ならば、将軍家御座船が、わたしのような素浪人の指揮のもとに航海していることに、不審をおぼえて、まず、そのわけを問うところだろう。この禁門影人が乗り組んで、指揮をとっているのを、知っているのは、将軍家夫妻と田沼主殿頭と船奉行だけのはずであった。……こちらが、この江戸丸を借りていることを、すこしもいぶからなかったのは、ただの大奥女中ではない証拠だ。……尻尾をのぞかせたからには、その尻尾を巻いて、早々に退散することだな」

そう云う影人めがけて、女隠密の頭領は、つづけざまに、手裏剣を飛ばして来た。

影人は、鋭いうなりをたてる襲撃を、ふところ手のまま、なんの造作もなく、かわしてみせた。

「未練がましいまねは止せ。そちらに、新式のオランダ銃の用意がある、とでもいうのなら、一戦交えてもよいが……、敵の隠密であっても、女人は女人、しかも、いずれも二十歳前後のうら若さであってみれば、海の藻屑(もくず)にするのは惜しまれる。慈悲と、受けとってくれてもよい」

影人の忠告に、しかし、女隠密団は、おとなしく、攻撃をあきらめはしなかった。

それぞれが、先端に鉤(かぎ)のついた太綱を、びゅん、びゅんと投げつけて来て、江戸丸の舷(げん)にひっかけた。

その軽業は、充分の修練を積んだものであり、ぴいんと張った綱の上を、すべるがごとく、渡って来た。

「くそ、あまっ！」

「ふざけやがるないっ！」

「こん畜生め！」

水主たちは、銛をつかんで、渡って来るあでやかな敵群に、たち向った。

六七人が、綱をふみはずして、海中へ落ちた。

あとの女隠密たちは、江戸丸の船上に、跳躍した。

水主たちの銛で、身を突き刺されたのは、わずかに二人だけであった。

松島に化けた女頭領は、両手に手裏剣をかざして、影人へ迫って来た。

八

影人は、平然として、両手を空けたままであった。尤も、腰に帯びた脇差は、中身が伽羅の木刀にすぎなかった。

影人という青年は、これほど多くの敵に、つけ狙(ねら)われながら、身を守る得物を、ひとつも、所持していなかったのである。

贋松島に、二本の手裏剣をかまえられて、五歩の距離に迫られつつ、影人は、あかるい微笑さえ口辺に刷いて、

「水野壱岐守という若年寄は、よほど、冷酷な気象の人物とみえる。若い女子ばかりの隠密集団をつくって、死地へ送り込むのは、男の欲情を逆手にとる奇謀だ、とひそかに、ほくそ笑んでいるのかも知れぬが、かれの権力欲のいけにえにされていることを自覚できぬそなたたちの、単純な性根が、あわれだ」

と、云った。

その言葉に対する女頭領の応答は、二本の手裏剣を、同時に、放つことであった。

刹那――。
影人の長身が、鳥の翔ぶに似た迅さで、くるりと、主檣をまわった。
二本の手裏剣は、その主檣に、突き立った。
女頭領は、影人のみごとな敏捷きわまるかわしかたに、舌を巻くいとまもなく、さっと、短剣をひき抜くや、船上を滑るがごとく、襲った。
主檣をへだてて――。
突く、かわす。かわす、突く。
その早業が、数秒間くりかえされた。
と、みた一瞬、影人の片足が、女頭領の股間を、蹴った。
あっ、と女の本能が、身を守ろうとした――その時、彼女の手から、短剣は、影人の手に、移っていた。
次に示した影人の行為は、なさけ容赦のないものであった。
一閃裡に、女頭領の帯を両断し、衣裳の前がはだけるや、さらに、その下着を締めた紐も切り落した。
女頭領は、もとより、この反撃に対する技を知らぬわけはなかったであろう。
ただ、非情であるべき隠密も、やはり、女性であった。
江戸丸へ、三十石船を寄せた時から、女頭領は、間近に正対した相手が、気品のある白面の貴公子であるのに、女としての感覚が、ふっと惹かれたようであった。
微妙なその感覚が、まとった衣裳をはがれることに、羞恥を呼んでいた。
こうなると、ただの女にかえるしかなかった。
うろたえて、防ぎの技を忘れたのである。
影人は、なんの造作もなく、女頭領を素裸にするや、くるりと、背を向けさせた。
その片腕をねじあげておいて、
「たたかいは終ったぞ！」
たからかに、云いはなった。
女隠密たちも水主一同も、攻防の手を止めて、視線を、こちらへ向けると、息をのんだ。
陽光に全裸をさらした女頭領の、股間の黒い茂みの下から、短剣のきっ先が、刃を上にしてのぞいていた。

九

「武器をすてることだ」
影人は、女隠密たちに向って、おだやかな音声で、命じた。

すでに――。
二十人の女隠密団は、頭数が半数以下に減っていた。
もちろん、銛をふりまわしていた水主たちも、数人が血海の中に仆れていたし、ほとんどの者が、重軽傷を負うていた。
「わたしは、これまで、自身の手で、人を殺傷することは、さけて来たし、これからも、そうしたい。万やむを得ない場合にだけ、敢えてあの世へ送り、また、その五体を戦闘不能にして来た。……見る通り、そなたたちのかしらは、女性として、いちばん大切な箇所に、白刃を擬されている。この上、そなたたちが、水野壱岐守の走狗として、狂いまわるのなら、この大切な箇処を、えぐり取ることになる」
冷たく冴えた語気が、若いはなやかな刺客たちの一人一人の肺腑に、しみた。
彼女たちは、一人が、得物をすてるのをきっかけにして、のこらず、手ばなした。
影人は、生き残った九人が、自分たちの船にもどるのを見とどけておいて、女頭領の股間から、すっと白刃を、引いた。
「恥をかかせて、すまなかった。しかし、こうする以外に、たたかいを止めさせるすべはなかった。許してもらおう」
「…………」
舷側へ歩み寄って、その短剣を、海へ投げすてる影人を、全裸の女頭領は、じっと見つめていたが、突如、主檣に突き立っていた手裏剣を、抜きとりざま、おのが胸を刺した。
「やりやがった！　かしらともなると、最期はいさぎよいものだぜ」
むこうで、鬼吉が、叫んだ。
鬼吉のそばに、無香がたたずんでいた。
いま、船上にむくろとなって横たわっている女隠密五人のうち、四人までを、無香が仕止めていた。
無香がいなければ、水主連中の犠牲は、もっと数が多かったに相違ない。
影人は、みごとに自決した女頭領のからだを、かかえあげると、三十石船に向って、
「そなたたちの指揮者を、鄭重にほうむってやるがよい。それから、そなたたちは、それぞれ、ただの娘に還るよう、すすめる」
云いきかせると、その一艘へ死体を投げおろしてやった。
深い沈黙の中で、二艘の三十石船は、江戸丸から、は

なれた。
「女ってえ生きものは、どうもよくわからねえ」
鬼吉が、影人と肩をならべて、遠ざかる九人の姿を見送りながら、首を振った。
「あっしは、餓鬼の頃は、婆あはいざ知らず、若い女は、みんな心根のやさしい、子を産んで育てることに、けんめいな良い母親になる者ばかりだと思い込んで居りやしたがねえ。……どうして、どうして、夜毎男にからだを売ることもできるし、あんな隠密にもしたてあげられるし、煮ても焼いても食えねえ、なんともしぶとい生きものなんだから、いやになっちまうぜ。嬶になんぞ金輪際しちゃならねえ化物だ。旦那も、そうお思いじゃありやせんかい？」

怪物

一

野母半島の脇岬と一衣帯水の樺島では——。
日本丸の生き残りの面々が、依然として、無為な日数を重ねていた。
いや、決して無為ではなかったのだが、敵の襲撃のない、行者山の隠れぐらしは、灼きつくような真夏の暑気の中で、一人の男をのぞいて、一同は、何もすることがなかった。
政七という海底もぐり二十年の熟練者が、岩礁にひそむ怪物に、片脚を食いちぎられて、横死してから、鬼堂天馬は、黒太をひきつれて、そこへもぐるのを中止していた。
それというのも——。
「洞窟をさぐる冒険は、しばらく見合せてくれ。そうだ、五日、待ってもらおう」

平賀源内に、とどめられたのであった。
「五日のあいだに、怪物退治の武器を作ってくれるというのか？」
「いや、海底での体力の消耗を、すくなくするものを作ってやる」
そう云って、源内は、三人の水主を助手として、一軒の小屋に、とじこもったのであった。
その五日間が、過ぎていた。
鬼堂天馬と松井源水と高山彦九郎は、敵が突如として攻撃して来るおそれがあるため、昼夜、交替で、半島へ向って遠眼鏡をあてて、監視をつづけていた。遠眼鏡は、横転した日本丸船から、食糧品とともに、持って来たのであった。
じっと、遠眼鏡をあてている彦九郎のそばへ、源水が現れた。
その気配で、遠眼鏡を、目からはなした彦九郎が、
「うんざりだ、もう——。有るのか無いのか判りもせぬ末次金欲しさに、こうやって、いつまでも、こんな南海の果てで、もぐらのように、じっとしているのは、ばかばかしくなった！」
巨軀に獰猛な血気を満たした二十歳の若者は、肚の底から、うんざりした不平を吐き出した。
「忍耐も、あと数日だろう」
「その四五日が、もう待てん！」
彦九郎は、遠眼鏡を、源水に手渡すと、
「おれは、去るぞ！」
と、云った。
「待て！　退去は、天馬にことわらねばならん」
「天馬が、われわれの頭領だと、いつ、だれが、きめたんだ！　おれが、おのれの往く道をえらぶのに、だれにも邪魔はされんぞ！」
「…………」
源水は——源水も、彦九郎が、立ち去るのを止める理由がなかった。
同志の誓いをしたわけではなかったのである。
彦九郎が、小松のあいだをくぐって、麓へ降りて行くのを、源水は、黙って、見送った。
——明日になれば、わしも、この島をはなれるかも知れん。
源水は、自分につぶやいていた。

二

天馬は、小屋で仮眠をとっていたが、入って来た源水

から、彦九郎が山を降りた、と告げられるや、はね起きた。

「彦九郎を、行かせてはならん！」

「どうしてだ？」

「敵がたは、彦九郎の姿を見受けたならば、日本丸の生き残り組が、この樺島にいることを、さとるに相違ないからだ」

「そうかな」

「そうだ！　敵がたは、われわれが全滅したと思っているからこそ、この樺島へ渡って来ないのだ、とそれがしは推測している。ただ、もしかすれば、一人や二人、生き残っている者が、どこかにひそんでいるかも知れぬ、と思って、見張りの者をのこしているだろう。その見張りの者に、彦九郎が発見されたならば、この行者山は、必ず攻撃される！」

「判った！」

源水は、彦九郎をひきとめるべく、飛鳥の迅さで、小松のちらばったゆるやかな勾配の斜面を、駆け降りて行った。

天馬も、彦九郎を説得しようと思って、あとを追おうとした。

そこへ——。

源内が、むこうの小屋から、顔をのぞけて、

「おい！　天馬、来てくれ！　おれの発明品が、完成したぞ！」

と、叫んだ。

——源水なら、彦九郎をひきとめられるだろう。

天馬は、源内の小屋へ、足をはこんだ。

「さあ、見てくれ！」

源内が、つかんで、かかげてみせたのは、おそろしく長い綱であった。

「なんだそれは？」

「海上から、潜水する者の口へ送る空気綱だ」

天馬が、そばへ寄ってみると、たしかに、ただの綱ではなかった。

「葦の髄をつないで、これを、火浣布で巻いた。この端に、鞴がつけてある」

すなわち、これは、巧みに工夫された送風装置器であった。

「こちらの端の火浣布製の仮面をつけて、仮面の口にさし込まれた綱口をくわえれば、どんな長い時間でも、海底にもぐっていられる。どうだ、これは！」

鞴によって送られる空気が、綱の中をつたわって来て、肺に送り込まれる仕掛けであった。現代の言葉でいえば、綱はエア・ホースであり、鞴はコンプレッサーであった。

「これは、たしかに、役に立つ」

天馬は、みとめた。

「そうだろう。……洞窟に、怪物がいる、といっていたが、そいつに嚙みつかれた場合、この火浣布の綱に、猛毒を塗りつけて、逆に、やっつけてくれるのだ」

「ふむ！」

源内は、忍者が竹筒をくわえて、水中にもぐり、長時間をすごすことから、思いついたのであった。

送風の鞴をつけたところが、巧妙な智慧であった。

「早速、今日にも、こいつをくわえて、試してくれ」

三

松井源水が、麓へ駆け降りた時、高山彦九郎は、さえぎる漁師を蹴倒しておいて、小舟にとび乗っていた。

「彦九郎、待て！」

源水は、渚まで、奔った。

「天馬に、止めるように、云いつけられたのだろう。おれは、公儀隠密の手下ではないぞ！」

彦九郎は、渾身の力をこめて、艪をこぎはじめた。

「ちがう！　お主が、居残った敵の見張り番に発見されたならば、行者山は、襲撃されるのだ！」

「おれの知ったことか！　おれは、おれの道を往くのだ！」

彦九郎は、呶鳴りかえした。

瞬間——。

源水の右手が、おどった。

「うっ！　く、くそっ！」

彦九郎は、左腕上膊部へ、ふかぶかと、手裏剣を突き立てられて、形相を一変させた。

「もどれっ！　その腕では、漕げぬぞ！」

「もどるものか！　畜生め！」

彦九郎は、手裏剣を刺されたまま、小舟を、島からはなれさせようと、呻きを嚙んで、必死に艪をあやつった。

源水は、おろおろする漁師を叱咤して、別の小舟を、寄せさせると、乗り込んだ。

樺島の漁師たちは、すべて日本丸主船が積んでいた金銀で、買収してあった。

手負うた彦九郎と、それを仕事としている漁師では、問題にならなかった。

彦九郎は、転覆した日本丸主船に手のとどくところで、追い付かれた。

「彦九郎、あきらめろ！」
「うぬがっ！」
憤怒で、総身の血汐を燃やした彦九郎は、隻腕の抜き討ちを、源水に、くれた。
身を沈めて、この一撃を、頭上に流しておいて、源水は、その小舟へとび移った。
「……う、うむっ！」
組み敷かれた彦九郎は、その巨軀を滅茶苦茶にあばれさせた。
源水は、やむなく、そのみぞおちへ、拳をくれた。
ぐったりと、気絶した彦九郎の上から、起き上った源水は、漁師に、
「この男を、島へ連れかえって、傷の手当をしてやったならば、縛りあげておけ」
と、命じた。
「へ、へい」
「わしは、脇岬へ渡ってみる」
もし万一、いまの争闘を、敵の見張り番に目撃されていたならば、その者を生かしてはおけなかったのである。
源水は、敵が見張っているとすれば、脇岬の弁天山の頂上であろう、と推測し、日本丸主船から、右方へ——弁天山の頂上からは、死角にあたる海上へ、迂回した。
いまは、むしろ、見廻り番が、一人なり、二人なり、居残っていてくれた方がよかった。
それを斬れば、日数がかせげるのであった。

四

源水は、脇岬へ渡って行き、その日は、樺島へ、帰っては来なかった。
翌朝——夜が明けて、太陽が水平線にすがたをあらわすには、まだ小半刻ある頃あい——。
源内、天馬、江戸三郎次、そして黒太をふくめた水主三人を乗せた漁師舟が、凪いだ海面を、すべり出た。
朝陽を受けぬ海は、小波も立っていないせいか、油を流したように、とろりとしていた。
「わっしが、岩礁の穴へもぐろう」
昨夜、江戸三郎次が、天馬に、申し出たのである。
弾丸をくらった肩は、ほとんど癒えていたが、その左手の自由を、完全にとりもどしていたわけではなかった。
「黒太にやらせてはどうだろう？」
「政七のような、海の底を、わが家の庭と同様に知って

いた奴でさえ、片脚を食いちぎられた穴ですぜ。黒太のような未経験な若僧なら、首を食われちまうだろうね」
三郎次に、怪物退治の自信があったわけではなく、船頭長としての面目から、まず、わが身を死地へ置く肚をきめさせたのであった。
夜明け前に、一同は、浜辺に降りたが、源内が、
「ねむい、ねむい！」
と、くりかえしながら、舟に乗り込むと、三米ばかりの鉄の円筒を、三郎次に渡した。
「なんですかい、これア？」
「ゆうべ一睡もせずに製ってみた銛撃ち器だ」
その円筒に、銛をさし込んでおいて、「この元に附けたビードロの中に、オランダ附木が仕込んである。ドンドロと称しているしろものだ。円筒を肩にのせて、狙いをつける前に、エレキテエルから発した火花を、ビードロにあてる。ビードロがはじけて、ドンドロが燃える。この火が、先端に走って、焼夷薬を包んだ銛を、発射させる」と、源内は、説明した。
ドンドロと称するオランダ附木は、現代のマッチに似たもので、塩素酸加里であった。
円筒は、いわば銃身であり、打金と引金がとりつけてあった。
台口のビードロを、エレキテエルの火花で、はじきとばしたならば、銃身を肩にのせ、打金を起して、引金を引く。
銛は、発射されて、火を曳いて飛び、怪物にあたって、炸裂する。
源内の発明通りに、これが働けば、成功するはずであった。
「寛永の頃、播州の三木茂太夫が発明した棒火矢から思いついて、製ってみたのだが……、はたして、水中で、うまく撃てるかどうかな」
「腕力で、銛を突きかけることから比べりゃ、こんなありがたい得物はありませんや」
三郎次は、源内から、いくども、くりかえし使用方法をきいて、
「エレキテエルと空気綱とこの得物がありゃ、鬼に金棒だ。わっしの三十年の経験が、立派に、ものをいいますぜ」
と、うそぶいた。

五

舟が、すうっと、横転した日本丸主船の胴わきに着け

られた時であった。
突如、珍事が起った。
黒太が、いきなり、艪をつかんで、三郎次の脳天へ、振りおろしたのである。
三郎次は、あっけなく気絶して、倒れた。
「何をする!」
天馬に睨みつけられた黒太は、双眸を血走らせつつ、
「かしらは、もう四十七、おれは、まだ二十一だ。おれの方が、三倍の体力があるし、怪物の野郎が襲って来やがったら、すばやくかわすことができるんだ。……おれは、政七のおっさんの仇が討ちてえんだ! 旦那、おれに、さきに、やらせておくんなせえ」
と、たのんだ。
天馬は、源内と顔を見合せた。
源内は、ぐったりとなった三郎次を抱き起してみて、
「意識をとりもどしても、今日一日は、使いものにならぬだろう」
と、云った。
そうでなくてさえ、左手の自由を失っている三郎次であった。
「やむを得ぬ。やってみせろ」
天馬は、許可した。
経験の未熟を、若い体力と敏捷な反射神経でおぎなわせて、のるかそるか、海底洞窟へ、もぐり込ませることにした。
黒太は、銛撃ち器を背負い、火浣布の仮面をかぶって、空気綱の口をくわえると、エレキテエルをかかえて、海中へ沈んで行った。
二人の水主が、せわしく、鞴を開閉して、するすると延びる綱の中へ、朝の空気を送り込んだ。
黒太は、ぐんぐん、海底めざして、もぐった。
まだ陽光が射し込まない透明な海中は、もぐるにつれて、その色を単調なものにしていた。
赤が消え、緑が黒に変化する。
黒太のまわりを、泳ぎまわる魚も、珊瑚礁に居すわった末次船の残骸も、そして岩礁も、すべて同色になった。
海水だけが、淡く澄んだ碧色をしていた。
黒太は、岩礁と岩礁の裂け目を、匍い進んだ。
ひときわ巨大な岩礁が、行手に出現してから、黒太は、ハンドルをまわして、エレキテエルを作動させた。
玻璃の円筒から、橙色の光線が、海水をつらぬき、あたりを明るく照らし出した。
鯛や針魚や鯖が、あわてて、逃げ散った。

しかし、黒太の二倍もある鮫が一尾、その光線にいどみかかるように、右方から突進して来た。
鮫は、どうやら、ひどい勘ちがいをしたらしく、光線の中を、突き抜けると、こんなはずはない、といら立った様子で、また、左方から、突進して来た。
黒太は、ハンドルをまわすのを止めて、光を消すと、鮫が去るのを待って、洞窟に向って、泳いだ。

六

海上では——。
「う、うむっ! ……くそっ!」
おのが激しい唸り声とともに、三郎次が意識をとりもどしていた。
海水で濡らした布で、頭部を巻かれていることに、気がつくまで、朝陽のさしそめた空を仰いでいたが、はっ、とさとって、はね起きた。
「あの青二才め、先駆けの功名をあげようとしやがって……、この船頭長の脳天をなぐりつけやがったか!」
「三郎次、しばらく、安静にしていろ。いま、逆上すると、廃人になるおそれがあるぞ」
源内が、忠告した。
「旦那がたは、黒太をもぐらせたんですかい!」
水主二人が、せわしく鞴を動かして、空気綱へ、風を送り込んでいるのを、三郎次は、いまいましげに、見まもった。
「黒太は、政七の仇を討ちたかったのだろう」
「冗談じゃねえ。あんな若僧に、海底の化物を、退治できるはずがねえ」
「無鉄砲な若い度胸は、時には、老練な経験者にまさるはたらきをする」
「あいつが、政七のように、手か足か、食いちぎられて浮かびあがって来たら、それア、旦那がたの責任ですぜ」
「その時は、おれが、代る」
天馬が、微笑しながら、こたえた。
「つぎつぎに、犬死するこたアねえ、とわっしは、思うがねえ」
吐きすてた三郎次は、さすがに、頭がずきずきと疼くのもかまわず、黒太を追って、海中へもぐる気力はなかった。
海底では——。
黒太が、岩と岩の裂け目に、身を伏せて、むこうに昏

い洞門をひらいた巨大な暗礁へ向って、エレキテエルの光線を、放射していた。
洞門は、小判状の楕円形をみせていた。
――まちげえねえ！　この中には、きっと、莫大な末次金が、かくされている。
その洞窟が、太古からあったかどうかは知らず、洞門が、きれいな小判状をしているのは、そのように、人の手が加えられたからに相違なかった。
この中に、大判小判が、ざくざくと、かくされてある、と洞門が、告げているようであった。
黒太は、興奮しつつ、光の輪を、洞門の壁へ描いて、移動させた。
と――。
洞門前に盛りあがっている砂が、もおっ、と舞い立った。
何か、生きものがうごめいたのを、黒太の視線が、とらえた。
――うつぼだ！
黒太は、そこへ、光線をあてた。
とたんに、砂の中から、緑色の怪物が、ぬうっ、と姿を現した。
途方もない巨体であった。
ゆっくりと開閉する奇怪な口が、なんとも、無気味であった。

七

――政七っつぁんよ、見ていろ！　仇を討ってくれるぞ！
黒太は、背負っていた銛撃ち器をとりはずすと、円筒（銃身）を両膝ではさんだ。
それから、エレキテエルを、横に倒して、ハンドルをぐるぐる廻転させた。
箱の上部中央から突出した電極の銅線（さしずめ、テレヴィジョン受像器のアンテナを想像してもらえばよい）が、パチッパチッと、火花を散らした。
黒太は、火花を、円筒の元口にふくらんだビードロに近づけた。
一瞬――。
ビードロが、はじけた。
黒太は、すばやく、円筒を右肩にかついで、洞門前の砂地へ、狙いをつけた。
砂が盛りあがっていたのは、岩がかくれていたためであった。その岩に穴があって、鱓は、そこにかくれていたのである。
にわかに、橙色の光で、すみかを照らされた怪魚は、なんだろう、と巨体の半身を現している。
――やるぞ！　見ていてくれ！
ドンドロが燃えて、円筒の中を、先端めがけて、ゆっくりと、つたわってゆくのを、黒太は感じて、政七の霊魂へ叫んだ。
打金を起した。
あとは、引金を引くばかりであった。
その時、黒太は、突如、くわえた綱口の仮面を、ぐい、と強く、ひっぱられた。
思わず、首がねじれそうになって、視線を仰がせた。
手のとどく近さの頭上に、こちらの身丈の倍もある巨大な海蛇が、空気綱の火浣布に、噛みついているのを、黒太は、みとめた。
――ちきしょうっ！
黒太は、ぐいぐいと空気綱をひっぱられるのに、必死に抵抗しつつ、円筒の引金を引いた。
銛は、たしかに、発射された。
しかし、火の尾を曳いて飛んだ銛は、開閉する鱓の口の上を、かすめて、洞窟の中の闇へ、吸い込まれるように、消えて行った。
黒太は、われを忘れると、ふんどしに差した小刀を抜きはなつや、海蛇めがけて、襲いかかろうとした。
海蛇は、その殺意に、すばやい、反応を示した。
空気綱に食いつきながら、くるりと反転しざま、泳ぎあがって来る黒太の顔へ、ぎりぎりと巻きついた。
空気綱よりも太いしろものに巻きつかれて、黒太は、身もだえた。
白刃を、めちゃめちゃに、振りまわしたが、むなしく、海水を切っただけであった。
あまりの苦しさに、黒太の体力は、急速に消耗した。
気が遠くなって来た。
――死んでたまるか！
おのれをどなりつけたものの、もはや、小刀で、海蛇を突き刺す余裕はなくなっていた。
――ちきしょう！　死んでたまるか！

八

突然、黒太は、顔を締めつけられていた苦しさから、解放された。
救助の手が、自分の片腕へかかり、ぐんぐん曳きあげられる安堵感が、若い黒太に、意識をとりもどさせた。

海蛇が、両断されて、ゆらゆらと落ちてゆくのが、目にのこった。
ぽかり、と海面へ、首が出た一瞬、黒太は、思わず、
「神様！」
と、叫んだ。
救助してくれたのは、天馬であった。
舟へはいあがった黒太は、いきなり、頬げたへ、拳をくらった。
三郎次の拳であった。
「かしら、す、すまねえ！」
「ざまをみろ、この餓鬼め！　やっぱり、仕損じたじゃねえか！」
「海蛇が、空気綱に食いつきやがったんだ。あん畜生が、現れなけりゃ、うつぼを、おら、仕止めることができたんだ」
「あとの祭に、わめいたところではじまるけえ」
三郎次に、きめつけられて、黒太は、ようやく、興奮からさめて、天馬や源内や水主たちの視線を、まぶしいものに感じた。
「うつぼは、どこにいた？」
天馬が、問うた。
「洞窟の入口の、砂にかくれた岩穴だ。でっけえ奴だ。あいつを退治しなけりゃ、洞窟の中には、入れねえ」
「今朝は、ひとまず、ひきあげよう」
源内が、思案顔で、云った。
黒太は、銛を発射してしまっていた。もう一度、円筒へ銛を入れて、射撃装置をつくりなおさなければならなかった。
その銛撃ち器もエレキテエルも、黒太は、海底へ、すてて来ていた。
水主二人が、とび込んで、それらをひろいあげて来た。
「うつぼが、海蛇をむしゃむしゃ食っていやがった！」
水主の一人が、告げて、その巨体を見た恐怖を、正直に、顔色に示した。
「かしら、明日、おれに、もう一度、やらせてくれろ！　たのむ！」
舟が、樺島の浜辺へ漕ぎもどされた時、黒太が、三郎次に、頭を下げた。
「おれが、殺されたら、てめえが、やるんだな」
三郎次は、ひややかに、はねつけた。
天馬が、小屋へ入ると、いつの間にか、松井源水が、帰って来ていた。
「どうした？」

「うむ。見張りの隠密が二人、弁天山に残っていた」
「斬ったか？」
「うむ、斬ったが……、どうやら、交替している模様だ。死体は、見つからぬようにかくして来たが、いずれ、敵は、この樺島に、目を光らせるだろう。……急ぐことだな」
「二三日うちに、洞窟の中に、宝があるかないか、調べて、かくされていれば、ひきあげることにしよう」
高山彦九郎は、となりの小屋で、高手小手にしばられて、横たわっていた。

末次金

一

同じ日――。
御座船江戸丸は、瀬戸内海を航行して、馬関海峡を抜け、壱岐水道から、一路、まっすぐに、肥前国の沖あいを、南下していた。
夜が明けた頃あいには、角力灘を過ぎ、長崎湾も、すでにうしろにしていた。
「もうすぐだな」
舳先に立った禁門影人が、かたわらに出て来た船頭の鬼吉に、云った。
「野母半島でさあ、あれが――」
鬼吉が、くろい陸地を指さした。
影人は、背後に、ひっそりとたたずむ無香に、
「あの半島の突端に、脇岬があるのだな……」
と、たしかめた。

「はい」
「そなたが、日本丸船団が潰滅させられた光景を目撃したのは、その脇岬の沖にある樺島であった、と申していたな……」
「樺島の行者山の頂上に居りました」
「ふむ。捨て草のそなたがえらんだ場所が、そこだ、とすると、公儀隠密である鬼堂天馬も、あるいは、そこをかくれ場所にするであろう」
「行者山ならば、半島の様子も天草灘のありさまも、長崎の方より南下して参る船影も、すべて、見てとることができまする」
「行者山の頂上には、小屋があるか？」
「ございます」
「生き残った面々が、たてこもっているのは、樺島の行者山と、断定しても、あやまりはないようだな」
　影人から、そう云われた鬼吉は、
「どうでございますかねえ」
　と、首をかしげた。
「もう、何処かへ、雲がくれした、と推測したいのか？」
「いえ、そうじゃねえんで……、あっしは、馬関を抜けたら、なんだか、急に、不吉な予感がして来やしたんで――へい」
「全員が、敵の猛攻を受けて、討死した――そう思うのだな？」
「まアね。……そう思いたくはねえんだが、敵が敵ですからね」
　鬼吉は、出帆した時の自信をうしなっていた。
「無香、そなたは、どう思う？」
　影人は、その直感力を、求めた。
「わたくしは、幾人かは、生き残っておいでに相違ない、と存じます」
「鬼吉――」
　影人は、微笑しながら、
「女の方が、直感力は、男よりも鋭いのではないかな？」
「まだ、いっぺんも嬶をもらったことのねえ、女郎買いしか知らねえあっしだから、敢えて、こちらの娘御の予想にさからいはしませんがね」
「遠路はるばる、救援にやって来たのだ。生き残っていてもらおうではないか」
　陽が昇り、むし暑い汐風に、船足をはやめた江戸丸は、野母半島をまわり込んだ。
　樺島が、手のとどく近さに来た。

　望遠鏡を、眼にあてて、じっと、行者山を眺めやっていた影人は、
「人の気配はないようだが、だからこそ、ひそんでいると受けとってもよかろう」
　と、云った。

二

「大変だ！」
　陽が西に傾いた頃あい、一人の水主が、天馬のいる小屋へ、とび込んで来た。
　小屋には、源水と三郎次もいた。
「どうした？」
「公方様の御座船が、この島へ近づいて来やすぜ！」
「御座船?!」
　天馬も源水も三郎次も、一瞬、耳をうたがった。
「御座船を、てめえ、見たことがあるのか？」
　三郎次が、問うた。
「おら、十年前に、天地丸という御座船の艪をこいだことがあるんだ。……朱色の大丸のまわりを八つの小丸がとりまいた船印は、御座船のほかには、ついちゃいませんぜ」
　天馬が、遠眼鏡をつかんで、小屋をとび出し、源水、三郎次がつづいた。
「まさしく、あれは、御座船だ！」
「公方様が、はるばる、ここまで、おいでなすった、ってえわけですかい？」
「いや、上様がおいでになるはずはない。……あれは、敵か、味方か、いずれかだ」
　若年寄・水野壱岐守忠見が、あの将軍家関船に乗り組んで、やって来たか！
　それとも、天馬の主人である御側用人田沼主殿頭意次が、将軍家の許可を得て、航海して来たのか？
　いずれかに相違ない、と受けとれた。
　大目付などが、御座船を使うことは、まず考えられなかった。まして、目付の大道寺左近が、隠密団をひきつれて、乗っている、と思いめぐらすのは、うがちすぎた妄想であろう。
　――あるいは、水野壱岐守が、総指揮をとっているならば、当然、大道寺左近も、そばにひかえているだろう。
　もし、そうであれば、こちらは、全滅を覚悟しなければならなかった。
　味方が援けに来てくれた、という可能性の方が、薄か

った。
　鬼堂天馬は、禁門影人の手足となった無香という女忍者の存在を、知らされていなかったのである。
「若年寄の水野壱岐守が、御座船の航海試しという口実をもうけて、長崎へやって来た。大道寺左近の報告を受けて、自ら指揮をとり、攻撃すべく南下して来た。そう受けとってよさそうだな」
　天馬が、云うと、源水と三郎次は、顔を見合せた。
「やっぱり、ここで、わしらは、無縁仏になるのか」
「そういうことだわい」
　天馬は、なお、じっと、遠眼鏡で、近づく御座船を、見まもっていたが、不意に、
「ちがうぞ！」
と、叫んだ。
「味方か?!」
「そうだ。主帆の頂きに、いま、菊の御紋の小旗が、ひるがえされた！　あれは、味方のしるしだ！　禁門影人殿が、救援にやって来たのだ！」
「しめた！」
　文字通り、蘇生のよろこびが、三人の血汐をわきたたせた。
「おれたちが、生き残って、ここにかくれていることをはっきりと、御座船に報らせろ！」

三

　御座船江戸丸は、樺島の南側の、断崖に沿うて、ゆっくりとまわり込んだ。
　外海へまわれば、脇岬からは、船が見えなくなるからであった。
　但し、外海側には、碇泊できる浜も入江もなかった。
「鬼吉、錨をおろして、船と崖を、綱でつなげるか？」
　影人が、問うた。
「やってみやしょう」
　もし、時化でもおそって来れば、船の胴体は、断崖へぶちつけられて、砕けるおそれがあった。
　太平洋に面して、太古より怒濤に堪えて来た海蝕崖は、船など寄せつけぬ険しさであったが、影人は、それゆえに敢えて、かくれ場所として、そこをえらんだのである。
「ここいらで、よかろう。おい、錨を投げろい！」
　鬼吉は、つづいて、からだへ綱を巻きつけた三人の水主に、断崖下へ、たどりつかせた。
　その時――。

　断崖縁に、数個の人影が現れて、綱を投げおろした。
　綱は綱へむすびつけられた。
　すなわち、船と樺島が、つながれたのである。
　それから、小半刻後――。
　禁門影人は、行者山の小屋に入って、鬼堂天馬・松井源水・江戸三郎次と対座していた。
「……そうか。あの座礁した主船の下に、沈没した末次船があり、海底の洞窟に、末次平蔵がかくした莫大な金銀が、秘蔵されてあるらしい、と推測するのか」
　影人は、微笑した。
「わしのあて推量にすぎないのであったら、無駄骨を折ることになるが……」
　最初に、そのことを云い出した源水は、いまは、なんとなく、一同に期待を抱かせたのを、すこし後悔している様子であった。
「乗りかかった船には、乗らずばなるまい」
　影人は、青く冴えた眉をあげて、さわやかな語気で云った。
「どでかいうつぼが、洞門で、口をぱくぱくさせてやがるんでさあ。まず、その怪物を退治しなけりゃ、中へもぐり込めねえ」
　三郎次が、告げた。
　天馬が、その怪物のために、水主の一人が生命を落した、とつけ加え、この日の朝の失敗も語った。
　すると、影人が、
「平賀源内は、その銛撃ち器を、明朝までには、つくりなおすのだな……」
「何かを発明することに夢中になると、寝食を忘れる男ゆえ、たぶん……」
　天馬が、こたえた。
「では、明朝、わたしが、一番に、もぐることにしよう」
「お手前が――？」
「わたしは、これでも、海中にもぐる習練も積んでいる。うつぼ退治は、まかせておいてもらおう」

四

　三日後の正午――。
　影人は、無香を供にして、黒太を交えた水主を五人えらんで、日本丸主船わきに、小舟を寄せた。
　海底へもぐるのが、二日おくれたのは、平賀源内が、送風装置器と銛撃ち器に、さらに、改良を加えたためであった。

源内は、樺島の漁師村へ降りてゆき、漁師たちが、食料用にたくわえている海草をゆずり受けて、これを塩水で煮て、硫黄を加えてどろどろにし、人の首型の丸木に塗りつけて、護謨の面をつくり、さらに、送風には、ふいごではなく、揚水機から思いついたブランド・スポイト（消火用ポンプすなわち竜吐水）を発明したのであった。

さらに、源内は、銛撃ち器の方も、円筒に、照準器を、打金わきにとりつけ、銛を発射した瞬間、火の尾から、花火のように、四方へ光が散る工夫をした。

この実験を、源内とともにやってみた影人は、

「あとは、末次金があるかないかだけだな」

と、笑ったことだった。

「無香、しばらく様子をみて、あとにつづけ」

そう命じておいて、影人は、ゆっくりと、海中へ、沈んだ。その腰には、小魚を入れた網がさげられていた。

真昼の陽光を濾過した海の中は、さまざまに彩られて、目がさめるような美しさであった。

影人は、岩礁に降りると、まっすぐに、洞門めざして、泳いだ。

泳ぎつつ、腰の網の中から、小魚を片手で、つかみとった。

……砂地に伏せて、しばらく、様子をうかがってから、エレキテエルの光線を、砂の盛りあがった箇所へ、放射した。

まず、その奇怪な口が、針のような鋭い歯をひき剝いて、現れた。

次いで、徐々に、巨大なからだを、垂直にのばして来た。

影人は、光線をあてつつ、至近距離に迫って行った。

左手につかんだ小魚数尾を、鱏の口の上へ、押しやった。

見えるのか見えないのか、わからぬほど小さな目を有った怪物は、次の瞬間、おそるべき敏捷な動きを示して、小魚を、ぱくっと、のみ込んだ。

——いまに、のたうちまわるぞ！

小魚の腹の中には、源内のつくった猛毒が、入れてあったのである。

はたして……。

鱏は、砂を舞いあげて、穴からとび出て来た。

その時すでに、影人は、銛撃ち砲の発射の構えをとっていた。

引金が、引かれた。

火花をまいて、銛は、怪物めがけて、水中を奔った。

狙いは、あやまたずに、銛は、鱏の口腔ふかく、突き刺さった。

五

無香が、短い布いちまいを、腰に巻きつけた裸身で、しなやかに海水をかきつつ、影人のそばへ降りて来た。

無香は、伊豆の荒海で、潜水の技を修得していた。

影人は、鱏の死体を指さし、

——鮫に、気をつけろ。

と、手まねで教えておいて、洞窟の中へ、泳ぎ入った。

エレキテエルに照らされた内部は、しかし、その光を拒否するように、水はくろずみ、岩肌がぼやけていた。

いちめんに、藻が、すすきのように、なびいて居り、もし、その中に足を入れると、何かおそろしい生きものが、食いつきそうであった。

洞窟は、五米あまりで、右折していた。

影人は、ためらわず、岩壁に沿うて、まがった。

——あったぞ！

かすんではいたが、そこの岩棚に、整然と、石で造られた箱が、ならべてあった。

しかも——。

さいわいなことに、二十以上もあるそれらの箱には、鉄の鎖がつけられてあった。

影人は、一筋の鎖をつかみあげ、それをたぐりつつ、洞門へ、退った。

鎖は、藻の中にもぐっていたが、まちがいなく、岩礁の外の砂地まで、のびていた。

すなわち、鎖をひっぱると、石箱がひき出されるしかけになっていた。

影人は、無香に合図して、

——この鎖を、綱へつなぐから、舟へ曳きあげよ。

と、命じた。

無香は、人魚のようなすばやさで、海上へ、かけあがって行った。

すぐに、鎖をつないだ綱が、ぐいぐいと、たぐられた。

影人は、石箱が、ゆらゆらとゆれながら、ひきあげられる光景を、仰いだ。

と——。

影人は、猛烈な勢いで、自分に突進して来る鮫を、みとめた。

四肢を縮めて、岩礁の角を蹴った影人は、エレキテエ

ルの光を、まともに、鮫へあびせつけつつ、背負うた銛を、右手につかんだ。
人間と海の野獣の闘いが、開始された。
ぐわっ、と大口を剝いた鮫は、エレキテエルへ、噛みつこうとした。
影人は、すかさず、銛を横にすると、その大口へ、柄を押しつけた。
鮫が、がりっと噛みくだいた——次の瞬間、影人は、その背に乗っていた。
片脚にくくりつけていた脇差を抜くと同時に、鮫の目を、刺しざま、ひとえぐりした。
ものすごい身もだえをした鮫は、白刃を刺されたまま、影人をふりはらって、奔り去った。
——他の鮫どもが、あいつを襲って、とも食いをするだろう。
影人は、やおら反転して、舟へ向って、浮かびあがって行った。

六

影人が、ぽかりと海面に首を出すのと、舟で歓喜の声があがったのが、同時であった。
天馬・源内・源水そして三郎次が、別の小舟でやって来ていて、いま、石箱の蓋が、ひらかれたのである。
かれらの苦労は、むくいられた。
石箱の中には、大判・小判が、異邦の金貨を交えて、びっしりと詰められてあった。
「これが、太閤さんのつくった慶長大判かい！　阿弥陀如来の後光よりも、まぶしいぜ！」
三郎次が、その一枚を、空へかざして、叫んだ。
「石箱は、洞窟の中に、二十三箇ある」
影人が、告げた。
「われわれ貧乏人には、かぞえきれぬ巨額だな」
源内は、そう云いながら、むしろ、その莫大さよりも、南蛮金貨に興味を示して、しきりに、と見こう見した。
それは、イギリス金貨であった。
「この一箱だけで、どれくらいの高になるのだろうか？」
源水が、影人へ問い、天馬にも、返辞をもとめた。
「いま通用している一両小判は、八代公（吉宗）の元文年間に、改鋳されたしろもので、慶長金とは比べもならぬ粗悪だから、この黄金を、いまの小判に鋳なおすと……さて、幾万両になるか？」
天馬も、見当がつかぬ面持であった。影人も、さすがに、思いもかけず入手した途方もない大金を、眼前にして、無言であった。

末次平蔵が、家財を没収されて、隠岐へ流されたのは、延宝四年（一六七六年）のことであるから、当然、この石箱の中の大判・小判は、慶長からほぼ百年間に、つくられた優良の品質であった。
大判は、千分のうち、純金が六七七・〇、銀が二七六・八、銅が四六・二の割合であった。
小判は、純金が八四二・九の高率であった。
幕府が、江戸城金蔵の貯えが乏しくなって、大判・小判を悪改鋳しはじめたのは、元禄年間からであった。
経費の膨張と、金銀の海外流出と、貨幣鋳造の地金を供する金山銀山が、しだいに産出額が減少したため、幕府は、金貨の品質を低下させざるを得なかった。
元禄の大判は、純金五一七・七であり、小判は、五七三・七であった。慶長・元和・寛永年間につくられた大判・小判とは、まったく比較にならなかった。
七代将軍家継・八代将軍吉宗の時世に、新井白石の主張する復古主義によって、良質の金銀貨がつくられたが、わずか二十年も経たぬ元文元年（一七三六年）には、またまた悪改鋳をせざるを得ない財政の窮迫が来たのであった。

七

黄金の詰まった石の宝箱を、つぎつぎと海底から曳きあげる、という作業は、決して容易ではなかった。
まず、野母半島の岬に、敵の目があることを、絶えず意識のうちに置いて、一瞬の油断も許されなかったこと
石箱は、洞窟のずっと奥にあり、しかも、その大半が、岩棚に、牡蠣でくっつけられていたこと。
石箱にとりつけられ、藻の中にかくされていた鉄鎖が、百年も経ると、腐蝕して居り、強くひっぱると、たちまち、ちぎれてしまったこと。
海底を照らすエレキテエルが、しばしば、故障したこと。また、送風装置器がひとつしかないために、洞窟内に、一人しか泳ぎ入ることができなかったこと。
鮫や海蛇など、獰猛な敵が、海中にいたこと。
さらに、季節が、海の荒れる時期を迎えていたこと。
その他、思いもかけぬさまざまな障害が起り、影人はじめ水主にいたるまで、困難を克服するために、非常な努力を尽した。
そして、五日間で、ようやく、十一個の石箱を曳きあげた。

この作業に、加わらなかったのは、ひとり高山彦九郎だけであった。

松井源水に投げられた手裏剣で負うた左腕の傷は、癒えていたが、源水に対する憎悪は消えていなかったし、彦九郎は、海底にねむっていた宝がついに発見されたことなど、すこしも興味がなかったのである。

十一個目の石箱が曳きあげられた日の宵、彦九郎は、影人の前に現れて、

「拙者は、明朝、この島から退去いたしたく、許可の儀、願い上げます」

と、申し入れた。

「何処か、行先のあてはあるのか?」

「いや、この彦九郎にとって、日本中の山野が、住処でござる」

昂然と、胸を張ってうそぶく二十歳の熱血漢を見まもった影人は、ふっと、微笑した。

「お主は、どうやら、われわれの同志にはなれぬようだな。諸方を独行流浪するのが、お主の天命らしい」

「いかにも、その通りでござる」

彦九郎は、同志たるべき人々から、つぎつぎと、手負わされ、あるいは侮辱を蒙っていた。

武庫山中では、平賀源内の製った麻薬をのんだ鬼堂天馬に、太股を斬られていた。

江戸では、山縣大弐を尊敬して、その門弟となるや、出現した影人によって、たちまち、道場から追われていた。

そして、この野母半島では、立去ろうとして、松井源水の手裏剣を撃ちかけられていた。

日本丸に乗ったのも、自分の意志ではなく、影人の指令であった。

上州新田郡細谷村の山野で、けもの相手に天性の猛気を発散させながら、育った若い野人は、禁門影人と名のる高貴の青年の前では、おのれの卑小さを意識させられる——その劣等感に堪えられなかったのである。

八

「去るがよい。わたしも天馬も源内も源水も、どうやら、お主にとって性の合わぬ曲者であろうゆえ、ともに力をあわせて、世直しをする志が燃えぬのであろう。敢えて、止めはせぬ」

影人は、許した。

「かたじけのうござる。独歩孤行が、拙者の性分でござる」

「太平記に書かれているな。妻子・珍宝および王位など、おのが一命の終りに臨んで、ともに随行はしてくれぬ、と」

「…………」

彦九郎は、遠くへ眼眸を置いた影人の容姿に、あらためて、一種の畏怖をおぼえた。

視線を、彦九郎へもどした影人は、

「別離にのぞんで、一言だけ、お主に忠告しておくことにしよう。お主に、はじめて会った二年前の冬、お主は京都三条大橋の上に正座して、皇居へ向って、大声をはりあげた。あのような振舞いは、おろかだ」

「…………」

「お主は、多言を弄した山縣大弐に私淑して、その塾に入って門下になった。あれも、おろかだ」

「…………」

「天、何をか言うか、四時、行われて百物生ず、天、何をか言うか——この孔子の教えが、判るか!」

「いえ、判り申さぬ」

彦九郎は、正直にかぶりを振った。

「志は実行してこそ、事が成るのであり、実行の前に弄する言辞など、末梢にすぎぬ、ということだ」

「判り申した。……おさらばでござる」

一礼して、立ち去ろうとする彦九郎に、影人は、無香を呼んで、一緒に岬へ渡れ、と命じた。

「拙者は、独歩孤行が性分でござる、と申し上げたはずでござる!」

「この娘を、行かせるのは、お主のためではない。われら一同の身の安全のためだ」

影人は、云った。

もし、岬に敵の隠密団が集結していると、知ったならば、遠見山から烽火をあげる——それが、無香の任務であった。

満天に星がちらばった深夜、その星の光もとどかぬ黒い海を、小舟が一艘、樺島の浜辺から、すべり出た。

彦九郎を乗せて、無香が、漕いでいた。

おだやかな微風が、肌に心地よかった。

「そなた——」

彦九郎は、なんとなく、呼びかけた。

「そなたは、よほど、あのさきの天子の兄君に、惚れているらしいな」

「…………」

無香は、こたえなかった。

「男子からも、女子からも、惚れられる御仁だ、とおれも、みとめるのにやぶさかではない。いや、みとめざるを得ないから、おれは、そのそばから、去るのだ」

「………」
「そなたは、そばにいるのがうれしいのであろうが、おれは、そばにいると、五体に燃えている焔が、しだいに、消えかかるようないら立ちにかられるのだ。……おれは、おれの道を、自らえらんで、往く！」

九

行者山では、源水が、
「若宮殿、高山彦九郎を去らせたのは、まずかったのではありますまいか」
と、云った。
彦九郎が、敵の隠密に発見されることは、この樺島に生き残り組が、まだ、いる、と教えるようなものであった。
影人は、微笑して、こたえた。
「これは、賭だ」
「賭とは――？」
「鼠がつぎつぎと数を増せば、これを退治する奇策をとらねばなるまい。夜が明ければ、おそらく、鼠の群がいるか否か、判ろう」
東の空がしらんだ頃合、影人は、野母崎に向って、じっと遠眼鏡をあてていたが、
「やはり、鼠の群は、集結していた」
と、云った。
遠見山の頂上から、ゆるやかに、黄煙が、たちのぼるのをみとめたのである。
白煙ならば、せいぜい数人。
黒煙ならば、十人以上。
黄煙ならば、二十人以上。
赤煙ならば、三十人以上。
無香との打ち合せは、それであった。
「どのような奇策で、迎え撃つ、といわれるのか？」
天馬が、問うた。
「敵がたは、用心深いゆえ、白昼、襲っては来ないであろう。夜の闇に乗じて、ひそかに、泳いで来る、と推測できる。……まず、座礁したあの日本丸に、泳ぎつき、それから、こちらの浜へ、渡って来ると判断してよかろう」
横転した日本丸主船の内部には、食糧はじめ、鉄砲、火薬その他の品が、たくさん積んであったことは、すでに、敵がたは、調べているはずであった。
それらの品々の大半が、なくなっていれば、この樺島へ、はこばれたことが明白となる。
船頭長・三郎次と御座船江戸丸をここまで航海させて来た鬼吉に、

「宵闇が降りたならば、江戸丸を、こちら側へまわせ」
と、命じた。
江戸丸は、目下、太平洋に面した側に、碇泊させてあった。
影人は、次いで、平賀源内に、
「将軍家御座船に備えつけた大砲が、どれほどの威力があるのか、調べてもらいたい」
と、依頼した。
天草灘の外側は、屏風のように切り立った断崖であり、その断崖の一部が、太古から打ち寄せる荒波によって、えぐり取られて、洞窟状になっていた。
島の漁師たちは、これを、『白戸の洞穴』と呼び、海神の憩い場所だといい伝えて、誰一人、近づいていなかった。
影人は、万一の場合を予想して、『白戸の洞穴』へ、十一個の石箱を、匿していた。
無為とみえる盛夏の一日が過ぎて、落日のかがやきも夫婦岩の彼方に消えた。
御座船江戸丸は、ゆっくりと、半島側へ、まわって来た。

十

日本本土の最西端に位置し、長崎半島の先端である野母崎の三十九キロに及ぶ海岸線は、ある処は砂丘となり、ある処は岩棚となり、またある処は、けわしい奇岩がじかに海へ落ち込んでいた。
自生する樹木は、大半が亜熱帯性のものであった。
無香は、その日、明けがたに、遠見山から、黄煙の烽火をあげておいて、すばやく脇岬へ移って、祇園山の椿の自然林の中に、身をひそめていた。
前夜、無香は、高山彦九郎を、千々石湾の奥まで、送っていた。忍者独特のカンで、無香のえらんだけものみちには、敵がたの姿はなかった。彦九郎は、島原へ抜ける、と云っていたが、ぶじに、行ったに相違ない。
無香は、椿の梢のあわいから、夜空に、つぎつぎに生れる星によって、時刻を測っていた。
初更（午後八時）きっかりに……。
無香は、眼下の野生朝顔の群生した地点に、二十数個の黒影が出現するのを、みとめた。
――やはり、今宵、襲撃する手筈なのだ！
無香は、闇に利くまなざしで、敵の一団の動きを、追った。
砂丘へ降りた一団は、音もなく、おだやかに凪いだ海へ、身を沈めて、泳ぎはじめた。
首だけを海面にのぞかせて進む攻撃隊は、無香の視力

のとどかない沖へ、非常な速さで、消えた。
無香は、しかし、かれらが、日本丸主船をめざして泳いで行ったのを、たしかめていた。
祇園山から、狼が仲間を呼ぶ声に似た音が、海原へひびいた。伊豆の『捨て草』が使う独特の合図笛であった。
御座船江戸丸は、その時、天草灘を大きく右方へまわり込んで、日本丸主船へ、百米の近距離へ迫っていた。
影人は、艫に、平賀源内と肩をならべて立っていたが、
「よし！　わたしの予想は、的中した。……源内殿、こんどは、お主が、習いおぼえた火薬知識を、存分に発揮して、その火砲の一撃を、的中させてもらおう」
と、云った。
「まかせておいて頂く。海底の洞窟の宝さがしの苦労にくらべると、なんの造作もない。第一、こんな壮快な気分になったのは、ひさしぶりのことだ」
源内は、彦九郎とはまた、ちがった意味で、末次金が曳きあげられると、もう、宝そのものに対する欲望など、ほとんど持たなかったのである。
水主たちが、砲門を、日本丸主船の胴体へ、狙いつけて、「撃て！」という命令を待ちかまえているところへ、歩み寄った源内は、照準鏡をのぞいた。
「狙いを、すこし下げろ。……うむ。もうちょっとだ。……下がりすぎたぞ。ほんのわずか、上げろ。……よし！　きまった！」
まさしく、この瞬間が、平賀源内という曲者の、生甲斐であった。

十一

大砲の威力が、わが国では、きわめて軽視されたことは、すでに、さきに述べた。
寛永十四年から十五年にかけての島原の乱に於て、幕府は、平戸に在ったオランダ軍艦に依頼して、原城を砲撃してもらったが、さして効力がなかったために、大砲に就いて、無関心になったのである。
御座船江戸丸が据えている二門の大砲も、慶長のむかし、家康が国友鉄砲鍛冶に造らせたものと、ほとんど変ってはいなかった。
さいわいなことに、こちら側には、平賀源内という、脳中に奇想を満たした人物がいた。
江戸丸に乗って、二門の大砲を一瞥した源内は、
「こんな大筒では、百歩はなれて立つ案山子さえもぶっとばすことはできぬ」

と断言し、水主十余人に命じて、ひとかかえもある松の幹を、切り倒させ、それで、とりあえず、砲架を組みたてて、大砲を据えたのであった。
すなわち、旋回九十度、仰角数十度の利く砲架であった。
次いで、源内は、いったん日本丸主船から行者山へはこんでいた多量の火薬の半分を、ふたたび、横転したその船底へ、もどしておいたのである。
船底へもどした火薬は、一発の砲弾によって、凄じい連鎖反応の爆発をするように、源内は、仕掛けて来た。
「ようし！　いいぞ！　撃てっ！」
源内が、叫んだ。
砲架の上で、大筒が、轟音とともに、ぐうん、と後へ引かれた。
砲門から発射された弾丸は、源内発明の照準鏡による狙い通りに、海上を飛び、日本丸主船の胴体下部を、つらぬいた。
夏の夜をいろどる華やかで、壮烈な火焔の宴が、そこに展開した。
横転した日本丸主船は、おのれを造ってくれた人々のために、最後の任務をはたして、海上に四散した。
はじけ飛ぶ火花の中で、いくつかの人影もまた、ふっとぶのが、みとめられた。
わずか数分間の出来事であった。
燃え屑が、海面にちらばって、つぎつぎと消えるのを、じっと眺めやりながら、影人は、
「どうやら、泳ぎついた隠密どもは、全員が、船と運命をともにしたようだな」
と、云った。
しかし——。
これは、必ずしも、勝利の快挙ではなかった。この撃沈のために、海底の岩礁が崩れて、洞窟の門は、ふさがれてしまったのである。
黒太が、もぐって行き、それを知って、浮上すると、
「だめだ！　もう、洞窟の中には、入れねえ」
と、叫んだ。
影人は、云った。
「やむを得ぬ。あと十二個の石箱の曳きあげは、あきらめる」
世直しをするためには、十一箱の黄金で充分だ、と考えたのである。
世直しをするのを、影人は、いそがなければならなかった。

賄賂

一

明和六年（一七六九年）八月十八日。

江戸城内の御用部屋の実力者の座が、大きく変った。

板倉佐渡守勝清（上野安中・三万石）が、西丸老中から、本丸老中になった。

西丸老中には、阿部豊後守正允（武蔵忍・十二万四千石）が、昇った。

それまでの御用部屋には、

松平右近武元（上野館林・五万四千石）

松平右京大夫輝高（上野高崎・八万二千石）

松平周防守康福（三河岡崎・六万石）

阿部伊予守正右（備後福山・十万石）

この顔ぶれであり、その首席は、延享四年（一七四七年）から、二十余年の長いあいだ老中をつとめている松平右近武元であった。

松平武元はじめ、宿老たちの権力を、大きく後退させたのは、御側用人の田沼主殿頭意次が、『老中格』として、御用部屋に入り、評定所の閣議に加わったためであった。

すでに――。

田沼意次は、御側用人として、十代将軍家治と老中・若年寄とのあいだに立って、そのパイプ役をつとめ、隠然たる実力を手中にしていた。

このたび、意次は、誰はばかることなく、御用部屋で、評定所で、幕政に関して、おのが意見を述べ、積極政策を主張する座に就いたのである。

宿老首座に在る松平武元も、田沼意次が老中格になるのを、それが将軍家治の意嚮であるならばやむを得ぬ異例のものと、受けとらざるを得なかった。

ここに、老中・若年寄には、譜代大名が就任するという格式が、はじめて、田沼意次によって、破られたのであった。

松平武元は、人格識見が秀れていた。謹厚忠誠の執政ぶりは、徳川将軍に奉公するために生れて来たような人物であった。

しかし、いかに人柄が高潔であっても、それが、必ずしも、政治家として立派であることにはならなかった。

松平武元は、八代将軍吉宗が、財政改革に非常な努力をはらい、結局は、失敗して、失意のうちに隠居したのを、看て来た。

吉宗は、将軍となるや、まず、幕府の台所の赤字を埋めるために、倹約政策をとり、支出を抑制した。ふくれあがった商業資本に対するたたかいでもあった。やがて、吉宗は、商業資本を圧迫することの不可能をさとるや、これを逆に利用して、依存しようとした。

封建幕府の体制下では、最大の商品は、米であった。米の価格が落ちると、たちまち領主の台所は火の車となり、反対に、価格がはねあがると、一般民衆が、食いつめることになる。

そこで、吉宗は、米価を維持するために、江戸・京・大坂三都の商業資本を統制した。米価維持のためには、敢えて、空米相場も公認した。

一応は、成功したかにみえたこの『享保改革』も、三都の大商人の資本力をさらに増大させる結果となり、江戸城はじめ各地の城の金蔵に、千両箱をたくわえさせることはできなかった。

松平武元は、吉宗の失敗を看たために、ついに、なんの積極政策もとらずに、二十余年をすごして来た。つまり、政治家としてのかれは、無能者であった。

二

『老中格』となって、下城して来た田沼意次を、上屋敷の書院で、一人の青年が、待っていた。

禁門影人であった。

「御用部屋に入られた由、慶賀に存ずる」

影人の挨拶を、意次は、多少照れながら、受けて、

「明日からは、この意次が、お手前の意のままにあやつられる木偶に相成るのかな」

と、云った。

この年の春――半年前。

それまで消息を絶っていた影人が、突然、意次の前へ、姿をあらわしたのであった。

純金を、当代の小判にして百万両ぶん、土産にしたのである。

率直に、悦びを満面に刷く意次に向って、影人は、云ったことだった。

「この純金は、平賀源内が、伊豆山中にて、あらたに発見した大金脈から採り、ひそかに、『わん掛け』したもの、とお受けとりありたい」

伊豆金山は、関ケ原役の直後――慶長五年（一六〇〇

年）に、天下人となった家康が、大久保長安を金山奉行にして徳川家直轄の鉱山に指定し、佐渡とならぶ莫大な産金量を誇ったものであった。

　しかし、金脈を掘り進むうちに、泉脈にぶつかり、噴出する温泉が、採鉱をさまたげ、伊豆金山は、いまは、みるかげもない衰微をきたしていた。

　平賀源内が、金山事業師としても天才であることは、秩父の中津川金山の発見採掘・選鉱・精錬まで、指揮したことで、世間にきこえていた。

　しかし、意次は、七八年前に、源内自身の口から、

「伊豆の金を採ることは、縦横にはしる泉脈を涸れさせぬかぎり、全く不可能と存じます」

と、きかされていた。

　鬼堂天馬の報告を受けていた意次は、その金が、長崎半島の先端野母崎の海底から曳きあげられた末次平蔵の匿し財宝であることを、すでに、知っていた。

　末次金である、と公儀へ届け出れば、当然、没収されて、曳きあげた者へ、いくばくかのほうびが与えられるにとどまる。

　平賀源内が発見した金山から採って、精錬した金だ、といえば、これは、禁門影人の私有物となり、田沼意次が自由に使えるわけであった。

　意次は、その百万両ぶんの純金を、そっくり、勘定奉行の立ちあいの上で、本町一丁目の金座の吹所（工場）へはこび、新小判を鋳造させたのであった。

　おかげで、江戸城の金蔵が、ひと息ついた。

　その功がものをいい、田沼意次は、御側用人から、老中格へ、昇進したのである。

　意次としては、禁門影人という先の帝の異母兄に、木偶としてあやつられるのも、やむを得ぬ、と覚悟しなければならなかった。

「老中格として、本日、御用部屋で、いかなる発言をされたか？」

　影人は問うた。

「いや、べつに……。ただ、宿老がたに挨拶しただけにとどめた」

「明日からは、堂々と、政策を申し述べられることだ」

三

「この意次、老中格になったからと申して、明日から、すぐに、おのれの政策をうち出せるものではあるまい」

「田沼殿とも思えぬ弱気な言葉だ。貴方は、今夜からでも、世直しがやれる」

　禁門影人は、云った。

「…………」

　意次は、いささか、とまどい気味に、影人の視線を受けとめた。

「閣老たちは、貴方が金座の吹所へはこび込んだ純金を、伊豆の金山から採掘し、精錬したものだ、などとは一人も信じてはいない。さりとて、純金の出どころを探索し、突きとめることも叶わぬ。閣老ならずとも、田沼主殿頭が、何処から、どうやって、尨大な純金を入手したか、誰でも興味をそそられる。この興味は、純金の量が、金座の吹所へはこび込まれた百万両ぶんで、すべてではなく、田沼主殿頭は、さらになお、幾百万両ぶんの純金を、かくし持っているのではあるまいか、という好奇心につながる。……貴方が、御用部屋で、幕府を根底からゆるがせるような大改革を主張すれば、きき手は、貴方の背後に光る黄金の量を、想像以上のものであるらしい、とおびえるに相違ない」

「禁門殿、お手前は、あれに数倍の純金を、いずこかにかくしている、と、申されるのか！」

　意次自身が、まず、好奇心をそそられる表情になった。

「左様――、貴方は、そういう顔つきを、閣老たちに、させることによって、主導権をつかみ得る」

　影人は、ひややかな語気で、云った。

――おそろしい青年だ、この先帝の異母兄は！

　意次は、かすかな戦慄が、背すじをはってくるのをおぼえた。

「金の力によって、閣老の座を得た貴方の許には、おもねりへつらう者たちが、あらゆる品を賄賂して来るだろう。貴方は、金銭に潔癖である必要はない。賄賂を当然のこととして、受け取られるがよい。これは、貴方が途方もなく莫大な秘密の金を所有している、と想像させるのに、役に立つ手段でもある」

　後世に於て、田沼意次が幕政の実権をにぎっていた時代は、賄賂横行の悪徳政治の時代として、史家から、非難されている。

　意次は、公然と賄賂を取った。

　しかし――。

　賄賂政治は、田沼意次からはじまったわけではなかった。

　四代将軍家綱の時、大老となった酒井雅楽頭忠清は、諸大名・大商人から収賄して、

「この身に物を贈って参るのは、すなわち、徳川将軍家を尊むゆえんである」

と、うそぶいている。
五代将軍綱吉の忠実な「狗(いぬ)」であった柳沢出羽守吉保も、その屋敷内に賄賂品をあふれさせた。
大名の中には、柳沢邸に詰めて、訪客の取次ぎや贈物受け取り役までやった者もいた、といわれている。
問題は、収賄した権力者が、いたずらに私腹をこやしたり、賄賂によってゆがんだ政治を行うか否か――それであった。

四

「近い過去に、貴方と比ぶべき政治家をえらぶとすれば――」
影人は、云った。
「八代公（吉宗）とその生涯をともにした大岡越前守忠(ただ)相(すけ)と、小便公方とさげすまれた九代殿（家重）の文字通り代弁者をつとめた、越前守と同族の大岡忠光と――この二人であろうか」
「…………」
意次は、じっと、影人の言葉に、耳をかたむけている。
「大岡忠相は、江戸町奉行として、大岡忠光は、将軍家側用人として、いずれも主人の信任が厚かった。信任厚いがゆえに、有能な官僚として、出世の道を歩んだ。大岡忠相が四十一歳で町奉行となり、大岡忠光が三十八歳で側衆となったのに比べれば、貴方が、五十一歳にしてようやく老中格となったのは、いかにも、出世の歳月が、遅々としていたように思われる。しかし、今日まで待っていたのは、むだではなかった。……大岡忠相は、町奉行以上の昇進を望まず、大岡忠光もまた、老中になろうという野心を抱かなかった。すなわち、この両人は、幕閣の主導権をにぎって、天下の様相を改めよう、などと考える政治家ではなかった。ただ、主人にひたすら忠誠をつくし、徳川幕府の威光をまもることに、熱心であった。貴方は、ちがう。貴方は、執政の権力を、一手ににぎる日の来ることを、祈念し、そして、ついに、その日を迎えた。……大岡忠相が、町奉行として、古い江戸を新しい町につくりかえたり、武蔵野に新田を開発したりした、すぐれた手腕と、大岡忠光が、暗愚な小便公方をかばいつづけた忍耐力と――両人の長所を、貴方は、兼備している。大岡忠光が、身を持すること謹恭(きんきょう)であった反面、公然と賄賂を受けとった事実も、貴方は、これにならえば、大名旗本たちに、身辺を煙幕でつつんでみせる効果があろう。……貴方は、これまで、旧習にとらわれぬ、はなはだざっくばらんな人柄ぶりを、側用人として、周囲に認識させて来た。明日よりは、自らの生来の気象を、執政者として、逆に応用してみせることになる。賄賂することも、奉公のひとつ、と公言しても、貴方ならば、これは、あけっぴろげな性格にふさわしく、きこえる。但し、いかに多くの物品を受けとろうとも、絶対に私腹をこやさぬこと。わたくしのくらしぶりは、常に質素であること。より多くしばしば賄賂する大名や町人の方に、利益を与えることも、決して、やってはなるまい。賄賂は、あくまで、身辺に煙幕を張る手段にすぎぬ」
「身共が思いきった改革をやろうとする時、お手前が、蔭で、金力を供給しよう、といわれるか？」
「金の力だけでは、民心をつかむことはできぬが、その点に関するかぎり、懸念は無用だ」
影人は、きっぱりと、承知してみせた。
「相判った！　身共は、明日、御用部屋に於て、宿老たちが唖然とするほど、おびただしい金の要る改革案を、提議いたそう」

五

翌朝――。
田沼意次は、辰(たつ)下刻（午前九時）すこし前に登城した。
これは、異例のことであった。
老中の登城は、正四つ（午前十時）が、不文律であった。
田沼意次は、その定例を破って、一時間前に、登城した。
老中登城、を告げるのは、御太鼓櫓(やぐら)の太鼓で、その行列が大手門を入りきってしまうまで、長く、
どーん
どーん
と、打ち鳴らす。
登城時刻がきまっているから、御太鼓櫓の番士たちは、のんびりとかまえていた。
そこへ、大手門の番士が、血相変えて駆けて来て、
「田沼主殿頭様、ご登城！」
と、叫んだ。
あわをくらった御太鼓番士は、非常な早打ちをやってしまった。
城内は、たちまち、騒然となった。
慣習が破られたのは、何事か、火急の事件が起ったことを意味したからである。
ついでに、ことわっておけば……。

老中が、異常なまでの権威を持つようになったのは、八代将軍吉宗の時代からであった。

それ以前は、老中は、さして威権をかさにきて居らず、譜代大名や旗本などは、

「御老中」

などとは呼ばず、ただ、

「年寄衆」

と、いささかさげすんだ呼びかたをしていた。

老中となるのは、譜代のうちでも、十万石以下の、あまり富有ではない大名の世襲であり、可もなく不可もないつとめかたをして、ぶじ任期を満了すればよかった。

もちろん、幕府体制がためをした松平伊豆守信綱（三代家光時代）や、五代綱吉の独裁政治（生類憐みの令などという悪法）をはばんで、若年寄・稲葉石見守正休に刺殺された大老・堀田筑前守正俊など、閣老という職権を大いにふるった人物も二三はいた。しかし、大半は、ほとんど、何もしなかった、といって過言ではない。

老中が、その権威を大きなものにしたのは、正徳二年（一七一二年）十月に、六代家宣が五十一歳で逝き、その子家継が、わずか五歳で七代となったが、病弱で育たず、八歳で夭折してしまい、八代将軍家を、誰が継ぐか――問題となった時、井上大和守正岑・阿部豊後守正喬・久世大和守重之・戸田山城守忠実らが、論議の挙句、紀州吉宗を推してからであった。

老中には、将軍職を誰に継がせるか、それを決定する力がある。

その認識を、諸大名から庶民にまで、与えたのであった。

将軍も十代となったこの時代には、老中の権威は、赫赫たるものになっていた。

徳川三家（尾張・紀伊・水戸）の当主から、さきに会釈されるようになっていたし、加賀前田、薩摩島津、仙台伊達などの、外様の国主大名をも、

「その方――」

と、呼びすてるようになっていた。

六

意次が、御用部屋に入って、ほどなく、定例の時刻前に、姿をあらわしたのは、西丸老中となった阿部豊後守正允であった。

阿部正允は、まだ京都所司代を兼ねて居り、西丸老中に昇ったのは、意次が将軍家治に推挙したからであった。

「はやばやとご登城でありますな」

阿部正允は、にこにこして、云った。

意次のおかげで、西丸老中になれたのを、いまだ一言も礼を述べては居らず、べつに恩に感じている態度を示していなかった。

「四つ（午前十時）に出仕して、八つ（午後二時）に下るような、なまけた執政ぶりでは、当今の困窮した政局を、乗りきることは、でき申さぬ」

意次は、こたえた。

「ご尤もでござる」

うなずいた阿部正允は、ふと思い出したような面持と口調で、

「時に、主殿頭殿は、従三位下権中納言にて、禁門影人と仮名をつかう若人を、ご存じでござるか？」

と、問うた。

「見知って居るが……、お手前も、会ったことがおありか？」

「京都で一度、出府の途次、下の諏訪で一度――」

「器量のほどを、はかられたか？」

「自ら先の帝の異母兄と名乗るだけの勇気と智能をそなえて居るように、看て取り申した。……下の諏訪では、自分が出府するのは、田沼主殿頭意次という将軍家側衆に会いに参る、と申して居りましたな」

「ふむ――」

「田沼殿の力をかりて、世直しをいたす、と明言して居り申したが……、どうやら、お手前の蔭で強い力をかした模様でありますな」

「いかにも、あの青年のおかげで、身共は、老中格となり申した」

「禁門影人の世直しの計と、お手前の積極政策は、一致いたして居りましょうや？」

「たぶん……」

意次は、にやりとしてみせた。

「まず、なにをなされるか、おうかがいいたしとう存ずる」

「江戸・京・大坂三都の大商人どもから、賄賂を取り申す」

「ほう、賄賂をな」

さすがの阿部正允も、いささかあきれた表情になった。

政策の第一歩で、公然と、賄賂を取る、と云いはなった閣老は、いまだ誰一人いなかった。

賄賂は、政治家として、強請するものではなく、黙っていても、むこうから持って来るべき性質のものである

はずであった。
「賄賂を取って、それを、どうなさるお考えですかな？」
「海運をさかんにし、新田を拓き、窮民を救い……と申せば、いかにも、執政者として、清廉潔白とみえ申そう。もとより、それらも、実行いたすが、最大の目的は、別にござる」
「よろしければ、おきかせ頂けまいか」
阿部正允にもとめられて、意次は、ちょっと沈黙を置いていたが、
「開国！」
ずばり、と云ってのけた。

七

「開国とは?!」
阿部正允は、あまりの大胆不敵な意次の言葉に、あっけにとられた。
意次は、微笑して、
「豊後殿は、わが日本が、四方を海でかこまれているのを、どうお思いか？」
唐突に、問うた。
「されば、無限の海の幸があって、日々その食膳の美味を欠かさぬ、と心得て居り申すが……」
「豊後殿は、この江戸湾の海水が、はるか地球のむこう側のオランダに通じていることに、思いを馳せられたことがおありか？」
「……………」
「ごらんあれ、あの床の間の自鳴鐘の時計を——」
意次が、指さした。
それは、元文元年（一七三六年）に、オランダのアントニイ・クロイトという時計師が、わざわざ渡来して、八代将軍吉宗に献上した、高さ三米余、金銀で飾り、一時間毎に、美しい音色を告げる、きわめて精巧に作られた品であった。
「あの時計にしても、また、八代様が、輸入なされたペルシャ馬にしても、すべて、船で、はこばれて来たのでござるよ」
吉宗は、長崎出島の商館へやって来た船長ケイツルが、乗馬に巧みであるときくと、馬役人を遣して、西洋流馬術を学ばせたのであった。
そして、吉宗の輸入したペルシャ馬が産んだ幾頭かは、いまも、下総の佐倉の牧場で、駆けまわっている。
その脚の長く細い、みごとにひきしまった肢体は、日

本古来の胴長な、ずんぐりした南部馬などと比べると、月とすっぽんの差があった。
「身共は、海は、海外異邦との交易のためにある、と考えて居り申す」
「……………」
「青木昆陽と申す、御書物奉行の蘭学者がいることは、豊後殿もおきき及びであろうが、昆陽と申せば、日本全土に薩摩薯をひろめた功労者として、有名であることぐらいしか、お手前もご承知あるまい。どうして、どうして、青木昆陽は、西洋の天文、地理、医術、電気……すべてに通じて居る人物にて、経済にも刑法にも貨幣に関しても一代の通儒でござるよ。いかんせん、すでに古稀を越えて、いまは、病床に臥して居り申すが、昆陽のような天才が、あと数人もあらわれて、蘭学に通暁いたしたならば、公儀にとっての利は、はかり知れぬ、と申せる」
「お手前の手飼いに、平賀源内という奇才がいる由、きき及んで居りますが——」
「源内は、学者ではござらぬ。気まぐれな発明狂で、ひとつの品をつくると、すぐに別の新しい仕事をやりたがる男でござれば、身共の相談相手にはなり申さぬ」
意次は、源内の人柄性情を、よく知っていた。
目下、源内の行方は、全くわからなかった。
おそらく、どこかのかくれ家で、異常な発明に、夢中になっているに相違なかった。
「で——、どのような手段で、鎖した国を開かれますのか？」
阿部正允は、問うた。

八

「わが国は、寛永年間以来、長崎出島で、オランダ一国のみと、交易をいたして居り申す。……身共は、オランダのみではなく、イギリスとも、ロシヤとも、フランスとも、交易の道をひらくのを、実現いたしたい」
意次は、こたえた。
幕府は、世間に知れないように、必死にかくしていたが、すでにロシヤ船は、蝦夷（北海道）の沖あいに出現して居り、インド大陸の大半を侵したイギリスは、清朝の中国の海辺に、拠点を確保して、徐々に、この鎖国日本へ迫ろうとしていた。
鎖国主義が、ようやく、破綻を来さんとしていることは、識者のひとしく看ているところであった。
げんに——。

東支那海では、イギリス軍艦が、オランダ軍艦と、海戦を交え、これを撃沈していた。
さらに――。
西国大名衆が、なかば公然と、密輸をやってのけて居り、長崎奉行・代官が知っていて知らぬふりをしていることは、さきに記述した。
また――。
青木昆陽の高弟となった前野良沢はじめ、杉田玄白らは、蘭学こそ、世にひらくべき学問として、同志をつのって、異常な情熱をわきたたせていた。
杉田玄白が、オランダの人体解剖書を入手して、これを読むために、寝食を忘れて、オランダ語を学んでいることを、意次は、鬼堂天馬の調査で、知らされていた。
「豊後殿、これが、何か、判断がつき申すか」
田沼意次は、かたわらに置いた函から、ひとつの品をとり出してみせた。
細長い硝子細工であった。
「なんでありましょうな？　見当もつき申さぬ」
「タルモメートルと申す寒暖験器でござるよ」
「ほう――」
「これを一瞥すれば、本日の温度が判り申す」
「成程！」
「イギリスでは、数年前、蒸気機関なるものが発明され、これを使えば、船は、帆も要らず、数十挺の艪で漕ぐよりも、数倍の速力で、航海できるとか……、全世界の科学は、まさに急速に日進月歩。……国を鎖して居るわが日本の文明だけが、百年も二百年も、おくれることに相成る」
「………」
「国家百年の計を想うならば、いまこそ、開国すべきでござろう」
「お手前ご一人で、開国がやれる、という自信がおありですかな？」
「いや――」
意次は、かぶりを振ってから、
「まず、一般庶民に、いかに、西洋文明が発達しているか、知らしめ、開国希望の世論をわきたたせなければならぬ、と存ずる」
「それは、むつかしい相談でござるの」
阿部正允は、正直に、云った。

九

老中格・田沼意次と西丸老中・阿部豊後守正允との問

答は、ひとまず、それで終った。
定例の時刻となり、老中たちが、御用部屋に、顔をそろえたからであった。
首席の松平右近武元は、このところ、からだの加減がわるく、登城して来ていなかった。
月番老中より、かんたんな報告があってから、宿老たちは、べつに評議する事柄もないまま、雑談を交した。
未刻（午後二時）まで、なんとなくすごしてから、退出する。この無為な出仕が、ずうっと、つづいているのであった。
御用部屋の空気が、しかし、田沼意次という、御側用人から、老中格に昇った人物の着座によって、あきらかに、変ったことは、宿老たちの意識するところであった。
意次が、なにか、突如として、このおだやかな空気をかきまわす予感は、かれらの心中に、わいていた。
「はばかりながら――」
小半刻がすぎてから、意次が、あらたまった語気で、口をきり、宿老たちの視線を集めた。
「この意次、執政の末席につらなったのを機会に、参政がたに、申し渡したき儀がござる」
執政とは老中をいい、参政とは若年寄をいった。
御用部屋は上の間に老中、下の間に若年寄がいて、中の間を空けてあった。
意次は、宿老たちの沈黙の中で、茶坊主に、上の間・中の間・下の間をへだてる襖をひらかせた。
この時の若年寄は、水野壱岐守忠見・酒井石見守忠休・鳥居伊賀守忠意・加納遠江守久堅・水野豊後守忠友の五人であった。
意次は、襖がひらかれると、やおら立ち上って、中の間へ移ると、
「参政がたに、申し渡す。きかれよ」
と、視線を、水野壱岐守忠見に、射込むように、あてた。
他の若年寄たちは、かるく頭を下げたが、水野忠見だけは、意次の鋭い眼光を受けとめた。
――こやつが、この意次が執政になることを、躍起になって阻止しようとして来たのだ！
「こん後、参政がたは、執政にことわりなく、自身で勝手に目付を配下にすることは、遠慮して頂こう。目付に命じて、隠密どもに徒党を組ませ、執政の職務のさまたげとなるような働きをさせることは、一切まかりならぬ」
意次は、きっぱりと命じた。水野忠見にきかせたのである。

水野忠見は、すなおには、ひきさがらなかった。
「お言葉をかえしますが、大目付が老中の耳目、目付が若年寄の耳目となることは、きめられたことでありますれば……」
「それは、これまでの慣例であり、公儀法度によって定められたことではない！」
意次は、きめつけた。
「もし、この命令にさからう御仁は、すみやかに、参政の座を去って頂こう」

十

——おのれが、この意次に敵対したことは、ことごとく知っているのだぞ！
意次は、それを、水野壱岐守忠見に向って、言外に、たたきつけたのであった。
と同時に——。
執政・参政全員に対して、
「今日より、幕閣の主導権を、この意次がにぎる！」
と、宣告する一種のデモンストレーションでもあった。
水野壱岐守忠見は、憤激の表情をかくすことができなかった。
抗議の弁を述べようと、口をひらいたとたん、意次は、さっと中の間の座を立ち、茶坊主に、
「襖を閉めよ」
と、命じておいて、上の間へもどった。
老中たちは、息をのんだまま、意次を、見まもった。
意次は、鋭い視線を、かれらの顔へまわしてから、
「この意次、御側御用を相つとめてより、ずうっと、当御用部屋の様子を、それとなく、拝見いたして参りましたが、上様へお取次ぎいたさねばならぬ重大な御相談を、ただの一度も、きき及ばなかった、と記憶つかまつる。……されば、本日より、末席ながら、老中格と相成った身共より、評議せねばならぬ事項を、申し上げますれば、左様お心得おき下さるよう、願い上げます」
と、云った。
宿老たちには、沈黙があっただけであった。
「本日、心にとめて頂きたき事柄は、これでござる」
意次は、懐中から、やおら、一冊の書物をとり出した。
それは、青木昆陽の著した『和蘭話訳』であった。
オランダのアルファベット、その綴り字、名詞、動詞、形容詞が、ずらりと書きならべてあった。

宿老たちは、順々に手渡したが、はじめて目を通す書物であり、なんの興味もなかった。
ただ、意次が、どんなこんたんあって見せるのか——
そのことに不安をおぼえた。
「すでに、蘭学は、かくのごとく、学者のみだけでなく、一般庶民の中にも、ぜひ学びたい、と希望する時代が来て居り申す。……お年寄衆も、なにとぞ、愚にもつかぬ世間話などなさるひまがあれば、このような蘭学者苦心の訳書に、お目通し頂きたく存じます」
意次は、若年寄を威圧し、次いで、老中のきもをひしいだ。
いうならば……。
外国語が全くしゃべれない代議士が、外務大臣を二期も三期も、つとめているのを、新しく外務次官になった語学に堪能な者が、
「それで、よくも、米英仏独など各国を相手に、外交がやれるものですな」
と、あざけるようなものであった。
宿老たちは、明日から、この御用部屋ですごす時間に、微かな恐怖さえおぼえたことだった。

江戸に降る金

一

紺屋町三丁目の新道では……。
小粋な構えの『長唄お習いどころ』から、当節流行のめりやす唄が、三下りのしんみりとした三味線の音色で、流れ出ていた。

並木　駒形　花川戸
山谷堀から、ちょいと上り
長い土手をば通わんせ
花魁が、お待ちかね
お客だよ　あいあい

三人ばかりの弟子に、稽古をつけたあとの、所在ない独吟であった。
「ごめんよ」
格子戸を開ける前に、声がかかった。
がらりと開ける音とともに、

「いいねえ、江戸っ子のつくっためりやす唄は――。同じ三下りでも、上方の大間な、のんびりしたしろものなんざ、きけたものじゃねえや」
　口早やに云いながら、もう座敷へ上って来ていた。
　浅草馬道の源水長屋に住んでいる夜働きの木鼠吉五郎であった。
「もう一曲、たのまあ、師匠」
　長火鉢の前に膝をそろえると、ぱんぱんと、柏手を打って、拝んでみせた。
「おまいさんにきかせたって、はじまらないやね」
　歌吉は、けだるげに、糸から駒を抜くと、三味線をうしろの柱へたてかけた。
「待ち人来たらずで、ご機嫌ななめの風情も、また、乙なものだぜ」
「置いとくれ。……冷酒でよけりゃ、樽があるよ。勝手に飲むがいいや」
「ご馳走になるか。飲んで巻くのが管ならば、伸びて縮むがめりやす唄、ときた」
　事実、上方端唄を江戸風に作曲して、芝居小屋の下座唄として使ったのが、市井にひろまったこの妙な名は、役者の仕科に合せて、自由に伸び縮みさせられるところが、当時オランダから輸入されたメリヤスそっくり、という駄洒落で、つけられたのである。
「極楽とんぼにゃ、なんの悩みもないのかい、吉つぁん？」
　猫板に頬杖をついた歌吉は、茶碗酒をあおる吉五郎へ、ぼんやりした視線をあてた。
「男だぜ、おれは――。大名屋敷へ忍び込んで、お宝をこっそり頂いて来る生命がけの夜働きは、その生命がけが、生甲斐さ」
「ふうん……。いいねえ、男って。女の生甲斐って、なんだろう？」
「なんだろう、はねえだろう。いま、がらりと格子戸が開けられて、歌吉、またしばらく泊ってゆくぞ、ときかされりゃ――とたんに、目はいきいきと、声もはずんで、おれなんざ、たちまち、おもてへ、おっぽり出されらあ」
「惚れる、って、つらいや」
　歌吉は、正直にみとめた。
「そのつらさを、じっとこらえて、むこう様の来るのを待って、自分の方からは、金輪際、逢いにいかねえ。そこんとところが、江戸の女の心意気だ。買っているぜ」
　禁門影人が、目下、源水長屋に逗留していることを、歌吉は、知っていながら、この家で待ちつづけているの

であった。

二

「吉つぁん、おまいさん、別に何も用事がなくて、あたしをただなぐさめに来てくれたわけじゃないんだろう？」
　歌吉が、問うた。
「めりやす唄を習う柄じゃねえ、となりゃ、云わねえでも判っているだろうぜ」
「あたしの待ち人のお使いかい？」
「師匠の弟子に、歴々の旗本衆が、何人いるか、きいて参れ、とのたまったね」
「あたしゃ、さむらいが三味線ひくのは、まっぴらごめんだから、ひらにごかんべんをねがって、おひきとり頂いているのさ」
「大名、旗本の屋敷内からまで、その音がひびいている当節だぜ」
「上も下も、一緒くたになっちまったのさ。分相応なんてえのは、むかしの夢さ。可哀想なのは、裏長屋の貧乏世帯ばかりさ。明日の米がなくてさ、ごらんな、天井裏を走る鼠の音もしないだろう」
「井守の黒焼きなら、師匠も、たった一人の男を待ちつづけていねえでも、男に不自由はしねえだろうが、鼠の丸焼きと来ちゃ、ぞっとしねえや」
「源水長屋は、泥棒の巣だから、酒でも米でも、不自由はないだろうけど……、おまいさん、いちど、この裏の長屋をのぞいてごらんよ。正直者が、どれだけ食いつめているか。じいんと、胸にこたえるよ。あたしゃ、しかたがなく、肩をすぼめて、三味線ひいているけど、裏の長屋の人たちには、その音色が、さぞかし、空っ腹にこたえているだろうよ」
　貧富の差が、ようやく、大きくひらいた時代になっていた。
　一方では、淫蕩放埒な気風がひろまって、歴々の旗本や大きな商家では、惣領はじめ、次男三男まで、三味線をひかない者はなくなっていたし、つつましくくらさなければならぬはずの町の番頭手代の女房や娘、はては下婢までが、派手な衣裳で身を飾るようになっていた。行儀作法もみだれて、金のためなら、かたぎの女までが、こっそり身を売っていた。
　その反面では、ばか正直に働いている職人や土方人足は、年毎にあがる物価に、のどをしめつけられて、雨が三日も降れば、その雨だけを飲んでいる、といっても過

言ではなかった。そうした貧乏長屋では、うまれた嬰児が、濡れた障子紙を鼻孔と口へあてられて、こっそり、しまつされるのが、日常事となっていたのである。

「吉つぁん、おまいさんも、せっかく生命がけで、大名屋敷や大商人の蔵からお宝を盗んでいるのだから、すこしは、貧乏人に、裾分けしたらどうなんだい？」

「そのことよ。おれは、師匠の待ち人から、夜働きをする代りに、世直しに一役つとめろ、と命じられたんだ」

吉五郎は、にやりとしてみせた。

「入って来た時から、いつものおまいさんと、様子がちがって、いやにいきいきしている、と思ったよ」

「盗っ人を、世直しに使おうという、師匠の待ち人の粋なはからいに、どうだい、よけい恋心がつのったろう」

三

江戸の地図をひろげてみると――。

大名・旗本屋敷と神社仏閣のスペースが、三分の二以上も占め、町区域は、日本橋を中心としたあたりは別として、きわめて狭く、裏長屋が、押し込められたようにひしめきあっている。

しかも、それらの裏長屋には、ろくでもない通称しかついていない。

蛇骨長屋とか、なめくじ長屋とか、臑浸き長屋とか……。

臑浸き、というのは、豪雨に見舞われると、かならず、床上まで浸水することから、そう称ばれるようになったのである。

そういう長屋に住む貧乏人は、一生涯、小判はおろか、一分銀さえも手にしたことはなかった。

寺門静軒という貧乏な無名学者が、『江戸繁昌記』という書物を著している。文政年間の江戸風俗を漢文で描いたものだが、明和年間と、その生態は、さしてかわりはないので、紹介しておく。

江戸八百八町は、どの町にも、縦横曲折した裏町新道があり、そして、そこには、裏店が建っていた。五軒一長屋、十軒一長屋、はなはだしいのは、五十軒一長屋で、これが狭い路地をへだてて向いあって、ひとつの井戸を汲みあい、三つばかりの厠を共同使用していた。

鼠、なめくじ、虱、蚊、蠅、守宮が、職人、土方人足、露店商、八卦見、駕籠舁き、托鉢僧、浪人、嬶連中に餓鬼どもと、仲よく雑居していた。

井戸端の嬶連中の声が、かまびすしい。

「ちかごろ、大家の娘の姿が見えないね」

「どこかの大名屋敷へ、腰元にあがった、って云ってたよ」

「嘘っぱちさ。室町の薬種問屋の外妾になっちまったんだとさ」

そこへ、托鉢僧が、帰って来て、

「大家の娘が妾奉公するのも、わしらが家賃を払わないからじゃ」

「そういうおめえは、今日も、お鉢米を、椀に一杯でも、もらって来たのかよう」

「あいにく、こう米が高くなってはのう。大店の葬式に、鉢をたたいてお経をあげても、強飯さえも、もらえぬしまつさ」

「奥州や北国が、大洪水で、作物が流れちまったせいかねえ」

「いやさ、米商人が、つりあげているにちがいないのじゃ」

「そういえば、お賑給米が、お上から、くばられたのは、いつだったっけ？」

「もう四月も前のこった。それも、たったの十日分――」

「あアあ、麦と粟の粥にも、あきちまったよう」

とたんに、一軒の破れ障子戸越しに、

「があがあ、うるせえぞ。江戸っ子だあ、けちな話は止しやがれ。米が一升百両になったって、おれアビクともしねえぞ。……ご政道ってやつが狂ってやがるんだ。蔵前の札差野郎どもは、中村芝翫が、上方へ行くはなむけに、千両呉れてやってやがるんだぞ。それで、なにが、御倹約令だあ、くそったれ！　公方様だって、こちとらだって、起きて半畳、寝て一畳、一度に五合の米が食えるけえ。はやいところ、お賑給米を寄越しやがれ」

呶鳴りたてたのは、昨日、旗本屋敷の中間部屋で、五十文ばかりもうけて、焼酎くらった香具師であった。

四

封建制度の幕政下で、改革といえば、まず倹約令であった。

その倹約令によって、絶対に政治の改革ができぬことは、三代将軍家光の時代から、かぞえきれぬほど、それを布告しながらも、ことごとく失敗に終っているので、明白である。

にもかかわらず、幕府は、ばかのひとつおぼえのごとく、財政困難をきり抜ける第一策として、倹約令を出しつづけて、この時代に至っていた。

後世、中興の英主とうたわれた八代吉宗でさえ、倹約令を第一策としなければならなかった。そして、第二策として、悪貨を鋳造した。
諸大名も、これにならって、倹約を第一の政策とした。
一例を挙げれば――。
当時、大坂の豪商三井高房から、その備忘録に、
『三百諸侯のうち、借金踏み倒しの随一は、肥後熊本の細川家である』
と、はなはだ不名誉な烙印を捺された細川家は、重賢が六代目当主となるや、用人堀平太左衛門勝名を抜擢して大奉行とし、凄じいばかりの質素倹約を行って、その窮乏をきり抜けたのであった。
重賢は、熊本城主となるや、家中一統を、大広間に集めて、
「わが勝手向きは、五十四万石である。しかし、実際の収入は三十五万石であり、支出は四十二万九千石である。されば、今日より、我は、二十万石の大名と思うゆえ、その方たちも、その心得を以て、貧しさを覚悟いたせ」
と、命じたものであった。
爾来、細川家では、当主重賢以下、家臣全員が、衣服も裃も羽織も袴も、木綿以外のものを身につけず、正月であろうと五節句であろうと、一汁二菜しか摂らなかった。
重賢は、熊本城内の畳替えをせず、自室の畳が破れても、そのままにしておいた。
城下には、琴や三味線の音は、全くきこえず、酒気をおびた者を一人も見なかった。
これほど、徹底的な倹約をしてもなお、五十四万石の大藩が、赤字を消すことはできなかったのである。
重賢は、支出を三十五万石前後に抑えることに成功はしたが、大坂の三井家に借りている金を返済することは不可能であった。
目下――。
中央政府である幕府の財政窮迫は、諸大名の台所困難とは比べもならなかった。
しかも、三都の大商人は、ますます富み、貧民はいよいよ貧しくなっていた。
禁門影人が、田沼意次を老中格に昇進せしめて、一大改革をやってのけるには、この状況は、まさしく、好機といえた。
「さて、そこで、師匠の待ち人が、世直し大明神になるにあたっては、まず、当分、ここへ、足をはこぶひまはなかろうぜ。気の毒だが、しようがねえやな。我慢忍耐、堪忍五両で、思案が十両、この夜働きでさえ、百両仕事も棒に振って、世直しのお手伝いだあ。……ごめんよ」
木鼠吉五郎は、歌吉にそう云いのこしたことだった。

五

浅草馬道の源水長屋は、他の裏店とちがって、昼も夜も、ひっそりとしていた。
その住民の大半が、地まわり、女衒、夜働きの盗賊であり、浅草一円に横行する巾着切の元締の松井源水が、
「かたぎの衆に、迷惑をかけてはならぬ」
と、きびしく命じていたからであった。
奥のつきあたりの一軒に、禁門影人は、逗留していた。
三日に一度、無香が、訪れて、掃除や洗濯をしておいて、立ち去った。しかし、無香自身は、どこをかくれ家にしているのか、影人にも告げていなかった。
ふらりと、木鼠吉五郎が、もどって来た時、影人は、江戸の地図をひろげていた。
「なにを、調べていなさるんですかい？」
「ひどいものだ」
「へえ？」
「例えば、この浅草の地図を眺めるがよい」
「あっしは、足で歩きまわるだけで、こんな地図を、上から眺めおろしたことはありやせんが……」
「眺めるがよい。大名・旗本屋敷、神社仏閣と、町人たちの住んでいる処との比率を――」
「なるほどねえ」
のぞき込んだ吉五郎は、首をひねった。
それまでは、大名屋敷は広大なもので、神社仏閣は犬の糞より多いもの、と思い、それがあたりまえのこととしていた吉五郎であった。
はじめて、影人から地図を見せられて、吉五郎は、町人たちの住む処が、いかに狭いか、思い知らされたことだった。
北方の浅草寺を中心とする寺院の地域は、浅草一円のほぼ四分の一を占めていた。
西南の大名旗本屋敷は、実に、浅草一円の三分の二を占めていた。
浅草でいちばん大きな町は、元鳥越町であったが、佐竹侍従義敦の中屋敷の敷地の半分にも足りなかった。
「こうやって、つくづく比べてみると、全く冗談じゃあ

りやせんね。ばかげていらあ。同じ人間の住居でも、こうもべらぼうな差をつけられちゃ、あっしのような律儀な生れつきの男も、夜働きをやっちまわあ」
「こちらの下谷の絵図を見るがよい。上野の山と末院は、別として、大名・旗本屋敷だけで、五分の四を占めている。佐竹侍従義敦邸を例にとれば、浅草の中屋敷に、この下谷の上屋敷ならびに下屋敷と合せた敷地は、神田相生町・松永町・佐久間町・八軒町に、御成街道に面した須田町を合せたよりも、広いであろう」
「全くで……」
「佐竹家は、秋田二十万五千石だ。……奥羽の半年間が雪で掩われた佐竹家の収穫高は、西国大名の三分の一にも足りまい。わたしが、調べたところでは、佐竹家の台所困窮は、目にあまるものがあり、当主は、朝食だけを摂って、夕餉の膳部には、わらびの地下茎でつくった根花餅とか、赤松の中皮を餅とともについた松花餅とやらを、ただ一個しか、口にしない、という。おそらく、お前など、口に入れたとたん、吐き出してしまうしろものであろう」

六

佃島に五百石船が着き、その積荷を、四艘の三十石船に移して、夜が更けた頃合、浅草今戸橋をくぐって、山谷堀に漕ぎ入って来たのは、それから三日後であった。
山谷橋の袂に、肩をならべて、待っていたのは、編笠をかぶった禁門影人と松井源水であった。
四艘の三十石船に分乗していたのは、日本丸生き残りの船頭長・三郎次、鬼吉、そして黒太はじめ十数人の水主連中であった。
その積荷をはこぶ大八車が、数輛用意されて居り、これには、源水の乾分たちが、付いていた。
影人は、上って来た三郎次が寄って来ると、
「予定では、先月はじめ、ということであったが、ずいぶん手間どったものだな。一昨日、無香が、伊豆から、ようやく出航した、と報せて来た」
「へえ、申しわけありやせん。なにしろ、鬼堂天馬さんと平賀源内の旦那が組んだ仕事でござんすからね。用心の上にも用心をかさねて、その上、源内の旦那が、本物以上の贋物をつくってみせると、あの通りの気象の御仁でござんすからね。……おまけに、あっしらは、海はて

めえの家みてえなものだが、山の中の金掘り、金造りてえ仕事は、陸に上った河童でさあ。これでも、夜も、ろくろく、寝ねえで、やってのけたんでさあ」
たしかに、海の荒くれ男たちにとっては、難行苦行の数ケ月であったに相違ない。
当時――。
幕府の許可なく、貨幣の私鋳は、厳禁されていた。
貨幣の私鋳は、上古から、徳川氏が天下を統一し、貨幣制度に改革を行うまで、つづけられていた。
領内に、鉱山を有った諸大名は、採掘し精錬して、小判や銀貨をつくっていたのである。
また、いささか大袈裟にいえば、日本中に、豊かな金銀鉱山があったのである。
イングラム・ブライヤンの『日本史』には――、
『われわれがジャパンと呼んでいる国は、その名称は、シナ語のジイ・ペンに発し、太陽の生ずる大地を意味している。（中略）著名なヴェネチヤの旅行家マルコ・ポーロは、第十三世紀の末（一二七一年から九五年まで）シナに入り、シナのさらに東方に、黄金を無限に産して、その黄金で家屋を装飾している一帝国のあるのを知り、きわめて蠱惑的な物語（「マルコ・ポーロ旅行記」）を書いた。フランス語ではジャポン、英語ではジャパンと音訳され、マルコ・ポーロは、ジパングと発音している』
と、記されてあるが、あながち、誇張ではなかったのである。
その金銀が豊富であったからこそ、家康は、幕府の財政を、私産によって経営することが、できたのである。
元禄時代、大名は二百四十家（十万石以上四五、十万石以下五四、五万石以下一四一）あったが、幕府は、この二百四十家に対して、一文も課税してはいなかった。

七

尤も――。
大名には、一年毎の参覲交替という苛酷な義務があり、禁門影人が木鼠吉五郎に、絵図面で示したごとく、広大な邸宅を上・中・下三屋敷も置いていたので、元禄年間に、すでに台所は窮迫していた。
もし、家康によって、自領の鉱山産出の金銀の私鋳を禁じられなかったならば、諸大名は、三食を二食に減らすような倹約をせずに、すんだであろう。
たしかに……。
マルコ・ポーロによって黄金郷ジパングが紹介されたのをきっかけに、ヨーロッパは、異常な興味をそそら

れ、クリストファ・コロンブスが、トスカネリの世界地図をにらみながら、東方へ航海し、日本の代りにアメリカ大陸を発見した頃、全ヨーロッパに保有された金は、すくなかった。
　二億二千五百万ドルであった。現代の一年の産金額の三分の一にも足りなかった。
　日本に於ては、家康が、大久保長安を抜擢して、その手腕をふるわせ、採鉱冶金の術を発達させて、諸国金銀山を片はしから開発し、佐渡・伊豆だけでも、幕府数十年の財政をまかなえる未曾有の金銀を産出したのであった。
　当時の記録では、
『佐渡島は金銀の宝庫で、この金銀を、一箱に十二貫目入れ、合せて百箱を、五十駄積みの船に積んで、毎年五十艘ずつ、越後の湊へはこんだ』
とある。
　伊豆の鉱山も、当時は、佐渡に劣らない多量の金銀を、産出した。
『慶長見聞集』の著者は、
『自分の若い頃は、一両など持っている者は、きわめてまれであった。五両も持っている人間を、長者などと呼んでいたが、いまは、百姓までも三両五両とたくわえ、分限者といわれる町人は、五百両以上持っているのが、普通である』
　と、記している。
　新井白石の計算によれば、慶長六年（一六〇一年）から、正保四年（一六四七年）の四十六年間に、金が六百十九万二千八百両、銀が百十二万二千六百八十七貫、銅が二億二千八百九十九万七千五百斤——すなわち、わが日本の保有金の三分の一、銀の三分の二が、ポルトガルやオランダやイギリスやスペインの狡猾な商人どもによって、くだらない西洋の物品を購入させられて、持ちかえられてしまった、という。
　しかし——。
　未曾有の産出も、わずか五十余年間にすぎなかった。
　日本全土の金・銀・銅山は、みるみる採掘しつくしてしまった。
　多量の金をはき出した佐渡・伊豆・陸奥の仙台及び南部のうち、伊豆が、まず廃坑となった。
　金銀銅の産出が減るとともに、幕府は財政が窮迫し、諸大名も台所が極度に苦しくなったのである。
　ただ、江戸・京・大坂三都の商人たちだけが、蔵の中の千両箱の数を増していた。

八

さて——。
　禁門影人が、目をつけたのは、廃坑となった伊豆の金山であった。
　伊豆の金鉱は、天正年間に、西浦、土肥で発見され、次いで、慶長年間に、湯ケ島、縄地、修善寺と開かれ、さらに、貞享初年から宝永末年にいたるまで、賀茂郡毛倉野、青野で、かなり金脈が発見されていた。
　しかし、明和に入った今日、発掘されつづけているのは、土肥と湯ケ島だけであった。
　影人は、ひそかに、平賀源内に相談した。
「賀茂郡縄地山の、慶長年間に、採出して、いまは廃坑となっている金鉱を、お主が、踏査して、新しい金脈を発見したことにしてもらえぬか？」
「伊豆の山は、くまなく歩いてみたが、もはや、新しい金山などないな。むしろ、秩父の山をさがした方がよかろう」
「金は、出なくともよいのだ。新しい金鉱を発見した、と公儀へ届け出て、御側用人から老中格となった田沼主殿頭の許可によって、坑内の岩石を掘り、いかにも、金を採っているかのように、世間に思わせるのだ」
「そうか」
　源内は、合点した。
「つまり、末次金を鋳つぶし、そのうちのひとにぎりを、微粒子にして坑内の岩石のあいだから流れ落ちる鏈筋（砂）にまぜてみせるのだな？」
「そうだ。そして、採掘しているとみせかけておいて、一方では、内密裡に、末次金で、一分判金をつくる」
「なるほど、お手前は、あっぱれな智慧者よ」
　源内は、感服したことだった。
　影人が、河津の縄地金山をえらんだのは、地形が嶮しく、けものみちにひとしい山路しかなく、また船がかりする浜辺もなかったからである。
　ただ、慶長以来、五十余年間は、その縄地採金のおかげで、下田の町が、船舶の出入りが多く、大いににぎわったものであった。
　縄地廃坑とともに、下田の町もさびれて、いまは、見るかげもない。
　港には、漁船が、数艘いるだけであるのを、影人は、見とどけて来た。
　末次金を、一分判金に改鋳して、ひそかに、はこび出すには、下田こそ、おあつらえ向きの港だったのであ

る。
　いわば——。
　平賀源内が、縄地山に、新しい金脈を発見して、採掘していることにすれば、下田港から、幕府御用の旗をかかげた五百石船が、まだ小判にも一分判金にもしていない金塊を、運んで行くがごとく、下田の役人はじめ、一般庶民に、思い込ませられるのであった。
　幕府の法度では、金塊は、すべて、江戸本町一丁目の後藤庄三郎官宅へはこばれ、御金改役によって、量質をあらためられて、吹所（工場）へまわされ、そこで判金に鋳造されるのであった。
　影人は、この法度を犯して、縄地の山中に秘密工場を設けて、一分判金をつくり、江戸へはこぶのであったから、こうして、まず、五百石船を佃島へ寄港させてから、三十石船四艘で、山谷堀へ、という面倒な手順をふんだのである。

九

　三十石船から揚げた荷を積んだ五輛の大八車は、深夜の表通りを、南へ向って、曳かれて行った。
　聖天町を抜けて、俗に藪之内と呼ばれている町に添うて右折すると、姥が池をとりかこんで、医王院とか一ノ権現とか二十三夜堂とか、金剛院・法善院など浅草寺末寺が、土塀をつらねている一郭へ出る。
　浅草寺の横手——随身門の向い側に、この一郭は、在った。
　大八車が、曳き込まれたのは、一ノ権現の堂宇の前であった。
　一ノ権現は、二年前、火事で焼け、再建されかかっていたが、金づまりから、目下、そのまま放置されていた。
　さすが、松井源水の乾分たちだけあって、大八車の荷を、堂宇の中へはこび入れ、あらかじめ剝いだ床から、床下に掘っておいた穴へ、下げおろす、という作業を、あっという間の敏捷さで、やってのけた。
　影人は、その作業の指揮を、源水にまかせておいて、一足さきに、源水長屋へ、もどって来た。
　その仮住居には、一人の客が来て、待っていた。
　伊豆縄地山から、陸路を通って、帰府した鬼堂天馬であった。
「ぶじに、すんだ。お主にも苦労をかけた」
　影人のねぎらいに対して、天馬は、懐中から、二枚の一分判金をとり出して、白紙の上にならべてみせた。い

ずれも、享保一分判金であった。
　享保一分判金は、一匁一分九厘の量目で、金が八六七・九、銀が一三二・一の比率の、きわめて良質の貨幣であった。
　しばらく、じっと、見くらべていた影人は、
「見事だ！　いずれが本物か贋か、判別がつかぬ」
と、云った。
「つまり、どちらも本物ということになります。鋳造したところが、金座の吹所と伊豆山中の秘密工場との相違、というだけのこと」
　天馬は、笑って、平賀源内の指導で、つくった判金の方を、つまみあげてみせた。
「金高は——？」
　影人が、問うと、天馬は、
「百五十万両ござる」
と、こたえた。
「つくったものだ！」
　影人も、あらためて、感服した。
「平賀源内は、まさしく、天才であり奇人であります。それがしが、ただ一度だけ、金座の吹所へ、案内しただけで、このように、本物の享保一分判金を、鋳造してみせました。ただただ、あきれるばかりでござる」
「うむ！」
　微笑して、うなずいた影人は、
「さて、いよいよ、ここ数日中に、江戸の貧しい長屋に、この金が、降ることになった」

十

「若宮殿——、この百五十万両は、われらがあるじが、お賑給米処の代り、窮民救済所を設けて、配るのではござらぬのか？」
　天馬が、問うた。
「いや——」
　影人は、かぶりを振った。
「結果は、同じであるが、貧しい庶民に対して、公然と配ることはせぬ。お主の主人は、老中格になったばかりであり、首席の松平右近武元以下の老中たちは、決して、田沼意次という御側用人あがりの昇格を歓迎しては居るまい。味方になる者がいるとすれば、このたび西丸老中となった阿部豊後守ただ一人であろう。もとより、若年寄連中も、お主の主人を、はやばやと失脚させる狡猾な陰謀をめぐらすだろう。……田沼主殿頭が、閣老の上座に就いて、おのが改革を実行するためには、まず、庶民の

人気を得なければならないが、そのためには、公然と、この一分判金を配るのは、下策だ。公然と配れば、必ず勘定奉行の探索を受ける」

「…………」

「手段は、ひとつ。老中格となった田沼主殿頭が、誰人（たれびと）も知らぬうちに、ひそかにたくわえておいた金を、内密で、市中にまいた、と一般庶民に、信じさせるのだ。……主殿頭自身は、城内では、自分は、断じて、そのようなまねはせぬ、とつよく否定する。否定することによって、主殿頭のしわざに相違ない、と上下すべての人に、信じ込ませる逆効果を、こちらはねらうのだ」

「なるほど！　諸葛亮孔明そこのけの、敵がたに、それが策略であると判らせつつ、どうにも防ぎきれぬ妙計ですな」

「ただし、この大盤振舞いは、南北両町奉行を、敵にまわすと、失敗するおそれがある」

影人は、云った。

「この点、わがあるじに抜かりはござらぬ。両町奉行とも、われらがあるじが、将軍家（おかみ）に推挙して、昨年就任した御仁たちでござる」

南町奉行は、牧野大隅守成賢。

北町奉行は、曲淵甲斐守景漸。

両町奉行のうち、後者は、去年まで、依田和泉守政次が、つとめていたが、この人物は、首席老中松平右近武元の股肱（ここう）であった。

田沼意次が、この依田和泉守を辞任させて、曲淵甲斐守に替えるには、それなりの苦心をはらっていた。

影人は、次の間にむかって、

「無香、筆と紙を持って参れ」

と、声をかけた。

いつの間にか、そこに、無香が、音もなく、ひかえていたのである。

影人は、一枚の紙に、さらさらと、短い文章をしたためると、天馬に渡した。

「これを木版刷りにした紙で、一分判金を包んでもらいたい。紙は、瓦版（かわらばん）のような粗末なしろものではなく、雲形のある杉原紙のような上等なのがよい」

「かしこまり申した」

天馬は、去った。

十一

武家が祝儀用にする杉原雲という立派な紙に包まれた一分判金が、府内の裏店へ、ばらまかれはじめたのは、十日後からであった。

まず、最初は、江戸市中でも、最も貧しい本所横川に沿うた入江町、長崎町、清水町、横川町の十軒長屋、五十軒長屋へ、夜半、路地に足音もなくやって来て、各戸へ、一個ずつ、投げ込まれた。

その杉原紙には、左のような文章が、刷られてあった。

　あら、ありがたや豊年満作、沼は田となり、田は黄金の波、念仏となえるより田をつくれ。
　このお慈悲、他言は無用。人に語れば、夢となるべし。

もとより、貧乏長屋の住民の九割は、文字など読めなかった。

そして、そのほとんどが、一分判金など、手にしたこともなかった。

「なんだろう、おまいさん、これ？」

いぶかしげに、亭主にさし出す女房もいた。生れてこのかた、穴あきの銅銭のほかに、見たことも、使ったこともなかったのである。

「こ、こいつは、金だぜ！　いってえ、ど、どうしたってんだ?!」

丁銀や豆板銀を、かせいだことはあるが、小判や一分判金など、自分とは、生涯縁のない金だ、と思っていた亭主の方は、ただ、あっけにとられた。

朝食前に、長屋の住民たちの半数が、それをにぎりしめて、大家の許へ、走った。

大家に、その文句を読んでもらって、ひとしく、茫然（ぼうぜん）となった。

全く信じられぬ一大珍事が起ったのである。

「このせちがらい当節、このような一分金を、めぐんで下さる分限者（ぶげんしゃ）お大尽がいたのかねえ？」

どの大家も、首をかしげざるを得なかった。

「まさか、こいつ、にせもので、誰かが、あっしらを、からかってやがるんじゃねえでしょうね？」

疑う者も、すくなくなかった。

「いや、これは、本物の享保一分金だ」

大家は、わが家にたくわえてある金銀の中から、同じものをとり出して、比べてみせた。

その日のうちに、本所から深川へ、深川から、隅田川をわたって、浅草へ、下谷へと、あっという間に、噂がひろがった。

わざと、

『このお慈悲、他言は無用。人に語れば、夢となるべし』
と、書き添えたのは、噂をひろめるための巧妙な逆手であった。
長屋の住民のうちには、文字が読める者もいて、その『お告げ』を守ったものの、各戸に配られたのを知って、自分だけ、知らぬ顔をしていられなかった。
「ふむ！　沼は田となり、か。この文句に、意味があるぞ！」
大家や浪人や托鉢僧など、すぐに、合点した者もあった。

十二

まさしく、天から金が降って来た、という騒動であった。
「まさか、本所横川かいわいに、たった一度こっきりの、気まぐれお慈悲じゃねえだろうな」
「横川で、餓鬼の頃、見知らねえ貧乏長屋のおやじから、おぼれかかったところを、救われた奴がよう、上方でお大尽になって、帰って来た、ってえのなら、大明神のご利益は、他の町内にはねえやな」
「おいらの長屋の八卦見の浪人者は、沼は田となり、ってえ文句が、くせえ、と云ってやがったぜ。これをひっくりけえせば、田沼となるだろう。……こんど、公方様の御側用人から、老中になった田沼意次ってえ切れ者がよう、ここらあたりで、貧乏人を救ってやろう、としているんじゃねえか、と……」
「そういえば、田沼意次様はよう、伊豆に、どでかい金山を、掘りあてて、金座で、小判を百万両つくらせた、ってえ話をきいたことがあるぜ」
現在のような情報過多時代ではなかった。
江戸城内の幕府政治は、貧しい一般庶民にとって、雲の上の評議であった。
明和元年に、きびしい倹約令が布告されていたが、裏店の住民に云わせると、
「こちとら、神武天皇以来の貧乏だ。倹約令で、分限者や大尽から、金をまきあげて、こっちへほどこしてくれる、というのなら話は別だあな」
という次第であった。
政治というものは江戸城内で行われるものであり、自分たち貧乏人には、どんな布令が出されようと、くらし

ぶりが楽になることは金輪際ない、という意識が、老松の根のように強く、脳裡に張っていたのである。
天から金が降ることが、ただ一回だけではない、と影なき布施人が、証明したのは、二日後であった。
場所は、市ケ谷谷町と牛込原町一丁目から三丁目にかけての一帯であった。
次の日――。
城内評定所に於て、老中・若年寄・町奉行・勘定奉行・寺社奉行全員が集合して、ばらまかれた一分判金の一枚とその包み紙を、各自が廻して、検査した。
松平右近武元が、勘定奉行に問うて、それが贋物ではない、とたしかめた上で、田沼意次にむかい、
「田沼殿、よもや、これは、御辺のほどこしではござるまいな？」
と、問うた。
「身共は、すでに、伊豆に於て発掘した金を、すべて、金座へ送り込んでおきましたゆえ、手許に、余分の金子など、たくわえては居りませぬ」
「では、いったい、何者のしわざだと、推測される？」
「見当もつきませぬな」
意次は、空とぼけた。
しかし、閣老たちの視線は、意次に集中し、
――この男以外に、このような振舞いを、誰がやれようか。
と、ひとしく考えていたことだった。

暗闘

一

十日ばかりの間に、影なき布施人の一分判金の配布は、ほぼ江戸市中の貧乏裏店全地域に及んだ。

しかも、ばらまきかたが、巧妙をきわめ、若年寄・水野壱岐守忠見の右腕である目付・大道寺左近は、数十人の隠密を、府内各処に配置して、下手人を生捕ろうと躍起になったが、徒労であった。

ばらまく者の姿を、発見できなかったわけではなかった。

ただ、あるいは辻で、あるいは舟の中に、または屋根の上に、その黒影をみとめて、これを追ったが、かれらは、人間業とは思われぬ敏捷さで、遁れ去った。

大道寺左近は、南北両町奉行所に、町方見廻りの与力・同心そして岡っ引の助勢を依頼したが、

「物盗りではなく、窮民救いの行為ゆえ、奉行所の任務ではござらぬ」

と、拒絶された。

もし、札差とか問屋などの土蔵破りをして、奪った金を、裏店にばらまいているのであれば、当然、町奉行所からの出役があり、捕物の網が張られるのであったが、一分判金をほどこしているのは、盗賊ではなかったのである。

大道寺左近としては、配下の隠密だけを使って、何者とも知れぬ布施人を、探索せざるを得なかった。

いや――。

何者とも見当がついていない次第ではなかった。

はっきりと、その正体の見当はついていた。

『禁門影人』

先の帝の異母兄と称する青年のしわざに相違ない、と左近は、看てとっていた。

しかし、影人が、何処にかくれているか、つきとめられなかったし、影人が下手人である証拠もなかった。

配っている者たちのうちの一人でも、ひっ捕えて、その口から白状させるほかに手段はなかった。

十日間、左近は、夜もねむれぬほどいら立ち、配下一同を叱咤しつづけた。

水野壱岐守は、左近以上に、いら立っていた。

一夜、下屋敷で、左近と対座した壱岐守忠見は、

「お主ともあろう切れ者が、その禁門影人なる若い曲者が、どのようにして、莫大な金子を入手したか、調べがつかぬとは、なさけないではないか」

と、語気険しく、責めた。

すでに過日――。

田沼意次が、平賀源内に命じて、伊豆山中に大金脈を発見させた、と称し、百万両ぶんの金塊を、金座へはこび入れて、新小判を鋳造させた時、大道寺左近は、自ら配下をひきつれて、伊豆へおもむいていた。

たしかに、賀茂郡縄地山の、慶長年間に廃されていた金坑で、発掘作業がなされてはいた。

左近の目は、しかし、だまされなかった。

――これは、ごまかしだ！

そうと看てとったものの、莫大な純金が、どういう方法と経路で、禁門影人から田沼意次へ渡されたか、推測すべくもなかったのである。

二

若年寄・水野壱岐守忠見にとって、おもて立った行動が、封じられたのは、痛かった。

すなわち、老中格となった田沼意次から、参政（若年寄）が、執政（老中）にことわりなく、自分勝手に、目付を配下にして使ってはならぬ、と申し渡されたことであった。

これまで通り、大道寺左近を活躍させて、その調査を、御用部屋で、報告するのは、不可能となったのである。

左近が、壱岐守のために働くのは、全く秘密裡でなければならなかった。露見すれば、壱岐守は、若年寄の座をしりぞかされるのであった。

南北両町奉行が、田沼意次の顔色をうかがいながら勤める猿まわしの猿でしかない、と判ったいま、大道寺左近は、わずか五十人足らずの隠密団のみで、禁門影人と暗闘しなければならなかった。

「わしが、京都の町奉行に問い合せたところ、たしかに、先の帝――桃園天皇には、異母兄があり、実母がいやしいために、閑院宮家の猶子として下げられて、有栖川家で育てられた由。十四五歳の時に、突然、出奔して、行方知れずに相成り、五年ばかり前に、ふらりと舞いもどって来ると、徳大寺前大納言を唯一の味方として、桃園天皇を見すてた近衛・鷹司ら五摂家を、次つぎと訪れ、脅しつけた事実がある」

「存じて居ります。それがしも、斯様な檄文を、入手いたして居ります」
左近は、一通の封書を、壱岐守にさし出した。

『ここに同志あり。共に、正々の旗をかかげ、堂々の陣を布きて、日月が地に墜ちざるために、天下をくつがえさん。義に二信なく、信に二命なし。疑わしければ、すなわち、義に従りて事を断ずべし。その手段は問わず。武を以てするも良し。文を以てするもまた佳なり。

禁門影人』

「これを、どこで手に入れた？」
「あの日本丸に便乗した大坂の読本作者の上田秋成と申す男の家を、捜索したところ、発見いたしたのでござる」
「禁門影人は、田沼主殿頭を利用して、王政復古を計って居るのだな！」
壱岐守は、たたきつけるように、言った。
「あるいは……」
「田沼主殿頭も、禁門影人の真意を看破しては居るまい。踊らされて居るのだ」
「さあ、それはどうでありましょうか？　田沼意次という人物は、踊らされていると知りつつ、わざと、踊ってみせているのではありますまいか」
大道寺左近は、皮肉な微笑をうかべていた。
「そうとも考えられる。いずれにしても、禁門影人なる曲者は、断じて、この世から消さねばならぬぞ、左近！」
「心得て居ります。かならず、それがしの手で、仕止めてごらんに入れます。それからまた、あの莫大な金を、どうやって入手したかも、調べあげます」
左近は、もはや、のっぴきならぬ瀬戸際に立たされているおのれを、知っていた。

三

公儀目付とは、他人に対してはもとよりのこと自分自身に対しても、きびしい戒律を課している職掌であった。
享保年間までは、定員も二十人を越えて居り、幕府諸般に関して監察する重い役目とはいえ、目付同士が相談の上でそれぞれ職務を分担していたので、比較的公私ともに余裕があった。

八代将軍吉宗が、享保の改革をするにあたり、諸大名の動静を調べるために、お庭番という隠密を創って以来、目付もまた、監察者としての面目を一変したのであった。
吉宗は、目付を十人に減じ、
「その方たちは、幕吏百僚の軌範とならねばならぬ。執政・参政であっても、これを監察し、不正あらば、直接、将軍たる余に、上申いたせ」
と、命じたのである。
老中の耳目は大目付、若年寄の耳目は目付と分れていて、前者は、むしろ典礼のことをつかさどる閑職で、いわば、故老の隠居クラスの人物がえらばれて居り、後者は、働き盛りの頭脳の切れる旗本の俊秀が就任していた。
吉宗の命令によって、大目付はいよいよ仕事らしい仕事のない隠居職になり、目付はその反対に、老中・若年寄・町奉行・寺社奉行・大目付、さらには、同役すらも、その座からひきずり落す権力を行使する立場に置かれたのであった。
当然、目付は、家族以外とは、兄弟とも交際しないような、謎めいた私生活を送るようになった。
大道寺左近は、妻子さえも持ってはいなかった。
江戸城内の目付部屋でも、同役と言葉を交したこともなく、私邸では、交際を断った完全な孤独を守って、老いた用人と中間五人だけを置き、全く女気のないくらしをしていた。
用人も中間も、居間にこもった主人が、どのようにしてすごしているのか、一切知らされていなかった。
左近が、配下の隠密の訪問を受けて、報告をきき、命令するのは、常に深夜であった。
その夜——。
水野壱岐守忠見の下屋敷から、帰宅した左近は、居間に入ると、あらためて、禁門影人に関する調査書類を、披いた。
——伊豆の伊東で、十艘の千石船を造っている。この金は、どうやって調達したか？　十一人の船頭と百数十人の水主どもは、加賀の二代目銭屋五兵衛が、やとっていた者どもであった。その銭屋五兵衛は、佐渡に流されていたが、いつの間にやら、そこの金山から姿をくらまして、行方知れずになっている。禁門影人は、五兵衛と、どこかで知りあいとなり、銭屋のかくし金を受け取ったに相違ない。その金で、日本丸十艘を造ったのだ。
——日本丸十艘は、南へ向って航海したが、これは、遠く、南蛮へおもむく目的であったのは明白だ。それゆ

えに、この大道寺左近が、オランダ軍艦にたのんで、撃沈したのだが……。
——その直後、禁門影人は、将軍家治から、御座船江戸丸を借り受けて、九州へ向っている。なんの目的であったか？

四

書類へ走らせる大道寺左近の目は、しだいに、光を鋭いものにした。
——御座船江戸丸は、野母半島突端の樺島に至って、そこから、ひきかえして来ている。わしが放った隠密全員を、殺しておいてだ！
——禁門影人が、莫大な金子を、手に入れた、とすれば、その時以外にはない。
左近の冴えた思考力は、過去の出来事をたぐり寄せていく。
——野母半島の突端のどこかに、その金が、かくされていた、となると、それは、むかし、誰人かが、かくしておいたものだ。
左近は、双眼をあげて、宙に視線を据えた。
すると——。
一人の男の名前が、うかんだ。
末次平蔵茂朝！
——そうだ！　判ったぞ！　平蔵茂朝は、抜荷船の母港を、野母半島の脇岬にしていた。平蔵が、隠岐へ流された時、公儀に没収された金銀は、六十数万両であった、というが、実は、数百万両を、脇岬のどこかに、隠匿しておいたとしても、ふしぎはない。それを、禁門影人とその徒党は、発見して、手に入れたのだ！　これで、つじつまが、ぴたりと合うではないか！
自分に大きくうなずいた——その折。
夜鴉が、三声啼いた。
配下の一人が、忍んで来た合図であった。
左近は、雨戸を一枚、繰った。
「禁門影人のかくれ家を突きとめました」
「どこだ？」
「浅草馬道の源水長屋であります」
「やはり、あのあたりではないか、と想像はしていたが……、まずいの？」
「は——」
「源水長屋では、いかにお前たちでも、突入するのは、無謀であろう」
「おそらく、禁門影人は、意表を衝く防衛の仕掛けをい

たして居りましょう」
「それに、あの青年は、用心深いゆえ、一分金を、源水長屋に、はこび込んでは居るまい。おそらく、他処にかくして居ろう」
「われわれも、左様に思います」
「わしが推測するに、馬道からさほど遠い場所には、かくして居るまい。さて、どのあたりに、かくし居ったか？」
大道寺左近としては、自身のうかつを責めなければならなかった。
左近は、田沼意次が御側用人から老中格になるまでの動静に、もっぱら、目をくばっていたのであった。
意次を監視していれば、かならず、禁門影人との連絡があり、その尻尾をつかむことができる、と考えていたのである。
たしかに、影人は、半年ぶりに、飄然として、江戸へ現れて、ただ一度、田沼邸を訪れていた。
それは、しかし、老中格になった意次に、祝意を述べに訪れたもの、と解釈した左近であった。
よもや、影人が、享保一分判金を秘密で鋳造し、江戸の貧乏長屋にほどこす計画を持って、江戸へ現れたとは、さすがの左近も、夢想だにしていなかった。
目付として、無念きわまるうかつさであった。

五

大道寺左近は、配下五十余人を四組に分けて、昼夜、片刻も油断なく、馬道の横丁長屋を中心とした浅草一円を、監視しつづけるように、命令した。
しかし——。
馬道は、一丁目から八丁目まで、おそろしい長さであり、その左右の横丁に、びっしりと裏店がならんで居り、住民の頭数は、おそらく、三千を越えていた。
松井源水の住む裏店は、浅草寺境内の三社権現と土塀をへだてた三丁目横丁にあったが、先代源水の時から、馬道の裏店すべてを、源水長屋と総称していた。
禁門影人が、はたして、どの横丁の一軒をかくれ家にしているのか、それとも、日毎あるいは数日毎に転々と移っているのか——それを突きとめるのは、ほとんど不可能に近かった。
松井源水自身も、江戸へ帰って来ているに相違なかったが、浅草寺境内で、居合抜きと独楽まわしの名人芸で、人垣をつくるのを止めて居り、どこにも姿を現していなかった。

四組に分れた隠密団は、職人に、虚無僧に、貸本屋に、煙草売りに、羅宇屋に、四つ手駕籠に……あらゆる職業の者に化けて、馬道をさりげなく徘徊しながら、修業成った目を光らせた。にもかかわらず、禁門影人も松井源水も、発見することはできなかった。のみならず、一分判金は、なお、各処にばらまかれて、貧乏人たちを狂喜させつづけていた。

早朝――。

十数人の虚無僧が、突如として、源水横丁へ踏み込んで、松井源水の家を、襲った。

前夜、源水らしい人影が、ひそかにもどって来るのを、みとめたからであった。

しかし、家の中には、八十の坂にさしかかったとおぼしい梅干婆さんが、一人、つくねんと、坐り込んで、煙草をくわえているばかりであった。

虚無僧たちが、むなしくひきあげてゆくや、とたんに、梅干婆さんは、すっと、背中をのばして、あぐらをかくと、片手で、顔面の皺だらけの皮を、一枚剥いだ。

木鼠吉五郎の顔が、あらわれた。

「平賀源内ってえ御仁は、全く奇妙奇天烈なしろものを、発明なさるぜ。……これなら、おれも、江戸城へ忍び込んで、公方様と、すりかわることができらあ」

いまさらに、源内の奇才ぶりに感服した吉五郎は、

「ばらまいたぜ、一分金を――。おれ一人だけでも、二十万両は、まいたかねえ」

と、独語した。

吉五郎は、得意の忍びの業で、屋根の上をかすめては、各戸へ、その包み金を、投げ込んだものであった。

隠密たちに、その姿を見つけられて、手裏剣を放たれ、あやうく、一命を落しそうになったこともあった。

「兄貴――、うまく化けたねえ」

向いの家から、顔をのぞけたのは、弟分の般若の万吉という巾着切であった。

「こんどは、万吉、おめえが、爺さんに化けてみろい」

「いっそ化けるなら、天女のような別嬪になってみてえや」

六

「笑わせるな。てめえのあばた面なら、夜鷹に化けても、すぐばれちまわあ」

吉五郎は、生あくびをしてから、

「考えてみりゃ、もったいねえほどこしよ。裏店の貧乏人が、ぜんぶ、善良な正直者とは、限っちゃいねえんだ。生れつきのなまけ者もいりゃ、博奕好き、酒中毒、餓鬼の面倒もみねえで一日中井戸端会議をやってやがる嬶連中など……、天のおめぐみを受けるにふさわしい律儀者なんざ、二割もいるかどうかだぜ」

と、吐き出した。

「それと知りつつ、兄貴は、どうして、一分金をばらまく手だすけをしているんだ?」

般若の万吉が、問うた。

「禁門影人ってえ、あの天子様のご落胤に、惚れたのよ」

「夜働きが、世直し大明神の手先になるんだから、人間も料簡次第で、地獄行きの道を極楽行きの道に、変えることができるんだな」

「万吉、てめえには、そんな芸当は、やれねえだろう?」

「どうしてよ?」

「五日ばかり前だ。おれが、千両、この家へはこんでおいたら、いつの間にか、三十両足りなくなっていたぞ。てめえのしわざに相違ねえ」

「じょ、冗談じゃねえ」

「万吉! この木鼠吉五郎の目を、節穴だと、なめてやがるのか。この五日間、てめえ、吉原の大まがきで、花魁を総あげしやがったろう。その金は、どこから出た? けちな巾着切のかせぎで、そんなまねができるか。……その右手の指を、二三本、つめてやろうか!」

きめつけられて、万吉は、あわてて、平蜘蛛のようになった。

「す、すまねえ。つ、つい出来心で、頂いちまったんだ。かんべんしてくれ」

「こんど、くすねやがったら、承知しねえから、そう思え」

「もう、金輪際、やらねえ。……それにしても、あの若宮様も、源水親分も、いってえ、どこへ、姿をくらましているんだい?」

「てめえの知ったことか」

「いや、あっしも、罪ほろぼしに、兄貴の下で、働きてえんだ。ほどこしをやらせてくれろ。たのむ!」

「てめえという野郎は、信用がおけねえ。黙って、指をくわえてみてろい」

「兄貴! あっしも、これまで、兄貴の夜働きの見張り番をやって来たんだぜ。弟分のあっしを、こんどの仕事だけ、除け者にすることはねえ、と思うがねえ」

万吉というこの巾着切は、小ずるい嘘つきだったが、面相に愛敬があり、ぺこぺこあやまられると、吉五郎

は、拳をくらわせる気も起きなかった。
「まあ、考えておいてやらあ。源水親分が、承知したら、ちょっとだけ、手つだわせてやってもいい」
「ありがてえ。たのみます。おがみます。……いま、源水親分は、どこに、かくれているんだい？」
万吉は、上目使いに、吉五郎を見つめた。

七

禁門影人は、源水長屋のどこかの横丁に身をひそめている、と敵がたに、わざとその証拠らしいものをつかませておいて、実は、大道寺左近の推測の及ばぬ意外な場所を、かくれ家にしていた。
将軍家別荘――御浜御殿の数寄屋（茶亭）であった。
将軍家治が、九年前、十代を継いで以来、この御浜御殿に成ったのは、二年前に、御台所倫子とともに、数寄屋で、閑院和仁である影人と対面した時だけであった。
倫子の方は、春秋の一日、ここに遊ぶならわしをつづけていた。
大奥に巧みに取り入っていた田沼意次が、
――禁門影人というわが蔭武者をかくまうには、御浜御殿以外にはない。
と、思いついたのであった。
いかに、目付部屋随一の切れ者でも、大奥という、全く隔絶した女ばかりの世界に、探索の手をのばすことはできなかったし、また、推測はそこまで及ばなかったのである。
もとより、御台所倫子は、影人が数寄屋を仮住居にして以来、そこで点前をすることはしなかった。
影人と、鬼堂天馬・無香・松井源水らとの連絡は、もっぱら、夜半、海上から、とられていた。
その宵――。
ひとりしずかに、点前をしていた影人を、訪れたのは、松井源水であった。
「百五十万両ぶんの一分金を、のこらず、府内に配るのは、容易ではありませんな。なにしろ、敵の隠密が血眼になって張りめぐらした網をくぐり抜けて、幽鬼のごとく出没しつつ、やってのけなければならぬのですから……」
すでに、百五十万両のうち、六十余万両を、ばらまいた報告を、影人は、受けていた。
影人は、微笑して、
「お主たちの働きも、ひとまずこのあたりで、中止して

もらってよい」
と、云った。
「すると、のこりのぶんを、そのまま、一ノ権現の地下に、ねむらせておくことになさる？」
「わたしの企てているのは、江戸の貧しい庶民救済だけではない。……この噂は、関東一円のみならず、陸奥にも越後にも、信濃にも遠江にも、口から口へとつたわっている」
影人は、無香を巡礼娘にしたてて、それをたしかめたのである。
「わたしは、府内に入る前に、秩父の八幡山で起った百姓一揆を、この目で、見とどけている。明日の米のなくなった窮民が、徒党を組み、むしろ旗をふりかざし、鍬やら鎌やらを得物にして、物持ちの店や倉へ殺到する光景は、まことに凄じいものであった。……わたしが、目撃した一揆は、千人足らずであったが、阿修羅となった徒党のおそろしさには、きもが冷えた」
「なるほど！　府内に、一分金がばらまかれているという噂をきけば、各地から、一揆が、なだれ込んで来る、と貴方様は、あらかじめ、算盤をはじいて居られたわけですな」
「左様――、ばらまいているのが、どうやら、執政の一人となった田沼主殿頭意次らしい、と耳にすれば、かならず、蝗の大群のごとく、この江戸へ、押し寄せて来て、ゆがんだ政道ゆえに、いかに百姓が飢えているか、叫喚をあげるであろう」

八

百姓一揆は、すでに、日本全土に、続発していた。
一例を挙げれば――。
有馬氏を城主とする筑後久留米では、まず、享保十三年（一七二八年）に、天候不順と蝗の害のために、平年の一割の収穫しかなく、一万五千余人の餓死者を出して、一揆が起っている。しかし、この年の一揆は、五千七百余人の百姓が押しかけたが、若年俊才の家老稲葉因幡のとっさのはからいで、納米を十分の一にしたために、ぶじにおさまった。
ところが、それから二十五年後の宝暦四年（一七五四年）の、二回目の一揆となると、有馬家には、稲葉因幡のような頭脳の切れる家老が一人もいなかったために、未曾有の騒動となった。
苛酷な課税に堪えかねた農民たちは、城主頼徸が参覲で、江戸へ出て行くのを待ちかまえて、三月二十日、生

葉郡吉井八幡の境内に数百人が集って、むしろ旗をふりかざしたのをきっかけに、翌日には、八幡河原に千数百人、二日後には、それが一万三千人に、次の日にはさらに三万人にふくれあがった。
藩庁の暴政をなじる呶号は、領内全郡に波及して、ついに、十七万八千人という、おそるべき大集団が、蓑笠姿で、手に手に鍬や鎌をひっつかみ、久留米城下めざして、押し寄せたのであった。
一揆は、城下へ向う途次、平常から百姓たちを虐待していた庄屋や豪農の屋敷を、めちゃめちゃに破壊した。
六十余の立派な構えの家が、あとかたもなく消えた。
現代のデモやストライキとちがい、一人のこらず、女子供まで、生命をすてる覚悟の上で、城下へ殺到して行くのであったから、その勢いの凄じさは、形容を絶した。
この未曾有の一揆が、どのようにして、鎮圧されたか、有馬家の藩史にはのこされていない。
のこされているのは、処罰された者の記録だけである。
首を刎ねられた者七人、さらし首にされた者八人、領外追放から、一里払いまでの刑を受けた者四十六人。
すでに、享保・宝暦年間に、日本全土の百姓は、一揆を起さざるを得ない困窮状態に、追い詰められていたのである。
影人は、府内に於ける一分判金のほどこしは、かならず、関東はもとより、上州・信濃・奥羽などの一揆をして、将軍家膝元たる都へ、洪水のごとく、なだれ込ませるさそい水になる、とそこまで計算していたのであった。
もし、そうなれば、江戸中の町が、収拾のつかぬ大混乱の渦になるのは、目に見えていた。
札差とか問屋とか、しこたま、金をため込んでいる町人たちの家は、ひとたまりもなく、たたきつぶされるに相違なかった。
「たしかに、何十万人もの一揆が、府内へ押し寄せて来たならば、これは、おもしろいことに相成ります」
松井源水も、その光景を想像しただけで、五体が熱くなるのをおぼえた。

九

きらっ、と影人の双眸が、光った。
「お主、どうやら、われわれの行方をかぎまわっていた犬を、五六匹、つれて来たようだ」

源水は、影人にそう云われて、はっとなり、神経を、屋外へくばった。
たしかに、庭に、殺気をみなぎらせた気配が、あった。
「はて？　屋形船に乗るまでは、尾行されては居らず、大川へ出てからも、怪しい舟の有無をたしかめていたのに……、なぜ、ここだと、かぎあてられたのか？」
源水は、不審に堪えず、首をひねった。
「今日、お主のかくれ家を訪れた者は——？」
「木鼠吉五郎ですが……」
「あの男は、決して裏切らぬ」
影人は、明言した。
とたんに、源水が、
「あいつだ！」
と、うめくように、云った。
「…………」
「吉五郎は、弟分の般若の万吉という巾着切を、つれて来て、こいつを使いたい、と許可をもとめたのでござる。万吉めが、いつの間にやら、この松井源水を裏切って、敵の手先になっていたのでござる。申しわけありませぬ！」
「いずれ、源水長屋の誰かが、敵がたに内通するであろう、と予想はしていた。お主の乾分ども全員に、誓いをたてさせていた次第ではない。気にすることはない」
「しかし、拙者のかくれ家だけが、さがしあてられたのであれば、なんのこともありませぬが、この御浜御殿にかくれておいでであることが、敵がたに知れては、おん身をかくされる場所は、府内に、他にござらぬ。すくなくとも、もはや、府内に、おん身をひそめておいでになることは、叶い申さぬ！」
必死の形相になって、おのれのうかつを責めている源水に向って、影人は、あかるく微笑してみせた。
「場合によっては、江戸城内へ、忍び込み、大奥にかくれる、という手段もある」
「ともあれ、この場は、拙者におまかせあって、遁れて頂きとう存じます」
「ひとりで、点前ばかりしているのも、あいたところだ。お主の居合の迅業を、見物しようか」
「拙者のうかつな失敗に対するお心遣いは、ご無用でござる。拙者がとび出すのと同時に、すばやく遁れて頂きとう存じます」
万が一、襲撃を受けた場合、どうやって遁れ去るか、思案は、影人の心中に成っているはずであった。
源水長屋から、裏切り者が出るであろう、と予想して

いた影人である。ただ、のんびりと、この数寄屋で、すごしていたわけはないのである。

「お主、べつに、ここで斬り死する覚悟などせずともよいのだ」

影人は、源水が、差料をつかんで立ちあがるのへ、ものしずかな口調で、その言葉を送った。

「それよりも、着物をとり換えて頂けますまいか」

源水は、たのんだ。二人の背恰好は、よく似ていたのである。

十

暗殺者たちが、数寄屋へ、じりっじりっ、と迫って来るのを、影人も源水も、

――迫らせるだけ迫らせ、ひきつけておいて反撃してくれよう。

と、その殺気を感じたまま、動かなかった。

影人は、まだ坐ったなりであったし、源水は、おもてがすぐ波に洗われている石垣になった縁側に立ち、雨戸を蹴倒して、躍り出る一瞬を、うかがっていた。

屋形船は、その石垣に、つないであった。

敵がたは、当然、影人と源水が、その屋形船で遁走しようとするに相違ない、と考えて、それをはばむ布陣をとっている……。

着物をとり換えて、白羽二重の着流しに、総髪を肩に散らした源水は、星あかりでは、影人に見えるに相違なかった。

影人になりすまして、数寄屋の縁側から、屋形船へ跳躍し、刺客どもを、一手に引き受けようとする源水の、とっさの計略が、はたして成功するか、どうか？

「……………」

「……………」

源水と影人は、視線を合せて、かるくうなずきあった。

次のせつな――。

雨戸を蹴倒しざま、源水の五体が、宙へ翔んだ。

と、同時に。

銃声が、闇に鳴った。

「しまった！」

影人は、源水の白い影が、屋形船ではなく、石垣ぎわへ落ちるのをみとめて、叫んだ。

「鉄砲で、狙って居ったか！」

影人は、畳を蹴って、飛びあがった。

張りじまいの天井板をはねて、屋根裏へ、身を移した

影人は、数秒後には、屋根の上に出ていた。

遁走路は、屋根から老松へ跳ぶ、宙にあった。

影人は、しかし、松井源水を討たれた怒りで、自分一人、遁れ去る気持はなかった。

飛鳥の速さで、源水のそばへ、とび降りるや、その居合抜きの業物をつかみとった。

とみた瞬間には、鉄砲を持っている敵を、脳天から、抜きつけに、斬りたおしていた。

禁門影人が、白刃をふるって、人を斬ったのは、今夜が、はじめてであった。

他には、鉄砲を所持している者のいないのを、たしかめる余裕を示しつつ、

「あと五人か」

と、かぞえた。

大道寺左近手飼いの隠密たちは、ついに、さがしあてた影人に向って、闘志をむき出した陣形をとった。

影人は、ゆっくりと、進みはじめた。

こちらから、その陣形の中へ、身を入れたのである。

無言裡の、凄絶な修羅場が、そこに展開した。

十一

影人が、自ら進んで、敵陣の中央へ、身を入れたのは、憤怒にまかせての捨身の戦法ではなかった。

影人は、いかなる場合も、血気をたぎらせて、その場の状況判断をあやまるような理性を、決して失わない青年であった。

影人の剣の業は、正式に、一流道場で修得したものではなかった。

十四歳で出奔、流浪半年ののち、五島列島のひとつ嵯峨島に渡り、そこに仙人同様のくらしをしている無名の兵法者に乞うて入門し、密林と荒浪を相手にして四年間、筆舌に尽しがたい刻苦の修業をして、会得した業前であった。

敵がたは、柳生道場その他で、各流の極意太刀を修業した腕前に、さらに、実戦を積んで、きたえていた。

こうした異質の剣と剣との闘いの場合、敵の裏をかき、意表を衝かねば、勝目は、きわめて薄かった。

五人に包囲させつつ、影人は、源水が使い馴らした三尺数寸の長剣を、ダラリとひっさげて、構えもとらなかった。

星あかりの下で、その姿は、隙だらけであった。
どこからでも、たやすく撃ち込めそうであった。
それが、かえって、無気味であった。
まず——。
真正面の敵が、青眼につけて、じりじりと、肉薄してきた。
影人は、それに対して、やおら、長剣を、右手につかんだなりで、徐々に、頭上高く、直立させた。
「えい！」
真正面の敵が、満身からの気合をほとばしらせて、斬り込んで来た。
瞬間——。
影人の黒影が、ぱっと、沈んだ。
と、その時には、もう、影人の長剣は、右手から背後の敵めがけて、放たれていた。
背後の敵が、のどを貫かれてのけぞった。
と——同時に、影人は、真正面から斬り込んだ敵の一撃を、紙一重でかわしざま、その手もとにとび込み、白刃を奪いとっていた。
奪いとった白刃は、次のせつなには、左方から、きぇーっ、と唸りをたてて来た刀を、受け止めた。
白刃を奪われた敵は、手刀で、股間の急所を打たれて、のけぞり、悶絶した。
「あと三人か」
影人は、ゆっくりと、見まわし、
「お主が、一番出来るようだな」
と、右方の敵を指さした。
あっという間の迅業をみせておいて、悠々たる余裕を示すことは、敵を威圧し、闘志をくじく効果があった。
もとより——。
それで、闘志をくじかれるような面々ではなかった。
それなり、幾分間か、相互とも、微動もしなかった。
影人の迅業が、端倪すべからざるものである、と知らされた以上、のこり三人は、猛攻を封じられたかたちであった。

十二

幾分間かののち——。
突如、三人の隠密は、言葉も交さずして、ぱっと、必殺の陣形をとった。
みごと、といえた。
正面の敵は、地へひくく、身を沈めた。
左方の敵は、常夜灯の笠の上へ、跳びあがった。その

双手には、手裏剣が、かまえられた。
そして、影人が最も手練者と看てとった右方の敵は、刀をすてて、脇差を鞘毎、腰から抜くや、びゅっと、ひと振りした。鞘は、たたみ込みの仕掛けになって居り、あっという間に、数米の手槍となった。
三者の敏捷な動作は、呼吸を合せて、瞬間裡に、なされた。
影人の後方は、屋形船の着けられた石垣であり、文字通り、背水の陣、といえば、きこえはいいが、窮鼠の位置であった。
——正面の、地面に身を伏せた者が、まず、猛然と、躍って、斬りかかって来る。これは、自らを捨て石とする戦法だ。
——同時に、左方から、手裏剣が、右方から、仕込みの手槍が、襲って来ることになる。
ただの敵ではなく、大道寺左近によって、選りすぐられた手練者なのだ。
いかに、影人といえども、三者が同時に襲撃して来たならば、いずれかの得物で、斬られるか、刺されることは、さけられなかった。
全き死地に置かれた、といえた。
「禁門影人殿、貴殿が、いまだ、何処かに隠匿している莫大な一分判金を、当方へ渡す、という条件を、承諾されるならば、われら三人、攻撃を中止せぬでもない」
右方の敵が、平静な語気で云った。
「わたしを捕虜としたのをきっかけとして、田沼主殿頭を、執政の座から追い落す——という水野壱岐守の野望か」
影人は、こたえた。
「あいにくだが、わたしは、死地に置かれたが、まだ敗北はして居らぬ」
「あたら、若い高貴のおん身を、犬死させることはござるまい」
「ふふふ……、乗り出した船に乗ろうとしているのではなく、すでに乗っているこの禁門影人だ」
「考えなおされい！」
「窮鼠、かならずしも、捕縛されるとは限らぬ」
「高貴のおん身が、堪えがたい囚徒の恥辱を蒙ってもよいのか！」
「わたしは、ただの素浪人だ。……お主らこそ、隠密という、蔭でのみ働かねばならぬ宿運を背負わされた身を、なげいたことはないのか」
そうした、一見平静ともみえる問答を交しつつも、双方は、みじんの隙もみせてはいなかった。

問答は、終った。
まず、正面に伏せた敵が、攻撃の潮合を、自ら迎えたように、ほんのわずかに、動きを示した。

十三

左方の常夜灯の上に立つ敵から、手練の手裏剣が、放たれるのと、正面の敵が、鳥の飛び立つごとく、宙を跳躍して、猛然と、斬りつけて来るのが、同時であった。
瞬間——。
これに応じた影人の戦法は、敵の意表を衝く、というよりも、無謀な行動であった。
おのが五体を、棒倒しに、後へ倒したのである。
手裏剣は、肩を——着物と皮膚を縫っていた。
正面から斬りつけて来た白刃は、影人の両足が、ぴたりとはさんでいた。
「うむっ！」
倒れた影人めがけて、右方の強敵が、飛矢の速度で、手槍を、くり出して来た。
避けられるべき突きではなかった。
しかし——。
右方の手練者は、手槍をくり出すと、同時に、異常な呻きを発した。
影人の味方が、茶亭の屋根に、いつの間にか伏せていて、その者から、かくし武器の奇襲が、かれにあびせられたのであった。
烈風の迅さで、無数の砂が、噴きかけられたのであった。それは、隠密ならば、すでに知っている鉄砂であり、その鉄砂には唐辛子の粉が交ぜてある目つぶしであった。
これが、目に入れれば、完全に失明するのであった。
手槍をくり出すよりも、そのおそるべき鉄砂が、顔へあたるのが、幾十分の一秒か、早かった。
そのために手槍の狙いは、ほんのわずか狂った。
地面に仰向けに倒れている影人が、左方から、飛来した第二の手裏剣を、充分の余裕をもってはじきとばした時、茶亭の屋根から、ひらりと跳び降りた伊豆の「捨て草」無香は、口にくわえた印籠形のかくし武器から、正面の敵へ、そのおそるべき鉄砂を噴きかけて、唸り声をほとばしらせた。
あとは、常夜灯から跳び降りた敵との、影人の一騎討ちであった。
死にもの狂いの攻撃を、斜横にとびかわしておいて、影人は、目にもとまらぬ胴薙ぎをくれた。

と——。
盲目となった生き残りの敵二人が、ほとんど同時に、
「……むっ！」
立腹を切った白刃で、さらに頸根を裂くと、どさりと、崩れ伏した。
その光景を、見やって、影人が、暗然とつぶやいた。
「幕臣に生れながら、表の栄職に就く者も居れば、こうして、闇の中に若い生涯を終える者もいる」
「やむを得ぬ運命でございます」
無香が、意外にも、しっかりとした口調でこたえた。
影人が、松井源水に歩み寄って、抱き起してみると、すでに、息絶えていた。
「気の毒に、まきぞえにしてしまった」

十四

松井源水の遺体をのせた屋形船は、しずかに、御浜御殿の石垣をはなれた。
艪をこいでいるのは、日本丸生き残りの水主の一人黒太であった。
黒太は、源水を、御浜御殿へ送って来て、たちまちそこで起った修羅場を、艫から、息をのんで、目撃していたのである。
野母半島突端の脇岬に於て、黒太は、鬼堂天馬と松井源水の人間ばなれした手練者ぶりを知らされていたので、よもや、源水が、こんなにあっけなく、横死しようとは、夢にも想像していなかった。
天馬も源水も、不死身だとばかり、信じていた黒太であった。
屋形船を、大川のまん中へこぎ出して、さかのぼらせながら、黒太は、頬へ、とめ度なく、泪をつたわせていた。
それにひきかえて、遺体の枕もとに端座した影人の態度は、いつもと変らなかった。
「無香——、上州あたりに、一揆の起りそうな不穏の気配はないか？」
巡礼娘に化けて、諸方をまわらせた女忍に、問うた。
「ただいまのところは、百姓衆は、おとなしゅうして居ります。……それと申すのも、公儀では、代官の名をもって、いたるところに、高札を立てて、一揆を起そうと煽動する者がいれば、訴え出た者に、十両以上のほうびを与える、と布告いたして居ります」
「一揆が、府内へなだれ込んで来るおそれがある、と心配した宿老首座の松平武元が、代官たちに命じたか」

八州——武蔵・相模・上州・下野・常陸・房州・下総・上総の関東の大半は、将軍家直轄地——いわゆる天領であった。

天領には、代官所があり、代官一人が、五万石の領地を支配していた。代官自身は、百五十石程度の下級の旗本が任じていたが、ひとたび、支配領に入れば、五万石の大名の権限を所有していた。

関八州には、代官所が、四箇処あり、その四人の代官の下に、八州取締出役という手附手代がいた。

この八州取締出役が、支配領内を廻って、盗賊や無宿者などを、捕えて、佐渡の金山へ、水替え人足として送っていたのである。

「八州様」とおそれられたかれらは、しかし、わずか十人足らずであり、関東一円の治安を保つには、あまりにも、すくなすぎた。

関八州に、博徒が増加したのも、やむを得ないことであった。

また、一人の大庄屋が、決意すれば、たちまち、万とかぞえる一揆を起すことも、容易であった。

「源水——」

影人は、魂の去ったむくろへ、云いかけた。

「上州あたりの百姓を煽動して、一揆を起させるには、お主こそ、うってつけの人物であったな。……あたら、横死させてしまい、すまぬ！」

はじめて、影人は、声音をつまらせて、頭を下げた。

無香は、うつ向いたなり、影のように、ひっそりと片隅に坐っていた。

十五

黒太の漕ぐ屋形船が、今戸橋をくぐって、山谷堀に入った時は、夜もしらじらと明けかかっていた。

屋形の中には、禁門影人と無香の姿は消えて居り、松井源水の遺体だけが、仰臥させられていた。

船が、左岸へつけられると同時に、若い男が二人、自身番から出て来て、足早やに近づいて来た。

いずれも、十手を腰にした岡っ引であった。

「どうした？」

一人が、黒太に、問うた。

かれらは、源水長屋の住民であったが、ほんものの岡っ引であった。

府内の岡っ引全員が、このたびの不敵なほどこし仕事に、味方していたのである。

南北両町奉行が、田沼意次の意のままになる人物たちであった。ということは、奉行所の与力・同心はのこらず、意次の支配下にあった、ということである。

大道寺左近が、いかに躍起になって、隠密たちを奔走させても、一人の下手人もつかまえられなかったはずであった。

市中取締り諸色調べ掛りの与力・同心そして岡っ引たちが、巧みに、下手人を遁したからである。

「どうもこうもねえ。木鼠吉五郎を呼んでくれ」

黒太は、投げ出すように、云った。

吉五郎が、やって来るのに、ものの十分もかからなかった。

舳先へ跳び移って、屋形の中をのぞいた吉五郎は、

「うっ！」

と、驚愕のうめきを発した。

黒太は、黙って、吉五郎に、禁門影人から吉五郎に渡すように、とあずかった手紙をさし出した。

披いて、走り読みした吉五郎は、

「畜生っ！　くそったれめ！」

凄じい形相になった。

しかし、源水横丁にもどって来た時には、もう、平静をとりもどしていた。

「万吉！　ちょっと来い！」

「なんでえ！」

般若の万吉は、なに食わぬ顔つきで、向いの源水の家へやって来たが、いつの間にか、遺体がはこび込まれ、安置されている光景を見せられて、ごく、と生唾をのみ込んで、土間に棒立った。

「万吉！　てめえ、ぬけぬけと、このほとけさんに、合掌したり、線香をあげたりできるかよ？」

「あ、あ、兄貴！」

「さむらいなら、さしずめ、この場で、切腹しておわびするところだが、吹けば飛ぶような、面も性根も小ぎたねえ巾着切じゃ、こっちが手をかしてやらなけりゃ、この世におさらばできねえだろう」

吉五郎に、睨みつけられた万吉は、身をひるがえして、遁げようとしたが、そこには、二人の岡っ引が、十手をかまえて、待ちかまえていた。

天下の野人

一

その年の同じ初秋——。

高山彦九郎は、故郷の上州新田郡細谷村に、在った。

気まぐれに、飄然と帰って来たのではなかった。

盛夏の一日、父の良右衛門正教が、死んだからであった。

ただの死ではなかった。

新田郡を治める代官は、野々村伴五郎という旗本であったが、融通のきかぬ頑固者で、課税、収税に関しては、いかなる歎願も受けつけなかった。

当然、高山良右衛門正教のような、先祖に新田義貞馬側十六騎党の一人である遠江守重遠を持つ土豪の名主は、こと毎に、代官と対立した。

上州人は、荒あらしい気風を得意とするところがあった。さらに、先祖が、武勇のほまれ高い武辺であってみれば、ただの名主として、代官の命令ならば、なんでも従う、というのは、その誇が許さなかった。

上州新田郡は、米の収穫のきわめてすくない地域であった。農民の大半は、農耕よりも、むしろ、養蚕に主力をそそいでいた。

代官・野々村伴五郎は、かねてより、これに重税を課すことを考えて、織物貫目改所を設立したい旨を、幕府に上申していた。

血のにじむ努力で、蚕を飼い、繭をつむぎ、機を織って、かろうじて、やせた田畑の収穫をおぎなっていた百姓たちにとって、その織物に重税を課せられるのは、生死にかかわる重大事であった。

細谷村名主・高山良右衛門正教が、代表者となって、代官・野々村伴五郎に、織物貫目改所の設立だけは、思いとどまって頂けますまいか、と願っていたが、冷たく代官所から追いかえされていた。

そして、ついに、この年の七月二十日、代官所へ、いくたび目かの歎願におもむいた高山良右衛門に向って、野々村伴五郎は、

「上州の土豪たる家門を鼻にかけて居るのならば、わしに改所設立を思いとどまらせるためには、一命を賭けて居るのであろうな」

と、云った。

「もとよりのこと」

良右衛門は、うなずいてみせた。

「ならば、家へ立ちもどって、腹を切ってみせい。新田義貞馬側十六騎党の一人高山遠江守重遠の末裔ならば、それくらいの、みごとな振舞いを示してもよかろう」

代官は、実際に、良右衛門が切腹するだろう、などとは考えずに、そう云ったのであったろう。

「てまえが、切腹いたせば、改所設立を思いとどまって頂けましょうか？」

「うむ。思いとどまってつかわそう」

その夜、高山良右衛門正教は、みごとに、切腹して相果てたのであった。享年五十五歳であった。

彦九郎が、この凶報を受けたのは、水戸城下であった。彦九郎は、木村謙という、水戸光圀の編纂になる大日本史の研究に専念している郷士の家に食客になっていた。木村謙は、後に、近藤重蔵に従って蝦夷地に入り、エトロフ島に、大日本国標を建てている。

二

高山良右衛門が、代官所へおもむく時は、いつも、一人の老僕を供にしていた。

老僕は、代官とあるじの問答を、のこらずきいていた。

細谷村のわが家へ、馳せもどって来た彦九郎は、老僕から、その日の模様を、ききとって、

「おのれっ！　代官め！」

と、まなじりをひきつらせた。

もし、代官所に、野々村伴五郎が滞在していたならば、彦九郎は、まっしぐらに、そこへ奔ったに相違なかった。

野々村伴五郎は、すでに、江戸の屋敷へひきあげていた。

彦九郎が、江戸へ趨ろうとするのを、つよい語気で、とどめたのは兄の専蔵正晴であった。

「位牌の前にひろげてある父者の遺書を、読みなおせ、彦九郎！」

良右衛門正教の遺書は、次のようなものであった。

我、つねづね、生年は百に満たざれど、千歳の憂いを懐く君子たらん、と欲していたり。しかれども、五十余歳にして、なお、悟らず。たまたま、今日、自らの一命を断つことによりて、いささか、志の成るを知り、これを為す。我が死を、横

死として、復仇の手段を問わんとする者あらば、
愚かなり。かまえて、愚行を為すなかれ。我は、
道を尽して、正命を終るものなればなり。

もし、彦九郎が、野々村伴五郎を斬れば、かわった新しい代官が、さらに、強硬な態度で、新田郡の百姓たちに臨んで来るであろうことは、想像に難くなかった。

そうなると、良右衛門正教の切腹は、無意味になる。

彦九郎としては、兄専蔵から説かれて、代官へ復讐の刃をかざすのを、いったん、あきらめなければならなかった。

そこで——。

彦九郎は、江戸へ趨るかわりに、先祖代々の墓地の入口に、茅葺きの小屋掛けをし、地面に藁を敷き、梁にむすんで、垂らした縄で、吊り棚をつくり、これに、数十巻の仏典を置き、そのわきに、几を据えて、これに対座した。

喪に服して、三ケ月が過ぎていた。

蓬髪、髭はのび放題、つけた裃は垢にまみれ、破れていた。

彦九郎は、糞尿すらも、坐ったままで、藁へ落して、経典を読みつづけていた。

高山家から、老僕が、食事をはこんできたが、彦九郎は、一日一回、一汁一菜を摂っていた。

兄の専蔵が、亡父の命日に、墓へ詣でて、

「彦九郎、いつまで、そうやって、喪に服しているつもりだ？」

と、問うた。

「三年！」

彦九郎は、こたえた。

「三年も?!」

「拙者が、この小屋を出るのを、最もおそれているのは、兄者、あんたではないのか」

三

その日も、高山家から、老僕が、朝・昼・夕食を兼ねた一汁一菜の食事を、黄昏まえに、墓地へはこんで来た。

雨もりのひどい茅葺きの小屋からは、経文ならぬ謡曲が、朗々とひびいていた。

「澗底の松の風、一声の秋をもよおし、上求菩提の機を見せ、池水にうつる月影は下化衆生の相を得たり……」

老僕は、彦九郎が、うたいおわるのを待って、小屋の前に、ひざまずいた。

「誦経は、厭きなさったか？」

「経文を千読万誦することで、三悪の罪が消えるのなら、この世に、生ぐさ坊主は一人も居らんだろう。……色即是空、空即是色は、おれには、縁遠いと知った。この三ケ月の服喪は、五体に猛気を満たすに役立っただけだ」

「お屋敷に、おもどりなされ」

「いや、おれは、ここで時節を待つ。起つべき時節は、もうすぐ、来るような気がするのだ。……ひとたび、その秋を迎えるや、騎虎の勢い、止ることを得ずだ！」

それから、三日後——。

小屋を、音もなく訪れたのは、禁門影人の密書をたずさえた無香であった。

一読した彦九郎は、髭だらけの顔面を紅潮させて、炬眼を光らせた。

「ふうむ！　一揆数万を催して、江戸を占拠するとは、壮図これより大なるはなしだ！　さすがは、英明なる先の帝の異母兄だけあるぞ。奇策を帷幄の中に運らして、勝ちを千里の外に決す、というわけだ！　よし！　やるぞ！」

彦九郎は、快諾の一文をしたためて、無香に渡すと、

「禁門殿の指定される日時をたがえず、かならず、われらは、一揆を引具して、府内へ乱入いたす、と誓った、と申しつたえてもらおう」

と、云った。

不意に屋敷へもどって来た弟から、

「一揆を起す」

と、断言されて、温厚な兄専蔵は、仰天した。

「彦九郎、なにを血迷って居るのだ。父者の切腹によって、代官殿は、織物貫目改所の設立を、中止して下されたのだぞ。しかも、今年は、珍しく、米は豊作ではないか。一揆を起す理由が、どこにある？」

「兄者！　昨年は、どうだ？　一昨年はどうだ？　四年前は、どうだ？　……四年前は、豪雨が、日本全土に降りつづいて、米の収穫は三分の二、伊勢・美濃の大河はことごとく堤防が決潰して、万余の家が流されているぞ。一昨年もまた、十数年ぶりの台風が襲うて来て、尾張・三河は大洪水になり、奥羽もまた大変な被害を受けて居る。昨年は、二年つづきの米の不作を、大商人どもが利用して、米価をつりあげ、大坂の窮民三千余が、蜂起して、貸借証文奥印請負人の家を、片っぱしから、うちこわしているではないか。そのために、今年の二月に、幕府は、農民一揆取締令を出して居るのだ。……上州だけが、今年は豊作だから、と安心しているのは、天

下に吹き荒れる嵐の音が耳に入らぬつんぼだ！」

四

しかし――。

せっかく、自らの生命を断ってまで、織物に重税を課せられるのをふせいだ亡父の功績を無にしまい、と考えている高山専蔵正晴は、弟彦九郎が、口角あわを飛ばして、述べたてる一揆蜂起のことを、断乎として拒否した。

一揆を起す、という大事は、百姓たちが、草根木皮を口にするところまで追いつめられて、文字通り、窮鼠猫を嚙む騒動であり、故意に、一同を煽動して起たしめる性質のものではなかった。

上州新田郡は、貧しいとはいえ、いまだ、百姓たちが、鍬や鎌をつかんで、代官所へ押し寄せる機は、熟していなかったのである。

しかも――。

無香が影人に報告した通り、上州一円は、大半が、幕府直轄地であるだけに、一村に一札あて、高札が立てられ、

『一揆を煽動する者あれば、その者及び一家一族、
死罪。これを訴え出た者には、ほうびとして十両
与えるべし』

と、記してあったのである。

兄弟のあいだに、いまにも、刀を抜かんばかりの激しい口論があってから、ついに、彦九郎が、

「よし！　もう、兄者にはたのまぬ！」

と、喚いた。

「なんとするぞ、彦九郎？」

「すてておけ！　おれはおれの流儀でやる！」

「待て！　彦九郎、お前が、もし、この上州で、百姓衆をそそのかすのであれば、わしは、お前を討ちとるぞ」

「ふん！　兄者に、おれが討てるか」

蓬髪長髯、弊衣の若い巨漢は、せせらわらってから、

「安心しろ、兄者。この上州など、日本全土からくらべれば、小指のさきほどの狭さだ。……われらが家は、本邦すべての山野だ。一揆を起すのは、奥羽・北陸、信濃だろうと遠江だろうと美濃だろうと、はては、九州へ渡って、大挙、船団をつくって、江戸表へ殺到してみせてくれるわ」

うそぶきたてて、屋敷をとび出すと、彦九郎は、大きく胸を張り、

「やるぞ！　高山彦九郎正之、臣が剣は十歩に一人、千里、行を留めず」

と、豪語すると、大股に歩き出した。

いそいで、門口に出て来た兄専蔵は、

「莫迦者が！　たった一人で、いったい、何事ができる、というのだ」

と、肉親としての不安を、おもてに示した。

「おとどめしても、むだでございましょうか？」

老僕が、問うた。

「あいつのことだ。もう二度と、故山の土を踏むことはあるまい」

専蔵は、弟の気象を知っていた。

――のぞむところへ、往くがいい。しかし、意味もない横死だけはしないで欲しい。

それが、せめてもの、実兄としての祈りであった。

五

高山彦九郎が、筆によって、不敵な勤王の志を、公衆に向ってうそぶく行動に出たのは、十日後からであった。

まず、最初に、人々の足をとめさせたのは、中仙道の高崎城下（大河内右京亮・八万二千石）に沿うて流れる烏川の堤上であった。並木の松の幹が、十本以上も、人目をひく箇処を削られて、墨痕あざやかに、

天に
二日なく
地に
二王なし
一天万乗の
大君こそ
わが大日本を
統括し
純化し給ふ
唯一久遠の
大生命なり

と、大書されてあったのである。

夜半ひそかに、やってのけたしわざであった。

もとより、何者がやったか、見当つかぬまま、大河内家中では、あわてて、尊皇絶対の文句を、塗りつぶした。

街道の並木の幹を削って、同様の意味あいの激越な一文を書く冒険は、それから、夜毎、つづけられた。

本庄、深谷、熊谷、鴻巣、上尾と、中仙道を、江戸へ迫り、それから、一転して、日光街道の各宿の松や杉の並木を削っていったのである。
古河、間々田、小山、石橋、雀の宮と、並木の白い肌に尊皇をうそぶき、宇都宮城下だけは、警戒厳重なので、これを避け、下徳次郎・中徳次郎・上徳次郎という奇妙な名の三つの宿場を、あらしておいて、彦九郎は、今市へ趨ると、宿はずれのうすぎたない旅籠に、泊った。
連れがいた。
牛松という大工で、彦九郎とは幼馴染であった。
牛松は、彦九郎に、
「おれに、ついて来い」
と、命じられて、なにも判らぬまま、一挺の鉋を、古布に包んで、故郷を出て来たのであった。
牛松は、仮名文字さえも読めなかったが、深夜をえらんで、自分に、街道の並木の幹を削らせて、彦九郎が書きなぐる文句が、どうやら、下手人として捕えられたならば、極刑をまぬがれぬ内容であることだけは、合点できた。
牛松自身、大した度胸があったわけではなく、犯す行為が重い罪に問われるものである、とおびえたものの、彦九郎からはなれられなかったのは、物心ついた頃から、牛松にとって一番おそろしい存在が、彦九郎だったからである。
「九郎様よ、もしや、お前様は、ここから鉢石までの参宮道の杉並木も、わしに、削らせるつもりじゃありますまいの？」
牛松は、枕をならべて、闇に目をひらきながら、問うた。

六

彦九郎の口から、牛松をはね起させる不敵な言葉が、吐かれた。
「鉢石までの杉を削るなど、なまぬるい。いっそ、日光東照宮の陽明門の柱を削ってくれようか」
「なにを云いなさる！　九郎様、お前様は、お父上の切腹で、ちょっとばかり、あたまの中が狂われたのとちがうかや？」
旅籠の小部屋の暗闘の中で、掛具をはねて、正座した牛松は、声音をふるわせた。
「正気も正気、大正気だ」
「云いなさるがの、わしらの方は、もう毎夜、生きた心

地もせぬ地獄でありますがな。いい加減で、こんな無茶苦茶な振舞いは、止めなさらんか？」
「止めん！　おれは、思うがままに行動する天下の浪人だ。……天下の憂いに先立ってこれを憂い、天下の大義にのぞんで身をすててこれをかえりみず、来るがごとく去るがごとく、あるいは顕れ、あるいは隠れ、これをとどめんと欲するもとどまらず、これをとらえんと欲するも空々漠々、いうならば、青き虚空にうかんだ一朶の白雲に比すべく……幕吏などの俗手にかかる高山彦九郎正之にあらず」
「それは、お前様が、お一人で、自分勝手にそう確信されているだけで、わしらは、まきぞえをくらって、牢に入れられたり、首を斬られたりは、まっぴらご免を蒙ります」
「びくびくするな、牛松！　人間は、絶対にまぬがれぬことが、ひとつだけある。つまり、死だ。だからこそ、死をおそれず、おのが道を、まっすぐに進むのだ！」
「人の生涯を五十年として、わしらは、まだ半分しか、生きとりゃせんのです。女房も欲しいし、子供もつくってみたいのが、人情ちゅうもんですだべ」
「おい、牛松！　お前、おれのそばから逃げて、細谷村へもどる存念か？」
「…………」
牛松は、ごくりと生唾をのみ込んで、黙った。
正直に返答すれば、彦九郎に、いきなり、斬られる恐怖をおぼえた。
「と、ともかく……」
牛松は、のどがひからびた声音で、
「日光の御宮の陽明門の柱を、削ることばかりは、かんべんして下せえ。おたのみ申します」
敷具からすべりおりて、平蜘蛛のように、平伏した。
闇に目の利く彦九郎は、牛松の必死な動作を見わけて、
「安心しろ。明日からは、別の方法で、わが大志を、世間に知らせてくれる」
と、云った。
「ど、どんな方法ですかの……」
「今夜は、ぐっすりねむれ。……おれの枕もとに、酒がのこって居る」
「わしらが、下戸なのを、ご存じじゃが……」
「だから、飲んで、酔って、なにもかも忘れてねむるのだ」

七

天下の野人高山彦九郎の突飛な行動は、無香によって、禁門影人に逐一報告されていた。

その禁門影人は、宿敵大道寺左近の推測の及ばぬ場所に、いた。

堂々と、江戸のまん中で、すごしていたのである。

北町奉行所――江戸城外郭曲輪内・常盤橋御門の、曲淵甲斐守の役宅であった。

まさに、灯台もと暗し、であった。

北町奉行・曲淵甲斐守も、田沼意次の命令であったので、このおそるべき高貴な青年に、しぶしぶ、別棟の一室を提供せざるを得なかった。

目付である大道寺左近は、北町奉行所のある常盤橋御門や南町奉行所のある呉服橋御門を通って、登城することは、まず、なかった。

北方の神田橋御門をくぐって、酒井雅楽頭の上屋敷に沿うて右折し、大手門を入ったのである。

大道寺左近にとって、無念きわまりないことには――。

一分判金が、推定およそ六十余万両、府内の貧乏長屋にばらまかれてから、その下手人を――張本人も手下どもも、一人も捕え得ないまま――ぴたりと、配布が中止されてしまったことであった。

大道寺左近配下が、仕止めたのは、松井源水だけであった。

その源水も、世間には、急病によって亡くなった、と知らされていた。

いまや、江戸市中で、前代未聞のほどこしをしてくれたのは、あらたに宿老となった田沼主殿頭意次であることを、疑う者は一人もなかったのである。

無念のほぞを嚙んだ大道寺左近は、田沼意次を暗殺する計画をたてて、若年寄・水野壱岐守に、進言したものであった。

「もはや、手おくれだ」

壱岐守は、むしろ、おのれが失脚させられるおそれをおぼえて居り、意次に、おもねりへつらう気持さえ起していた。

意次の人気が絶大なものとなった以上、これを暗殺すれば、庶民は、意次をして救世大明神にしてしまうに相違なかった。

「禁門影人が、これきり、姿を消すはずはあるまい。次に起す騒動を、どこかで、思案していると思われる。

……左近、主殿頭の化の皮を剝ぐには、まず、禁門影人という曲者を捕えて、公儀反逆の証拠をあばくしかないではないか」

「心得て居ります。彼奴に、先手先手と打たれた無念は、この大道寺左近が、最も肝に銘じて居り、たとい刺しちがえても生かしてはおかぬ憤怒で、寝食も忘れて居りますれば……」

宿敵に、それほど躍起にならせておいて、影人の方は、きわめて、のどかな日々を、北町奉行所ですごしていたのは、皮肉な対照というべきであった。

今日も、影人は、朝から、やわらかな篠竹を削って、笛をつくっていた。

八

「のんびりと、笛作りをされて居るのか」

すっと、音もなく、入って来たのは、鬼堂天馬であった。

「退屈だな。無為に日々をすごすのは、性分に合わぬ」

「高山彦九郎のしわざでござろうが、上州の街道の並木を削って、尊皇の檄文を書きちらして居る由ですが、まさか、お手前様の指嗾ではありますまい」

「わたしは、無駄な骨折り仕事など、人にはさせぬ。……彦九郎には、百姓一揆を起すように、とすすめたが、どうやら、それができぬと知ると、一人合点な行動に、酔っている」

「八州取締りの頭数が足らぬ地域ゆえ、あのようなばかげた振舞いも、やってのけられ申すが……、彦九郎の奴、図に乗って、府内に押し入って来て、あちらこちらに、筆を走らせでもすれば、たちまち、縄をかけられることに相成り、お手前様にまで、迷惑をおよぼすと存じます」

「やりたければ、やらせるのだな」

「すてておけと申される？」

「野人は野人らしゅう振舞うのが、生甲斐であろう。……平賀源内は、如何した？」

「どうやら、また長崎へ行った模様です」

すでに、伊豆の賀茂郡縄地山の金坑採掘（とみせかけた作業）は、中止されていた。

「ところで――」

天馬は、ひきしまった表情で、

「大道寺左近は、城内で、長崎犯科帳をくわしく調べた挙句、手の者を幾人か、あの野母半島の脇岬へ、おもむかせ申した。どうやら、末次平蔵の隠匿金に就いて、鼻をかがせたと思われます」

「あとの祭、ということか」
「よもや、あの海底にねむっているぶんを、左近が、さがしあてるとは考えられませんが、万が一、ということもあります。それがしが、おもむいて、監視しようと存じます」
「わたしは、むしろ、源内に、新しい火力を発明してもらって、ふさがれた洞窟の門を、ひらけないものか、と考えているが……」
そう云って、影人は、微笑した。
洞窟の中には、黄金を詰めた十二個の石箱が、ねむっているのであった。
「それは、われらのあるじが、御用部屋の主権を、完全に手中にしてからで、おそくはありますまい」
天馬が、去ると、影人は、ふたたび、笛作りをはじめたが、やがて、ふっと、宙へ遠い視線を送った。
——つかさが、京で、待ちつづけているであろうな。

九

子刻（午前零時）——。
禁門影人は、北町奉行所を、一人で、抜け出した。
常盤橋御門を出たところで、乗物が待っていた。
いわゆる『御忍び駕籠』で、上流層が、なにか特別の急用あって、夜半を往来する乗物であった。
木鼠吉五郎が、中間ていに姿をかえて、乗物わきにひかえていた。
駕籠をかついでいるのも、供ざむらいに化けているのも、もちろん、ただの男ではなく、源水横丁のしたたか者どもであった。
「どちらへ、おいでなさるんで——！」
吉五郎が、問うた。
「上野山内だ。……輪王寺宮に会う」
「へい」
東叡山寛永寺の門跡は、天台宗最高位にあり、本院は、日光東照宮にあったので、日光宮とも称されていた。
初代は天海僧正で、二代が花山院家の公海准三宮、三代目には、後水尾帝の皇子入道守澄親王を迎え、以来、寛永寺輪王寺宮は、天皇の御子がなる、というしきたりであった。
江戸で、将軍家に、頭を下げさせるのは、ひとり、東叡山寛永寺の輪王寺宮だけであった。
下谷広小路にさしかかると、
「やっぱり、尾けて来やがった。……どうなさいやす？」
と、吉五郎が、駕籠の中へ、そっと問いかけた。
「かまわぬ。尾けさせるがよい」
「はじめは、明神下で一人、それが、湯島天神の裏門坂で、三人に増して、この黒門町では、五人になっちまやがったんです」
「あと二人ぐらいは、加わるだろう」
「七人もの隠密をむこうにまわして、おやんなさるお覚悟ができていなさる？」
「できては居らぬ。お前らの頭領の松井源水さんも、討たれた。尋常一様の敵ではない」
「ちきしょう、だんだん、距離を縮めて来やす！」
「ものしずかに歩め！」
影人の下知は、凛乎としていた。
一行は、不忍池から流れる掘割に架けられた三橋を渡ると、まっすぐに、上野山内の関所である黒門に進んだ。
黒門は、暮六つに閉じられて、将軍家か輪王寺宮に、なにか重大な用件が起らぬ限り、明け六つまで、ひらかれることはなかった。
もし、駕籠が、右方——山下の方へ向ったならば、当然、尾行団は、その中に何者が乗っているか、たしかめたに相違ない。
影人は、吉五郎に、
「黒門を通るぞ」
と、云ったのである。
吉五郎や、他の連中に、そのようなことが、可能かどうか、首をかしげさせた。
影人は、黒門前に、乗物を停めさせると、供ざむらいに化けた者へ、一通の封書を渡した。
「番士に、すぐに、御本坊へ持って行くように、とつたえよ」
そして、ものの二十分も経たぬうちに、門をひらかせたのであった。

十

徳川幕府の初期に於ては、東叡山寛永寺は、天皇の都である京都を、比叡山延暦寺が、鬼門の守りとしているように、将軍の都である江戸の鬼門を守るべく、かなりこけおどかしな規模と構造を誇り、門跡に皇子を迎えたのは、飾りものとして据えるのに、これ以上の身分の人はいなかったからである。
皮肉なことに……。

時代が下るにつれて、公私万端にわたって、礼式作法が人間をしばるようになると、上野の山の輪王寺宮は、ただの飾りものではなくなって来た。
寺社奉行といえども、上野山内だけは、特別あつかいとし、輪王寺宮の意志にさからう行動は、とれなかった。（尤も、輪王寺宮が、自らすすんで、何かしたいと、寺社奉行に通達したことは、一度もなかったが……）
輪王寺宮は、天台宗座主・関東大本山の門跡であるばかりではなく、日光東照宮を本山として、日光宮と称えていた。
すなわち。
徳川家始祖家康を、東照神君としてまつっている日光の本山をあずかる輪王寺宮は、幕府初期の時代の、飾られた雲上人ではなく、江戸に於ける唯一の治外法権地の権威を誇る存在になっていた。
そのあらわれのひとつとして、江戸の富有な商人たちは、安心して、寛永寺を、『銀行』として、金をあずけたことであった。
上野山内は、江戸城よりも、町人職人の出入りに関しては、寛大であり、また、花見どきなどには、裏長屋のうすぎたない連中をも、自由に遊ばせた。
しかし、寛永寺に、盗賊が侵入したことは、開府以来一度もなかった。
盗賊にも、仏罰をおそれる気持があったかどうか。
富有な商人たちにとって、自分の店の土蔵よりも、寛永寺の蔵の方が、安心だったのである。
寛永寺は、『銀行』になったとはいえ、無利息で、あずかった。
そして、台所窮迫した大名たちは、この『銀行』から、利息をはらって、金を借りていた。
もとより、元禄時代が過ぎると、大名の貧乏はますますひどいものになり、寛永寺から借りた金を、容易に返済できなくなった。
そこで、一日だけ、札差とか問屋から、金を借りて、黒門から上野山内へはこび、いったん、利息を添えて返し、その場で、すぐにまた借りて、谷中の方へ抜け出る、という苦肉の方策をとって、なんとか、しのいでいるありさまであった。
いわば、寛永寺は、濡れ手で粟のまるもうけをやって居り、寺社奉行といえども、これに関して、口をさしはさむことはできなかった。
そのようなふしぎな権威をそなえた寛永寺を、夜半に訪れて、黒門をひらかせた乗物の中の人物が、何者であるか——大道寺左近手飼いの隠密たちには、見当がついた。しかし、しずしずと、山内へ消えてゆく一行に対して、襲撃することは叶わず、無念の歯がみをしなければならなかった。

十一

東叡山は、さすが、将軍家の菩提所だけあって、途方もない規模であった。
黒門から、ゆるやかな坂をのぼるが、これがおそろしく長い。
吉祥閣があり、そのうしろが、阿弥陀堂と釈迦堂が左右にどっしりと居すわった文殊楼である。
これをくぐって、中堂に至る。
中堂は、将軍が参詣した時だけ、門扉をひらく。
中堂の裏手が、鬱蒼たる樹林にかこまれた本坊である。
まず、本坊だけでも、二十万石の大名の城郭の広壮な構えと思えばいい。
禁門影人は、納所二人に案内されて、おそろしく長い廊下を、進んだ。
三十畳はあろう座敷に、みちびかれた。
調度は、何ひとつなく、上座に御簾がたれ、左右に平安期の遺物のような燭台が、あかりをまたたかせていた。
影人は、座敷中央の円座に、胡座をかいた。
やがて——。
「ご出座にございまする」
俗っぽい面相の、誦経よりも算盤をはじくのが得意そうな沙門が入って来て告げた。
「わたしは、宮とは、二人きりで話しあいたい。他の者は、遠慮して頂こう」
影人は、まず、念を押した。
「かしこまりました」
「但し、どこかの物蔭で、ぬすみぎきするようなことは、止めてもらいたい。こちらは、いささか、神経を練磨しているゆえ、人の気配を察知するに敏感である」
沙門は、ちらと、小憎らしげに、影人へ一瞥をくれてから、ひきさがって行った。
輪王寺宮が、上座に就くと、納所が御簾をまきあげておいて、あとずさりに、去った。
「幾歳ぶりであろうな、和仁殿」
輪王寺宮は、なつかしげに、笑いかけた。
影人より、四歳年上であった。
閑院和仁であった頃、この親王と、蹴毬の相手をし

て、遊んだこともあり、ともに机をならべて、書道を学んだこともあった。
「准三宮様に、おことわりしておきます。わたしは、ただいまは、禁門影人という、一介の素浪人にすぎませぬ。……尤も、貴方様に、お逢いするこのような場合は、やむなく、先の帝の異母兄の特権を利用いたしますが……」
「世間から、へだてられたこの寛永寺にも、それとなく、噂が流れて参る。……貴方は、なにやら、世間に、騒動をまきおこしておいでらしい」
「田沼主殿頭でも、お耳に入れましたか」
影人は、冷たく、にやりとしてみせた。
「いや、先月、将軍家が参詣なされた時、貴方のことを、興味ぶかげに、お話しなされて、いましたよ」
「この禁門影人、将軍家まで、手玉にとる存念はありませんが、堕落した公卿衆の中からも、一人ぐらい、骨のある者が現れてもよかろうと存じ、あれこれと企てて、世直しをやってのけようといたして居ります」

十二

「なんでも、何者かが、府内の貧しい者たちに、多額の一分判金を、配布いたしたそうなが……」
輪王寺宮は、そう云って、影人の返辞を待った。
「わたしのしわざです」
影人は、かくさなかった。
その莫大な黄金の発見、入手の苦労、一分判金に鋳なおすための秘密な方策、そして、配布するにあたって、目付大道寺左近を敵にまわしながらのはなれわざ等について、手短かに、要領よく、語ってきかせてから、
「さて、今宵、参上いたしましたのは、お願いの儀があってのことです」
「わたしにできることがあれば――」
「貧民にほどこしたのは、百五十万両のうち、六十余万両です。のこりは、浅草姥が池の一ノ権現の床下に、かくしてあります」
「ほう……」
「のこりの八十余万両を、当寛永寺の土蔵におあずかり頂きとう存じます」
影人は、たのんだ。
「あずかるのは、造作もないが、どうやって、はこばれるのか？」
「田沼主殿頭の行列によって――」
影人は、こたえた。

「と、申されると？」
輪王寺宮は、眉宇をひそめた。
札差や問屋は、預けるために、この上野山内へ金をはこんで来るが、大名旗本は例外なく、借りるために、やって来るのであった。
「田沼邸には、目下、大名はじめ商人まで、毎日、つぎつぎと、賄賂がもたらされて居ります。あと三月も経てば、かなりの金額になりましょう。……主殿頭には、この賄賂金を、わたくしのものとせず、いずれ、ひろく、庶民にわかつ、と公言してもらい、ひとまず、当寛永寺にあずけることにする――この手段をとります」
「なるほど！」
輪王寺宮は、微笑した。
幼少から、鋭利な才気の持主である、と周囲の人々からみとめられていたが、
――この器量、まさしく、天下を動かすに足りる！
と、日光宮門跡は、感服した。
「ついでに、うかがっておく。貴方のまことの目的は、なんであろう？」
「王政復古――と申せば、なにやら、古めかしい思想ですが、わたしの願いは、この日本を、封建の制度から解放し、諸外国に国を開き、士農工商などという階級を、なくすることにあります」
「………」
輪王寺宮としては、生れてはじめてきかされる革命であった。
そのような革命が、いったい、実現可能なものかどうか？
「もとより、十年や二十年で、実現はいたしますまい。百年あるいは、それ以上の歳月をかけなければならぬと存じます」
影人は、なにげない口調で云ってから、
「わたしは、そのための捨て石になる覚悟で居ります」

権勢

一

歳月が、あわただしく、流れ過ぎた。
安永元年（一七七二年）正月十五日。
田沼主殿頭意次は、老中格から、正式に、老中となった。
『老中格』と『老中』では、その地位に、明らかな差があった。
並の人物ならば、末席の老中格である時は、万事、発言をひかえめにするのが常識であった。
意次は、そうではなかった。老中格となるや、他の宿老を威圧し、首座に在る松平右近武元に、真正面から対立するのを、敢えて辞さなかった。
将軍家治の絶大な信頼を背負うていたからである。
そして――。
いよいよ、老中になった時には、すでに、意次に向って、対抗の姿勢をとる宿老は、一人もいなくなっていた。
もし、松平武元が、健康であり、常に出仕していたならば、意次も、御用部屋で、ある程度、遠慮する態度を示していたであろう。
還暦を迎えた松平武元は、急速に、体力がおとろえ、病臥がちになったのである。
将軍家治に、二度ばかり、隠居の儀を願い出てもいた。
しかし、家治は、凡庸な将軍ではなかった。
――意次は、奔馬ゆえ、たづなをつかんでいる者が、その上に、いなければならぬ。それが、武元だ。
つねづね、そう考えていた。
家治は、意次の才智をみとめ、その政治力を高く買ってはいたが、一面、そのありあまる精力に、いちまつの懸念をおぼえていた。
松平右近武元のような人物こそ、野心旺盛な意次を牽制するためには、なくてはならぬ存在であった。
武元は、水戸家の庶流松平頼明の三男で、六代将軍家宣の弟松平清武がたてた家を継いでいた。
二十歳で、右近将監となり、三十歳で奏者番となり、四年後に寺社奉行、三年後に老中と確実に出世して、爾

来現在まで、ただの一度も、失策をせず、その高潔な人格にふさわしい公私のくらしぶりは、封建幕府の閣老として典型的規範であった。
幕閣に加わってから三十年、老中の座に在ること二十六年――これほど、長く老中職に在った人物は、他に例がなかった。
武元自身も、内心、
――自分が隠居してしまえば、田沼は、途方もない改革をやってのけるおそれがある。それが、かならずしも、徳川家のためにはなるまい。
と、おそれていた。
武元としては、老中であることは、徳川家の忠臣であることと同じ意味であった。
徳川幕府が、永久不変につづくのが、松平右近武元という老人の願いであり、祈りであった。
もし、田沼意次の改革が、将軍家の威信を傷つけるようなことがあれば、これは、断じて許しがたい不忠であった。

二

一日――。
松平武元は、若年寄・水野壱岐守忠見の来訪を受けた。
書院に入って来た右近武元は、人手をかりなければ、歩行もおぼつかないほどの衰弱ぶりをみせていた。
「ご加減悪しくば、お居間の方へおうかがいつかまつりましたものを――」
壱岐守は、眉宇をひそめて、いった。
「おのがからだは、おのれがいちばんよく存じて居る。養生して、治るものならば、そうもいたそうが……、どうやら、死神めが、すこしずつ、体内を虫食み居る」
武元は、笑ってみせた。
現代の病名でいえば、ガンであったろう。まず腎臓あたりをやられて、それが、次第に、各臓腑に転移した模様であった。
「わざわざ、みえたのは、主殿頭のことかな？」
「はい」
壱岐守は、うなずいてから、
「先日、こころみに、田沼邸を、訪れてみましたところ、きききにまさる、あきれるばかりの賄賂の市でありました」
と、云った。
「なんでも、各大名の留守居どもが、田沼邸の数十畳敷

きの座敷に、隙間もなく詰め、次の間に、その者どもの刀がならべられたさまは、海波を描いたような景色にみえるそうなが……」

「誇張ではありませぬ。……なお、これは、感服すべきか、あきれるべきか——主殿頭殿は、五十名を越える留守居役どもの顔と名前を、すべて、覚えて居りました」

「そうでなければ、あれほどの絶大な人気を集められまい。……どうやら、主殿頭は、譜代や門閥の反感をしりぞけることに成功したようだな」

「ちゃくちゃくとして、味方の頭数を増して居ります。目下は、ご老中では、阿部豊後守正允殿お一人でありますが、いずれ、近く、水野出羽守忠友、稲葉越中守正明、米倉丹後守昌晴、太田備中守資愛ら、幕閣の要職に就くであろう面々が、主殿頭殿の権力をささえる土台となり柱となり梁となりましょう」

すでに——。

田沼意次は、勘定奉行に、松平伊豆守秀持を百俵五人扶持の組頭から抜擢していた。

能力のある人材を、思いきって登用するのは、田沼意次のような、譜代大名以外から老中にのぼった人物にして、はじめて、やってのけられることであった。

もうひとつ、意次にとって、強力な味方がいた。

外様の大大名であった。

加賀の前田家、薩摩の島津家などが、意次の権勢を歓迎したのである。

殊に、島津重豪は、意次の開国政策を支持した。重豪自身、開国主義者であり、また、堂々と、密貿易をやってのけていたからである。

明和八年（一七七一年）、島津重豪は、出府の途次、長崎に立寄り、オランダ商館長に会い、西欧文明がいかに発達しているか、つぶさにきかされて、はっきりと、鎖国がいかに日本をおくらせているか、知ったのである。

三

「きくところでは、……この身が、出仕をおこたっているあいだに、御本丸はじめ、西丸、大奥のほとんどの座敷が、主殿頭献上の珍器奇宝で飾られたそうなが、どのようなしろものであろうかな？」

松平武元は、問うた。

「各大名の領内で、名人とうたわれる者どもが、精魂こめた品が、ご城内に網羅された、と申しても過言ではありますまい。漆器、陶磁器、絨毯、衝立、屏風、書画、

見台、厨子、茶道具……かぞえるにいとまもありませぬ」

「つまり、主殿頭は、諸大名や大商人の賄賂品を、片はしから、ご城内へ、はこんでみせた次第か」

「左様です。ご登城なされて、白書院ならびに黒書院の飾りつけを、ごらんなされば、いかに、各大名の留守居どもが、高価にして貴重な品を、賄賂したか、唖然となさいましょう」

江戸城の白書院は、本丸のおもての西側にあった。中庭をへだてて、北が黒書院、南は大広間。上段・下段と分れて、上段の東は、納戸構えを中にして連歌の間、下段の東が、帝鑑の間である。

塗りものを一切用いずに、檜柾の白材で作られたこの白書院が、いわば、幕府の正殿であった。将軍職に就くとか、勅使答礼とか、大礼はすべて、ここでとりおこなわれた。

黒書院の方は、将軍が、親戚または親近の人々を引見し、座談するところであった。書院窓の縁から、格子、障子縁までのこらず黒うるし塗りなので、この称があった。

将軍家の威厳を示す両書院は、当然、その飾りつけは、床の間の三幅一対の掛物も、香炉・花瓶・燭台の三具足も、棚や厨子を飾る諸品も、価額のつけようのない宝物であった。

田沼意次は、これまで飾られていた品々にまさるともおとらぬ佳品名作を、献上して、大名衆の目を惹いている、という。

「主殿頭は、賄賂は私欲をこやすためではなく、ご城内を飾るために受けとっている、と諸大名に対する示威の手段にいたして居る次第か」

武元は、ほっと、ふかく溜息をもらした。

賄賂政治が、田沼意次によってはじまったのではないことは、すでに述べてある。

意次の巧妙なやりかたは、贈りものを、おのれのふところに入れなかった点にある。

これは、禁門影人という影の存在が、物心両面から、援助し、忠告したおかげであった。

意次が、執政（老中）と参政（若年寄）を、まっ向から威圧したのは、老中格となって、ほんの一月あまりであった。外柔内剛の性格であり、平常は、茶坊主などにも気軽に自分から声をかけたし、御用部屋でも、まず、宿老たちの意見をもとめ、それらをまとめて、裁決するがごとくみせて、結果としては、おのが薬籠中の物にする手腕を示した。表面は、いかにも、謙虚にさえみえ

た。
　但し、その態度は、宿老たちには、かえって、いつ大爆発するか判らぬ休火山のごとく、無気味であった。

四

「一昨日、途方もなくぜいたくな置物が、主殿頭殿より、ご城内へはこび込まれ、とりあえず、大広間の四の間に、飾りました」
　水野壱岐守は、首席老中に、告げた。
「方九尺ばかりの石台に、山家の秋景を模してつくったものでありまして、隠者の草庵を設け、その屋根は小判で葺き、窓も戸ぼそも板壁もみな金箔、銀幣でよそおい、室内もまた、襖、畳、天井を金銀にてつくり、さらに、この模型の大きさに合せた精巧無比の調度品を配して居ります。黒棚には、松喰鶴蒔絵の小唐櫃、屛風は扇流し、掛物は、陶千虎の手写せし菩薩処胎経を、いずれ名のある僧侶に写させたとおぼしい唐表装、とまことに凝りに凝ったしつらえ。さらに、庭は、豆銀で立石敷石をつくり、木戸口には、青茅を植えて居ります。そればかりか、青茅わきに、銀鎖で、生きているほんものの猪の子をつないで居ります」
「なんと、前代未聞の賄賂よの。……誰人が、主殿頭に贈ったか、しらべたか？」
「お名前を挙げるのは、はばかりますが、京畿に近い、三十五万石がほどの譜代名家の由、きき及びました」
「――彦根侯が、贈ったというのか！」
　武元は、眉宇をひそめた。
　井伊掃部頭直幸ならば、いずれは、大老になるべき大名ではないか。
　その掃部頭直幸さえも、いまは、田沼意次の機嫌をとらねばならぬとは！
「壱岐守」
「は……」
「お許は、目付の大道寺左近を使って、主殿頭が御側用人であった頃から、必死に、その野望をうちくだくべく、苦心した模様であったが、どうやら、無駄骨に終ったようだな」
「まだ、あきらめては居りませぬ。いざとなれば、非常の手段を用いる覚悟で居ります」
「もはや、手おくれだの」
　武元は、よわよわしく、かぶりを振った。
「なぜ、そのように、主殿頭に、遠慮をなさいますのか！　幕府の柱石たる貴方様のご気力次第にて、かの御

仁を宿老の座から追い落すのは、決して不可能ではありませぬ」
「…………」
　武元は、黙って、懐中から、ひと綴りの調書を、とり出した。
「お許は、田沼が、この十年間に、交易政策に於て、金銀が外国へ流出するのをふせぎ、逆に、清国、安南、オランダ、欧州諸国に、海産物や漆器や陶磁器を輸出して、どれくらい金銀を輸入したか、承知であろうか！」
　壱岐守は、その調書を手渡された。
　昨年までの輸入額が、総計されていた。
　金八十七貫余。
　銀五千二百貫余。
　田沼意次は、将軍家治に直接進言して、海外交易に銀を用いるのを止めて、銀二百貫を銅三十万斤の相場とし、そのうち銅を七分、あとの三分を俵物（海産物その他の国産品）で、外国と取引したのである。
　この非凡な政策を、意次は、老中や若年寄が知らぬうちに、やってのけていたのであった。

五

　水野壱岐守忠見が、自邸へ帰って来ると、書院に、客があった。
　大道寺左近であった。
　目付たる左近が、若年寄の屋敷を訪れたのは、この日が、はじめてであった。
　公儀目付は、上司、同僚はもとより、父兄弟・近親の家も、絶対に訪問しない不文律を課せられていた。たとえば、兄弟が亡くなっても、通夜にも葬儀にも、姿を現さなかった。それほど非情な孤独を守る役職であった。
　壱岐守は、左近が、敢えて、禁を破って、訪れて来た理由を、はかりかねつつ、対座した。
　しかし、その理由を問う前に、
「右近将監殿は、もはや、田沼主殿頭に反抗いたすのは、無駄である、と申された」
と、云った。
　意次が、この十年間に、諸外国から多額の金銀を輸入した功績だけでも、宿老たちは、一歩ゆずって、その権力をみとめざるを得なかったのである。
「貴方様のご努力も、それがしの尽力も、すべて、徒労

におわりましたな」
　左近は、自嘲のひびきを、声音にこめた。
「天災が、田沼に味方したことだ」
　壱岐守も、なげ出すように云った。
　天災――暴風雨・旱魃による飢饉が、この十数年、あいついで起っていた。
　幕府はじめ、諸大名の台所は、目にみえて苦しくなり、倹約令は、九代家重の時代から、二度も三度も出されていたが、十代家治の時世になると、ますますその実行をきびしいものにしなければならなかったのである。
　荒廃した田畑の復旧、破壊した河川の堤防修理工事、江戸城はじめ仏閣の修築、困窮しはてた小大名に対する援助、その他、朝鮮来聘使の接待とか、将軍代替りのための経費とか……、つもりつもった赤字は、勘定奉行の頭をかかえさせていた。
　明和元年（一七六四年）の倹約令では、作事方・小普請方・賄方・細工所へ支給されていた用紙や蠟燭や晒布まで、さしとめられたくらいであった。
　明和八年（一七七一年）になると、倹約令は、さらに細部にわたってきびしくなっていた。
　例えば、江戸城内の畳は、たといすりきれても、五年間、取り替えないことにされた。老中・若年寄はじめ、側衆や奥向き、評定所の役人は、昼夕食は、湯漬と沢庵と焼味噌だけとなり、酒は禁止された。
　そして、この極端な倹約は、いまなお、つづいているのであった。
　最大の皮肉は、上下をあげての倹約のさなか、田沼意次の許へは、ありとあらゆるぜいたくで珍奇な賄賂品が、昼夜、山のようにはこび込まれていることであった。
　ただ、意次自身は、御用部屋に出仕した時でも、下に襦袢を着ることがなく、木綿の着物・羽織・袴をつけていたし、自邸に在っても、金山寺味噌と沢庵だけの粗食を守り、魚など、十日に一度も、口にしなかった。
　つまり、意次の公私の素行には、けちのつけようがなかったのである。

六

「わしは、近く、参政の座を退く」
　水野壱岐守は、告げた。
「…………」
　大道寺左近は、無言で、上司の顔を、見つめた。
「やむを得ぬ次第だ。……右近将監殿が、病臥されず、健康にて、毎日御用部屋に出仕されて居るのであれば、

わしも、これまで燃やしつづけた執念を、むざむざ、すてるものではないが……、天災までも主殿頭に味方するほど、あの男の運勢の強さには、とうてい、敵わぬ、と知った。……左近、今宵、訪れた理由をきこう」
「申し上げます。それがしの執念は、禁門影人の行方を突きとめ、これを討ち取ることにありました。ついに、行方を突きとめました」
「ほう……」
「それがしは、禁門影人を、かならず、討ち取ってごらんに入れます！」
「左近――、わしは、主殿頭の悪運の強さに屈したのだ。お主も、禁門影人という曲者から、手を引いては如何だ？」
「壱岐守様！　ありていに、申し上げますが、貴方様は、卑怯者でござる！」
「なに?!」
　さすがに、壱岐守は、顔色を変えた。
「参政の座にあって、あくまでも、田沼主殿頭の野望をはばまんとされるならば、最後の手段がございましょうが！」
「…………」
「刃傷でござる！」
　大道寺左近は、声を張って、言いはなった。
「殿中に於て、田沼意次を、仕止めるのでござる」
「……う、む！」
「だが、その勇気は、貴方様は、お持ちではありますまい」
「左近！」
「それがしは、貴方様に、決意なさるように、すすめては居り申さぬ。……しかし、この大道寺左近、禁門影人に対しては、おのが五体の血の一滴までしぼり出しても、かれが生命を奪ってくれる執念がござる。これは、男子としての意気地でござる。……いまさら、禁門影人を討ち取ったところで、田沼意次の権力を殺ぐことにはならぬ、というのは、第三者のしたりげな理窟と申すもの。それがしにとっては、あの男を、この世から屠るのが、生甲斐であり死甲斐でござる」
「…………」
　壱岐守は、左近の気魄に圧倒されて、いたずらに、顔面を蒼ざめさせた。
「では、これにて……。今生のいとま乞いにうかがいました」
　左近は、頭を下げると、さっと、座を立った。

「ま、待て、左近！」

あわてて、とどめる壱岐守を無視して、左近の姿は、そのまま、廊下へ出て、袴を鳴らす音を遠ざけていった。

七

東叡山のおもてを黒門口とすれば、北方の天王寺が、裏手となる。

輪王寺宮の住居である御隠殿は、天王寺の東がたに、宏壮な構えを深い森にかこまれていた。

さらに——。

宮家の別邸が、その御隠殿にほど近い根岸の里に、二つあった。

文人墨客の遊ぶ根岸の里にふさわしい、柿葺きの屋根に、自然木の柱、網代の天井など、意匠上の配慮の心にくい数寄屋造りは、四季の佳日に、輪王寺宮が、息ぬきに半日をすごすための別邸であった。

禁門影人は、輪王寺宮にすすめられて、常盤橋御門の北町奉行の役宅から、御隠殿に移って、この二年あまり、無為な日々をすごしていた。

影人自身は、何もせずに、好機の至るのを待っていたが、世の中は移り変っていた。

著名な人たちが、つぎつぎと逝っていた。青木昆陽、賀茂真淵らが、古稀を越えて、他界した。浮世絵師の鈴木春信も、五十を過ぎたところで、亡くなった。

明和七年十一月、後桜町帝は、英仁親王（後桃園帝）に譲位されて、翌年一月造営成った仙洞御所へ移られた。

長崎に滞在していた平賀源内は、天草陶土によって、みごとな陶器を焼きあげ、公然と諸外国へ輸出することを、公儀に願い出ていた。

影人に、ひそかに泪を流させる不幸も、その年の秋に起っていた。

将軍家治の御台所五十宮倫子が、まだ三十四歳の若さで逝去したことであった。

そして、年があらたまって、安永元年正月に、いよいよ、田沼意次が、老中格から老中に昇ったのである。

それから一月後に、明暦の振袖火事以来の猛火が、二昼夜、江戸市中を荒れ狂い、死者四百余人を出した。

上野の仁王門も類焼した。老中・若年寄の邸宅も、大半が烏有に帰した。

初夏の一日——。

まだ、西の空があかるい残照に映えている頃合、禁門

影人は、御隠殿を抜け出して、堀川沿いに、根岸の里へ、足を向けた。

菅笠をかぶっていたが、白羽二重の小袖の着流しに、小脇差一本だけ佩びて、頭髪を肩に散らした姿は、相変らずのものであった。

小橋を渡ったところで、むかいの社家から、ひょいと出て来たのは、木鼠吉五郎であった。

「まだあかるいうちは、ご用心なすった方がよござんすがねえ」

吉五郎は、松井源水という頭領を失って以来、影人の身辺の警護役を、自分で買って出て、影人が御隠殿に移ると、自分も、堀川をへだてた社家の一部屋に起居していたのである。

「輪王寺宮が、先月、帰洛された際、わたしの伴侶をともなって、もどられた。別邸に逗留させた、と報らされた。こちらにとっては、いささか迷惑な話だが、やむを得ぬ。……今宵、ともにすごしたならば、また京都へ帰すことになろう」

八

根岸の輪王寺宮別邸は、梅屋敷のはすむかいにひとつ。

往還をへだてて、円光寺という小さな寺院と塀をへだてててもうひとつ。

いずれも、まわりは、百姓地で、欅の林の外は、一望、武蔵野の原野であった。

「吉五郎——」

影人は、円光寺と塀をへだてた別邸の門前に来て、

「大道寺左近という目付は、狙った獲物には、鬼と化して、くらいつくようだな」

と、云った。

「とうとう、さがしあてられましたか？」

「梅屋敷の蔭から、尾行の者が、現れた。……但し、一人ゆえ、襲っては参るまい」

「仲間を呼んで来るまでに、一刻はかかりやすね」

「大道寺左近が、指揮をとるであろう。わたしの息の根を止めるのは、今夜しかない、と覚悟をきめて居ろう」

「どうなさいやす？　伴侶というおひとをおつれなすって、ひとまず、御隠殿におひきあげなさいやすか？」

「御隠殿は、女人禁制だ」

「この際、そんな掟にしたがっていちゃ、いられますまい」

「吉五郎——」

影人は、微笑を投げて、
「ひとつ、ここで、おのが運勢をためしてみたい」
「と仰言いますと？」
「敵が襲撃して来るまでの一刻あまり、久しぶりに、わが伴侶と褥をともにして、男と女の悦楽に耽ってみよう、と思う」
「…………」
吉五郎は、思わず、息をのんで、影人の顔を見なおした。
「大道寺左近が、迫って来れば、そこらあたりに身をかくしている無香が、合図を送ってくれるであろう」
「心中でもなさろうってえ、お考えですかい？」
吉五郎は、江戸っ子の早合点で、なんとなく、むかっ腹が立った。
「そうではない。生と死は、紙一重だ。わたしは、これまで、わが身を守るために、万全の処置をとって来た。……男子として、ふっと、一度は、死地に立ってみたい、と思った。それだけのことだ」
「若宮様ともあろう、慎重の上にも慎重な行為をえらぶお方が、いったい、どういう風の吹きまわしで、そんな無謀なお考えを起しなすったのか、皆目さっぱり、あっしには、わかりませんね」
「敢えて申せば、わたしの敵は、大道寺左近ではなく、死神だ。その死神と、今夜、対決してみたくなった」
「なるほど、そう仰言られると、そのお気持は、すこしは、わかるような気もいたしやすが……。あっしの立場はこの五体が舎利になっても貴方様を守ることにありやす。あっしはあっしで、勝手に、源水長屋の生命知らずを呼び集めて、ここへ駆けつけやす」
「ことわる！」
「なんですって！」
「吉五郎、云ったではないか、わたしは、死神と対決するのだ、と。多勢の味方に援けられては、死神と対決することにはならぬ」

九

青蚊帳の中に、つかさは、ひっそりと坐っていた。
雨戸もまだ閉められていなかったし、障子も開けはなたれていた。
心字池の庭の宵闇の中を、ほんの短かいいのちの証を点滅させて、飛び交う螢の群へ、つかさは、じっと、微熱でうるんだ眼眸を、投げていた。
つかさは、この一年あまりのあいだに、数度、喀血していた。

もう、自分の生命が、さして長くないことをさとっていた。
それゆえに、京都の『長生庵』で、禁門影人を待ちつづけることに、堪えられなくなったのである。帰洛した輪王寺宮に、江戸へともなって頂けますまいか、とつかさの方から、乞うて、ききとどけてもらったのであった。
影人が、平家物語の一節
『一樹の蔭に宿りあひ、同じ流れを掬ぶだに、別れは悲しきならひぞかし』
という文章を、書き置いて、『長生庵』から、姿を消して、もう七年の歳月が流れ過ぎていた。
七年！
つかさにとっては、あまりにも長い日々であった。
そのあいだ、影人からは、一通の手紙さえも、とどかなかったのである。
――江戸へ出れば、影人様に、きっと、お逢いできる！
そう思いはじめたのは、つかさ自身気づかなかったが、肺が病菌にむしばまれはじめた頃からであった。
はじめて血を喀いた時、つかさの心を占めたのは、自分の一生の短かさをなげくよりも、立居振舞いの自由なあいだに、ぜひとも、影人に逢わなければならぬ、という想いであった。
そして……。
ついに、念願叶って、つかさは、出府して来たのである。
影人が、輪王寺宮の本邸である御隠殿に、かくれ住んでいることも、神仏の慈悲と思われた。
――きれい！
つかさは、胸のうちでつぶやいた。
ほんの短かい数日の生涯を、生きの限りに、夜を光らせて飛ぶ螢を、わが身になぞらえていた。
つかさは、わずらってから、さらに、その美貌をろうたけたものにしていた。
透けるような肌の色は、老いを知らぬままに、この世から消えるために、美しさを増しているようであった。
ただ一度、この肌を、影人に抱かれたならば、つかさは、次の日、死んでもよかった。
……ふっ、と。
つかさは、頭をまわした。
「あ！」
次の間との仕切りの襖が、いつの間にか開かれて、白い立姿が、そこにあった。

——ああ！　とうとう、お逢いできた！
つかさは、胸で両手を組み合せた。
「わずらって久しいのではないのか、つかさ？」
影人の第一声は、それであった。

十

つかさは、とっさに、返辞にとまどった。
影人は、青蚊帳のわきをまわって、縁側に出た。
螢火へ、視線を送りながら、
「そなたが、わずらっているらしい、ということは、年に一度、京都をおとずれる無香から、告げられていた」
と、云った。
長生庵の裏手の墓地に、無香の父無念道士が葬られていた。
伊豆忍者「捨て草」——北条乱波最後の生き残りである無念道士は、娘の無香を使って、禁門影人を襲撃して、敗れたのであった。
敗れたばかりか、わが娘の縄術によって、頸根へ鉛玉を打ち込まれて、相果てたのである。
無香は、影人の命令によって、そこの墓地に、父を葬った。
爾来、無香は、祥月命日には、こっそり、京都へ現れて、墓に詣でていたのである。
これも、無香の意志ではなく、影人の命令であった。
影人が、無香から、
「父は、右手の五本の指を、自身で、焼いて居りました」
と、きかされたのは、江戸へ出て、源水横丁の一軒を仮住居にした時であった。
その無慚な自虐行為が、桃園帝崩御の二日後になされたと、無香に語られて、影人は、すぐに合点したのであった。
——わが異母弟の英邁な天子は、五摂家どもにやとわれた北条乱波の生き残りによって、生命を縮めさせられたのであったか！
いかに非情な生きかたをしている忍者であっても、時の帝を暗殺した罪の深さに堪えられず、最も大切な得物であるおのが右手の指を焼く、という罰をおのれに加えたのである。
「父が、わたしに縄術を使わせて、貴方様を、襲うたのは、もしかすれば、死ぬ時をえらんだのかも知れませぬ」
無香は、ずうっと考えていたことを口にしたのであっ

た。
無念道士は、禁門影人が人間ばなれした修業をし、迅業を身につけているのを知った。
無香に、縄術を使って、立ちむかわせても、影人が、充分の余裕をもって、これをかわすに相違ない、と予測した。
そこで、おのが右手で暗殺した先の帝の異母兄を襲撃することによって、伊豆忍者「捨て草」らしい生涯を閉じることにした。
おそらく、無念道士は、計略通りに、わが娘の放った鉛玉を、その頸根に埋めて自決したに相違なかった。
「影人様——」
つかさは、叫んだ。
「無香さんが、墓詣でをされた時に、貴方様の消息を、伝えて下されば、どんなに、わたくしにとって、よろこびでありましたでしょうに……」
「無香は、そうしたい、と申し出たが、わたしが、止めたのだ」
「なぜでございます？」
「この七年間、わたしは、明日のないくらしをつづけて来た。もし横死すれば、無香は、そなたに、それを報せなければならなかった。……そなたにとって、わたしは、いつまでも生きていなければならぬ男なのだ」

十一

影人が、すっと、青蚊帳の中へ入って来ると、つかさは、一瞬にして、乱れた。
胸に顔をうずめて、双腕の中ではげしく身もだえるつかさの匂いを、影人は、七年ぶりに吸いながら、
「細く、軽くなりすぎたぞ、つかさ」
と、云った。
「影人様！」
つかさは、力の限り、しがみつきつつ、
「わたしは、螢に、なりました！　……明日の朝には、もう、この世から、消えまする！　……うれしい！　生きていて、よかった！」
七年のあいだ、たった一人で、男への想いを、燠火のように心の底で絶やすことのなかった女は、今宵、その慕情を、炎にしてあかあかと燃えあがらせていた。
影人は、しかし、すこし腕に力をこめれば、もろくもくだけそうなつかさのからだを、女として、褥の上へ仰臥させ、ひらかせることを、ためらった。
時間は、一刻あまりしか、与えられていなかった。

つかさとの契りは、最後のものになるのであった。つかさは、それを、のぞんでいる。

「………」

身もだえつづけるつかさを、抱きながら、影人は、かぼそくはかなく病んだ肌の冷たさに、胸が疼いた。

螢火は、束の間の短かさゆえに、こよなく美しいが、血汐の燃える熱さはない。

「……あ、あ……あ！」

不意に、つかさが、胸から顔をはなして、苦しげにかぶりを振った。

「どうした？」

「い、いえ――」

つかさは、襦袢の袖で、口を掩うた。

白綸子が、みるみる、朱にそまった。

影人は、そのからだを、そっと褥へ横たえた。

「……おゆるしを――」

つかさは、影人に、懐紙で唇を拭かれると、かぼそい声音で、詫びた。

閉じた目蓋から、まつ毛を押しあげるようにして、泪があふれた。

「わたくし、今宵だけは、血を……喀きたくない、と祈って居りましたのに……」

「よいのだ。そなたとわたしは、魂がむすばれている」

「はい」

「そなたは、自分の生命を、わたしに呉れたようだ」

「………？」

「ほどなく、宿敵となった男が、刺客団を引具して、ここをおとずれる」

「影人様！」

「わたしは、独力で、迎えることにした。死神めと対決してみるためにだ。……どうやら、わたしは、討たれずに、すむらしい。そなたが、自分の寿命を縮めて、わたしの身替りになってくれるようだ」

「は、はい！　つかさは、よろこんで、いのちを、貴方様にさしあげまする」

十二

およそ、一刻（二時間）が、経った。

そのまま、青蚊帳の中で、つかさを抱いて、横伏していた影人は、この別邸が、予測通り包囲される気配を、察知した。

十人や二十人の頭数ではないようであった。

「刺客たちが、押し寄せた」

「はい」

つかさは、うなずいた。

「わたし一人を討ち取ろうとするにしては、いささか、頭数が多すぎるようだ」

「貴方様は、決して、ここでは、相果てられませぬ」

「死神め、あるいは、わたしを、そなたと心中させるつもりかも知れぬ」

「い、いえ！　……貴方様は、世直しのために、あと二十年も、いえ、三十年も、生きのびなければならぬおかたです！」

つかさは、おのがいのちを、影人の五体へ、そそぎ込むように、顔を顔へ、胸を胸へ、四肢を四肢へ、ひたと密着させた。

その瞬間、影人のとぎすまされた神経が、戸外の気配に対して、ひとつの不審を起した。

――この包囲陣には、なにかが欠けている。

敢えていえば、こちらを是が非でも討ち取ろうとする殺気が、感じられなかった。

大道寺左近配下の隠密団に、その闘志がないはずはなかった。

――面妖しい?!

影人は、つかさの上から身を起すと、蚊帳を出た。

たしかに、屋敷は、ひしひしと包囲されていた。

庭からは、もう螢火は消えていた。

闇をすかし視た影人は、はっとなった。

「何者たちだ、お主らは――？」

はっきりと、敵ではない、とさとった。

返辞は、なかった。

影人は、微かな火薬のにおいをかぎわけた。

影人が、庭へ降り立つのと、円光寺の塀を、三十を越える黒影が、鳥のごとく躍り越えて来るのが、同時だった。

その襲撃の群に向って、庭の木立に身をひそめていた包囲陣から、一斉に、鉄砲の火が噴いた。

屋敷をとりかこんでいた数十人は、影人を守護する味方であった。

塀を躍り越えて来た刺客団の半数は、銃弾にたおれた。

のこり半数めがけて、守護勢が、刀槍をかざして、殺到した。

凄じい修羅場が、そこに、くりひろげられた。

影人は、一個の人影が廊下から座敷を奔り抜けて、かたわらに来るや、木偶のように、ここで、拱手傍観させて

いるつもりか、鬼堂天馬」
と、云った。
「わがあるじは、まだまだ、お手前様を、利用価値のある御仁と考えて居られるのです」
木鼠吉五郎の急報を受けた鬼堂天馬の、すばやい守護ぶりであった。

十三

「禁門影人！　まだ、勝負はついて居らぬぞ！」
闇の一隅から、大道寺左近の大声が、ひびいたのは、その時であった。
「どういう意味だ？」
「お主が手飼いの女忍を、生捕ったぞ！」
「…………」
影人は、一瞬、無香ほどの者が、むざと、左近の網にかかるとは、信じ難かった。
——無香は、たぶん、天馬が隠密団を引具して、この別邸を守護に来たのを、看てとり、安堵して、いったん、立ち去ろうとしたに相違ない……。無香に、油断が生じたのは……?!
影人は、胸中に、微かな痛みを感じた。
——おれが、つかさを抱いたのを、どこからか、眺めた。そのために、心が乱れていたのだ。
「禁門影人！　くの一を救いたくば、守護の隠密どもを、ひきさがらせておいて、一人で、やって来い！　この円光寺境内を、大道寺左近が、決闘の場にえらんでやる！」
「よかろう」
影人が、応じると、
「止されい！　相手は、冷酷非情の権化——大道寺左近という目付でありますぞ！」
天馬が、必死にとどめた。
「あいにく、わたしは、冷酷非情ではないゆえ、無香を見ごろしにはできぬ」
「それがしが、代って、彼奴と一騎討ちいたす！」
「冷酷非情の権化たる目付が、代理の者と勝負はすまい」
「いかなる卑劣な策計を用いるか、わかりませんぞ！」
「わたしは、あの男を、死神とみなしている。……雷に打たれて死ぬ者や、猟師の鉄砲の逸れ弾丸に当って死ぬ者に比べれば、こちらから、死神と対決するのだ。一命を落しても悔いはのこるまい」
影人は、そう云いのこして、ゆっくりと、塀へ近づい

て行った。
天馬は、味方の者に、影人より先に、塀を越えさせるべきか否か、迷った。
もし、左近の方に、尋常の勝負を決する肚があるとすれば、影人以外の者が立ち向って来るや、即座に、無香を殺すに相違なかった。
——あの目付が、はたして、堂々と若宮殿と一騎討ちするであろうか？
「大道寺左近！」
天馬は、声をはりあげて、呼んだ。
「お主の言葉に、いつわりはあるまいな！　宮家と一人対一人の決闘をするのであろうな？」
「この大道寺左近は、いまは、公儀目付としてではなく、一個の武士として、宿敵と雌雄を決するのだ！」
その応答を、天馬は、信じることにした。
影人は、塀ぎわに立つと、
「無香！　生きているのであれば、こたえよ」
と、云った。
「若宮様！　無香の不覚をお許し下さいませ。なにとぞ、お見すておきのほどを！」
血汐をしぼるより悲痛な返辞があった。

十四

影人は、地を蹴って、ひらりと、塀の上に立った。
とたんに、円光寺境内の数箇処で、篝火が燃やされて、あかあかと、二百坪あまりの地上を照らした。
大道寺左近は、ちょうど中央の地点に、根生えたように、大きく股をひらき、胸を張っていた。
「中身が匂い木の小脇差を佩びただけで、われらの挑戦に応じようとするのは、おのが身の高貴を誇示するためか？」
左近は、あざけるように、云った。
左近自身は、九尺柄の手違十文字槍を立てていた。
影人は、べつに、それにこたえようとはせずに、視線を、左方に移した。
鐘楼の石段下に、後手にくくられ、猿ぐつわをかまされた無香が、ひき据えられていた。
その膝に、ひと振りの刀が、のせてあった。
「禁門影人！　得物を持たぬ貴様を、刺し貫いたところで、それがしには、勝利の快感はわかぬ。生捕った女忍の膝にのせてあるのは、中河内国助の利剣だ。呈上いたすゆえ、取ってもらおう」

「当方は、この双手もまた、武器になると心得ているが、そちらでわざわざえらんでくれた利剣ならば、ありがたく、使わせてもらおう」

そうこたえて、影人は、塀から数歩の地面に、降り立ったとたん、無香の頭が、はげしく、横へ振られるのを見わけた。

「わたしのそばに近づかれてはなりませぬ！　罠が仕掛けてございます！」

無香は、口がきけたならば、そう叫んだに相違なかった。

影人は、あらためて、無香が後手にしばられたありさまを、観察しなおした。

無香をしばったのは、無香の武器である鉛玉を先端につけた縄であった。

縄は、まっすぐ、ぴいんと、直立に張られていた。

すなわち、鉛玉のついた先端は、撞木に巻きつけてあった。

そのために、撞木は、いっぱいに引かれて居り、もし、縄が切断されるか、無香が身を動かせば、梵鐘を鳴らすことになる。

――梵鐘の中に、何か凄じい仕掛けがなされている。

「大道寺左近殿、せっかくの贈りものだが、遠慮しよう。……無香、動くな！」

影人は、命じておいて、ゆっくりと、足を踏み出した。

「刀を取れ、禁門影人！」

左近は、呶号した。

「ことわる」

「刀を取らぬと、女忍の一命はないぞ！」

「…………」

影人は、鐘楼むこうの篝火わきで、弓に矢をつがえている左近の部下の一人をみとめた。

矢は、背後から無香の頸を狙っていた。その腕前は、熟練したものに相違なかった。

影人は、足を停めた。

無香の頭は、必死に、横へ振られつづけている。

――はて？

影人は、眉宇をひそめた。

その頭の振りかたは、ただ、近づかせまい、と阻止しようとしているほかに、もうひとつ、意味があるのを、影人は、さとったのである。

十五

――そうか。無香は、頭を一回振るのを、一歩だ、と教えて居る。

無香は、十五回振っては、中止し、また十五回振っていたのである。

つまり、十五歩の距離まで、寄って欲しい、と合図していたのであった。

自分がひき据えられている鐘楼の石段下に、十五歩の距離まで、無香は、影人を近づかせて、どうしようというのか？

――うむ！　そうか！

影人は、はっきりと、無香の意図を読みとった。

……そして。

影人が、十五歩の距離に、身を進めた――瞬間であった。

正座した無香が、そのままの姿で、ぱっと、宙へはねあがった。人間ばなれした秘術であった。

瞬間――、無香の膝から、刀が、生きもののように、宙を飛んで、影人の手許へ来た。

十五歩は、無香が、膝ではねあげて、刀を影人に渡すために測った距離だったのである。

次の瞬間――。

凄じい生地獄の光景が、起った。

無香が、宙へはねあがることによって、ぴいんと張っていた縄がゆるみ、ぎりぎりに引かれていた撞木が、梵鐘に、ぐわあんと当った。

鐘の音が、鐘の内に仕掛けた榴弾（ボム）を炸裂させた。

ただの榴弾ではなかった。

無数の火の玉が、四方へはじけ飛んだ。その火の玉は、無香の全身にくらいついた。そればかりではなく、悪臭もの凄い黒煙を噴いた。黒煙は、猛毒であった。

無香は、毒煙の火の玉にまみれて、地面に落ち崩れた。

その時、影人は、無香が飛ばしてくれた中河内国助を、抜きはなって、まっしぐらに、大道寺左近めがけて、奔馳していた。

「勝負っ！」

「おおっ！」

篝火の明りの中で、手違十文字槍と、白刃が、電光の迅さで、閃いた。

固唾をのんで見まもる者の目に、槍の穂先が、けら首

から両断されて、空へ飛ぶのが映った。

と――。

左近の上半身が、異常な呻きとともに、のけぞった。

その両眼から、血汐が噴き散った。

影人は、槍を両断した迅業を、そのまま、左近の両眼を一直線に斬る神技に継続させたのであった。

……左近は、どさっと、地面に、坐った。

「斬れっ！」

「勝負は、ついたぞ、大道寺左近。……これからは、盲目の世界で、しずかに、余生を送ることだ」

「ふん！ 盲目にしておけば、討つ執念をすてると思うのは、甘いぞ！ それがしは、生きている限り、妄執の鬼となって、お主を狙いつづけるぞ！」

「それも、よかろう。……但し、幕府の権勢はすでに、田沼意次の手に帰し、お主のあるじ水野壱岐守の立場が、無となったからには、盲目となった身は、怨念から解脱する生きかたもあることを、考えるがよい」

不吉の影

一

田沼主殿頭意次が、老中の座に就いてから一年が経過した。

その専権は、絶対ゆるぎないものとなった。

意次は、矢つぎ早やに、積極政策をうち出した。

一、下総印旛沼・手賀沼の干拓事業。

一、運上政策。すなわち、日本全土の問屋の株仲間を公認して、商品流通を統制し、運上金・冥加金を徴収すること。

一、貨幣新鋳。金一両を銀六十匁替え、五匁銀十二枚で金一両の公定価格の厳しい実施とともに、金貨の補助貨幣としてつくった南鐐二朱判を、一般民衆に使わせること。

一、蝦夷地（北海道）の大開発。これは、ロシヤとの貿易の実施のための手段であった。

一、長崎貿易。これまでの、オランダ一国のみを相手とせず、ひろく諸外国の人々を、自由に国内へ迎えて、それらの国の新しい、科学技術をとり入れること。これは、あきらかに、鎖国制度を破棄して、開国をやってのけるための布石であった。

もとより、これらの積極政策は、意次の独創ではなかった。

印旛沼・手賀沼の干拓は、八代将軍吉宗によって、実行されようとして、失敗した事業であった。また、運上政策も、吉宗の享保改革に於て、みられたものであった。開国貿易の意図も、吉宗の胸中にあったことである。

すなわち。

田沼意次の積極政策は、吉宗がやりそこなった享保改革の線上に於ける強行施行であった。

――おれは、断じて、失敗はせぬぞ！ かならず、成功してみせる！

満々たる自信のもとに、御用部屋に於て、すべての宿老の口を封じたのであった。

しかし……。

それらの積極政策をうち出した時、はやくも、意次の専権に、暗い影のさす異変がつぎつぎと起った。

その前ぶれは、意次が老中になった年の秋、東海道・奥羽地方に、未曾有の暴風雨が襲いかかったことであった。この被害は、江戸が最もはなはだしかった。

その天災が招いたように、江戸市中に、異常に、乞食の群が、増えた。

そして――。

安永二年晩秋、突如として、怒濤のごとく、一万余に及ぶ百姓一揆が、府内へなだれ込んで来た。

むしろ旗もかかげず、得物もたずさえてはいなかったが、一人のこらず、褌ひとつの素裸であった。

一斉に、狂ったように念仏をとなえて、深川から両国橋を駆け渡り、小伝馬町、大伝馬町を通って、日本橋を中心とする問屋町へ殺到した。

二

南北両町奉行は、この暴徒の侵入に対して、なさけない非力ぶりをさらけ出した。

与力・同心全員が、出動して、これをとりしずめようとしたが、念仏を叫喚する渦の中にまき込まれて、いたずらに、恐怖戦慄の立往生をさせられたにとどまった。

一揆（いっき）とはいえ、問屋を打ちこわして、米や金品を掠（りゃく）奪（だつ）するという狂暴な行動には出なかった。
ただ、問屋の方で、ふるえあがって、米や金品を、かれらの手に渡して、ひたすら、ひきあげてくれるように、乞うた。
その時、田沼意次は、下城して、屋敷にもどっていた。
騒動が起って、ものの半刻も過ぎないうちに、鬼堂天馬が、形相を一変させて、意次の前に、坐った。
「暴徒どもは、得物をふりまわす代りに、このような紙を、撒きちらして居ります」
一枚の紙が、意次の手に渡された。

おそろしや、おそろしや。天罰下って、大洪水。田は沼となって、万民困窮。濁った沼田が、お城にあっては、おきつぐ酒も、一滴のこらずこぼれてしまう。天知る、地知る、人ぞ知る。
沼田の泥底に、かくした金子は一千万両。四年前に、江戸の貧乏長屋に、まいた分金は、一千万両の私腹をごまかすための、はした金。だまされまいぞ、皆の衆。
さて、その一千万両を、どこから手に入れたか、東西とうざい、九州は長崎半島先端の、海の中からひきあげた末次平蔵のかくし金。
これでおどろくのは、まだ早い。ここに、もう一人、大曲者、こいつが、末次金をひきあげて、餌（えさ）じゃ餌じゃと、とのも（家の外側）から、沼田魚を食いつかせ、自由自在に泳がせている次第。
その大曲者の名をば、耳かっぽじって、皆の衆、とくにおぼえておきなされ。禁門影人と申しそろ。
こやつの餌で沼田魚が泳ぐ限りは、洪水・地震・火事・旱魃（かんばつ）ついでに流行病もうちつづく。あな、おそろしや、南無阿弥陀仏。

読み下す意次のこめかみが、青筋立てて、痙攣（けいれん）した。
「天馬！」
「はっ――」
「何者が書いたか、その方ならば、見当がつくであろう」
「大道寺左近に相違ございませぬ」
「そうか。昨夏、禁門影人は、輪王寺宮別邸を襲撃して来た左近を、盲目にしただけで、討ち取ることをせなんだのであったな」
「御意――」
「盲目にされたあの目付の憎念が、どのような報復を為すか、禁門影人は、予測しなかった。不覚と申すよりほかはない」

「はい」
「このようなびらを散らされた上は、影人自身に、責任をとってもらわなければならぬ！」

三

「あの宮家に、責任をとらせるとは――？」
天馬は、不吉の予感を、おもてにあらわした。
「政道の主座に就いた者は、昨日の味方も、今日は敵として、片づける非情の覚悟ができていなければならぬ」
「殿！　若宮殿を、暗殺すると仰せられまするか？」
「やむを得まい。あの人物は、影として存在していたからこそ、わしも、敢えて、あやつられることにあまんじていた。ところが、その名を公にされては、消えてもらうほかはない」
「…………」
「天馬！」
「は――？」
「その方、隠密でありながら、いつの間に、人情に左右される男に相成った？」
「殿！」
天馬は、じっと、主人の冷たい面貌（めんぼう）を視かえして、
「お言葉をかえしまするが、あの宮家ご自身は、殿の敵にまわったわけではございませぬ。大道寺左近に、仮名を公にされたからと申して、殿にご迷惑が及ぶとは思いませぬが……」
「天馬、忘れるな。御用部屋の主導の権は、わしの手中に帰しているとはいえ、宿老首座は、いまだ、病臥（びょうが）中の松平右近将監武元という老人のものだ。右近将監に対する上様のご信頼も、うすれては居らぬ。……もし、かりに、右近将監が、上様へ、じきじきに、禁門影人には王政復古、倒幕思想がある、と言上いたしたならば、結果は、如何相成るか、予想もせぬ事態の起るおそれがあるぞ。この意次が、禁門影人――実は、閑院和仁の傀儡（かいらい）と相成って、幕府の法度を破棄し、開国しよう、といたして居るのだ、と上様をおそれさせ、宿老・参政一同にも信じさせる説得力は、なお、老中首座にのこされて居る。……いまのわしにとっては、禁門影人なる人物は、この世に存在せぬ架空の曲者でなければならぬ！」
「…………」
「たしかに、わしは禁門影人の蔭（かげ）の働きによって、御用部屋に入るを得たし、権勢もわがものにできた。……しかし、現在、申さば、禁門影人は、わしにとって、もは

や、無用の人物だ。いや、かかるびらがばら撒かれた以上は、邪魔な存在である」
「…………」
「天馬！　これは、わしの命令だ。禁門影人を、消せ！」
「は――」
天馬は、両手をつかえた。
その脳裡には、影人と生死をともにした過去の出来事が、走馬燈のように、去来した。
主君意次の云うことも、たしかに、合点できる。政治家として、その専権をふるう上で、いささかでもわが身に迷惑を及ぼす者は、敢えて除く非情は、必要であろう。
とはいえ、鬼堂天馬にとって、禁門影人は、この上ない魅力と知能をそなえた味方であった。
むしろ、主君意次よりも、近いところに在った。
影人との談合もなしに、一方的に、これを消す決意をした意次に対して、天馬は、微かな憎悪さえおぼえた。

四

江戸城内に於ける政治家たちの権勢争い、苦しまぎれの改革、前向きの政策、といっても、それが、封建制度という巨大な体制の枠内で行われる限り、一般庶民の日々のくらしが、目に見えて変るものではなかった。
徳川幕府の土台がゆるがず、鎖国主義が守られている限り、民衆は、その檻の中で、それぞれが、自分の人生に、ささやかなルールをつくり（たとい、それが、自分たちの自由をしばる窮屈な慣習や迷信であっても）生涯を送って、疑うことを知らなかった。
封建制度という苛酷な政治形体を、
――まちがっている！
と、拒否する革命思想を抱く者は、暁天の星よりも少なかった。
いわば、一般庶民が、自分の家業のみに精を出して、政治などというものに一向に関心を向けないのは、徳川期も、現代も変りはなかったことになる。
紺屋町三丁目新道にある『長唄お習いどころ』の女師匠も、その一人であった。
今日も……。
六年前に、出て行ったきり、梨のつぶての恋する男を、待ちつづけるわびしさを、横坐りのつま弾きに、まぎらわせていた。

垣根　卯の花　ほととぎす
ひと声　啼いて聞かまほし
音信ないがご無事かえ

やつれ姿の水鏡
おとす涙で、顔ちり散りに
ささ
どうじゃいな、なんとしょう

唄いおわって、ほっと、ひとつ溜息をついた。
その折、次の間の唐紙が、すっと開かれた。
「夢かえ?!」
思わず、歌吉は、叫んだ。
影人は、うすら笑って、長火鉢の前に坐ると、
「皮肉なものだ」
「なんでござんす？」
「わたしに惚れた生娘は、わたしを救うために、火だるまになって、相果てた。もう一人、生涯の伴侶ときめていた女は、血を喀きつづけて、他界した。……気まぐれに抱いた女だけが、ここに残っているのは、どういうめぐりあわせであろうな」
「若様！」
歌吉は、生唾をのんで、長火鉢のひき出しから、江戸市中へ一揆がばらまいた紙をとり出した。
「まさか、あたしをふびんと思うて、おん身の危険をいとわずに、逢いにおいでになったのじゃござんすまいね」
「江戸の女は、すがりついて来る代りに、惚れた男が、どのようなあぶない瀬戸際に追いつめられているか――その方を、案じてくれる。けなげな心意気だな」
「だって……一昨日も、なにやら目つきの鋭いおさむらい衆が、三人も黙って、押し入って来て、押入れまで開けて行ったのでござんすよ」
歌吉は、こわばった面持で、声音をふるわせた。

五

「たっぷりと餌をくれて、手なずけたつもりであったが、虎はやはり虎であった、ということだ」
影人は、歌吉に冷酒をもとめて、ひと息に飲み干すと、自嘲のひびきを、声音にふくめた。
上野山内の御隠殿に逗留していた影人は、鬼堂天馬から、密書を受けとったのであった。
密書には、その理由は記されて居らず、ただ、江戸を立去って、何処かの山中に身をひそめるように、とすめてあった。
影人には、すぐ、せっかく手に入れた権力を守るためには情義など、ごみ屑のようにふりすてる田沼意次の姿を思いうかべたのであった。
市中にこの紙がばら撒かれたのは、大道寺左近の報復

手段であることも、判断がついた。

「これから、どうなさるんです。若様？」

歌吉は、不安の色をこめた眸子を、影人のさわやかな顔へあてた。

「どうもせぬ」

「どうもせぬ、だなんて、おちついておいでになって、よろしいんですか？」

「こうなると、じたばたあがくだけ、沼と化した田の中へ、ずるずると、ひきずり込まれよう。なりゆきまかせだな。……さしずめ、今宵は、そなたでも抱いて寝るか」

影人は、笑ってみせた。

「貴方様というおひとは……」

歌吉は、胸を灼いていたよろこびが、肌に熱くひろがるのをおぼえて、ひしと両膝を合せた。

……不意に。

影人は、あらあらしく、歌吉を抱き寄せた。

すがりついた歌吉の、乳房の下の鼓動が、息苦しいまでに早鳴った。

下肢のもがきが、緋縮緬の湯文字を膝から、すべり落した。

あらわになった太腿を、男の手がゆるゆると滑った。

——はずかしい！……もう、濡れて……。

歌吉は、そこに来た男の指のうごめきに、思わず、意識の外の呻きをあげた。

と——。

影人が、動きを止めた。

「吉五郎、野暮を承知で、そこにいるのか？」

その声に、歌吉は、はっと、四肢をこわばらせた。

「へい。……討手が、そこに来やした！」

「そうか」

影人は、なお、歌吉を抱いたなりで、

「事が終るまで、待っていてくれるほど、粋なはからいを心得ている連中ではないようだ」

「若様！」

歌吉の双眸から、泪があふれた。

やおら立った影人の左手には、大道寺左近が贈ってくれた中河内国助があった。

「因果は車の輪の如し、とは誰が云ったか知らぬが、その車輪は、この身が現世に別れるまで、まわりつづけることになる」

六

格子戸を開けて、すっとおもてへ出た影人は、そこに

待っている吉五郎に、

「人殺しを好まぬわたしも、斬らねば斬られる窮地に追い込まれたな」

「貴方様が、こんどは、田沼意次に、刺客をさし向けられるなんて、浮世の仕組みに、反吐が出やす。……今夜、やって来やがったのは、三十人は居りやす」

「おそらく、えりすぐられた手練者どもであろう」

「あっしは、貴方様を、みごとに遁してごらんに入れやすよ」

「助太刀してくれるというのか？」

「へい。これでも、十年前、十五の年から五年間、あっしは、松井源水の居合抜きの前座をつとめて、手裏剣打ちをやって居りやした。むかし取った杵柄が、どれだけお役に立つか、見ていて頂きやす」

「では、たのもうか」

「お願えしてえのは、鍛冶町へ出なすったら、左へ折れて日本橋の方角へ向ってまっしぐらに突き進んで下さいやし」

「うむ！　承知した！」

下弦の月が、中天にかかり、一片の雲影もない初冬の宵空に、冴えていた。

吉五郎の姿は、音もなく、かたわらから消えた。

影人は、ふところ手のまま、ゆっくりとした足どりで、紺屋町二丁目、一丁目を通り抜けて、鍛冶町一丁目の広い往還に出た。

出た瞬間に、物蔭に、殺気をひそめた気配が、左右にあるのを察知した。

左折して、今川橋から、まっすぐに進めば、本石町、室町、そして日本橋にいたる。いわば、江戸の大商人の中心地区であった。

今川橋から本銀町へ——ちょうど、左手に、時の鐘のある地点にさしかかった時、背後から、音を消した疾駆の襲撃が来た。

二人であった。

一人は手槍、もう一人は刀をつかんで居り、前者がまっしぐらに突き込んで来るのと、後者が地を蹴って、蝙蝠のごとく宙を翔んで来る、みごとな襲撃ぶりであった。

影人が、手槍の柄を両断するところを、頭上から、後者が、斬りつけて来る計算であったろう。

熟練した影人の反射神経が、そうしなかった。

腰の中河内国助を抜いて、応戦するいとまがない、と本能の命ずるまま、くり出された手槍を、さっとかわした。

次のせつな。

その手槍の柄を手刀で、はねあげた。

頭上から翔び降りて来た敵が、その手槍の穂先に、したたか、下腹部を刺し貫かれた。
影人の素手の迅業は、神技といえた。
「うぬっ！」
手槍の敵は、それを手ばなすやいなや、抜刀した。
と――。
上段にふりかぶった一瞬、がくっと首をかしげた。
その頸根に、ふかぶかと、手裏剣が打ち込まれていた。
木鼠吉五郎が、商家の屋根にいたのである。

七

影人にとって、まさに、これは、死地であった。
二人の敵を片づけた本銀町のその地点から、広い往還は、日本橋まで、一直線にのびていたが、吉五郎の告げた三十人にあまる刺客団は、路上には、一人として、姿を現していないのであった。
江戸の夜は、両国や浅草、吉原の廓や深川の岡場所などを除いて、陽が落ちるとともに、ほとんど人影は、絶える。
江戸の商業の中心地であるこの表通りも、もう、すべての店が、大戸をおろして、ひっそりとしずまりかえっていた。
襲撃して来るのは、尋常の勝負を挑んで来ている敵ではなかった。一人のこらず、物蔭にひそんで、飢えた野獣が、獲物をねらって、牙をひきむいている状況なのである。
初冬の空気が澄みきっているために、月のおとす光が、意外に地上をあかるいものとしているのも、孤身を進める影人にとって、不利な条件となっている。
こちらが歩むにつれて、屋根を移動して行く木鼠吉五郎ただ一人の味方で、はたして、この死地を脱出できるものかどうか。
敢えていえば……。
一年前、大道寺左近を宿敵として、死神と対決しようとした時とは、影人の心理に、大きな変化があった。
敵は、味方であった田沼意次に代ったのである。
影人には、怒りがあった。
怒りが五体に燃えている限り、断じて敗北したくはなかった。
――走狗どものえじきになるよりも、腹をかっさばいた方がましだ！
市井で生れて、育った素浪人ではなかった。誇りは、高かった。
次の敵は、姿をかくしたまま、左右から、同時に、弦

音を鳴らした。
影人は、前へも、後へも、跳ばなかった。
ふところ手を、袖から抜きざま、ぱっと左右へひろげた。
かつん！
高いひびきとともに、矢は、地面へ落ちた。影人の双手には、懐石がにぎられていたのである。
その懐石のひとつが、右方の店わきの天水桶めがけて、投じられたのは、矢を落した次の瞬間であった。天水桶の蔭から、躍り出ようとした敵の眉間に、懐石は、ふかぶかと埋まった。
影人が、風の早さで、奔り出したのは、その時からであった。
二個の速影が、行手をさえぎったが、ほとんど一閃裡に、影人の抜きつけの贄になった。

八

影人は、斬っては奔り、奔っては斬った。
本町二丁目で、三人。
室町三丁目で、二人。ここでは、影人の背後から襲った一人を、吉五郎が、屋根から仕止めた。
室町二丁目では、前後左右から、手槍がくり出されて来た。影人の月光の中の翻転は、その四本の穂先を、宙に散らした。次の瞬間には、一個の首を刎ね、刎ねた白刃をつばめ返しに、一人の顔面を、頤から額へ、逆斬りにしていた。
すでに、敵がたは、商家の屋根に、手裏剣を放って来る影人の味方がいることを、さとっていて、そこでは、一人が、みごとに、飛んで来た一本を、はじきかえした。もう一人は、肩を刺されて、退いた。
室町一丁目では、一挙に七八人が、躍り出て来た。
とたんに、頭上から、吉五郎の絶叫があった。
「そこを――高砂新道へ！　按針町を突き抜けなすったら、荒布橋、思案橋、そして、行徳河岸だ！」
その行徳河岸に、大川へ遁れる船でも用意してある、というのであったろうか。
影人は、高砂新道へ、駆け込む前に、一人に袈裟がけをあびせ、一人の片腕を斬り、一人の咽喉を貫き、一人の胴を薙いだ。吉五郎もまた、二人を手負わせた。
やがて――。
幽鬼が月闇を、掠めるに似た凄じい速度で、追撃して来る刺客の群を、ふりきって、影人が、思案橋を駆け渡った時、行手に、どっと、喚声が、夜空に噴きあがった
三十人や四十人ではなかった。

——そうであったのか！

影人は、吉五郎が、自分を救出するために打った手の巧妙さを、さとった。

行徳河岸に、集結していたのは、三百人を越えて居り、かれらは、源水長屋の住民だったのであった。

影人が、そこへ至るや、さらにもの凄い鯨波をあげて、追跡した公儀隠密団に向って、殺到して行った。

影人と吉五郎によって、その三分の一を斃されていた刺客たちは、思いもかけぬ、このおそろしい集団と、敢えてわたりあう闘志はなかった。

ひと息ついた影人のそばに、吉五郎が来た。

「宮本武蔵が、一乗寺下り松で、吉岡道場七十何人をむこうにまわした以上のお働きぶりでござんしたね」

「武蔵には、お前や、こういう素朴で気っぷのいい江戸っ子たちの味方がいなかった。……あらためて、礼を云う。かたじけなかった」

「それにしても、田沼意次の野郎が、貴方様を、この世から葬ろうとしやがるなんざ、金輪際、許せねえ！ あっしら、源水長屋一同が、田沼の屋敷へ、討ち入ってくれようか、という声もありやす」

「吉五郎、わたしも、さすがに、意次には腹が立ったが、考えてみれば、わたしが意次の立場に居れば、この禁門影人は、邪魔な存在と考えよう。政治にたずさわる者は、申さば、人間ではない。怪物にならねばならぬようだ」

九

行徳河岸には、一艘の屋形船が、用意してあった。

影人が、乗り込むと、そこに、思いがけず、旧知の人物が、待っていた。

平賀源内であった。

「やあ——、人間とは思われぬような阿修羅ぶりを発揮されたようですな」

「長崎に滞在していたのではなかったのか？」

「そろそろ、主殿頭が、開国政策を実行するのではないか、と思って、出府して来たところ、鬼堂天馬から、妙なあんばいになったと、きき申した」

「この件は、わたし個人の運命ゆえ、お主は、田沼を説いて、開国政策をすすめてもらいたい」

影人の語気は、平静であった。

「あいにく、この平賀源内も、山師の烙印を捺されて居りますが、お手前という御仁と知りあったおかげで、いささか、人の観かたがちがって来ました」

「…………」

「それがしは、田沼意次の器量を、どうやら買いかぶっていたらしい。一揆が、埒もないびらをふり撒いたために、あわてて、貴方を消そうと躍起になるなどとは、あの男の改革も、一時は成功するかも知れぬが、先が見えて居ります。それがしが、いささか学んだ西洋の占星の術ではかったところ、田沼の専権の座は、きわめて短い期間に、崩壊つかまつる」

「しかし、意次の改革断行は、無意味ではあるまい」

「そこだ！ お手前様は、自分を消そうという男に対して、裏切られた激怒にかられる代りに、まるで第三者のような存念を持って居られる」

「政治家というものは、あくまで、おのれの知力によって、のし上って、専権を得たことにする——それが、古今東西のかれらのやりかたであろう」

影人は、微笑してみせた。

「まことに、端倪すべからざる御仁だ、お手前は——」

源内は、かぶりを振ってから、

「それがし自身のことながら、白状しておかねばならぬことがござる」

「…………」

「実は、昨年暮あたりより、どうも、からだの加減がよくなく、オランダ商館へやって来た医師に、診てもらったところ、どうやら、あと二年か三年の生命らしい、とそれとなく宣告を下されたとお思い頂きたい」

「お主が！」

さすがに、影人も、強い衝撃を受けた。

「思えば、この山師、五十年の生涯、常人の十倍ぐらい、あらゆる仕事に手を出し、奇妙な発明品で世間をおどろかせることに、精を出して来ました。その成功の最大のものは、エレキテエルによって、脇岬の海底から、末次平蔵のかくし金をひきあげたことでござる。お手前という不思議な、魅力のある貴人にめぐり逢ったおかげで、山師もまた、役に立ったことは、わが亡きのち、詐欺師という名を冠せられようとも、一片の悔いもござらぬ」

淡々として云ってのけてから、源内は、

「これをお手前様に、贈呈するのが、どうやら、この山師の最後の仕事でござる」

と、一通の書状と一枚の世界地図と、ひと綴りの書類を手渡した。

十

屋形船は、大川へ出た。

影人と源内を乗せた屋形船が、月の光のくだける海

を横切って、すべり込んだのは、佃島の風待ち場であった。
オランダ軍艦の砲撃を受けた日本丸十艘のうち、生き残った最後の一艘が、はるばる遁げ帰って、かくれた場所であった。
その風待ち場に、五百石積みの商船が一艘、ひっそりと碇泊していた。
「この船が、お手前の希望なさるところへ、おん身をはこんでくれる由。……さ、どうぞ――」
源内が、舷側からするするとおろされた縄梯子を、指さした。
「お主が、はからってくれたのか？」
影人は、問うた。
「いや、それがしは、別離の挨拶したついでに、ここまでお送りしたまでのこと。この船を、ここへまわして、お手前を江戸から遁すべく、計ったのは、別の知己でござる」
源内は、こたえた。
――そうか！　鬼堂天馬がはからってくれたのだな。
影人は、直感した。
「では、これにて、お別れいたします。ご壮健であれば、いずれまた、出府されて、新しい世界をつくるお働きをなさることと信じます」
「お主には、言葉につくせぬ世話になった。お主がエレキテエルをつくってくれたからこそ、末次金を入手できた。かたじけない」
影人は、あと二三年の生命しかないと宣告を受けながら、みじんも平然たる態度を変えていない源内に、感動をこめて、頭を下げた。
「お手前様は、まだお若うござる。……この平賀源内に、敢えてすすめさせて頂くならば、一度、遠く、地球の彼方の西欧諸国をごらんなさるがよろしいかと存じます。実は、それが、それがしの若年からの夢でござった。それがしに代って、お手前に、イギリス、オランダ、フランスなどの文明国のありさまを、つぶさに眺めて来て頂きとう存じます」
「機会があれば、必ず――」
影人は、うなずいてみせてから、
「お主の寿命に、奇蹟が起るのを祈る」
その言葉を、永久の別離の挨拶にした。
「生きているあいだに、もう一度、世間をあっといわせる奇妙な発明をやってのける山師根性を、息をひきとる瀬戸際まですてはいたさぬ」
舷から照らされるあかりの中で、源内は、ごく自然に、皓い歯をひらいて、にやりとした。

不敵に生き、不敵に死んで行く人物であった。
影人は、船上へのぼった。
迎えてくれたのは、意外な男であった。
二世銭屋五兵衛であった。
オロシャとの密貿易が露見して、佐渡へ流されていた五兵衛が、相川町の女郎をつれて、脱出に成功し、中仙道へ抜けて来た時、影人と出会い、かくし金十五万両のうち、六万両を謝礼として、江戸へ出ることができたのは、八年前のことであった。
「お前が、救い主とは！」
さすがの影人も、一瞬、唖然となった。
「ご縁でございますな」
五兵衛のうしろには、船頭の三郎次・鬼吉、水主の黒太など、なつかしい顔がならんでいた。

十一

島抜けした流人が、公儀から許された例はなかった。
加賀前田家も、もとより、五兵衛をかばってはくれなかった。
ただ、五兵衛は、五万両あまりを、ひそかに、前田家の藩庁へさし出し、自分をこの世から亡い者にしてもらったのであった。
すなわち。
佐渡から脱出した五兵衛を、前田家の役人が、捕縛したところ、重病にかかって居り、間もなく、牢死した、と幕府へ届け出てもらったのである。
銭屋五兵衛が、御用商人として前田家の台所をうるおした金は、莫大なものであった。
銭屋の先祖は、加賀国能美郡山上郷清水村の百姓であった。武士の流れを汲んだ家柄であった、という。
正保年間に、吉右衛門というのが、百姓をきらい、同郡清水村の真宗大谷派長徳寺が金沢に移転した際、その執事にしてもらって、故郷をすてた。
石川郡宮腰町（現在の金沢市金石町）に、銭屋五兵衛という旧家があった。吉右衛門は、その銭屋がつぶれるや、屋号をもらって、あらたに、金銭両替商をはじめた。
これが、一世銭屋五兵衛である。
五兵衛には、実子がなかったので、親戚の天満屋三郎右衛門の弟与三兵衛を養子にした。三年後、長男が生れた。弥吉郎といい、義兄与三兵衛が宗家を継ぐと、弥吉郎は、宮腰町字上越前町に、新しく一家を興した。これが、二世銭屋五兵衛であった。
五兵衛は、天性非凡の商才にめぐまれていた。

両替質商だけではあきたらず、船商となり、つぎつぎと千石船をつくって、南部・津軽・松前・函館・江刺へ、自ら指揮をとって渡航し、巨利を博した。
しかし、やりすぎた。
オロシャとの密貿易では、おそろしいばかりの取引きができたのである。
そして、それが、いのち取りとなって、佐渡へ流される結果をまねいたのであった。
影人は、胴の間で、五兵衛と対座すると、
「この世に亡い者になったお前は、金沢にはいられなかったのであろう」
「もとより、この船一艘をわが家として、加賀を去り……、今日まで、対馬を根じろにして、抜荷買いをやって居りました」
「対馬か。さすがは、お前らしい」
「影人様。海は広うございます。対馬から壱岐、五島列島、ずうっと東へ下って、種子島、屋久島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、それから、琉球諸島まで、貴方様が、しばらく、おん身をのんびりとおすごしなされる島は、いくらでもございます。この五兵衛が、お好きなところへ、ご案内つかまつります。……貴方様と生死をともにした船頭や水主が、貴方様のためなら、生命をすててもよい、とよろこび勇んで居ります」
「すてる神もあれば、ひろう神もあり、か」
影人は、海の男の心意気に、ふかい感動をおぼえたことだった。

十二

その日——。
田沼意次は、何故とも知れず、朝から、奇妙な苛立ちをおぼえていた。
城中御用部屋でも、他の宿老たちとほとんど口をきかず、下城して屋敷の自室に入っても、おちつかなかった。
子刻（午前零時）が来ても、意次は、寝所に入らず、改革案の書類をひらいていたが、すこしも、心がその内容に入らなかった。
「殿——」
次の間から、鬼堂天馬の声が、呼んだ。
「入れ」
意次は、天馬の声をきいた瞬間、この日の苛立ちの原因が判ったような気がした。
——わしは、禁門影人の影におびえていたのだ。

つまり、影人が突如として、自分の面前に出現して、
「裏切り者に成敗を加える！」
と、斬りつけて来る——その恐怖が、無意識に、おちつきを失わせていたのである。
襖が、開かれた。
「天馬！　仕止めたか、禁門を——？」
「ざんねんながら、禁門影人には、浅草かいわいに、千人以上の、貧しいが、意気地のある住民どもが、味方について居ります」
天馬は、冷やかな語気で、こたえた。
「とり遁したのだな？」
「やむなき仕儀でございました」
「たわけがっ！」
思わず、意次は、喚いた。
その時、三の間との仕切り襖が、開かれた。
入って来たのは、平賀源内であった。
意次は、さらに、かっとなった。
「いま時分、なんの用だ、源内？」
「天馬が、禁門影人を討ち損じたのは、申さば、ご老中に不吉の影がさしたことを意味して居ります」
「なに?!」
「まず、気をおちつけて、それがしの申すことに、耳を傾けて頂きとう存じます。……それがしが、貴方様の強い運勢につき、西洋の占星の術にて、占ったことは、かつて、お伝えいたしました。貴方様は、黄道十二宮のうち、獅子宮であり、獅子宮の支配星は、すなわち、太陽。権力・活力・創造性を象徴する太陽が支配星である獅子宮は、吉に於ては、威厳のある支配力・指導力・組織力を発揮し、性情は寛闊にして陽気。凶に於ては、独裁でなければ承知できず、頑固であり、独断であり、豪磊な浪費家であり、奔放、派手好み——」
「それが、どうした？」
「吉凶と申すものは、あざなえる縄の如し、と申す。……ご老中は、最も強力な蔭の味方である禁門影人を、邪魔者として暗殺しようとなされた。その時、たちまち、運勢の吉は凶に変じました。……それがしが、占ったところ、ご老中の改革策は、何ひとつ、成功いたしませぬな」
「黙れっ！　山師め！」
思わず、意次は、突っ立って、床の間の刀架けから、差料をひっつかんだ。
「その逆上ぶりが、とりもなおさず、吉変じて凶となったことを示して居り申す」
源内は、冷笑した。

かくれ島

一

南海におとずれた静かな春が、一片の雲影もない碧空を、西の彼方の水平線に、溶け込ませていた。

深い入江は、青くみがかれた鏡そのままのなめらかな水面をたたえていた。

地下人には、唐船浦と呼ばれている。

日本の最西端に位置し、東支那海に面している五島列島の主島であるこの福江島には、遠いむかしから、唐船が渡って来て、この浦に、船がかりしたのである。

入江には、ただ一艘だけ、小舟が、春光をあびて、浮かんでいた。

禁門影人は、その舳先に腰を下して、釣竿を手にしていた。

一二度、出会っただけの者なら、これが、江戸中に莫大な一分判金をばらまいた不敵な人物だとは、気がつくまい。

総髪こそ、元のままであったが、顔の半面を髭で掩い、筒袖にたっつけという姿に変っていた。

その変りかたが、三年の歳月を経たことを示していた。

影人が、かくれ地として、この五島列島の福江島をえらんだ時、五島家城主は、盛道が六十歳で隠居して、十七歳の次男盛運が、継いでいた。

もし、盛道が他界していたならば、影人は、福江をかくれ地にえらばなかったであろう。

影人は、盛道とは、旧知の間柄だったのである。

弱冠にして、京都を出奔した影人が、半年の流浪の末に、渡り着いたのが、実は、この五島列島のひとつ嵯峨島であった。

影人は、嵯峨島に、仙人そのままのくらしをしている武芸の達人が住む、ときいて、その業を学ぶべく、ただ一人、小舟を漕いで行ったのであった。

無刀斎と名のるその達人が、影人に入門を許してくれたのは、気品のある容姿と皇室の出である証拠を示す、菊の紋のついた印籠と小脇差によってであった。

影人が、その素姓を打ち明けようとせずに、ただ、

「京の生れの者です」

と、告げたことも、無刀斎には、気に入った。

「わしの術は、剣すなわち拳であるゆえ、修業は、地獄でのたうつほどの刻苦を強いる。それに堪えられるならば……」

無刀斎のその言葉に、いつわりはなかった。

影人は、四年の修業の間、いくたび、死の淵をのぞいたことだったろう。

無刀斎は、城主五島盛道に一通の添状をしたためて、影人に渡した翌日、逝った。すでに、その一年前から、おのが死を予知していたようであった。

影人は、五島盛道に、鄭重に迎えられ、福江城で、数ケ月をすごした。

禁門影人という貴公子が、その身分をすてた只の浪人者としての人間をつくったのは嵯峨島に於てであった。

そして、影人は、福江城では、無刀斎門下の素浪人扱いを、五島盛道に願い、食客としてすごしたあいだ、家中で、その素姓を知る者はいなかったのである。

二

——この三年間、意次は、何をしたか？　いたずらに、賄賂品をはこんで来る者どもに、門前市をなさしめ、おのれの一家一門を栄達させた。ただ、それだけしかやらなかった。

影人は、遠い水平線へ、視線を送りながら、専権の座に就いた男の姿を思いうかべて、深い失望をおぼえていた。

田沼意次だけは、五代綱吉の下にいた柳沢吉保や九代家重の下にいた大岡忠光などとは、同じ小身から出世して側用人になった人物であっても、前二者とちがい、思いきった改革をやってのける器量と手腕の持主に相違ない、と影人は、看てとっていたのである。

柳沢吉保も大岡忠光も、賄賂をとった。

しかし、田沼意次は、賄賂をとることを、幕府の体制を一変せしめる政治の方便とするはずであった。

——この禁門影人の目が狂っていたのか？　それとも、賄賂の山の中にうずもれているうちに、意次の性根が腐ったのか？

影人は、この三年間、ただ無為に、福江島にひそんでいたのではなかった。

二代銭屋五兵衛に命じて、北方の情勢をさぐらせていた。そしてまた、五島盛道からえらんでもらった家中の俊才を、長崎へ送り込んで、イギリスその他のヨーロッパ各国の動静をしらべさせていた。

目下、日本に対しておそるべき野心を燃やしているのは、オロシャであった。
オロシャには、エカテリナ女帝（カザリン二世）が、ピョートル大帝にも劣らぬ秀れた智能をそなえて、君臨していた。
女帝の野望は、オロシャをして、海洋へ進出せしめることであった。
すでに、西欧にあっては、ポーランドをねじ伏せ、トルコをたたきつけて、黒海沿岸に、艦隊をうかべていたし、スウェーデンを襲って、北海も制圧しようとしていた。
次に――。
女帝が、当然、目をつけたのは、アジアであった。
北太平洋には、無尽蔵の魚がいた。
女帝は、その魚利を獲るべく、海軍に命じて、千島・日本・中国大陸・朝鮮の近海をさぐらせていた。
その結果、女帝は、
「日本国を制することによって、北太平洋を、わがものにできる」
そう決意したのであった。
オロシャ人が、はじめて千島を発見したのは、宝永三年（一七〇六年）であった。
以来、オロシャの千島経略は、あるいは物品交換の甘い汁で、あるいは、強力な武力で、しだいに進行していた。
影人は、二代銭屋五兵衛の手紙によって、千島列島に於て、オロシャ兵と蝦夷の土人とが、凄じい戦いを展開していることを、報らされていた。
そのことが、田沼意次の耳に入っていないはずはなかった。
――一昨日、とどいた五兵衛の手紙には、オロシャ軍艦が、蝦夷の根室へ攻め寄せて、砲撃を加えた、という。……意次の脳裡から、開国という改革は、煙のように消えてしまった、というのか！

三

「あ！　浮子が――」
影人は、艫から声をかけられて、われにかえった。
小舟を漕いでくれているのは、漁師ではなかった。
まだ十四歳の少女であった。
銭屋五兵衛が、身のまわりのお世話をさせます、といって、連れて来た五兵衛の妹であった。
佐和、といい、いつも眸子をきらきら光らせている、骨身を惜しまぬ利口者であった。
影人は、あわてて、竿をはねあげたが、
「餌を取られた」
と、舌打ちした。
「貴方様は、釣をなさる時、いつも、なにか、ほかのことばかり考えておいでです。だから、魚に逃げられてしまうのでございますよ」
「そうだな」
影人は、微笑して、佐和の非難をみとめた。
「魚の方も、釣りあげられたら、殺されるのですから、いのちがけで、餌をさらって逃げるのでございます。……貴方様は、兄から、立派なおかたとうかがっていましたが、釣だけは、いい加減にやっておいでてございます。たとい、ひまつぶしの遊びごとでも、生きものを相手にした時は、真剣にやって下さらなければ……。あ、いけない。わたしのような小娘が、ご主人様を説教してしまった。お許し下さいませ」
佐和は、ぺこんと頭を下げた。
「お前の申したことは、なまぐさ坊主の説教よりも、ずしりと肚にこたえた」
「お腹立ちじゃございませんね！」
「うむ」
「ああ、よかった！」
「今日は、これで、ひきあげよう」
影人は、まだ一尾も釣りあげてはいなかった。
「やっぱり、わたしがつまらぬことを申し上げたので、ご機嫌を損じられました」
「そうではない。明日からは、一心不乱になって、何十尾も釣りあげてみせる」
小舟は、渚へ漕ぎもどされた。
影人は、この正月から、福江城を出て、唐船浦の村落の一軒に、仮住いしていた。
――ここは、かくれ切支丹衆の村だな。
移って来て、十日も経たないうちに、影人は、看破していた。
五島列島は、明和年間から、蝗の大害を蒙り、農民の疲弊は言語に絶する状態に陥ちていた。また、漁師の鯨捕り、鰯びきなどの漁業も、この数年間、かぞえきれぬほどの暴風雨の直撃を受けて、全くさびれてしまっていた。
五島盛道は、大村藩にたのんで、新しい農耕法を知っている百姓を集団移住させた。
移住して来た百姓たちは、『居着き百姓』とか、『御用百姓』と称され、夫役負担を免じられ、大虫害で荒廃し

た農地で、煙草と砂糖をつくりはじめていた。

かれらの栽培法は、これまで日本でみられなかった新しいものであった。

そのすべてがかくれ切支丹信徒であり、ひそかに、密貿易の外国船の船員から、栽培法を教えられていたのである。

四

大村領外海（西彼杵郡）から移住して来たこれらかくれ切支丹信徒は、ひとつの村落に隔絶されたかたちで、五島領民と全く交際することのないくらしをしていた。

尤も——。

五島盛道が、大村藩からかくれ切支丹信徒を、集団移住させたのは、五島列島に於ける切支丹宗には、古い長い歴史があったのである。

その歴史は、永禄九年（一五六六年）にはじまる。

はるか地球の彼方から、一人の勇気ある冒険好きな若い貴族が、やって来た。

ルイス・デ・アルメイダというポルトガルのその若い貴族は、商船に乗り込んだ時は、キリスト教の布教師ではなかった。マルコ・ポーロによって記された「神秘で、黄金にあふれた国」に対する青年らしい好奇心を燃やしていた。

平戸に至ったルイスは、そこで、おのが全生命をなげうって、布教に専念している神父トルレソに出会い、その偉大な人格にうたれて、修士となった。

ルイスは、日本人修士ロレンソとともに、五島列島をくまなく巡り、各宗寺院の仏僧の陰険な迫害と反抗に遭いながら、しばしば、生命の危機にさらされるのに屈せず、キリストの教理を説いてまわった。

ルイスが、天草で生涯を終えた頃、五島列島には、数千人の切支丹信徒がいた、という。

徳川期に入って、凄じい切支丹弾圧が加えられたことは、ここにあらためて、述べるまでもない。

しかし——。

天草にも、平戸にも、五島にも、その弾圧に屈せず、イエスの恩寵を信じる信徒は、その信仰を、子孫に継いでいた。

もとより、天草でも大村でも、切支丹宗門に帰依した民衆に対する吟味は、きびしかった。

大村藩では、毎年、イエスを抱いたマリア像の踏絵を行い、間引きや嬰児殺しがキリスト教の大罪であると知るや、女たちに、長男だけを産ませておいて、次に妊娠

すると、臨月の腹を、竹や棒で打ちのめして、流産させた、という。

五島の城主だけは、かくれ切支丹に対して、かなり寛大な態度をとった模様である。

そして、八代盛道は、享保十三年（一七二八年）に十八歳で新城主となるや、かくれ切支丹を、巧みに利用する政策をとった。

すなわち、かれらを、密貿易とむすびつけたのである。

さらに、九代を次男盛運にゆずった盛道は、大村藩から、かくれ切支丹信徒を、なかば公然と、五島の各島へ移住せしめたのであった。

十五歳の禁門影人が、嵯峨島へ、単身舟を乗りつけた時、もとより、かれ自身、切支丹宗門の何たるか、知識は皆無であった。

影人に、その武芸とともにキリスト教の教理を、教えたのは、無刀斎であった。

五

無刀斎は、十五歳の影人に対して、最初の一月間は、武芸を教える代りに、そのむかし——天文十八年（一五四九年）八月十五日——聖母マリア被昇天の祝日に、フランシスコ・ザビエルが、一艘のジャンクで、鹿児島に到着して以来、異邦の布教師たちが、いかに高い理想と不屈の信念をかかげて、布教につとめたか、語ってきかせたのであった。

無刀斎が、

「剣すなわち拳である」

と、会得するにいたったのは、キリストの教理を学び、異邦の宣教師たちが、未知の国日本へやって来て、文字通り言語に絶する異常な執念と努力で、武力ではなく、言葉によって、民衆を教化し、そして、その大半が、迫害と拷問と惨殺に遭ったのを知ったのが、きっかけだったのである。

徳川家康が、大坂城を攻めて、豊臣家を滅亡せしめたのち、徳川幕府のキリスト教の宣教師に加えた弾圧は、猛獣が、抵抗力のない小動物をなぶり殺しにする以上の、残忍無比な行為であった。

にもかかわらず、宣教師ならびに信徒たちは、拷問に堪え、こよなく美しい表情で、処刑されていったのである。

無刀斎の武芸は、いわば、キリスト教の宣教師のおそるべき信念と苦行から学び、会得したものであった。

唯一の弟子である影人が、匂い木の小脇差のみを腰に佩びて、人を斬ることをさけて来たのは、師のこの教えを受けたためであった。

今日も——

かくれ切支丹信徒の村落へ、十四歳の少女佐和をつれて、もどって行く影人は、無腰であった。

三年前、江戸商業の中心地で襲って来た田沼意次の隠密団のうち十数人を斬った中河内国助は、銭屋五兵衛の船で遁れ去る時、未練気もなく、海へ投げすてていた。

影人が、福江城を出て、一戸をかまえたこの村落は、黒蔵と呼ばれていた。

大村藩から最初に移住して来たかくれ切支丹の村落であった。

水は、ほとんどなかった。さつまいもが、主食であった。

城主のすすめで、ゆるやかな山麓の斜面に、煙草が栽培されていたが、十数戸のくらしをたてる収益は、まだ、なさそうであった。

その煙草畑で働いている老人に、佐和が、気軽に、

「精が出ますね、おじいさん」

と、声をかけた。

返辞はなかった。

影人は、この村落に移り住んでから、まだ一度も、村民と口をきいたこともなかった。

いや、無言の挨拶さえも受けたことさえなかった。

佐和の方は、誰にでも、声をかけたが、この少女も、黙殺されていた。

家に入ると、佐和は、ふくれ面で、

「なんてことだろう！　ばかばかしい。……影人様は、どうして、こんな外道村をおえらびになったのですか？」

と、問うた。

影人は、笑ってみせた。

「日本中で、これほど安全な場所はないからだ」

六

そのかくれ切支丹村落の影人の家へ、ひょっこり、一人の訪問者があったのは、それから三日後であった。

見るからにうすぎたない風体の、その風体にふさわしい、自我を曲げぬ野趣をむき出した平べたい醜い面貌の小男であった。

坊主あたまで、腰に矢立をさし、かなり部厚い杉原紙数帖をふところにしていた。

「禁門影人様のお住居は、ここかの？」

庭さきで、せっせと、日干にするさつまいもを切っていた佐和は、旅塵によごれているにもかかわらず、旅人の荷などひとつも持っていない訪問者に、警戒の目を光らせた。

「禁門なんとか、なんて、知らん」

佐和は、そっけなくかぶりを振った。

「わしは、公儀の隠密やない。……上田秋成ちゅう、大坂の戯作者じゃ」

「小娘と思って、だまそうとしても、そうは問屋がおろさないよ」

「そういうところをみると、やっぱり、ここが、影人様のお住居やな」

秋成は、にやっとした。

その時。

「珍しい男が、さがしあてて来たものだな」

右方の松林の中から、出て来た影人が、云った。

「お礼に来ましたのや。……大坂で、偶然、鬼堂天馬さんにめぐり逢いましてな、貴方様が、ここの福江にかくれていなさる、とききましての」

「お礼とは、どういうことだ？」

「わしは、日本丸に乗せられて、天草灘で、大時化と、オランダ軍艦の大砲をくろうているさなかに、さか巻く波浪の上に、現れては消える死霊を視たのですわ。いや、ほんまに、視たんですのや」

「日本丸に乗せられたおかげだ、というわけで、わざわざ、ここまで礼に来たとは、お主も変った男だ」

「いや、それが……、わしは、あれから——樺島を抜け出して、大坂へもどってから、ずうっと、人間の奥にひそんでいる心霊と取り組んで、物語を書いては破り、破っては書いて、とうとう、世間に読んでもろうてもええ自信作を脱稿しましたのや。……ぜんぶで、五巻やが、出版する前に、まず、一番に、貴方様に読んで頂こうと思うて、お逢いしたい、と念じて居ったところ、ちゃんと、願いが叶いましたがな。貴方様を、こうして訪ねて来られたのも、この世に、心霊がある証拠や」

影人は、感動の色を顔へむき出した秋成を、屋内へいざなった。

座に就くと、秋成は、すぐに、ふところから、杉原紙の書帖五巻をとり出して、影人の膝の前に押しやった。

「貴方様は、人間がこの世を去る時、おのれが死ぬことを、最も親しい者に、なにかのかたちで報らせる。このことは、お信じなさるやろな？」

「この世には、われわれの理解しがたいふしぎな現象が

あるかも知れぬ。わたしは、木火土金水に宿る霊気の哲学を、決して否定はせぬ」

七

影人は、『雨月物語』と表紙に記された書帖五巻を、つぎつぎに、手にとってみた。

巻一『白峯』『菊花の約』
巻二『浅茅が宿』『夢応の鯉魚』
巻三『仏法僧』『吉備津の釜』
巻四『蛇性の婬』
巻五『青頭巾』『貧福論』

秋成は、云った。

「わしは、樺島を抜け出して、てくてくと九州を横断し、山陽道を、大坂へむかって、道中しているあいだに、宇宙にさまよう霊魂を主題にした物語を、つくってやろうと決意しましたのや。つまり、この九篇ですわな。最初に書いたこの『菊花の約』は、播磨の加古の浜辺で、弁当をつかっている時、ふっと、頭にうかんだのですわ」

「ふむ」

影人は、その『菊花の約』を、読みはじめた。

戦乱の時代であった。

丈部左門という、学を好む若い武士が、播磨の加古の海辺に、母親と二人で住んでいた。

春日、ぶらりと散歩に出た左門は、行き倒れになっている武士を、見つけた。瘟病をわずらっていて、もはや、たすからぬていにみえた。

左門は、しかし、もしや、とのぞみをかけて、家へかついで来て、母親とともに、手厚く、看護した。

武士は、さいわいに、一命をとりとめた。出雲の富田の城主に仕えていた兵法指南役で、赤穴宗右衛門、といった。さすが、武芸できたえているだけあって、たちまち恢復する体力を持っていた。

赤穴宗右衛門は、主君の使者として、近江の国へおもむき、その帰途、行き倒れたのであった。

宗右衛門の留守中、富田城は、隣国の尼子経久に攻め滅ぼされていた。

宗右衛門は、主君の生死をたしかめるために、出雲へ帰らなければならなかった。

左門母子に、礼をのべて、出発するに際して、左門と義兄弟の契りをむすび、

「九月九日の重陽の菊の節句に、かならず、ここへもどって参るゆえ、待っていて頂きたい」

と、かたい約束をした。

その九月九日が来た。

左門は、一輪の菊を花瓶にさして、いまかいまか、と幾十回となく、戸口に出て、待った。

しかし、宵闇が落ちても、ついに、赤穴宗右衛門は、やって来なかった。

深夜になった。

左門は、あきらめきれずに、また、戸口に出てみた。

『銀河、影消えぎえに、氷輪、われのみを照して淋しきに……月の光も山の端に暗くなれば、今はとて戸をたてて入らんとするに、ただ看る、おぼろなる黒影のなかに人ありて、風のまにまに来るを、あやしと見れば、赤穴宗右衛門なり』

それは、宗右衛門の亡霊であった。

出雲へ帰った宗右衛門は、尼子方に捕えられて、投獄されていたが、左門との菊花の約をはたすために、牢内で自刃して、亡霊となり、陰風に乗って逢いに来たのであった。

八

『菊花の約』を読みおえた影人は、じっと息をのんで、その批評を待っている上田秋成にむかって、

「みごとな出来ばえだ。本邦にはじめて生れた騰蛇の世界の物語、といえよう」

と、云った。

騰蛇とは、青竜・朱雀・白虎・玄武・勾陳とともに、古代中国でつくられた架空の妖怪であった。これは、宇宙霊として、うやまわれて、中国から朝鮮、朝鮮から日本へと渡って来た。

都には、かならず、北に玄武門が、南に朱雀門が、建てられたのは、これらの宇宙霊によって、都内を不運不幸から守ってもらうためであった。

「貴方様に、おほめの言葉を頂けたのは、戯作者として、この上の本望はありませぬ」

秋成は、ふかぶかと頭を下げてから、

「では、これより、ただちに、大坂へ帰り、この『雨月物語』を出版して、世間の目にふれさせることにいたします」

と、告げた。

奇行の戯作者であり、止めても、泊ってゆく男ではないことを、影人は、知っていた。

立ち上った秋成に、影人が、五巻を返そうとすると、

「一文字のこらず、この頭の中に入って居りますわな。

つれづれに、お読み下され」
と、云いのこした。
戸口に送って出た影人は、
「秋成――、わたしが、傑作だとほめたからといって、出版してみると、世間は、かならずしも、妖怪物語を歓迎してくれるとは、かぎらぬぞ」
と、云った。
「いや、貴方様お一人におほめ頂ければ、それで、この秋成は、満足にいたしますのや」
秋成は、にやっとしてみせた。
影人の予言は、的中した。
後世に、大きな影響を与え、現代でも劇化されている傑作『雨月物語』は、出版されても、一向に売れゆきは、かんばしくなかった。
『雨月物語』をみとめたのは、江戸の曲亭馬琴はじめ、ごく少数の識者のみであった。
「影人様！」
影人が、座敷にもどると、佐和が、真剣な面持で、かしこまっていた。
「あのように、おそろしげなことを云う人の書いたものなんぞ、お読みなされますな」
「どうしてだ？」
「きっと、たたりがあります。焼きすてて下さいませ」
「お前は、この世に、亡霊がいることを、信じないのか？」
「阿呆らしい。幽霊やお化なんぞ、絶対に、居りません！」
「いるかも知れぬぞ」
「いいえ、絶対に居りません！」
「ならば、わたしにたたりがある、と心配するのは、おかしいではないか。妖怪変化がいるからこそ、たたりもあろうというものだ」
影人は、この十四歳の少女と問答していると、くつろいだ気分になり愉しかった。

九

上田秋成の来訪は、佐和という少女をおそれさせたのみならず、このかくれ切支丹村の住民たちをも、別の意味で、おそれさせた。
次の日、影人が、朝食の箸を、膳に置くのを、うかがっていて、村長が、戸口に立った。
影人は、福江城から、この村落に移って来た際、村長の家へ足をはこび、「よろしく、たのむ」と挨拶したのであったが、村長から一言の返礼もされなかった。
交際を拒否されたことは、かえって、影人にとって、

気楽であったものの、かくれ切支丹信徒の頑なさには、いささかあきれさせられていた。
したがって、突然、村長がやって来たのは、その固くこわばった表情から推察しても、決していい話ではなかった。
「村民一同を代表して、参上つかまつりました」
初老の村長は、抑揚のないかわいた口調で、きり出した。
「なんだ……」
「貴方様に、この村から、出ていって頂きとう存じます」
「…………」
「理由は――？」
「べつに、村がたに、迷惑をかけたおぼえはないが……」
「ともかく、昨夜、わしの家に全員が集合した挙句、きめたことでござります。お願い申します」
村長は、はじめて、頭を下げた。
「理由も云わずに、去れ、とは、いささか、無礼だと思うが――」
「…………」
「それとも、理由を云えぬ事情でもあるのか？」
「…………」
「わたし自身、頑固な男ゆえ、村がたの頑固な態度に、むしろ、好感さえおぼえていた。こうなると、お互いの頑固を競うことになる。尤も、村がたで、この家を打ちこわすような暴力沙汰をひき起すのは、お前たちがあがめている天主の教理にそむくのであろうゆえ、できまい」
「…………」
「わたしの方も、暴力で対抗するのは、好まぬ。……村がたが、わたしを追い払う理由が、納得できるものであれば、別の村をさがすのに、やぶさかではない」
「お願いしているのでござります。どうぞ、出ていって下されませい」
村長は、戸口に、土下座した。
影人の方は、薄ら笑って、
「村人全員が、この家の前に、坐り込む、という追い出し策もあるな」
と、云った。
「おたのみ申します。……ほかにお移り頂くための費用として、これだけ、さしあげまする」
村長は、携げて来た重い包みを前に置いて、ひらいてみせた。

百両はあろう清国銀貨であった。

「見そこなうな、たわけ者！」

影人の凄じい一喝が、村長をぴくんと肩の中へ首をすくめさせた。

十

「お前らが、わたしを、追い出そうとしている理由を、その口から吐けぬならば、わたしの方から、お前らの秘密を、あばいてくれる」

影人は、凛乎たる態度で、云った。

「お前ら、大村領より移住して来たかくれ切支丹が、五島領民と一切つきあおうとせず、孤立したいとなみをやっているのは、外道とさげすまされているくやしさの為ではない。……あの丘陵の東側の、海へ向って急傾斜した土地には、高い竹囲いがしてある。お前らは、大きな規模で、芥子を、栽培しているのだ。おそらく、長崎の唐人屋敷の小ずるい商人から、芥子を栽培し、それから、阿片を製る方法を教えられたのであろう。……製った阿片を、お前らは、年に一度、唐船浦へやって来る清国商船と、抜荷取引きを行っている。米も麦も穫れぬ痩地を与えられた貧しいお前らとしては、これは、もはや止めることのできぬ大きな収益だ。……お前らは、おそらく、唐人から、重病患者の苦痛をとりのぞき、やすらかにねむらせる貴重な薬物だ、と教えられたに相違ない」

「は、はい」

「ところが、この薬物が、いかにおそるべき毒物であるか――お前は、知っているか？」

「い、いえ……、毒物であるなどとは、全く存じませぬ」

「はたして、そうかな」

「まことでございます。……てまえの母親は、八十歳まで長生きいたしましたが、下腹部に激痛を起し、もだえ苦しんで、正視に堪えぬていと相成りましたので、阿片を吸わせましたところ、やすらかに、聖神のガラサのお光にみちびかれて、天主の御園に召されましてございまする」

「八十歳の高齢ゆえ、阿片は、薬物としての効能をはたしたのだ。……お前は、青壮年が、阿片を吸引し、その中毒患者になったのを、知るまい」

「存じませぬ」

「あるいは、知っていて知らぬふりをしているのかも知れぬな……。中毒患者になれば、骨と皮に痩せおとろえ、精神は錯乱し、歩行すらおぼつかなくなる。もし、

その患者に、阿片を与えるのを中止すれば、禁断症状は、この世の地獄の光景を呈する。その害は、われわれの想像を絶する」

「…………」

村長は、平伏したまま、からだをふるわせた。

――こいつ、阿片の害を、すでに知っている。

影人は、看てとりながら、

「げんに、清国に於ては、阿片のために、数十万人が廃人になっていると、きいた。……天主を信仰しているお前らかくれ切支丹は、その毒物を製って、抜荷をやっているのだ」

「…………」

「わたしが、この黒蔵へ移り住んで来た時、お前らは、その秘密を、知られるのを、おそれた。いや、その秘密をさぐるために、やって来たのではないか、と疑った」

「…………」

「昨日、奇妙な男が一人、わたしを訪ねて来た。お前らは、この訪問者が、公儀隠密にまちがいない、と受けとった。つまり、わたしが、公儀隠密であると、確信を抱いた」

十一

影人は、言葉を次いだ。

「あの男は、大坂の戯作者で、上田秋成という大層な変り者だ。それゆえ、お前らは、てっきり公儀隠密に相違ないと思い込んだのであろう。教えておくが、公儀隠密というものは、商人にも職人にも化けられる、きわめて平凡な風貌をいたして居るのだ。……わたしは、その公儀隠密に生命を狙われている男なのだ。それゆえ、この村落に、かくれ家をえらんだ」

「…………」

しかし、なお、村長は、半信半疑の様子であった。

「わたしが、こう語ったところで、ただちに信じてくれぬのは、無理もない。わたしが、公儀隠密ではない、という証拠は、何ひとつない。……おのれの素姓を、おのが口から打ち明けるのは、好まぬが、やむを得まい。……お前らが、かくれ切支丹であることをかくして、真宗門徒であるふりをしているのと同様、わたしは、ただの素浪人とみせかけているが、実は、いまを去る十四年前――宝暦十二年七月二十二日、宝算二十二歳で崩御された桃園天皇の異母兄にあたる者だ。……従三位下権中納言・閑

院和仁。これが、わたしの正体だ、と思ってもらおう」
「…………」
村長は、はじめて驚愕(きょうがく)の表情になって、影人を見あげた。
影人は、明るく微笑して、
「わたしの人相に、天子の異母兄である品位らしいものをみとめてもらえると、ありがたいが、どうであろう」
と、云った。
「は、はい」
村長の背後には、すでに十数人の村人が、集っていた。
「わたしの正体の、証拠らしいものといえば、これしかないが……」
影人は、腰から印籠をはずして、佐和に持たせてやった。
それには、皇族でなければ所持できぬ菊花の紋が浮いていた。
村長は、思わず、押しいただいた。
「わかりましてございます！ ……外道(げどう)者とさげすまれているわたくしども居付き百姓の、ひがみ根性ゆえ、とんでもない思いちがいをいたしました。なにとぞ、お許し下さいませ」
村長が、地べたへ額をすりつけると、村民たちも、平伏した。
「それは、困る。お前らは、わたしを、これまで通り、ただの素浪人として扱ってくれてよい。これは、わたしの方からのたのみだ」
「さればと申しましても、かような高貴のお方様と相判りました上は……」
「待て！ わたし自身のことは、これまで通り、知らぬふりをしてくれて、一向にかまわぬ。……ただ、お前らが、この家を訪ねてくれたのを機会に、ひとつだけ、こちらから、たのみがある」
「はい。いかなることでも、お言葉にしたがいまする」
「お前らの唯一の収益である芥子(けし)の栽培を、中止してもらいたい」

十二

きっぱりと命じた影人の態度には、いかにも、貴公子としての犯すべからざる威厳があった。
「いや、わたしは、お前らを、さつまいもや麦稗(ひえ)のたぐいで、飢えさせようというのではない。……わたしは、日本は開国して、ひろく、世界中の文明国と交易し、徳川幕府の鎖国をうち破らなければならぬ、と考え、実現

を夢みて居る。鎖国というのは、キリスト教を排除するための苛酷な制度だ。申さば、抜荷は罪ではない。むしろ、大名も商人も、やらねばならぬ秋(とき)を迎えて居る」
「…………」
「だが、阿片の抜荷は、断じていかん。……お前らは、あの芥子畠で栽培し、製った阿片が、清国へ送られて、どれだけ多くの清国人の身心をむしばみ、精神を狂わせ、廃者として、ぼろきれのように、死にいたらしめたか、思いをいたしたことがあるか？」
「…………」
村長は、がっくりとうなだれた。他の村人たちは、阿片というものが、そのようなおそろしい毒物であることは知らされていなかったらしく、一様に、いまはじめて、強い衝撃を受けた様子になった。
「天主を仰ぎ、その恩寵(おんちょう)をかたく信じるお前らが、製るべき物ではないのだ、阿片は——」
「…………」
一同は、重い沈黙の中に、頭を垂れた。
影人は、つづけた。
「と申して、お前らを、飢餓におとし入れるために、かようなおどかしをいたして居るのではない。抜荷をやるには、他の品を以てすべきなのだ」
「お言葉をかえしまするが、てまえどもには、抜荷で利を得る品など、何ひとつ持っては居りませぬ」
「その心配は、無用だ。……お前らの中には、その名前を耳にした者も居ろう。平賀源内という当代随一の天才だ。この男は、長崎に、製陶工場を建て、肥後天草深江の陶土を以て、伊万里・唐津焼きとは全くちがった陶器をつくり、その工場にかくし、たくわえて居る。わたしも、この五島に渡る前に、それを眺(なが)めたが、まことに見事な品であった。イギリス人はじめ、ヨーロッパ諸国の商人ならば、いかに高値をつけられても、よろこんで、買うであろう。……いや、平賀源内が製った陶器のみならず、わが日本は、西洋人が目の色を変えて欲しがる品物は、おびただしい。これらをこそ、抜荷の品として、わが日本に利益を得るべきであろう」
影人は、云った。
村長は、しかし、
「されば、と申しましても、てまえどもがこっそり取引きして居りますのは、長崎の唐人屋敷の行商(ホンシヨン)でございますゆえ、阿片以外は受けつけてはくれぬと存じまする」
行商というのは、政府直属の官商に対立している民間の商人であった。そのあくどい商売ぶりは、とうてい、

日本の大名や、商人の歯の立つものではなかった。
「その行商船は、一艘だけだな？」
「はい」
「ならば、これを片づけるのは、造作もない」
影人は、しかし、清国の行商船一艘ぐらい、片づけるのは造作もない、と云いはなったが、どのような手段を用いるか、その時は、信徒たちに、打ち明けようとはしなかった。

十三

ただ、
「わたしに、まかせておいてもらおう」
と、だけ云った。
村民たちが去ってから、影人は、佐和が片隅に、身をすくめて、眸子をいっぱいにみひらいているのをみとめた。
「どうした？　なにをおびえて居る？」
「いいえ、おびえているのではございませんです」
「いつものお前らしくないではないか」
「だって……」
佐和は、両手をつかえると、
「貴方様が、天子様のお兄上様とは、夢にも知らなかったので……おそれ多くて、わたくしは、どうして、いいのか、わかりませんでございます」
「ははは……、わたしは、禁門影人というただの浪人者にすぎぬ」
「でも、もう、貴方様は、ご自分の口から、素姓を打ち明けておしまいなされましたです」
「忘れろ」
「忘れることなど、できるはずがございません」
「佐和――」
「はい！」
「よいか、このことだけは、よくおぼえておけ。人間は、天子の子に生れたくて生れたのでもなければ、乞食の子に生れたくなくても生れざるを得なかった。親の身分、地位、素姓など、その子にとって、べつに、自慢したり、卑下したりするしろものではない。人間の価値は、自分自身で、つくるものだ。……三代将軍家光は、諸大名を居ならばせておいて、自分は生れながらの将軍である、とうそぶいたそうなが、これほど傲慢な態度はない。すくなくとも、おのれが、口にすべきことではない。将軍職になったならば、まず、黙って、将軍らしい威容を身につけるべく、心をきたえなければならぬ。

……人間は、生れた時は、ひとしく、はだかの赤子ではないか。将軍も百姓も同じだ。そのことを、忘れぬように心掛けてこそ、人間らしゅう生きていける」
「は、はいっ！」
佐和は、大きくうなずいた。
「ははは……、実は、えらそうに、そう云っているわたし自身、まだ、なんの悟りも得ては居らぬ俗物なのだ」
「いいえ！　貴方様のようなご立派なおかたは、ほかにおいでにはなりませんです」
「この話は、これきりだ。わたしは、この村から追い出されまいとして、やむなく、威張ってみせたにすぎぬ。……わたしの身分など、夢をみていた、と思って、さっさと忘れることだ」
「はい」
「本当に忘れるのだぞ」
「はい、忘れますです」

老中御用部屋

一

江戸城内にあっては、田沼主殿頭意次が、執政として、御用部屋の主権をにぎりながら、かれが企図した改革は、一向に実行に移されぬままに、いたずらに、歳月が流れていた。
意次の改革の二大目的は、壮大な国土開発（印旛沼・手賀沼はじめ、日本全土の不毛の地を、新田に変えること）と、外国貿易のために、長崎のみならず、蝦夷の函館、つづいて、神奈川あたりの湊に、公然とオランダ以外の外国船を迎えて、事実上の開国をやることにあった。
しかし――。
意次にとって、不運であったのは、その二大目的が、みごとに失敗したことであった。
印旛沼干拓では、平戸村から検見川の海まで掘りひら

き、印旛沼の水を落し、広い新田を起さんとして、大坂の天王寺屋藤八郎、江戸浅草の長谷川新五郎に資本を出さして、六万両を投入して、とりかかったのであったが、そのとたん、暴風雨が、襲って来て、見るもむざんに失敗してしまった。

その暴風雨が、やがて、天明期に入って、徳川期はじまって以来の天災が、日本全土を襲撃する前ぶれであった。

さらに——。

もうひとつの意次の最大目的である開国は、まず最初に、蝦夷地（北海道開拓）とともに、ロシヤと貿易して、成功し、それによって、日本中に、開国港をひらこうとした考えに、誤算があった。

すなわち、意次は、世界で最も悪智慧を有したロシヤの女帝——カザリン二世の、

「北太平洋を制するには、日本を足下に伏さしめるにしかず」

という命令の下に、北方を侵して来た軍艦に擁護させた商船に、まともにぶつかってしまったのである。

田沼意次は、この二つの失敗によって、おのれが、二流の政治家でしかないことを証明してしまった。

意次は、この二つの改革によって、徳川幕府随一の傑物としてその名をのこすはずであった。

その重商主義が破れた時、元禄年間から徐々に崩れていた『貴穀賤金』の思想は、完敗した。

意次は、これまで老中たちがそうであったように、大坂・京・江戸の大町人のご機嫌をとって、専売と運上によって、かれらから冥加金を出させる、きわめてくだらぬ凡夫になりはてていた。

すでに——。

あらゆる商業、その生産によって、大町人たちの金は、幕府の政治さえも左右する不動の実力をそなえていたのである。

賄賂の山に、田沼主殿頭意次はうずもれて、後世に、賄賂時代と非難されていながら、まことは、意次の企てた重商主義は、町人の力の前に屈したのである。

これは、意次に対して、苛酷な非難であろう。いや、実は、意次に対して、最大の敵は、何者でもない、将軍家治だったのである。

二

十代将軍家治は、風貌も優しく、その聡明さは、御用部屋の執政また参政を信頼し、すべてをまかすことにして、将軍としての独断的な命令や拒否を一度も示していなかった。

家治の心中に、不退転の強い意志が、ひめられていることは、いまは、病臥している首席老中の松平右近武元にすら、看てとれていなかったのである。

ひとつの逸話がある。若い日のことであった。

家治が、湯殿に入っていた。

そこへ、小納戸役の根来内膳が、至急の用があって、湯殿の脱衣所に伺候した。

家治は、その用件をきき出しておいて、ふと思い出したように、

「そちの隣家には、誰が住んで居る？」

「はい、同役の平岡藤次郎と申す男が住んで居りまする」

「片隣りは、誰だな？」

「これも、同役の三淵縫殿助と申す者が、長らく住んで居ります」

「で——、その方ら、三人、長い隣りづきあいで、反目いたしたことはなかったか？」

「口論を交さなかったとは申しませぬが、これも親しい交際のゆえでございまする」

それをきいて、家治は、長い沈黙を置いた。

根来内膳が、不安になって、

「上様、そのことが、なにか……、お気にかかる、何事かと、かかわりがあるのでございましょうか？」

と、訊ねた。

「いや、その方たちの交際をきいて居ると、まことにうらやましい。……この自分には、隣りが、何を考え、何を企てているか、見当がつかぬ。交際する手段も、将軍である自分には、何ひとつ思いつかぬ、将来に不安をおぼえる」

内膳は、これをきいて、首をかしげ、

「はばかりながら、田安様、清水様、一橋様などの、お近い血筋のおかたがたと、親しくお話しすることがおできあそばしませぬ、とは、上様のお言葉ともおぼえませぬ」

「ははは……、予が、隣りと申したのは、清国であり、天竺でありオランダであり、イギリスでありフランスなのだ。……将軍である自分に、これらがどのような国か、教えてくれる者は、一人も居らぬ」

そう云ってから、家治は、しみじみとした口調で、

「将軍職というのは、孤独なものよの」

と、云ったことであった。

それは、若い日の家治の逸話であった。

田沼意次が、伺候して、
「オロシャとの交易をいたすために、蝦夷の函館を、開港いたしたき存念を持ちまするが、お許したまわりますよう、願い上げます」
と、言上した時、家治は、
「主殿頭、オロシャの女帝が、どのような野望家であるか、存じて居るか？」
と、問うた。
さすがの意次も、カザリン二世のことまでは、知識がなかった。
「おそらく、歴史上にのこる驕后であろう。前漢の呂太后、唐の則天武后にも比肩する女傑らしい。開港して、この女傑の武力に、わが国が、もてあそばれるのは、好ましいことではない」

三

――この上は、禁門影人が、何処かに隠匿した末次金を、手に入れて、その金力にものいわせて、改革をやってくれるぞ！
意次は、深夜、鬼堂天馬を、居室に呼んだ。
「天馬、禁門影人が所有している末次金は、何処にある？」
天馬は、意次の食いつきそうな、焦躁感をむき出した形相を、平静に見まもった。
「さあ、そこまでは……、きわめて慎重を期す御仁ゆえ、それがしにも、何処にかくしたか、打ち明けてくれては居りませぬ」
「天馬！　判って居るぞ！　おのれは、わしが、あの男を討て、と命じた時、内心、わしの非情を強く反撥いたしたであろう。……その方が、末次金の隠匿場所を、知らぬはずはない！」
意次は、嚙みつくように、叫んだ。
「…………」
天馬は、顔を伏せた。
天馬は、知っていた。
禁門影人は、六十余万両の一分判金を、府内の貧乏人たちにほどこし、残った八十余万両を、上野寛永寺に、預けたのであった。
ちょうど、その時点では、田沼意次自身も、四方からとどけられる賄賂を、わたくしのものとせずに、改革のためにたくわえておくために、寛永寺に預けておく考えであった。
昨日の味方であった身を、今日は敵として、この世から消そうとされた影人は、やむなく、意次の手から、のがれて、姿を消し、今日に、いたっていた。
「天馬！　その方は、いつの間にか、禁門影人の人柄に魅せられて、わしの隠密であることを嫌悪するようになって居るな！」
「いえ、そのようなことは……」
「かくすな！　その方は、どうやら、あの男を、討ちとる代りに、何処かへ落してやったに相違ない。それが、看破れぬこの意次ではない。その方は、いずれ、わしに、そむくかも知れぬ」
「…………」
意次としては、鬼堂天馬ほど、信頼すべき股肱はなかったのである。この忠実な飼い犬に、逆に嚙みつかれることは、恐怖であった。
意次は、語気をしずめて、
「天馬、その方の心情が、如何であろうとも、わしは、その方を信頼いたして居る。その方の蔭の力にたすけられなければ、わしの企図する改革はできぬ。……たのむ！」
意次は、思わず、頭を下げた。
天馬は、しばらく沈黙を置いてから、
「明日にも、平賀源内を、訪れてみることにいたします」
「源内が、末次金の隠匿場所を知っているかも知れぬ、と申すか？」
「あるいは……」
「今夜うちにも、行け。いまは、平賀源内は、わしにとって、強い味方になってくれよう」
「あまりご期待は、なさいませぬよう、願い上げます」
「よいか！　わしは、その方を、唯一の心を許す股肱と思って居るのだ。それを忘れないでもらいたい」

四

夜明けてほどなく、天馬は、神田橋本町にある平賀源内の家を訪れた。
源内ほど、転々と住居をかえた人物も珍しかった。
宝暦六年（一七五六年）に、江戸へ出て来て以来、十数度も、移転していたし、また、時には、本宅のほかに、別宅を二軒も構えたりもした。妾を置いた次第ではなかった。源内は、生涯、独身を通し、ついに、女体に接しなかったのである。
天馬は、べつに案内も乞わずに、上って行き、
「天馬だ。いるか？」
と、奥座敷との仕切り襖を開けたとたん、背すじに、異常な戦慄が走るのをおぼえた。

源内は、前後に揺れる西洋椅子に、仰臥していたが、さながら生きた幽鬼であった。
天馬の知っているのは、やや小肥りの、頬の肉の厚い源内であった。
「どうしたというのだ?」
天馬は、唖然として、一年ぶりに逢う痩せさらばえた旧友を見まもった。
「こういうあんばいに、生きた亡霊が住むにふさわしいのだ、この家は――」
源内の頬骨に貼りついた皺だらけの皮膚が、自嘲の痙攣を示した。
源内が、長逗留した長崎から、帰府して、買いもとめたのが、この家であった。
神田の検校某の旧宅であった。いまわしい二重の因縁があった。
十年前には、高利の金貸しをする浪人者が住んでいたが、気が狂って、切腹して相果てていた。そのあとに、検校某が入り、この盲人もまた金貸しをして暴利をむさぼっていたが、町奉行所の目をつけるところとなり、捕えられて八丈島へ送られ、そのせがれは、井戸に落ちて死んだ。それから、三年余、空家になっていた。
こういう家には、かならず、亡霊があらわれる、という噂が立つ。
夜な夜な、陰惨な声音で、小判を一枚一枚かぞえる音がきこえる、という風聞がひろまれば、買い手も、借り手もなくなる。
平賀源内は、敢えて、格安の値で、買い取って、住んだのであった。
「加減がよくない、ときいていたが、これほどとは、思わなかった」
「ちょうど、人生五十年、生きたいように生きた。ここらあたりが、この世におさらばする汐どきだろう」
けだるげに身を起した源内は、脇の卓子から、煙草を把った。
「治療をして居るのか?」
「無駄だな」
「……………」
「脳が、やられた。半年前から、癲狂のきざしは、あらわれた」
「……………」
「万芸あって一心足らず。……この男、何ひとつ深く研究めたる芸もあらず、といえども、無芸というにあらず、どっちつかずのちくらの洋、磯にもよらず、浪にもつかず、流れるままの瓢箪なまず、見識だけは吉原の

廓の天水桶よりも高く、智慧は品川の女郎屋の雪隠よりも深し――。さて、用件をきこうか、隠密殿。きいても、ろくな返答は、できまいが……」

五

天馬は、源内の自らをあざける文句をきいてから、
「おれは、あるじ主殿頭意次に、愛想がつきた」
と、云った。
「愛想のつきるのが、いささかおそすぎたのではないのか」
「源内、おれは、十六歳の時から、仕えて来たのだ。二十年間、おのれを無にして、働いて来たあるじを、そうかんたんに見すてることはできまい」
「しかし、お主は、禁門影人を南へ落した時、すでに、田沼を裏切った」
「おれは、あの時はまだ、あるじが、新しい政治をやるものと信じていた。ところが、あるじの政策は、逆に、大坂の町人どもを富ませ、役人どもに袖の下の味をおぼえさせる結果をまねいただけだ」
事実であった。
たとえば――。
大坂には、百三十数種類の株仲間が存在した。かれらは、その業種の独占権を与えられていた。
幕府は、かれらに独占権を与える代りに、かれらから運上・冥加金を上納させていた。
今日でいえば、与党である自民党に、政治献金をさせていたわけである。
当然、町人たちは、株の独占権を得るために、役人に、賄賂を惜しまなかった。
当時の川柳の、
『役人の子は、にぎにぎを、よくおぼえ』
という諷刺は、いかに役人が堕落していたか、痛烈に表現している。
その賄賂を、最も多く取ったのが、田沼意次であった。
賄賂政治は、すでに、数代も前から為されたことであり、一人、意次だけが、非難されるべきではなかった。
ただ、股肱たる鬼堂天馬は、主人が、いつ、幕府体制をひっくりかえすような改革をやるのか、期待しつづけて来たのであった。
天馬は、意次が、おのれを老中の座へ押し上げる蔭の助力をしてくれた禁門影人を、逆に亡き者にしようとした時、改革の意志よりも権力志向が先行している姿を、看たのであった。

——これまでの、専権者と、すこしも変るところはないではないか。
そう失望したものの、それも、御用部屋の第一位の力を保持するためならば、やむを得ざる措置、と考えなおしたのであった。
「源内、わがあるじの性根は、くさった、と判断するか？」
「いや——」
源内は、かぶりを振った。
「わしは、西欧諸国の事情を、いささか、調べて居る。……鎖国主義をとったわが日本の、すでに百年もつづいている幕府政治の潮流を、一人の人間の力で、変えられるものではない。田沼意次という人物は、専権を得て、いざ、その潮流を変えようとして、それが不可能であると思い知らされた。それだけのことさ」

六

天馬は、しばらく、思いに沈んでいたが、
「では……、この鬼堂天馬も、そろそろ、田沼意次の走狗という役目をご免蒙ってもよい汐どきだな」
と、おのれに言いきかせるように、もらした。
「どうやらお主、田沼から、禁門影人が、江戸市中にばらまいた一分判金の、残りの隠匿金を、持って来い、と命じられたのではないのか？」
「わかるか？」
「癲狂のきざしをおぼえて居る頭脳は、妙な冴えがある。灯火の尽きんとするや、一瞬、そのまたたきは、明るさを増す、というやつだ」
「お主のその冴えた頭脳で、どうわがあるじをだますか、手段を考えてもらえぬか？」
「あの八十余万両は、寛永寺の金蔵に、ねむっているのであったな？」
「そうだ」
「日本国内で、最も安全な場所に預けてあるのだ。いくらでも、田沼をだませるだろうな」
「うむ？」
「禁門影人は、いま、どこだ？」
「五島列島の福江にかくれて居る。どうやら、かくれ切支丹の村に、住んでいるようだ」
「なるほど、うまいかくれ場所を見つけたものだ」
源内は、しばらく、考えていたが、
「どうだろう。禁門影人は、その金を、長崎にはこび、唐人屋敷の民商を説得して、唐船を一艘、買い受け、俵物（俵で包装した商品）を、ごまんと積み込んで、日本

を脱出して行ったことにすればよかろう。この源内が、見とどけた、と報告すれば、田沼も信じるのではないか」
「そうか。上々の嘘だな」
「この嘘を、さらに真実らしく裏打ちしてみせるには、薩摩の島津重豪が、ひそかに、手を貸したことにすればよかろう」
「判った」
天馬は、うなずくと、
「この報告を最後として、走狗の役目におさらばする」
と、明言した。
「福江島へ趨って、こんどは、禁門影人の走狗になるか」
「そう、いちいち、こちらの思念を当てられては、たまらぬ」
「ははは……、そのほかに、その五尺の身の置きどころが、あるか」
源内は、薄ら笑ってから、宙へうつろな視線を送った。
「平賀源内、生れるのが、百年ばかり早すぎた」
「…………」
「おれの才能が発揮されるためには、時世が動乱期に入っていなければならん。……おれには、百年後の日本が、視えるのだ。……百年後、幕府の大屋台は、崩れている。下級の若い武士たちが、倒幕の狼煙をあげているに相違ない。これは、確信を以て、断言できる」

七

同じ日——。
田沼意次は、青山の下屋敷にいた。
一月ばかり前、大坂の鴻池屋から贈られた京女を、その下屋敷に置いて、珍しく、意次は、その白い柔肌に、魅せられていた。
やすというその女は、倒産した紅花問屋の娘で、いったん鴻池屋の妾に、売られたのであった。
鴻池屋のあるじは、老中田沼意次に、あらゆる品が贈られているが、
——よもや、生きた美女を賄賂した者は居るまい。
と、思いついて、やすを江戸へ送ったのであった。
江戸に生れて、十五歳で西丸の児小姓となって、そのまま、女気のない城内で青年となった意次は、京女の柔肌に、はじめて接したのであった。
鴻池屋の意外な思いつきも、意次は、大いに気に入った。
繁多な御用をさばいたあと、意次には、ひとつの愉しみができたわけであった。

このぶんでは、当分のあいだ、青山の下屋敷がよいがつづきそうであった。

この日、下城した行列をまっすぐにくり込ませた意次は、すぐに、寝所に入った。まだ、真夏の陽ざしが消えるには、一刻以上もあった。

放恣な裸形を、重ねて、意次は、唇を、頬を、うなじを、つぎつぎと吸い、やがて、透けるようなうすい、可憐なかたちの耳朶を、舌でもてあそんだ。

とたんに、やすは、官能の疼く激しい反応を、声音と四肢で示した。

「やす――」

顔をはなした意次は、じっと、やすのおっとりした容貌を見下して、

「はじめての男は、鴻池屋であったか？」

と、問うた。

「…………」

やすは、目蓋を閉じたまま、官能のよろこびのなごりを、あえぎにみせながら、こたえなかった。

「どうじゃ、返辞をせぬか。鴻池屋のぞんぶんの技で、女にされてから、わしに贈られたのであろう？」

「い、いいえ……、そんなこと、あらしまへん。……うちは、はじめて、殿に――」

「問われたならば、そう答えよ、と鴻池屋に教えられたのであろう」

「いえ、いえ、ちがいます。うち、ただ、もう、はずかしゅうて……」

「ごまかすな」

意次は、サディスティックないじめかたに、さらに、欲情の度合を増した。

ようやく、庭の白砂だけが、ほんのりと昏れのこった頃あい、意次は、厠に入った。

――鴻池屋に、この意次が、嫉妬の心を起すとは！

自分自身をわらって、ひとり、苦笑した――その折であった。

「田沼主殿頭様！　そのまま、お動きあるな。もとより声を立てられると、瞬時にして、あの世へお送りつかまつる」

落し口にまたがっている意次の臀部へ、ひやりと冷たい白刃があてられたのであった。

八

――曲者め！　この意次の隙を、みごとにとらえ居った。

意次は、戦慄するよりも、感心した。

愛妾にわれを忘れたあとの一種の心地よい放心状態で、厠の落し口にまたがった――その瞬間を、待ち伏せていたとは、巧智な計といえた。

臀部にあてられたのは、槍の穂先であった。

「どうやら、その方、刺客として忍び込んだ者ではないようだな」

暗殺者ならば、有無をいわさず、意次がしゃがんだところを、肛門から腹部まで、ふかぶかと、刺し貫いたに相違なかった。

「暗殺が目的でないならば、なんの用件か、きこうか。ここは、どうも居心地がわるい。書院まで来るがよい」

「あいにくだが、それがしは、盲目でござる」

それをきくと、意次は、すぐ合点した。

「その方、根岸の輪王寺宮別邸にて、禁門影人から、双眼を両断された水野壱岐守の右腕であった大道寺左近だな」

「左様でござる」

若年寄・水野壱岐守忠見は、二年前、意次が、その職を解任していた。

「推参した意図は、なんだ？」

「盲目となり申したそれがし、隠密としての頭脳は、以前と変り申さぬ。それがしのために、一命をなげうってくれる者も、十数人、居り申す」

「ふむ！」

意次は、いかにもぶざまなおのが姿に、いささか愛想をつかしながら、

「どうやら、その方、わしの下で、働きたい意嚮を持ったようだな」

「左様でござる」

「では、当然、土産を持参いたしたであろう？」

「もとよりのこと。……ひとつ、禁門影人は、江戸市中にばらまいた六十余万両の残り八十余万両は、寛永寺の金蔵にあずけたこと、まちがいござらぬ。もうひとつは、首席老中松平右近将監殿は、厳秘にふして居りますが、おそらく、今日明日の寿命であること、侍医の口を割らせ申した」

右近将監は、すでに、六十七歳であり、現代の病名でいえば、ガンであった。

武元が逝けば、もはや、老中部屋で、面と向って、意次にたてつく執政はいなかった。

将軍家治が、意次の進言をしりぞけたのも、内密に、武元から、意次の専権を抑えるように、密書がとどけられていることは、明白であった。

将軍家治を抑えれば、意次には一人の敵もなかった。

「よかろう。その土産は、金品の賄賂よりも、わしにとっては、有難い」

「それがしの目的は、禁門影人に、復讐いたすこと。他に、なんらの欲もないことを、おみとめ頂きたく存ずる」

「よかろう。……ともあれ、この臭い厠で、槍をつきつけられていては、たまらぬ。書院へ移って、その方と、とくと談合いたすことにしよう」

九

やがて、書院で対座した意次は、鼻梁と口だけをのぞかせた白覆面の左近の、茶の湯の宗匠ていの姿を、じっと見すえて、

「その方、禁門影人に対して復讐鬼と化して居るようだな……」

「たとい十年、いや二十年かかろうとも、彼奴をさがしあてて、息の根を止めてくれる決意でござる」

「つまり、この意次のために、ひと働きして、その功によって、わしの下知で、影人の行方をつきとめてもらう存念か？」

「彼奴は、すでに、殿にとって邪魔な存在になって居りますれば、それがしが、彼奴を討ちとることも、殿へのご奉公と相成りましょう」

「そういうことだな。……では、ひとつ、その方に、ひと仕事、たのもうか？」

「かしこまり申した」

「松平武元が、命、旦夕に迫っているのであれば、かならず、遺書をのこして居るであろう。将軍家への奉公一筋に生きた人物ならば、その遺書は、ただ一通——すなわち、上様に宛てた諫言に相違ない」

「…………」

「わしは、先般、上様に、オロシャとの交易をいたすために、蝦夷の函館の開港を、とお願いした。ところが、上様は、オロシャのカザリン女帝が、唐の則天武后にも比肩する女帝ゆえ、開港いたせば、武力によって、わが国が占拠されるおそれがある、と仰せられた。……ご当代は、前代とちがい、ただの床の間の雛人形ではない。この意次の企図する改革を、決して、信頼されては居らぬ。……上様は、むしろ、松平武元の忠誠心を、わしの政治力よりも、信頼されて居る」

「…………」

「されば、もし、松平武元の遺書が、田沼意次を御用部屋の首座に置くのは危険であり、上様の決断を願い上げ

たてまつる、とでも、諫言されていたならば、おそらく、わしの立場は、一朝にして、崩れるに相違あるまい」

「…………」

「そこで、その方に、手飼の忍びの達者を、右近将監邸へ、潜入させ、その遺書を奪って来てもらいたい。……やれるか、左近？」

「かしこまり申した」

「では、たのむ」

意次は、座を立って広縁に出た。

庭さきに、三つばかり、黒影がうずくまっていた。

左近の配下に相違なかった。

——左近め、わしが、この書院で、家臣に討ちとらせようとしたならば、逆に、こやつらにわしの生命を奪わせたであろう。

意次は、薄ら笑って、奥へ歩いて行った。

左近自身は、杖にもたよらず、庭へ降りると、三人の配下を先に立てて、裏門へ向った。

十

この青山の田沼別邸に、もう一人、忍び込んでいる者がいた。

木鼠吉五郎であった。

意次が、ここへ、毎晩かようようになってから、吉五郎は、

——吹けば飛ぶような夜働きにも、江戸っ子の心意気があることを、田沼にみせてくれるぜ！

と、決死の度胸をきめたのであった。

すなわち。

田沼意次を討つ！

これであった。

あれほど、田沼意次を、老中にすべく権力をつかませるために、蔭の尽力をした禁門影人を、御用部屋に於けるおのれの座を危険にする人物だ、と世間に取沙汰されると、たちまち、てのひらをかえしたように、これを亡き者にしようとしたのである。

政権争いの虚々実々のかけひきなど、吉五郎には、なにもわからなかったが、田沼意次の冷酷さは、許せなかった。

行徳河岸で、別れぎわに、影人は、吉五郎に言ったことだった。

「吉五郎、わたしも、さすがに、意次には腹が立ったが、考えてみれば、わたしが意次の立場に居れば、この禁門影人は、邪魔な存在と考えよう。政治にたずさわる

者は、申さば、人間ではない。怪物にならねばならぬようだ」

吉五郎は、影人の寛大さに、かえって、いらだちをおぼえた。

――怪物なら、この盗っ人が退治してくれりゃ、神も仏も、ようやった、とほめて下さらあ。

爾来――。

吉五郎は、ずうっと、意次をつけ狙いつづけていたのであったが、相手がなにしろ飛ぶ鳥も落す老中であるため、よほど奇蹟に近い好機がおとずれぬかぎり、万に一もその目的はたせそうもなかった。

ところが、大坂の鴻池屋が、贈呈して来た京女が、大いに気に入って、これを青山の下屋敷に置いて、かよいはじめたのを、つきとめた吉五郎は、

――神仏が、おれに味方してくれるぜ！

と、勇躍したのであった。もちろん、吉五郎は、わが身をすててかかっていた。

下屋敷で、女におぼれているただの男になり下った意次を、殺れねえ道理がねえ、と吉五郎は、おのれに云いきかせたのであった。

……吉五郎は、築山の頂きの老松の太枝に、夜がらすのように、とまっていた。

今宵が、三日目であった。

「おや？」

吉五郎は、書院から庭に降りて、配下らしい三人の男をさきに立てて、泉水のほとりを、ゆっくりとたどって行く人物に、眸子をこらした。

――あいつ、盲目だぜ。

闇に目の利く夜盗であった。

「そうだ！　あん畜生！　大道寺左近だ！」

吉五郎の胸が、高鳴った。

――田沼の野郎、大道寺左近まで、手下にしやがった！　くそったれ！

十一

大道寺左近の歩行ぶりは、尾けてゆく木鼠吉五郎を、あきれさせた。

青山百人町の表通りから、まっすぐ、麻布に入り、六本木町を右折して、芋洗坂を下り、北白ケ窪町、南日ケ窪町、宮下町とつづく町家通りを過ぎ、暗闇坂に面したかなりの構えの武家屋敷まで、左近は、一定した歩幅と速度で、すたすたと歩き、左脇に添った配下の一人に、一度も手を借りようとしなかったのである。

生れながらの盲目でも、杖を必要とするのに、左近は、禁門影人に暗黒の世界に送り込まれるや、おそるべき忍耐力を以て、聴覚をとぎすますことによって、東西南北を知り、自然の音と人為の音をききわけ、おのが身を自由に動かせるようにしたのである。

筆舌に尽しがたい努力がはらわれたに相違なかった。

――公儀目付に、大道寺左近あり、とうたわれただけのことはあるぜ。

こちらが、築山の松の枝に、夜がらすのように、とまっているあいだに、盲目でありながら、どういう手段で、田沼意次に接触したか、しかも、その会見をみごとに成功させた態度で、あの別邸を立ち出たのは、

――やはり、しがねえ盗っ人と、公儀の役人衆をふるえあがらせた目付との、人間の出来加減の差になるんだろうぜ。くやしいが、ここまでは、へい恐れ入谷の鬼子母神、と頭を下げらあ。下げたところで、こんどは、こちらが、一足さきに、だし抜いてごらんに入れようってえ寸法だ。

吉五郎も、ここが、盗っ人と元目付との勝負どころ、とおのれに云いきかせた。

左近は、そのような競争相手が、床下にひそんだことまでは、察知しなかった。

自分の手であり足である十七人の配下たちに、老中田沼意次との取引きの次第をきかせてから、

「田沼は、松平右近将監が、将軍家に対する諫言状としての遺書をしたためたであろうことを、おそれている。右近将監が、そのような遺書をしたためたとすれば、それは、松平家上屋敷の仏間にある。右近将監は、東照公から九代家重公までの位牌をつくり、その九基を、特別に製らせた仏壇にならべて居る。将軍家へ宛てた遺書をしたためたとすれば、この仏壇に供えてあるに相違あるまい。……奪ったことが露見いたせば、せっかくの仕事も無になるゆえ、まず、どのような紙に、なんと表書き、裏書きがなされているか、とくに調べておいて、松平家家中の誰人にも看破れぬ、そっくりそのままの贋ものをつくってすりかえるのだ。……贋ものの内容は、当然、田沼意次に私心なく、幕府のため、国家のために、御用部屋の専権をわがものにしている、とでも、ほめあげておいて、ただ心配なのは、田沼に心から心服している大名旗本のすくないことであり、その人気の薄さが田沼の為そうとしている改革を不成功におわらせるかも知れぬ、とでも書き添えておけば、諫言の役目もつとめることになろう」

往く人、来る人

一

老中首座にあった松平右近将監武元が、行年六十七歳で逝ったのは、安永八年（一七七九年）七月二十五日であった。

昭和十年に発行された『国史大年表』（平凡社）には、

「是より政治大いに衰え綱紀頽廃、風俗衰弛、賄賂公行、収拾すべからざるに至る」

と、記されている。『徳川十五代史』から、そのまま、引用したのである。

いかにも、松平武元一人が、政治の堕落腐敗を、身を以て食いとめていたような表現である。

田沼意次という人物を悪玉として批判するためには、松平武元を、賄賂を取らぬ精神の高潔な政治家にしておいた方が、都合がよかったのであろう。すくなくとも、戦争前までは、ほとんどの史家の史眼とやらは、その程度のものであった。

ただ、大正四年に、辻善之助が、

「従来、田沼意次というものが、非常に悪いもののようにいわれ、その時代は極めて腐敗していたようにいわれている。それが、果して事実であろうか。その前の時代の吉宗の享保時代なり、また後の白河楽翁（松平定信）の寛政時代は、これに反してすべて引締った、清らかな、太平の時代のようにいわれている。それが果して然るか。時勢の移り変りというものが、そんなに明かに、掌を反すように、一政治家の施設方策でかわるものであろうか」

と、疑問を呈しているのは、まさに史家の史眼の正しさであろう。

一人の節操を保持した政治家が、歿したからといって、たちまち、時世が腐敗し、堕落するものでもなければ、逆に、政治の権力をおのが手につかんだ成り上りの政治家が、一挙に、鎖国を止めて、諸外国と貿易を為そうとしても、そうたやすく、やれるものでもなかった。

その年は、二月二十四日に、将軍家治の世子家基がわずか十八歳で薨じ、さらに十一月九日には、後桃園帝が、まだ二十二歳の若さで崩御、という、やがて、日本

全体に襲いかかる天変地異と、飢えた農民の一揆を、予告するような暗い年であった。

その暗い年も、あと三日であらたまろうとしている、極寒の朝。

本所もずっと町からはずれた、見わたす限り、田野がひろがっている押上村の柳島橋のたもとで、さわがしい世間の年の暮とは、なんのかかわりもないように、ひっそりと、寒鮒釣りの竿をさしのべている浪人姿が、あった。

深編笠で顔をかくし、もう半刻以上も、じっと動かぬ。

素足のつめたさも感じないのは、完全に無心の境に入っている証拠なのか。

橋をゆっくりと渡って来た者が、背後で足を止めたとたん、その無心状態が破れたように、

「魚も、隠密崩れをきらうようだな、吉五郎」

と、云って、かわいた笑いを継いだ。

鬼堂天馬であった。

「さがしましたぜ、旦那を――」

吉五郎は、やっとさがしあてた表情であった。

二

鬼堂天馬は、押上村の無住寺に、仮住いしていた。

山門や本堂の屋根などに、かなりの荒廃をみせているが、庫裏などは、ふつうの農家よりも、はるかにきれいに掃除が、ゆきとどいていた。

真言宗観望寺というこの寺は、鎌倉期からあり、徳川幕府から百二十俵の寺領ももらっていた。

この三代ばかり、住職がろくでなしばかりで、本堂を、無宿の博徒に貸したり、住職自身も花札をいじくったりしていた。当代になって、深川の岡場所から、伏玉という高等淫売をつれて来たが、この伏玉には、ひもがついていた。

ひもは、何食わぬ顔をして、無宿人をよそおい、住職に、ひと勝負いどんだ。さいころ賭博であったが、ひもは、すめくらというインチキ賽をつかって、住職をこれでもかとばかり、やっつけた。

やっつける快感に酔ったあまり、ふっと、口をすべらせたのが、ひもの運のつきであった。

「あいつ（伏玉）は、五年前から、おれのあやつり人形だったのさ。お釈迦様でも、ご存じなかったようだな」

その夜、寝酒に、毒薬が混ぜられ、ひもと伏玉は、あっさりあの世へ鞍がえしたし、三日後、寺社奉行所の与力が捕吏を幾人かひきつれて、山門をくぐって来た。

住職は、いま、八丈島に流されている。

一年前のことだが、七十過ぎた寺男が、留守をまもっているかたちであった。

鬼堂天馬が、入り込むには、ふさわしい住居といえた。

「吉五郎、お前は、どうやら、田沼意次の一命を狙って、しゃかりきになっているらしいな」

「貴方さんのご主人でも、どうしても、許せねえんでさあ」

吉五郎は、京女を置いた青山の下屋敷へかよう意次に、忍び寄る隙ができる、と確信したのであった。

「ところが、妙な雲ゆきになりやしてね」

「どういう雲ゆきだ？」

「大道寺左近――影人様に両眼を斬られたあの目付が、つまり、鬼堂天馬の代理を相つとめることになったんでさあ」

大道寺左近が、まず、仕事として命じられたのは、松平右近将監武元の将軍へ呈する遺書を奪うことであった。

そこで、吉五郎は、大道寺左近をだし抜いてくれる覚悟をした。

吉五郎は、左近配下の忍びの達者が、松平邸仏間に、それがあるのを、見とどけに来る先に、前夜のうちに、それを、無断借用した。しかし、明けがたには、もうもとの場にもどしておいた。

吉五郎は、元来が御家人の出で、筆が立った。しかも、筆蹟をまねるのが得意であった。

吉五郎が、夜明けがたには、遺書をもとのところへもどすことができたのは、すべて、仏間の上の天井裏で、贋遺書づくりをやってのけたからであった。

左近配下が、その贋遺書を持ち去り、左近作製の別の贋遺書とすりかえるのを待って、吉五郎は、それを再び、ほんものの遺書にとりかえる、というややこしい手続きを踏んだのであった。

三

「お前の働きは、そこいらあたりまでが、限度だろうな」

天馬は、云った。

「いや、あっしは、この身が舎利になっても田沼意次

を、あの世へ送ってやらなけりゃ、虫がおさまらねえんでさ」

「吉五郎、田沼が、おれのむかしのあるじだから、かばうようにきこえるかも知れぬが、あのような人物は、一度、天下はわが手中にあると錯覚させて、それから奈落へどしん、と失脚させる。つまり、因果応報というやつだな。そういう、奈落の底の堪えがたい失脚の苦悩を味わわせてやるのが、ひと思いに討つよりは、百倍も効果があるのだ。……平賀源内も、田沼意次の運勢を、星によって占ったところ、権勢の座にあるのは、せいぜい、五六年だそうな」

「へえ……」

「それにしても、源内は、癲狂の発作を起してしまった」

「へえ、そいつは、ちっともまた、存じやせんでした。あっしは、田沼を狙うのに無我夢中になっていたもので――」

「米問屋の伜で、文学好きな若僧がいて、源内宅へ出入りしていた。……源内は、あの通りの気象で、どんな親しい友であっても、未完成の著述の稿本を見るのを拒否した。米問屋が、そうと知りつつも、源内が外出すると、その机上に置かれた新しい稿本を、ぬすみ読みしはじめた。……人の気配に、はっとなって、ふりかえると、源内が、そこに立っていた、という次第さ。致命傷は、負わせなかったようだが……いま、小伝馬町の揚り屋にいる。来年まで、生きのびられまい」

「……………」

吉五郎は、殊勝に膝をそろえて、うつ向いた。

「源内は、むしろ、獄死するのを、のぞんでいるのかも知れぬ。……いつぞや、京都の町奉行所で不敬の罪を問われて、一月あまり、入れられた時、エレキテエルの原理を思いついたと云っていた。……源内は、小伝馬町でエレキテエルにまさる奇想の発明を脳裡に描きつつ、逝く。源内らしいではないか」

「へ、へい。それアまあ、山師とか奇人とかいわれていなさる御仁の死にどころかも知れませんな」

天馬は、しばらく、宙へ視線を送っていたが、

「吉五郎、これ以上、出しゃばるな」

と、云った。

命令口調であった。

「禁門影人が、おれの送った手紙に返書を寄越したのだ」

「ど、どういう内容でござんす！」

「田沼のきもをひしぐために、出府するが、そちらに、

奇想があればさいわい、とあったが、どうやら、お前の松平右近将監の遺書すりかえ作戦は、小道具として、役に立ちそうだ」
「さいですか！」
吉五郎は、自分のやったことが無駄ではなかったのを、よろこんだ。

四

平賀源内は、安永八年（一七七九年）十二月十八日夜、あっぱれな自殺をとげた。
あっぱれな、という常套的な形容よりも、やはり、源内らしい奇想の最期と、いった方がふさわしいようである。
源内は、揚り屋に入れられると、
「慈母観音を彫刻いたしたく、その材木と、斧、鑿、槌など申し受けたい」
揚り屋は、町人職人の獄舎より、待遇がゆるやかであり、与力の人に、源内を尊敬している者が居り、すぐに許可が下りた。
えらばれた材木は、和歌山の紀ノ川を流れ落ちた流木であった。
源内は大いに気に入り、慈母観音完成に、昼夜、寝食を惜しんだ。
約二十日あまりで、等身大の坐像として完成したそれを、与力たちは、眺めて感服した。
まさに、平賀源内が、最後の傑作であった。
源内は、与力に乞うて台座を設け、五寸釘をもらい受けて、壁に打ちつけ、それに、菩薩の後頭の孔をひっかけた。
菩薩は、誰でも、それにひれ伏す位置に、鎮座した。
ところが――。
朝食を持参した下士が、血相を変えて、ちょうど当直だった与力のところへ、駆け込んで来た。
「平賀殿が、と、途方もないことを！」
「なんとした？」
「そ、それが、自身が、菩薩に、お、おなりなされて……」
「なにっ?!」
意味のわからぬままに、与力は、廊下を奔った。
まさしく――。
源内は、奇想天外な自決をとげていた。
慈母観音菩薩を、壁の五寸釘にかけていたところに、源内が、平然として台座上に端坐して、目蓋を閉じ、合

掌していた。
慈母観音は、源内の前にかしずくように、その前に、坐らされていた。
やや、うつ向いていたので、いかにも、源内に、召使いとしてかしずくといったかたちであった。
「な、なんということを！」
与力は、茫然となった。
観世音菩薩などを、自分の足下に据えて、他界した高僧も武辺も、いまだかつて、きいたことがなかった。
たとい、平賀源内が、無宗教であるとはいえ、これは、あまりに、不敬のふるまいであった。
「いかがいたそう？　この姿を、そのまま、お奉行にお目にかけることはできぬ！」
「お目にかけるのだな」
廊下で、ずばりと、云ったのは、鬼堂天馬であった。
「近頃の堕落しきった生臭坊主どもには、この尊敬すべき死にざまを、とっくりと、眺めさせて、きもをひやさせてやることだな。町奉行所のおっちょこちょいの役人どもに、平賀源内の真意は、断じて判るまい」

五

十月二十九日、後桃園帝が、宝算わずか二十二歳で、崩御され、十一月二十五日に、兼仁親王が践祚され、関白九条尚実が、摂政となった京都では、数十年ぶりというおそるべき寒波の中で、粉雪が、毎日、舞い散った。
奇しくも――。
平賀源内が、江戸小伝馬町の揚り屋で、奇想天外な縊死をとげた――同じ十二月十八日。
出府の途次にあった禁門影人は、東山にある九条尚実を訪れ、
「閑院和仁の資格を以て、出府いたす。われらに、万が一のことあれば、洛中洛外に、徳川幕府の首席執政田沼意次によって、暗殺されたる旨、高札を立てて、公布されたい」
と、たのんだ。
尚実は、承知した。
九条尚実は、五摂家中、最も気骨のある、度量のすわった人物であった。
泊って行くようにすすめられるのをふりきって、九条邸を出た影人は、かつての白装束をすて、堂々と菊の五つ

紋つきの黒羽二重に、袴をはき、大小をたばさんでいた。

口髭もあご鬚もたくわえていた。変っていないのは、肩まで散らした総髪だけであった。

この物語に登場した時の白面の貴公子も、すでに不惑の年齢に達しようとして、そこいらの堂上公卿などとは、比較もならぬ風格をそなえていた。

影人の進む道筋は、賀茂川から噴きあげる水煙がそのまま粉雪となって舞い狂うような、目もあけていられないほどの激しさであった。

尤も、粉雪は、まるで、ひとつ、ひとつ、集団をつくっているように、いったん、猛烈に行人を押し包み巻きついたかとみるや、さっと、吹き去り、次の集団が襲いかかるまでに、ほんのしばしの秒刻を置いた。

……影人は、三条大橋にさしかかった。

人影は、前後に、絶えていた。

と――。

影人は、橋上の中央に、文字通り白い石像のように、両手をつかえて、うずくまっている影を見出した。

ゆっくりと歩み寄った影人は、

「人は、風狂とあざわらえばわらえ。おのれは、生涯、歩行のかなう限り、京都に至らば、この橋上に坐して、皇居をふしおがむ慣をつづける、というわけか」

そう云われて、高山彦九郎は、頭をあげて、相手を視た。

一瞬、彦九郎は、それが誰人であるか、判別しがたかった。

舞い狂う粉雪の中に立つその姿は、十四年前に知るその人とは、全く別人に見えた。

ようやく――。

「おお！　貴方様は！」

と、彦九郎は、おどろきの声をあげた。

「お主は、去る十四年前――明和二年晩秋、この三条大橋で、土下座して、皇居をふし拝んだ。しかし、それは、十九歳の若者の客気ありあまる行為として、眺められた。……あいにくだが、三十歳を越えたいまも、同じ振舞いをしているのは、愚行もきわまる、とわたしの目には映るが……」

六

それから、しばらくして、影人が、彦九郎を、ともなったのは、粟田口の青蓮院であった。

さすがに、京洛に於て、閑院和仁たる影人の宿泊をこばむ寺院神社はなかった。

奥まった一室で、対座すると、影人は、微笑しながら、

「どうやら、この十余年間、日本中、足跡至らざるはなし、とみえる」

と、云った。

「左様、蝦夷を除いては、すべての国の土を踏み申した」

「薩摩も、か？」

影人は、問うた。　薩摩の島津藩は、鎖国日本の中の鎖国大名領といえた。

隠密でなくても、他国者は、一歩も、領内を侵すことを、許されなかった。

「その儀でござる。拙者、もし宮家に再会が叶うたならば、薩摩国へ入る方法はないものか、お教え頂きたいと存じて居りました。……拙者が思うに、尊皇倒幕の旗じるしが、まっさきにかかげられるのは、島津家家中よりと存じます」

「ということは、お主が、日本中を歩きまわって、のどをからして、尊皇絶対を、ぶちまくってみたものの……とどのつまりは、笛吹けど、人は踊ってくれなかった、という結果か」

影人の語気は、皮肉なひびきをおびていた。

彦九郎は、むっとなりつつ、

「拙者は、おのが檄が、やがて、大きなこだまを呼び、それが庶民の叫びとなるのは、遠くない日と確信つかまつる」

と、こたえた。

「犬の遠吠えは、すでに、徳川幕府が成った頃からきこえている。ただ、吠えただけでは、傾きかかったとはいえ、これだけの大廈が、そう気軽に倒れてはくれぬ。お主の一心不乱の東奔西走ぶりは、まことにご苦労なことだが、観かたによっては、実をむすばぬ仇花、かも知れぬ」

「貴方様さえも、拙者の一命を賭した大志を、さげすまれるとは！」

「志は、事を成さんとする実行力をともなわねば、ならぬ。……お主は、この十余年間、ただ、わめき、呶鳴り、奔り、駆けめぐっただけではないのか」

「宮家といえども、その暴言、ききのがすわけには、参りませんぞ！」

彦九郎は、いきなり、差料をひっつかんだ。

「お主の、そういう、かっとなる気象が、自身を道化にしていることに気がつかぬのか。お主は、この十余年間に、幾人の同志と誓いあった？」

「……む！」
「たった一人の同志すらも、つくれなかったのではないのか？」
「ともに語るべき御仁に出会うたのは、十指にあまり申すぞ」
「しかし、たがいに力を合せて、幕府を倒す同志になってくれる者は、一人もいなかった」
彦九郎は、影人に冷たく正視されて、思わず、顔を伏せてしまった。

七

「それでは、宮家には――貴方様の方は、この十余年間、何を為されて居りましたか？」
ようやく、彦九郎が、顔をあげ、胸を張った。
「わたしか……？　わたしは、お主のように諸方を彷徨（ほうこう）もせず、九州のひとつの島に、仮住いして、魚ばかり釣っていた」
「ならば、貴方様も、自らを顧るならば、この高山彦九郎を軽蔑することは、できますまい」
「わたしは、お主を、いささかも軽蔑しては居らぬ。軽蔑しているとすれば、自分自身をであろう」
「なにがゆえに、おのれご自身をさげすまれますぞ？」
「わたしが、幕府の中から、田沼意次という人物をえらび出し、これを、あやつって、あわよくば、天下をくつがえしてくれよう、と企てたのは、まことの尊皇倒幕の思想をふまえた所以ではなかった」
「…………」
「幕府老中という存在、これにへつらうこの京都の摂家らに対する復讐心――英明の天子であった異母弟を暗殺された兄の私怨ばらしから、しだいにふくらんだ企てであった。お主が、関東の田舎でつちかった私心なき勤王精神にくらべれば、卑小なものであった、といえる」
「私怨と申されますが、桃園帝暗殺こそ、徳川幕府の正体を示したものでござる。拙者は、王政復古こそ、天下人民の心を安らがせる唯一の革命と存じます。……われら、日本の土地に生きる者にとって、片時もなくて、叶（かな）わぬもの――至大なるものは天皇であり、至小なるものは、火口（ほくち）と存じます」
「そこだな、危険なのは――」
影人が、云った。
「危険とは……？」
彦九郎は、影人を視かえした。
「この地上に、無比というものはあるまい。天皇だけを、皇統無窮の至尊なる存在にするのは、危険なのだ」
「あいや！　それは、貴方様のお考えであり、拙者の大志の芯にあるものを、とりのぞこうとされても、不可能でござる。天に二日がないのと同じく、地上に二王は在らず、とする拙者の思念は、不滅でござる！」
彦九郎は、影人がとどめるのも肯かず、青蓮院に泊ろうとはしなかった。
夜が更けるにつれて、粉雪の舞い狂うのもはげしくなっていた。
ほとんど目をあけてはいられぬほどの、白い無数の化生が闇の夜を占めたまった中へ、平然と出て行く彦九郎を、見送って、
――これも、ひとつのきびしい人生か。
と、感動をおぼえた。
座敷へもどると、青蓮院宮が、来ていた。
「どうしても、出府されるか？」
「おのれの気がすむだけのことは、いたしたく……」
「皇継第三位にあるお許（こと）を、わざわざ、死地とわかる江戸へ行かせとうはないが」
「やむを得ないことです。こういう気象に生れついてしまっているのです。往かせて頂きましょう」

八

禁門影人が、箱根の関所を通ったのは、この年（安永八年）もあと二日のこすのみとなった朝であった。
日が押しせまるにつれて、往き来のあわただしくなるのが、年の瀬のようであった。
箱根の関所も例外ではなく、通行手形をさし出す時間も惜しいようなおちつかぬ様子のお店者たちが、西から東へ――つまり、上方から江戸へ帰って行こうとしているのは、おそらく、金の工面を大坂でつけて、大晦日（おおみそか）には江戸の主家へもどりつかねばならぬからであったろう。
それと対蹠（たいしょ）した風景は、関所を出るや、大声で駕籠舁（かごかき）を呼んでいる旦那衆の姿であった。いずれも、若いきれいな女子を連れていた。正月を、湯河原、伊豆山、熱海、伊東、長岡、修善寺などの伊豆の温泉で、のんびりすごそうとしているのであった。
同じ町人ながら、年の瀬を越すありさまに、金の力のおそろしさ、かなしさを露骨に示しているのが、世相を映していて、影人には、興味深かった。
「待て！」

風の迅さで、追い抜いた隼人飛脚を、影人は、早雲寺門前の勾配の険しい坂道で、呼びとめた。
ふりかえった隼人飛脚の片足は、もう、三昧橋にかかっていた。
「年の暮とはいえ、そそっかしすぎるのではないか」
影人は、隼人飛脚が追い抜きざまに、袂へ投げ入れた煙硝玉を、おもむろに、とり出した。
竹の柄のついた嬰児の頭ほどの大きさの、黄燐のかたまりであった。
玉の中に、じじっ、じじっと、火の燃えるかすかな音があるのは、いずれ、炸裂するのであろうが、ただ、黄色な狼煙を高くたちのぼらせるだけなのか、それとも、炸裂すれば恐怖すべき威力を発揮するのか？
「大道寺左近は、この禁門影人に、一歩も、江戸の土を踏ませぬ入念な構えをとっているようだが、どのあたりで待ち伏せているのか？」
「…………」
「この煙硝玉が、狼煙となって、空へたちのぼるのを、小田原に配された者が、視て、すぐ注進に及ぶ、とすれば……」
ゆっくりと、そこまで云った時、隼人飛脚の視線が、ちら、と煙硝玉へ走った。
「かえすぞ！」
瞬間、影人は、煙硝玉を、相手へ投げた。
相手は、かわす代りに、抜き打ちに、これを、はねあげた。
炸裂音は、大したことはなかった。
黄色な狼煙が、するすると、はるか空へ高く、昇った。
だが、その黄煙の下では、無数の燐の断片が、隠密の顔面へ、頸すじへ、胸へ、肩へ、腕へ、蛭のように吸いついて、ぶすぶすと燃えていた。
「…………」
影人は、黙って、見まもっていた。
「ああーっ！」
隠密は、三昧橋を蹴ると、須雲川へとび込んでいき、急流に押し流されつつ、なお、悲鳴を遠くからひびかせた。

九

大道寺左近は、大磯のさき――化粧坂で、影人を待ち受けていた。
左近が、そこをえらんだのは、品川と小田原のあいだ

で、ただ一人でやって来る影人を討ちとるために、最も我に利のある地形だったからである。
化粧坂は、平塚と大磯とのあいだにあり、やって来る影人にとって、ただひとすじのせばまった隘路であった。
待ち受ける左近側にとって、影人をして、この坂を越えさせれば、高麗山の麓に布陣した味方の好餌となるのであった。
左近は、馬をとばして近づいて来る影人の、その蹄の音をきき、かたわらに終始つき添っている者に、状況をくわしく述べさせると、
――来れ、影人め！
おのずと、口辺にうかぶ、北叟笑みをおさえかねていた。
一尾の魚が、こちらのひろげた網の中へ、するすると泳ぎ入って来るのを、ただ、待っていればいいのであった。
魚の方で、急に身をひるがえして、逃げる、ということは、まず考えられなかった。
網の中に入って来た魚は、どうあばれようと、獲られる運命にあった。
――待てよ。
左近は、影人があまりに易々として、こちらの布いた陣営の中へ、入って来ようとするのに、ふと、不安をおぼえた。影人ともあろう曲者が、そうやすやすと討たれるはずはないのだ。
不意に――。
左近は、木立の中から、ぱっと馬をのり出した。
化粧坂の上で、たづなをひいて胸を張り、頭をあげた左近はかっかっと大地を鳴らして来る影人を眼下にして、
「いかに、禁門影人！」
と、呼びかけた。
影人は、ほんのすこしばかり馬脚の速度をゆるめた。
「その無謀な突入に、なにかの思案あってのことか、禁門影人？」
せわしく、たたきつけるようなその不審の問いに対して、影人は、にやりとした。
文字通り、無謀な、なんの計も策もない行動であった。
――こちらが、無策であれば、かえって、うろたえるのは、左近の方ではなかろうか？
影人は、はたして、予測通り、左近自らが、馬をのり出して来たのを、

――そちらで、勝手に、道をあけてくれるらしい。
と、冷笑したのである。
「禁門影人！　こたえろ！」
大道寺左近は、ここで、はじめて、目の見えぬ者のいら立ちを、みせた。
影人は、わざと、沈黙をまもり、突如、馬腹を蹴った。
大道寺左近は、狼狽した。
「おのれっ！　なにを計る?!」
馬上にはねあがって、叫んだ。
影人は、無言裡に、坂の左右の松林の中から、放たれた矢数本を、抜きつけの大小の白刃の閃光とともに、宙へ両断してみせた。

十

勝率からいえば、大道寺左近側に、九割九分あった。
禁門影人は、全くの無策で、一直線に、敵が布いた完壁の陣営へ――化粧坂へ、駆け上って来たのである。
坂をなかばも、駆け上らないうちに、その網中の魚になるはずであった。
俗に、一寸さきは闇、という予測しがたい人間の運命が、ここでも生じた。
禁門影人ともあろう曲者が、なんの計も策もなく突入して来るはずがない、とふっと不審をおぼえた瞬間に、大道寺左近がつかんでいた絶対的な高い勝率が、一挙に、下った、といえる。
ほとんど衝動的に、坂の上に、左近が躍り出た瞬間から、勝敗は五分と五分になった、のであった。
盲目というハンディキャップが、左近の心理状況に一瞬狂いを生ぜしめ、かれをして、為すべからざる行動をとらせたのである。
当然、伏せている配下たちは、首領の突如の不可解な行動によって、それぞれの攻撃を止めた。
木立の中から、数人が、矢を放ったが、もとより、これは、影人の二刀で、切りはなたれてしまった。
左近は、とぎすまされた聴覚によって、影人が、わが面前に、馬を疾駆させて来るや、柄も鋼鉄製の手槍を、
ぶーん！
と一旋回させた。
暗黒裡のその一撃に、狂いはなかった。ただ、手槍は、別の手ごたえとともに、左近の両手から、はなれた。
左近は、なぜ、手槍が一瞬裡に奪われたか、わからなかった。
禁門影人は、人間ばなれした迅業を発揮したのであった。
左方の松の梢のてっぺんから、鉄砲の狙いをつけている敵めがけて、小刀を投げあげるやいなや、その空けた左手は、もう、懐中の縄をつかんでおり、
ぶうん！
鋭いうなりとともに、左近が旋回させて来た手槍に、くるくるっと、巻きつけていたのである。その先には、鉛玉がついていた。すなわち、無香が形見の得物であった。
手槍が、松の梢よりも高くはね飛んだ時には、もう、影人は、化粧坂を駆け抜けていた。
「討てっ！　遁すなっ！」
はじめて、左近は、配下二十余人に対して、絶叫した。
銃声。
吶号。
弦の鳴る音、矢のうなり。
伏せていた場所から躍り出る敏捷な攻撃の動きが、厳冬の午の空気を、かきまわした。
「…………？」
大道寺左近は、闇の世界で、はっとなった。
不意に、影人が、馬首をまわして、こちらめがけて、凄じい勢いで、疾駆して来るではないか。
血路をひらいて、遁げきろうとするのが、当然であるのに、これは、どうしたことか？

十一

影人が、馬首をかえして、大道寺左近めがけて、駆けもどって来たのは、きわめて明白な理由からであった。
高麗山の斜面を、けものの迅さで駆け降りて来る速影を、
――味方だ！
と、みとめたのである。
せつな。
影人は、殺人者たることをきらうおのれをすてて、冷酷な殺戮の鬼になったのである。
大道寺左近は、生かしておくべき人物ではなかった。
「左近っ！　宿敵としての決着をつける！」
たからかに、そう叫んだ時には、互いの馬の距離は、三間とはなれてはいなかった。
「おーっ！」

呼応した左近が、腰から差料を抜くのと、影人が、おのが馬から、五体を宙に躍りあがらせたのが、同時であった。

二度と為せ、といわれても、これは不可能な神技であった。

影人は、跳躍した五体を、左近の軀幹へたたきつけ、これを突き落すや、その馬を奪って、うちまたがったのである。

影人の剣の先は、左近の咽喉を貫いて居り、左近の突いた大刀は、影人の左腕を貫いていた。

そのままのかたちで、影人は、馬腹を蹴り、左近を、ものの三間も、ひきずった。

左近が、影人の左腕を刺した大刀の柄をはなすと、影人の白刃も咽喉から抜かれて、大地へころがった。

影人が、そのまま、高麗山の麓へ、疾駆すると――。

そこにも、凄じい修羅場が、くりひろげられていた。

鬼堂天馬が、十数人をむこうにまわして、阿修羅となっていたのである。

「おいそぎなされ！」

天馬は、呶鳴った。

天馬自身、すでに、銃弾をくらい、刀傷槍傷を負うていた。

「江戸城の……年頭の賀儀に、間に合わぬと……、せっかくの、出府が、……徒労になり申す！」

血を吐くような天馬の声音であった。

「……ゆるせ！」

影人は、風の迅さで、その修羅場を、駆け抜けた。

――許せ！

――許せ！

影人は、宙へ向って、叫びつづけた。

自分のまわりから、この世を去って行った人々へ向って、叫びつづけた。

泪が、両眼から、あふれた。

自ら非情に生きんと誓ったこの貴公子が、はじめて流す泪であった。

――許せ！

――許せ！

――許せ！

そして、ついに、あらん限りの声をしぼって、

「許してくれっ！」

と、絶叫したことだった。

安永九年正月

一

徳川時代に於て、最も厳粛で、ものものしい儀式は、大名が、将軍家に謁見することであった。

登城すると、数寄屋坊主の案内で、まず大広間に入る。そこから、柳の間、松の間の大廊下を過ぎて、白書院に至る。

大広間から白書院までの間に、御三家（紀州・尾張・水戸）と三卿（一橋家・田安家・清水家）の詰所、次に、大広間の溜間詰めがあり、譜代で政治の諮問にあずかる重臣たち（井伊家・酒井家・堀田家ら）が居ならんで居り、その次が御用部屋であって、老中、若年寄、寺社奉行、大目付、目付らが、それぞれの座を占めているのであった。

すなわち、謁見を許された大名は、白書院に至るまでに、極度の緊張を強いられるわけであった。

白書院は、上段の間と下段の間と分けられていたが、さらに、上段の間の奥に、もう一間あり、御簾が、半分垂れていて、将軍家は、御簾のむこうに着座していた。

したがって、謁見を許された大名は、将軍家の顔を見ることが、叶わぬままに、平伏するだけであった。

老中が、そばにつき添って、謁見者を披露するのは、二十万石以上の国主に限られていた。

しかも、ちゃんと官姓名を告げず、ただ、

「安芸にございます」

とか、

「薩摩にございます」

とか、紹介するだけであった。

この謁見で、最も盛大な儀式が、年賀の宴であった。

これは、正月元旦、二日、三日にわけられて、謁見が行われ、大名たちは、賜盃の光栄に浴して、下城する。いささかのとがめを受けた大名たちは、この年賀に、登城は許されなかった。

正月元旦には――。

老中、御三家、一橋・田安・清水の三卿、そして、執政の座に就く資格のある井伊家・酒井家・堀田家などの重臣たちが、謁見を許された。

ところで……。

八代将軍吉宗の時代は、吉宗の大らかな気象もあって、上段の間の奥の一間の御簾は、高くまきあげられて、吉宗は、じかに、家臣たちと、言葉を交したものであった。

九代家重が、父吉宗と似ても似つかぬ脆弱(ぜいじゃく)、暗愚であったために、御用取次ぎの大岡忠光が、一計を案じて、謁見の際、絶対に御簾をあげないようにしてしまったのである。

事実、九代家重は、酒色に耽(ふけ)ったたたりだけではなく、生来、言語が明晰(めいせき)でなかった。一人、大岡忠光が、何を云っているのか、ききわけることができたのであった。

御簾をあげて、謁見の大名に、声をかけるなど、家重には、不可能であった。

そして――。

御簾をたらしたまま、謁見する慣習は、十代家治まで、つづいていたのである。

安永九年正月元旦も、その慣習のままに、賀儀は、滞りなく、とりおこなわれるはずであった。

二

田沼主殿頭意次にとって、この年の年賀の儀式こそ、かれの生涯に於ける得意の絶頂にのぼった瞬間といえた。

去年までは、意次の頭上には、鬱陶しい一朶の暗い雲が、かかっていた。もとより、意次めがけて、冷たい雨を降りそそぐわけではなかったが、追いはらうこともできなかったのである。

その一朶の暗雲が、去年七月二十五日を以て、一陣の風に吹きはらわれるがごとく、意次の頭上から消えたのである。

六十七歳の首席老中松平右近将監武元が逝くや、田沼意次の行手をはばむ人物は、一人もいなくなったのである。

巳刻(みのこく)(午前十時)――。

まさしく、白書院に向って、第一番に進む田沼意次は、颯爽として、威風あたりをはらっていた。

白書院の上段の間に伺候した意次は、御簾(みす)のむこうへ拝礼し、

「田沼主殿頭意次、つつしみて、第十代の御世をことほぎたてまつりまする」

と、言上した。

これに対して、将軍家からは、

「今年も、政事の儀、よしなに、たのむ」

という言葉が、あるはずであった。

ところが……。

「主殿頭――」

語気は平常通りであったが、将軍家治は、あらたまって、意次を呼んだ。

「は――」

「余は、わが父より、遺言をたまわっている。この家重亡きのちも、田沼を厚くもてなしてやれ、と」

「これは、もったいなき仰せにございまする」

「余は、わが父の遺言を、忠実に守り、そちを、今日まで、信任し、重く用いて来た」

「ご高恩の儀、子孫にまでつたえるべく、おのが心中より、片刻もはなれはいたしませぬ」

「されば……」

ここで、ちょっと、声音を切って、家治は、なにか云いまどう様子を、御簾のむこうから、意次に感じさせた。

意次は、内心、ぎくりとなった。

自らの意見を、ずばずばと云ってのけたことのない将軍家であった。

幼少より聡明のほまれの高かった家治は、十代の職を襲うてより、きわめて口数すくない公方になっていた。

病弱にして暗愚であった父家重とは、人間としての出来がちがっていたが、寡黙であることが、田沼意次をして、思う存分に、その才腕をふるわせた、といえる。

名実ともに、専権を得た意次に向って、家治は、いまはじめて、なにか、にがい言葉をくれようとしている。

意次にとって、これは、想像もしなかったことであった。

「上様、お言葉うけたまわりとう存じまする」

意次は、自分の方から、もとめた。

「うむ。……余の膝の上には、松平武元の遺言状がある。読みきかせるまでもあるまい。そちは、この遺言状が、武元自身の手によってしたためられたもの、とおぼえておくがよい」

三

両手をつかえた意次の背筋を悪寒が走り、脇(わき)の下から冷汗がつたい落ちた。

「主殿頭、忘れまいぞ。余は、右近将監を、父とも祖父とも思うて来た。……右近将監は、三十二年の長きにわたって、執政の要職をつとめ、一日も、私心をはたらかせたことはなく、自らを守ることに厳しく、失うものがなかった。余は、そちもまた、右近将監にならい、さらに右近将監を越える執政者であることをのぞんで来た。いまも、この気持に変りはない」

「かたじけないお言葉、意次の骨髄にまでしみ通りまする」

「主殿頭――、右近将監の遺言状には、一日もはやく、田沼意次を宿老の座から、しりぞけられますように、と記されてある。右近将監は、その理由として、そちが、御用部屋に入った時とは別人のごとく、権勢欲にとりつかれていることを、挙げて居る」

「上様！　それは、右近将監殿の誤解でありますれば、この意次に、おのれを弁護することを許されませ。この意次、執政の末席を与えられましたる明和六年八月十八日より、今日まで、私欲にかられて、政事をまげたことは一度もございませぬ。人を、登庸するにあたり、賄賂の多寡に左右されたおぼえはなく、その者の手腕をはかり、適任を与えて参りました次第にございまする。……まさしく、この意次の屋敷には、おびただしい賄賂の品が、はこび込まれて居りまするこ と、上様も、幾度も、お耳になされたと存じまする。さりながら、これらの品は、ことごとく帳簿に記載し、一品とて洩れては居りませぬ。すなわち、賄賂されたるこれらの品を、この意次は、私有いたして居る考えが毛頭みじんもない所以でございまする。欲しいと仰せあらば、明日うちにも、金品を、ご城内へはこび入れまする。もとより、この意次も人間なれば、小身より出世し、執政筆頭者として、天下の政治を、意のごとく為す快感に酔うていることを、決して、否定はいたしませぬ。ただ、さきの時代の宿老がたのお働きに比べて頂けますならば、同じ新貨を鋳造いたしても、同じ倹約令を布きましても、同じ問屋をさだめて民間に専売をさせてこれが運上によって、公儀の財政の困難をきり抜けようとして居るにいたしても、その結果はひとつの失敗もございませぬ。これは、この意次に、強い運勢の星が与えられているもの、と確信いたして居りますれば、こん後十年間、なにとぞ、ご信任を得て、この意次の働きを、お見まもりたまわりたく、伏して願い上げたてまつりまする」

一気に述べたてて、ぴたっと平伏した。

白書院の下段の間では、執政、御三家、三卿、また政事の要務に就くべき大名たちが、かたずをのんで、上段

の間を、眺めやっていた。

謁見で、これほど、長い時間がついやされた前例を、人々は、知らなかった。

将軍家と田沼意次との間に、どのような会話が、交されているのか、きこえぬままに、興味をそそられていた。

四

意次は、待っていた。

自分の述べたてた専権の座にある者の自信のほどを、将軍家が、どう受けとめてくれたか――その言葉を待っていた。

長い沈黙が、あった。

やがて――。

「田沼意次、久闊！」

凛乎たる声音が、意次の耳を刺した。

意次は、あっ、となった。

将軍家治は、御簾のむこうから消えて、別人に代ったのである。

「お主に殺されようとした禁門影人は、お主と同様、悪運つよく、今日ただいま、皇継第三位閑院和仁として、ここに在る」

「………」

「ことわっておくが、わたしは、お主に怨恨など抱いては居らぬ。むしろ、あわれみの情さえおぼえて居る。……お主は、おのが運勢が、なお、昇りつつある、と思って居るのであろうが、気の毒ながら、昇りの時は終り、降りの時を迎えて居るようだ。それに、お主がまだ気づいて居らぬのが、なんとなく、うら悲しい。……人間の運気というものは、せいぜい十年も保てば、これを良しとしなければなるまい。五十一歳で老中格となったお主は、ちょうど十一年間、権勢をふるう座に在った。ここいらで、そろそろ、身の処理のあざやかさを思慮することができれば、お主も、一流の人物とみなされようが……」

「何をもって、わが運気が降る、ときめつけられるぞ？」

意次は、御簾の奥を、睨みつけた。

「天の秋、地の利、人の和――この三つが、その身に集まれば、運気は、おもしろいほど上昇する。お主は、新年を迎えて、この三つをことごとく失おうとしている。まず、お主は、蔭の味方として生きようとしたこの閑院和仁を、暗殺しようとして、失敗した。それゆえに、唯

一の信頼すべき股肱の隠密鬼堂天馬に、そむかれた。お主は、やむなく、性根のくさった元目付の大道寺左近ごとき者を、やとわなければならなかった。おのれでおのれを孤立させ、たのむべき味方を失ったのだ。六十歳を越えたお主には、もはや、十年前の覇気はない。天の秋は、とっくに、去っているのだ。お主は、ただ、松平武元が逝ったいま、この地上に於て、敵はない、と心おごった風情だが、とりもなおさず、それは、逆に、お主が地の利をうばわれたことを意味する。げんに、将軍家すらが、お主に不信の念を抱いて居られる。……おっと、余計者が、謁見の時刻を、ひきのばしてしまい、下段の間で待つ人たちに、迷惑をかけたようだ。……田沼意次、わたしが、この御簾の間を、臨時に借りたのは、予言者として、忠告しておきたいためだ。……執政筆頭人として、まず第一番に、その盃を頂き、飲み干すがよい。盃の底に、予言がある」

意次は、盃を両手に持った。

児小姓が、するすると進み寄って、屠蘇をついだ。

とたんに、意次の双眸が、盃の底に吸い寄せられた。

左の文字が浮きあがったのである。

『これより十年間にわたり、河川はあふれ、火山は火を噴き、饑饉、疫病あい次ぎ、百姓一揆凄じく、すべての凶事は、田沼意次のせいにされるべし。

平賀源内』

五

その日を限りとして、禁門影人は、江戸から姿を消し、杳として行方知れずとなった。

田沼意次は、あらたにえらび出した隠密数十人を、四方に趨らせたが、ついに、その消息を知ることなくおわった。

ともあれ――。

名実ともに専権の座に就いた意次の公私の生活と行動を批判する者は、もはや一人もいなかった。

意次の権勢は、そのまま、永遠につづくがごとくみえた。

しかし、意次の独裁は、年号があらたまって、天明に入るや、たちまち、これをはばむ敵の出現をみた。

敵――すなわち、天災であった。

平賀源内の予言は、みごとに的中したのである。

息つくいとまを与えず、日本全土へ波状攻撃を加えて来た暴風雨で、主な河川の八割が氾濫し、洪水は、田畑

を泥土に還した。

その惨禍が、生んだのは、飢餓と疫病であった。そして、窮民は、越訴・逃散・徒党・強訴の一揆騒動をひきおこした。

一揆は一揆を誘発し、騒動を呼応せしめた。

――このままでは、人は死に絶え、国は滅びてしまう。いや、とうとう、その秋が来たのだ！

その恐怖が、疫病のごとく日本全土にひろがり、窮民をして、一揆騒動にかりたてた。

事実、浅間山の未曾有の大爆発を目撃させられた信州の窮民たちは、その光景を、とりもなおさず、この世の終末と受けとった。

田沼意次が、いかに躍起になろうとも、相次ぐ天災の猛威に遭うては、つのる人心の不安を、しずめるてだてはなかった。

天明六年（一七八六年）――。

田沼意次は、二千余万人の憎悪を、一身にあびて、失脚した。

いわば、意次が、名実ともに、専権の座に在ったのは、わずか七年間であった。

尤も、七年間にすぎなかったとはいえ、独裁者が、幕府体制を改革するに足りない歳月ではなかった。

皮肉にも、その七年間、天災の起らぬ年は一年もなかったのである。意次自身、絶望感に陥らざるを得ぬ矢つぎ早やな猛烈をきわめた襲撃であった。

意次の失脚は、天災に屈服したことであった。

意次は、八代将軍吉宗の孫にあたる松平定信と定信を支持する譜代門閥の大名たちによって、ほとんどクーデター同然に、御用部屋から追い出されたのであるが、この時すでに、かれは、これに、抵抗する気力を全く喪っていたのであった。

居城である遠州相良城に、自らを囚徒として置いた意次が、敗北者の虚しい眼眸で、天を仰ぎ、冷たい月光をあびた時、去来したのは、禁門影人、鬼堂天馬、平賀源内ら、味方として衆を抜いた、たのもしい曲者たちの面影であったろう。

六

その年の晩秋の一日――。

五島列島の主島・福江島の唐船浦の入江では、今日も、一艘の漁舟が、ぽつんと、一片の雲影を刷いたように、鏡そのままのなめらかな水面に浮かんでいた。

舳先で、巧みに、宙いっぱいに投網をひろげているの

は、女であった。

七年前の、十四歳の稚い姿しか知らぬ者ならば、目をみはるであろう。

銭屋五兵衛の妹佐和であった。日焼けた肌のつややかさや胸や腰のふくらみが、ふれれば弾む活き活きとした成熟ぶりを示していた。

花咲いた娘の肉体に、男が、女の悦びを教えたのは、去年あたりであろうか。

その男は、艫に、肱枕をして、寝そべっている。

南海のかくれ切支丹村に仮住居するにふさわしく、めくら縞の筒袖にたっつけをはいた侘び姿であったが、陽光を受けた双眸の、冷たく冴えた色は、七年前と変ってはいなかった。

と――。

やおら身を起した禁門影人は、

「佐和、もうそのあたりでよかろう」

と、云った。

「でも、まだ、貴方様のお好きないさきを、一尾も獲げて居りませんから……」

「いや、今日の夕餉から、お前は、一人ぽっちで、膳部に就くことになろう」

「え？」

びっくりして、見つめかえす佐和へ、影人は、沖あいを指さしてみせた。

いつの間にか、黒い巨船が、ゆっくりと、この唐船浦へ入って来ようとしていた。

「ようやく、田沼は老中首座からすべり落ちたとみえる。お前の兄者が、わたしを迎えに来た」

影人は、云った。

田沼意次が失脚したならば、千石船をまわしてもらいたい、と影人は、銭屋五兵衛にたのんでおいたのである。

「どちらへ、お行きになるのでございます？」

佐和は、問うた。

この日が来るのを、かねて覚悟していた佐和であった。決して、見苦しくとりみだすまい、と自分に云いきかせていた。

早鐘のように、烈しく動悸をうっていたが、それを語気にあらわすまい、と必死に怺えたものの、こわばる表情をかくすことはできなかった。

「地球を半分まわったむこうの、ヨーロッパのどこかの国、ということになろうか」

「………」

「佐和――」

「は、はい」

「わたしが、白髪になって帰って来た時、お前の腰も、まがって居ろう」

「い、いいえ！　腰など、まがっては居りません。顔に、皺ひとつ、つくっては居りませんです。……だから、きっと……きっと、おもどりになって、下さいませ」

佐和は、正座して、両手をつかえると、平伏した。泪があふれると、顔をあげることができなくなった。

影人の視線は、近づいて来る千石船の彼方の水平線へ、投げられていた。

「わたしが帰って来た時、母国の様相が、一新して居れば――と期待するのは、むりであろう。第二の田沼が、御用部屋の権勢をほしいままにしている、というところか。百年、河清を待つことになれば、寿命が足らぬ」

そう呟いてから、影人は、湿った感慨は、この静かで美しい景色にふさわしくないのに気がついた。

「佐和、ひとつ、きかせてもらおうか。お前も銭屋五兵衛の妹ならば、知って居ろう。……良人の船が、水平線の彼方へ消えてゆくのを見送る漁師の女房が、その大漁を祈って、唄う歌を――」

（終）

附記

現代――昭和五十二年（一九七七年）から、ちょうど二百年、さかのぼってみよう。

二百年前は、安永六年である。

田沼意次の「賄賂時代」のどまん中にあたる。

意次は、明和四年に、四十九歳で、側用人となり、同六年に老中格となって、御用部屋に入っている。そして、老中となったのは、五十四歳（安永元年）の正月であった。

それから、六年を経て、意次は、ちょうど六十歳を迎え、御用部屋の上席に就いていた。

一七七七年。

二百年という歳月は、気が遠くなるほど、むかしではない。といって、徳川慶喜が、薩摩・長州連合軍と、鳥羽伏見で闘った維新ほどの近さはない。

維新までに、文化・文政の仇花が咲きみだれている。

徳川期に於て、最も頽廃のにおいをただよわせたこの時代を、私は、「眠狂四郎」をはじめ、より多く小説の舞台にとっている。

さらに、文化・文政にひきつづいて、水野忠邦が、将

軍家慶の信任を得て、改革をやってのけた天保という時代がある。
十五代徳川慶喜までは、まだまだ、かなりの歳月をみなければならないのである。
そのせいか、この二百年前は、かなり中途半端な状況下にあるように、感じられる。
いうならば、田沼意次の「賄賂時代」は、現代の保守政党の単独内閣のつづいている「ロッキード時代」と、どこやら似かよっているのではあるまいか。
いや、いつの時代にも、国家があり、施政者が居り、その施政者が権勢欲にかられているとすれば、その様相が、似て来るのは当然であろう。
まして、田沼意次のような、小身から成り上った、人柄としてはおよそ老中にふさわしくないざっくばらんな、むしろ下品なところが、かえって、家柄や格式にしばられた江戸城内では、魅力あるものとして、歓迎されたことなど、典型的な一例として、挙げなければなるまい。
私が、敢えて、「曲者時代」と呼んで、田沼意次の表裏の姿をとらえようとしたのは、その意味があったからである。
ところが、皮肉なことに、「曲者」という奴は、曲者として描こうとする筆者にも、手に負えなかった。
「曲者」が曲者である所以であろうか。
現代の曲者もまた、田沼意次のごとく、つかまえがたいのであろうか、とうそ寒さをおぼえざるを得ない。
政治に関心のない私ごとき一文士にして、二百年前の政治家を描こうとして、その姿が、どうにも正確にとらえがたい苛立たしさに駆られると、当然、現代の政治家に、八つ当りしたくなるのである。
一七七七年と一九七七年と……その二百年のあいだを語り尽せぬ巨大な歴史の山河でへだてられつつも――政治家の姿が、かくもよく似て、しかも、正確につかまえがたい、とは一体どういうことなのであろう。
私は、首をかしげつつ、ペンを擱く。

曲者時代

一九七八年一月一〇日　初版印刷
一九七八年一月二五日　初版発行

定　価　九八〇円
著　者　柴田錬三郎
装幀者　伊藤三喜庵
発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋二－五－一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二三〇－六三六一
　　　販売部（〇三）二三〇－六一七一
印刷所　凸版印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします

© 1978 R. SHIBATA　Printed in Japan
0093-772122-3041

集英社文芸書

柴田錬三郎

生きざま

戦国の世から徳川三百年——優勝劣敗のこの時代を武士たちはいかに生きたか。不条理な掟と慣習の狭間に貫いた男の生きざまを、池田・井伊・浅野・南部・大久保・蜂須賀・有馬等々の諸大名家の中に求め、男の意気地を現代に問う著者初の書き下し歴史譚。

柴田錬三郎

どうでもいい事ばかり

「どうでもいい事ばかり書くつもりで、こんな題名をつけた。しかしこれは仕事であり、仕事には責任を持たねばならない。おかげで私はどうでもいい事は書けなくなってしまった」……円月殺法は冴えわたり、無気力な生活に堕しがちな現代人の精神状態を鋭く斬りすてる。話題のエッセイ。

新宮正春

鷹たちの砦

大坂城落城と共に大判一万三千枚が消えた。それは〝ふんどう〟に鋳直され、どこかに運び去られたという。その所在の鍵は、家康所有の鷹の尾羽根についた四箇の鈴に!! 豊臣家の侍女だったなぎは、奇怪な使い手を集め、壮絶な争奪戦を開始する。気鋭が放つ書き下し超大型時代ロマン。

南原幹雄

鴻池一族の野望

豪商・鴻池一族は、すでに五十四家の大名に高利貸し付けを行い、一方で武装集団を設け、経済力による日本支配に向かいつつあった。幕府は、この野望を絶つべく秘密与力、檜十蔵をおくりこむ。大坂から江戸へと舞台をかえて、熾烈な闘いが開始される。気鋭の描く書き下し時代長編。